

中居町一丁目遺跡

(都) 3. 3. 8 高崎駅東口線地方特定街路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

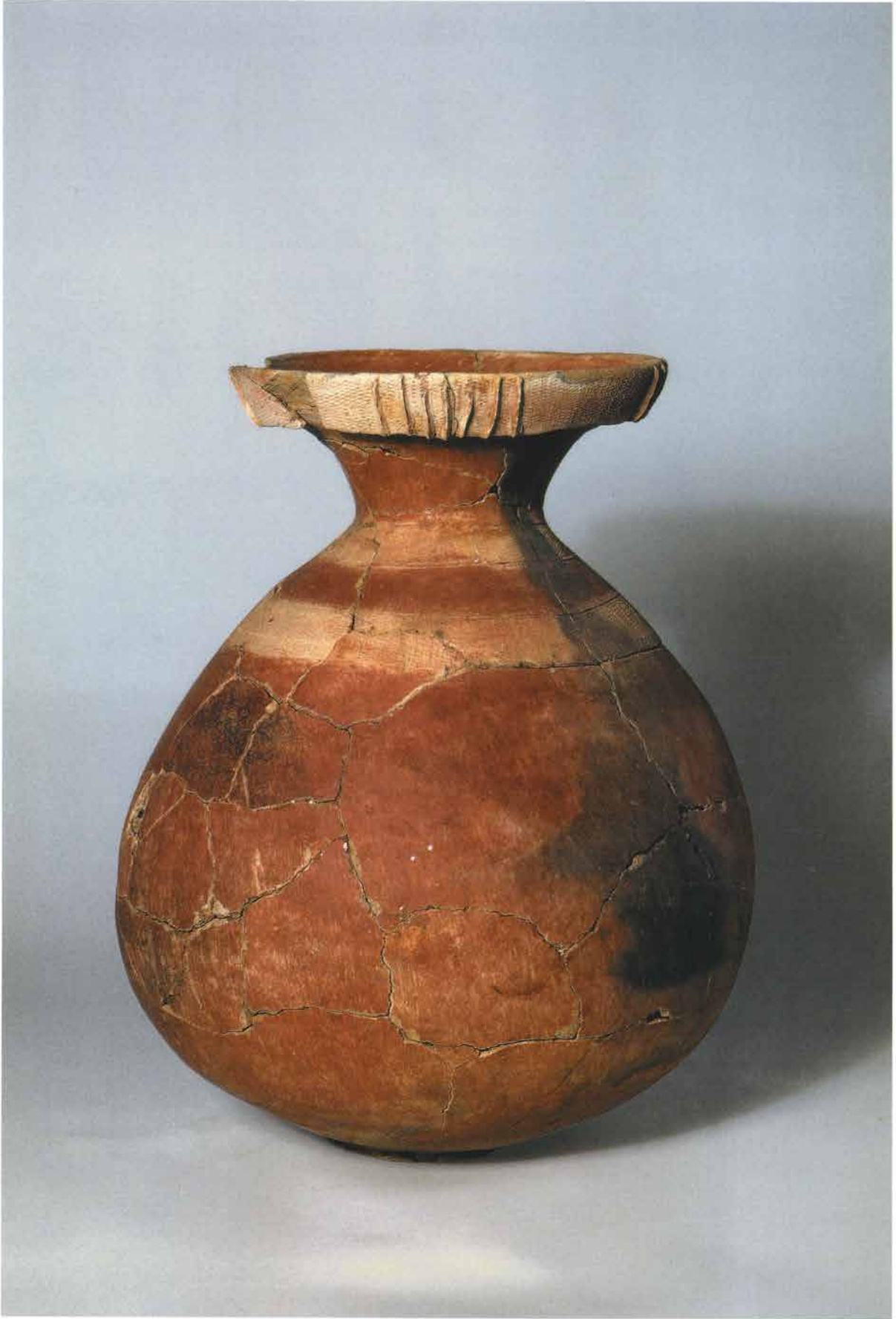
県土整備局高崎土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

中居町一丁目遺跡

(都) 3. 3. 8 高崎駅東口線地方特定街路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

県土整備局高崎土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1号方形周溝墓出土の網目状燃糸文壺



1号方形周溝墓全景



1号方形周溝墓出土土器群(左端の土器高36cm)

序

高崎市は、榛名山を背景に望む、広大な関東平野の北端に位置する、群馬県を代表する都市です。平成18年1月23日に、倉渕村、箕郷町、群馬町、新町と、10月1日には榛名町と合併し、新たな市の人口は34万人を超え、面積は401.01平方キロメートルに及びます。市域や人口の大幅な拡大に伴って、今後は特例市から中核市への移行が計画されています。また、都市機能の充実とさらなる発展を目途とした基盤整備も同時に進められています。かつてのどかな田園が広がっていた高崎駅東口地域も、現在では宅地化が進み、新たな道路建設によって商業地域としての一大中心地となりつつあります。

(都)3.3.8高崎駅東口線の道路整備は、このような市街地発展の要請に基づいて計画されたものです。この道路整備事業実施に伴い、工事予定地の埋蔵文化財保護を目的とした発掘調査が行われることとなりました。高崎市は群馬県内でも有数の遺跡分布地として知られており、特に弥生時代以降は、大小河川の集まる豊富な水源に恵まれて、早くから水田開発が進められ、当時の農耕集落の遺跡が濃密に存在することがわかっています。中居町一丁目遺跡はこのような初期農耕集落のひとつと考えられ、この度の発掘調査によって、古墳時代はじめ頃の集落と方形周溝墓という特有の墓の存在が明らかとなりました。なかでも、墓に供献された土器の中で発見された、赤い彩色のひとときわ美しい壺は、遠く離れた東京湾沿岸地域からはるばる群馬の地にもたらされた搬入品であり、当時の地域間交流の様子をうかがわせる重要な証拠品として、大きな注目を集めています。

このたび、このような発掘調査の成果をとりまとめ、報告書として刊行する運びとなりました。古代人たちが残してくれた貴重な歴史資料として、本書を多くの方々に活用していただけたら幸甚です。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご協力を賜った県土整備局高崎土木事務所、群馬県教育委員会文化課、高崎市教育委員会、地元関係者の皆様に心より感謝の意をあらわし序といたします。

平成19年2月23日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例 言

- 1 本書は、(都)3. 3. 8高崎駅東口線地方特定街路整備事業に伴い事前調査された中居町一丁目遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 中居町一丁目遺跡は高崎市中居町一丁目28-11に所在する。
- 3 事業主体 群馬県県土整備局高崎土木事務所
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成17年1月1日～平成17年2月28日
- 6 調査組織
事務担当 小野宇三郎、住谷永市、神保侑史、矢崎俊夫、右島和夫、丸岡道雄、中東耕志、竹内 宏、高橋房雄、須田朋子、吉田有光、栗原幸代、佐藤聖行、阿久津玄洋
事務補助 内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、吉田茂松下次男、狩野真子
調査担当 柏木一男、瀧川仲男
- 7 整理期間 平成17年4月1日～平成17年6月30日
平成18年1月1日～平成18年3月31日
以上、柏木一男が担当
平成18年10月1日～平成18年11月30日
以上、大木紳一郎が担当
- 8 整理組織
事務担当 小野宇三郎、高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、矢崎俊夫、萩原 勉、中東耕志、宮前結城雄、笠原秀樹、竹内 宏、石井 清、須田朋子、今泉大作、吉田有光、栗原幸代、斉藤恵利子、清水秀紀、柳岡良宏、

- 佐藤聖行
- 事務補助 内山佳子、本間久美子、武藤秀典、北原かおり、若田誠、今井もと子
- 整理担当 柏木一男、大木紳一郎
- 整理補助 安藤三枝子、勅使河原繰子、石関富美代、松井さえ子、八峠美津子、長岡美和子、馬場信子、堀米弘美、小淵トモ子、山口洋子、関口正広
- 9 報告書作成関係者
本文執筆 第1章-1 中東耕志
第1章-2 柏木一男
第2章 大木紳一郎
第3章 柏木一男
(大木が加筆)
第4章 大木紳一郎
第5章 榑崎修一郎
第6章 大木紳一郎
編集作業 柏木一男、大木紳一郎
遺構写真撮影 柏木一男、瀧川仲男
遺物写真撮影 佐藤元彦
図版作成 長岡美和子、馬場信子、堀米弘美、小淵トモ子、山口洋子、関口正広
- 10 整理協力者 土器については松本 完氏からは有益な意言をいただき、石器については岩崎泰一(当事業団 職員)、縄文土器について藤巻幸男(同職員)からを助言をいただいた。記して感謝する。
- 11 本遺跡の出土遺物と記録資料については群馬県埋蔵文化財センターに保管している。
- 12 発掘調査及び整理作業を実施するにあたり、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、群馬県県土整備局高崎土木事務所の関係者、及び右島和夫、田口一郎、若狭徹、黒田晃の諸氏、地元関係者の各位ほか多くの方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は国家座標(世界測地系)第IX系による座標北を表している。
- 2 遺構図に記載した標高値、等高線値の数値はmを単位とする。
- 3 遺構平面図に示した座標値はX軸値・Y軸値とも5桁の数値で示したが、下3桁で示した図もあるので注意されたい。
- 4 遺構の平面位置の記述にあたっては、座標値の下3桁の数値を記載して示してある。
- 5 遺構名称は発掘調査時の呼称をそのまま使用し、調査途中及び整理作業段階で不適と思われた遺構名については欠番とした。また呼称については、「番号-遺構種類」の順で記載してある。
- 6 土色記載には『標準土色帳』農林省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修に基本的に準じた。
- 6 遺構図の縮尺は住居跡1/60、方形周溝墓1/100、土坑・ピット1/40、溝平面図1/80、溝断面図1/40を基準としている。遺物図の縮尺は1/3を基準とした。
- 7 挿図に使用した地形図は、国土地理院 地形図1/25000「高崎」である。
- 9 遺物番号は、本報告記載にあたって、遺構毎に通し番号を付与した。挿図掲載番号と観察表番号及び写真図版の番号は一致する。
- 10 観察表記載事項は、種類名、出土位置(床面・底面からの高さをcm単位の数値で示し、+は床上、-は床下を示す)、遺存状況、法量、材質、器形と整形の特徴であり、法量に関する単位は観察表に記載してある。

目 次

口絵

序

例言・凡例

第1章 発掘調査の経過と方法

- 1 調査に至る経緯…………… 1
- 2 調査の経過と方法…………… 2
 - (1) 調査の経過…………… 2
 - (2) 発掘調査の方法…………… 2
 - (3) 基本土層…………… 3
 - (4) 調査日誌抄…………… 4

第2章 遺跡の立地と環境

- 1 遺跡の立地…………… 5
- 2 周辺の遺跡…………… 6

第3章 検出された遺構と遺物

- 概 要…………… 11
- 1 竪穴住居跡…………… 12
- 2 方形周溝墓…………… 45
- 3 井戸…………… 66
- 4 土坑…………… 68
- 5 溝…………… 70
- 6 ピット…………… 72
- 7 火葬跡…………… 73
- 8 遺構外出土遺物…………… 73

第4章 出土遺物観察表…………… 78

第5章 中居町一丁目遺跡出土人骨…………… 103

第6章 まとめ…………… 105

写真図版

抄 録

挿 図 目 次

第1図	調査対象区域図
第2図	グリッド設定図
第3図	基本土層図
第4図	前橋台地の地形分類図
第5図	遺跡周辺の微地形図
第6図	周辺の遺跡分布図
第7図	遺構全体図
第8図	1号住居跡
第9図	1号住居跡出土遺物
第10図	2号住居跡出土遺物
第11図	2号住居跡
第12図	3号住居跡及び出土遺物(1)
第13図	3号住居跡出土遺物(2)
第14図	3号住居跡出土遺物(3)
第15図	4号住居跡及び出土遺物(1)
第16図	4号住居跡出土遺物(2)
第17図	5号住居跡
第18図	5号住居跡出土遺物
第19図	6号住居跡及び出土遺物(1)
第20図	6号住居跡出土遺物(2)
第21図	7号住居跡及び出土遺物
第22図	8号住居跡及び出土遺物
第23図	9号住居跡
第24図	9号住居跡出土遺物
第25図	10号住居跡
第26図	10号住居跡遺物出土分布図
第27図	10号住居跡出土遺物(1)
第28図	10号住居跡出土遺物(2)
第29図	10号住居跡出土遺物(3)
第30図	10号住居跡出土遺物(4)
第31図	10号住居跡出土遺物(5)
第32図	10号住居跡出土遺物(6)
第33図	11号住居跡及び出土遺物
第34図	12号住居跡
第35図	12号住居跡出土遺物(1)
第36図	12号住居跡出土遺物(2)
第37図	14号住居跡
第38図	14号住居跡炉・貯蔵穴断面図
第39図	14号住居跡出土遺物
第40図	15号住居跡及び出土遺物(1)
第41図	15号住居跡出土遺物(2)
第42図	16号住居跡及び出土遺物
第43図	17号住居跡及び出土遺物
第44図	18号住居跡及び出土遺物
第45図	1号方形周溝墓
第46図	1号方形周溝墓遺物出土分布図(1)
第47図	1号方形周溝墓遺物出土分布図(2)
第48図	1号方形周溝墓出土遺物(1)
第49図	1号方形周溝墓出土遺物(2)
第50図	1号方形周溝墓出土遺物(3)
第51図	1号方形周溝墓出土遺物(4)
第52図	1号方形周溝墓出土遺物(5)
第53図	1号方形周溝墓出土遺物(6)
第54図	1号方形周溝墓出土遺物(7)
第55図	1号方形周溝墓出土遺物(8)
第56図	1号方形周溝墓出土遺物(9)
第57図	1号方形周溝墓出土遺物(10)
第58図	1号方形周溝墓出土遺物(11)
第59図	1号方形周溝墓出土遺物(12)
第60図	1号方形周溝墓出土遺物(13)

第61図	1号方形周溝墓出土遺物(14)
第62図	1号・2号井戸跡
第63図	3号・4号・5号・6号井戸跡
第64図	1号・2号・3号・4号土坑
第65図	5号・6号土坑
第66図	6号土坑出土遺物
第67図	1号溝及び出土遺物
第68図	3号・4号溝及び出土遺物
第69図	1～13号ピット
第70図	1号火葬跡
第71図	遺構外出土遺物(縄文土器)
第72図	遺構外出土遺物(古墳時代土師器1)
第73図	遺構外出土遺物(古墳時代土師器2)
第74図	遺構外出土遺物(古墳時代・古代土器)
第75図	遺構外出土石器
写真1	1号火葬跡火葬人骨出土状況
写真2	1号火葬跡出土火葬人骨(上下顎歯根)
写真3	1号火葬跡出土火葬人骨(上顎右第3大臼歯歯根)
第76図	壺の分類
第77図	甕・高杯の分類
第78図	土器の編年(1)
第79図	土器の編年(2)
第80図	網目状撚糸文壺と関連資料

写真図版目次

口絵1	1号方形周溝墓出土網目状撚糸文壺
口絵2	1号方形周溝墓
口絵3	1号方形周溝墓出土土器群
PL1	遺跡全景
PL2	1号住居跡・2号住居跡
PL3	2～6号住居跡
PL4	6～9号住居跡
PL5	10・11号住居跡
PL6	12・14・15号住居跡
PL7	16～18号住居跡、1～4号井戸
PL8	5・6号井戸、1～6号土坑
PL9	1号火葬跡、1・3号溝、1号方形周溝墓
PL10	1号方形周溝墓
PL11	1号方形周溝墓遺物出土状況ほか
PL12	1号方形周溝墓遺物出土状況
PL13	1号方形周溝墓遺物出土状況
PL14	1・2・4～6号住居跡出土遺物
PL15	10号住居跡出土遺物(1)
PL16	10号住居跡出土遺物(2)
PL17	9・11・12号住居跡出土遺物
PL18	11・12号住居跡出土遺物
PL19	14・15・17・18号住居跡出土遺物
PL20	1号方形周溝墓出土遺物(1)
PL21	1号方形周溝墓出土遺物(2)
PL22	1号方形周溝墓出土遺物(3)
PL23	1号方形周溝墓出土遺物(4)
PL24	1号方形周溝墓出土遺物(5)
PL25	1号方形周溝墓出土遺物(6)
PL26	6号土坑出土遺物、1・3号溝出土遺物、遺構外出土遺物(古墳時代土器)

表 目 次

表1	周辺の遺跡一覧-----	9
表2	ピット計測表-----	72

第1章 発掘調査の経過と方法

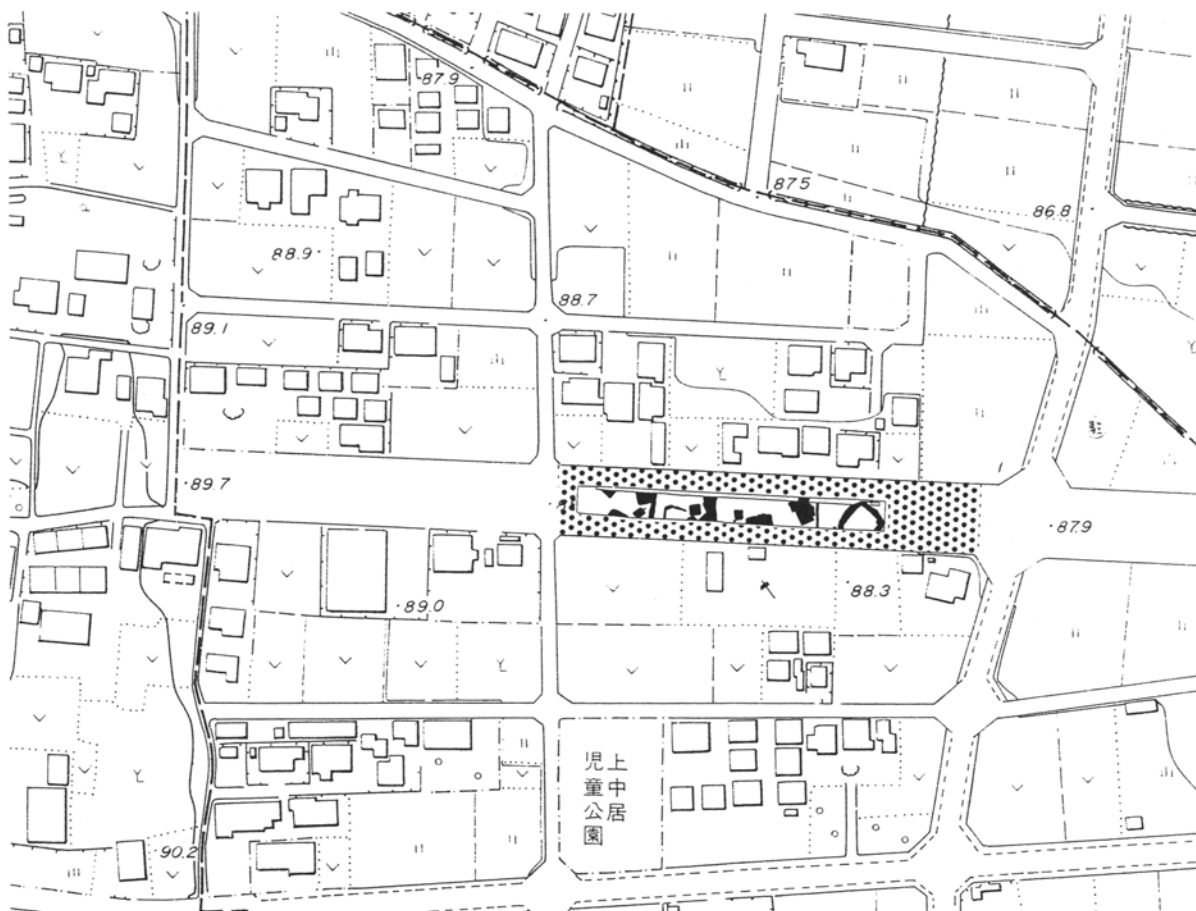
1 調査に至る経緯

本遺跡は県教育委員会文化課では、県土木部高崎土木事務所から（都）3.3.8高崎駅東口線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の事業紹介があり、平成16年8月5日と6日の2日間で試掘調査を実施した。その結果、古墳時代の住居跡や溝が検出され、約1,500㎡については本調査が必要であると判断された。

同年8月26日に文化課・高崎土木事務所・高崎市水道局の三者の第一回目の調整会議が開催され、発掘調査の実施にあたり事務所用地や地下埋設物、排土置き場、掘削の方法等の協議がなされた。同時に、文化課から群馬県埋蔵文化財調査事業団へ、発掘調査の実施と資料整理作業に関する事前打診があ

り、平成16年11月9日に発掘調査の依頼文が提出された。さらに、同年12月1日付けで本事業団理事長と高崎土木事務所長の間で、「平成16年度（都）3.3.8高崎駅東口線埋蔵文化財発掘調査」の委託契約が締結され、平成17年1月4日から同年2月28日までの2ヶ月間発掘調査を実施することが決定された。

発掘調査の着手にあたり、同年1月6日に文化課と高崎土木事務所、本埋蔵文化財調査事業団の三者で現地立会をおこない、隣接地住民の車両通行区域を確保するとともに、安全柵の設置及び夜間安全灯を設置し、表土除去に着手した。さらに、発掘調査終了後の資料整理事業は、平成17年度及び18年度に実施し、発掘調査報告書を刊行する全体事業実施計画が協議された。



第1図 調査対象区域図 1/2500(高崎市都市計画図より作成)

2 調査の経過と方法

(1) 調査の経過

調査区は、簡易舗装された道路として使用されていたため、重機によりアスファルトを切断し、その下の碎石を取り除くことから始めた。

今回の調査区は遺構掘削により、排出する土の捨て場がないため、調査区を半分に分け、まず東半分を調査終了させてから、西半分の調査を実施する計画で調査を開始した。まず東半分を重機により遺物包含層まで掘り下げ始め、終了したのが1月20日であった。重機で剥がした所から順次遺構掘削作業を進めていったところ、試掘調査では確認されていなかった方形周溝墓が1基検出され、土器も多量に出土した。また、竪穴住居跡も予想された数より多く検出された。そのため、東半部分と西半部分を分割する当初の調査工程を変更せざるを得なくなり、2月1日から西半分の調査を開始し、全面的な調査展開を行うこととなった。

表土面から80~100cmで地山の前橋泥流層に達し、湧水が著しいために、調査の進捗に深刻な障害となった。そこで、排水ポンプを昼夜稼動して遺構掘削作業を進めた。

調査は調査区東端で検出された方形周溝墓から始めたが、予想以上に多くの遺構と遺物が検出されたため、調査には繁忙を極めた。方形周溝墓からは南関東系の美しい壺をはじめ多量の供献土器が発見され、県内外の研究者に注目を浴びることとなった。その成果の一端は、一般市民を対象に平成17年7月2日の群馬県埋蔵文化財調査事業団遺跡発表会にて公表してある。

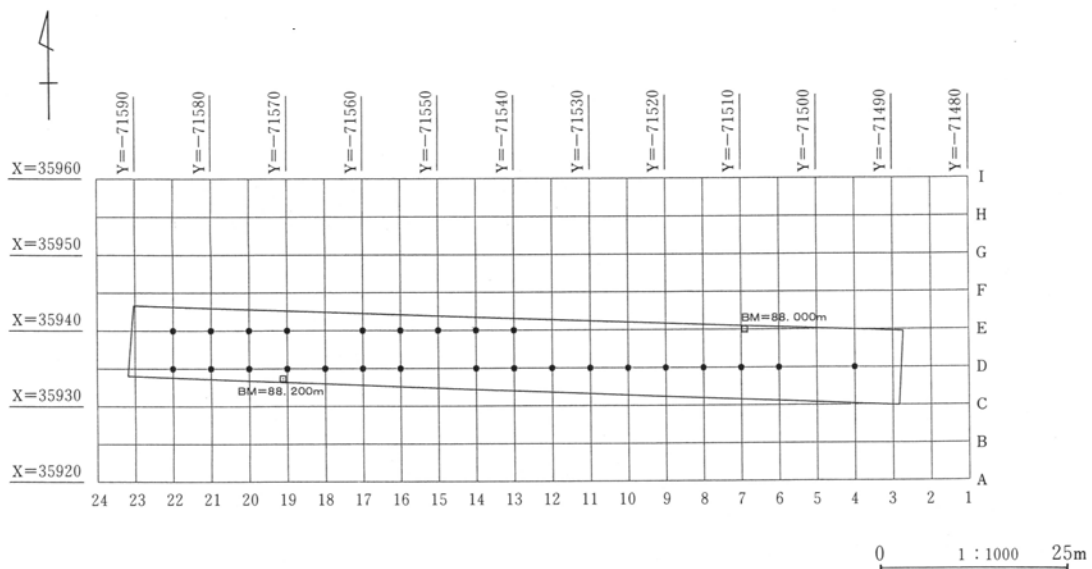
(2) 発掘調査の方法

調査区における調査グリッドの設定は国家座標系を用いた。5m方眼のグリッドで、南東隅の杭を基準とし、北へ5m進むごとにA→I、西に5m進むごとに1→24とし、アルファベットと算用数字の組み合わせで、グリッド名とした(第2図)。

調査手順は、表土については、重機による掘削を行い、その後、記録用測量杭を国家座標軸に沿って打設した。始めにトレンチ調査を行い、遺構分布と検出面の深さの確認を行った。

遺構番号は、遺構ごとに検出順序をもとに算用数字を付した。

遺構の測量については、原則として竪穴住居跡・土坑・井戸・ピット等の平面図を1/20、溝跡・方



第2図 グリッド設定図

形周溝墓の平面図を1/40の縮尺とした。調査区全体図は1/100、断面図はすべて1/20で測量した。

遺物取り上げは、原則的に遺構ごとに番号を付し、平面位置測量と出土レベルの計測を行った。埋土上層出土品や遺構に伴わない遺物については、遺構名

やグリッド名を明記し、層位ごとに取り上げた。

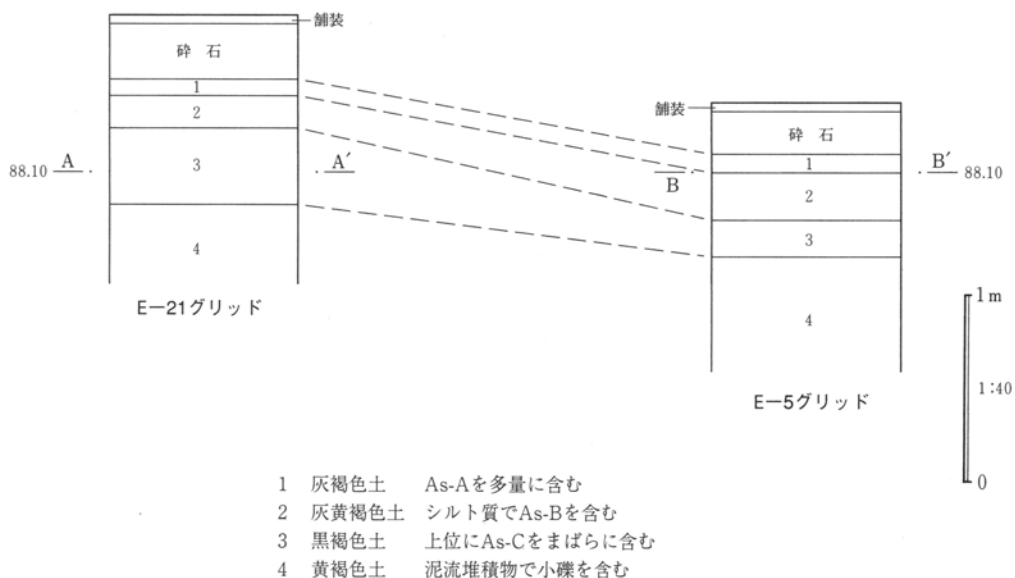
遺構記録写真撮影は担当職員が行い、6×7判と35mmの一眼レフカメラによる銀塩フィルム・カラーリバーサルフィルムに記録した。

(3) 基本土層

遺跡地は烏川と井野川に挟まれた地に位置し、前橋台地と呼ばれる台地上に位置している。この一帯には小河川が網目状に流れており、微高地と低湿地が複雑に入り組んだ地形を形成している。本遺跡は微高地上に立地している。

ここでは、本調査区内の土層を模式図で示す。調査区内は簡易舗装されていたため、図の最上層は舗装部分である。その下には碎石が入られていた。1層は現表土・耕作土の一部になり、As-A（浅間Aテフラ1783年）が多量、As-B（浅間Bテフラ1108

年）が含まれる灰褐色土である。2層はAs-B、As-C（浅間Cテフラ3世紀後半代）が含まれる粘質のある灰黄褐色土である。厚さは20cm程である。中世以降の遺構にはこの2層の土が入る。3層はAs-Cテフラ、前橋泥流土を含む黒褐色土である。厚さは東側では約25cm程で、西側へいくほど厚くなり約40cm程になっていた。また、上面の高さも東側が西側より40cm程低くなっていた。なお、調査区より東は低湿地となっている。4層は前橋泥流層で、10m以上の堆積厚と想定される。



第3図 基本土層図

(4) 調査日誌抄

平成17年

- 1月4日 群馬県教育委員会文化課調整担当者立ち会いのもと、遺跡発掘調査範囲と現状の確認。
- 1月5日 調査用具等の準備
- 1月6日 遺跡現地にて、高崎土木事務所担当者と調査方法についての打ち合わせ。
- 1月7日 調査範囲内の現用道路の舗装除去作業開始。
- 1月12日 調査区東端から重機による表土掘削作業開始。表土層下から古墳時代前期を主とする土器片が出土。
- 1月13日 調査区東端の遺構確認作業で、溝を確認。同時に古墳時代土器の集中する箇所を確認。
- 1月14日 調査区東半で南北に走る溝を確認、浅間B軽石の堆積を認め、1号溝と命名する。前日確認の東端における溝を2号溝と命名する。
- 1月18日 調査区東半で確認された土坑3基と1号溝の調査開始。
- 1月19日 調査区東半で古墳時代前期と思われる竪穴住居跡2棟を確認。精査開始。
- 1月20日 1号住居跡と2号溝が重複すると判断し、精査を進める。2号溝の平面プランが屈曲し、方形周溝墓の可能性が出てくる。
- 1月24日 2号溝埋土から多量の古墳時代土器が出土。ますます方形周溝墓の可能性強まる。高崎土木事務所担当者来跡。
- 1月26日 精査の終了した1号・2号住居跡、土坑等の測量を開始。2号溝では多量の土器取上作業。
- 1月27日 2号溝を方形周溝墓と認定し、精査を継続する。
- 1月28日 方形周溝墓溝底から完形に復元可能な赤彩壺が出土。南関東系土器と判明。
- 2月1日 方形周溝墓の遺物取上作業と分布図測量作業継続。
- 2月3日 調査区西半での遺構確認作業で古墳時代前期住居跡を複数確認。中世と推測される3号溝の精査開始。
- 2月7日 住居跡の精査に比重を移す。
- 2月9日 調査区中央部で住居跡6棟の重複を確認、精査を開始する。
- 2月10日 中世火葬跡で人骨を確認。
- 2月13日 火葬跡の人骨取上作業。
- 2月15日 方形周溝墓の全景写真撮影。
- 2月16日 降雪のため、現場での作業を中止。
- 2月17日 住居群、土坑の精査継続。方形周溝墓の測量開始。
- 2月24日 遺構の精査作業をほぼ終了し、測量、記録作業に比重を移す。
- 2月28日 遺跡発掘現場における発掘記録作業を全て終了する。

第2章 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

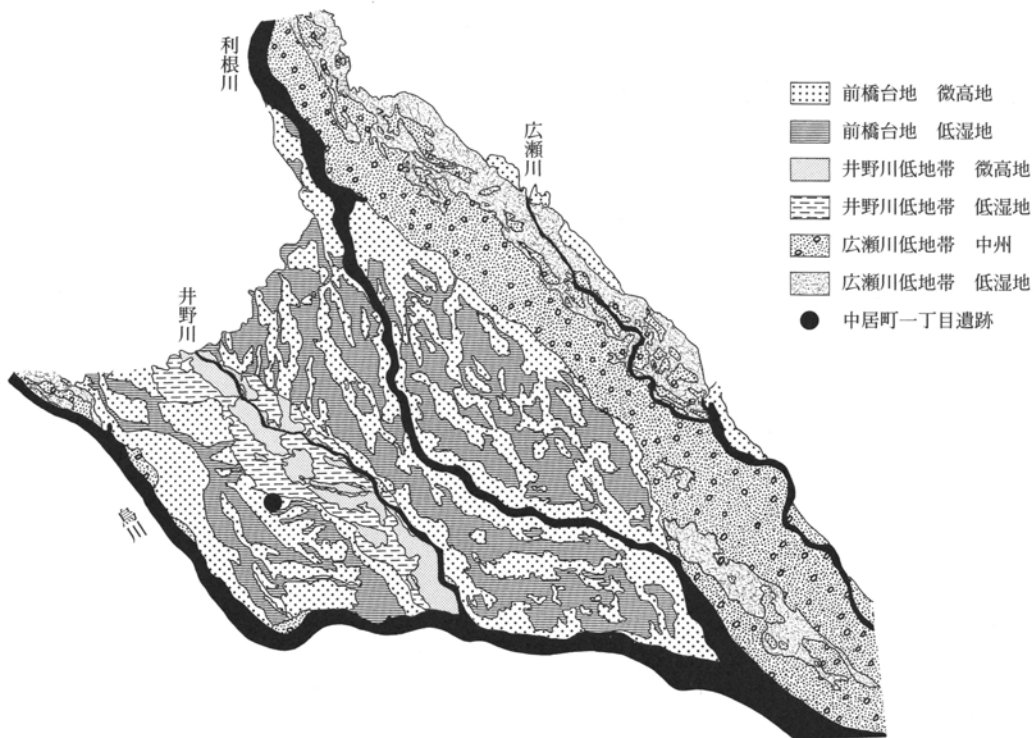
中居町一丁目遺跡は、群馬県高崎市の南東部、中居町に位置し、JR高崎駅から東に約2kmの距離にある。

群馬県の県央部に位置する榛名山南麓の相馬が原を南下していくと、緩やかな傾斜になり、そのうちに平坦な面になる。この面を前橋台地と呼び、この辺りが上信越の山地と関東平野の境界にあたる。この前橋台地の基盤層は約2.1万年前の浅間山の噴火に伴う、大規模な山体崩落によつての堆積物である前橋泥流が10メートル以上堆積している。高崎市の西に烏川、東方には利根川が流れ、この河川に挟まれた台地上には井野川や染谷川など小河川が流れており、この河川の流れに沿い北西から南東に向けて緩やかに低くなっている。この中央付近を流れる井野川流域には段丘と谷底平野からなる井野川低地帯

が広がっている。

本遺跡は、この烏川と井野川に挟まれた地にある。本遺跡から東約2.5kmを井野川が、西約3kmを烏川がそれぞれ南東流し、この遺跡から南東6kmの地点で合流している。この2川に挟まれた一帯は台地上になっており、ここに小河川が網目状に流れている。そのため、微高地と低湿地が複雑に入り組んだ地形になっている。調査地は微高地上の縁辺部に立地し、標高は概ね89mを測る。調査地より東方は低湿地帯が広がっている。

高崎市内を南東方向に流下する井野川は、榛名山南斜面中腹に源を発し、延長約26kmで烏川に合流する小規模な河川である。井野川は両側に幅約10km前後の低地帯を形成し、下流域では右岸側に段丘地形を作り出している。本遺跡は、この井野川低地帯の右岸に位置し、さほどの比高はないものの北東低地帯を臨む微高地端に立地する（第4図）。



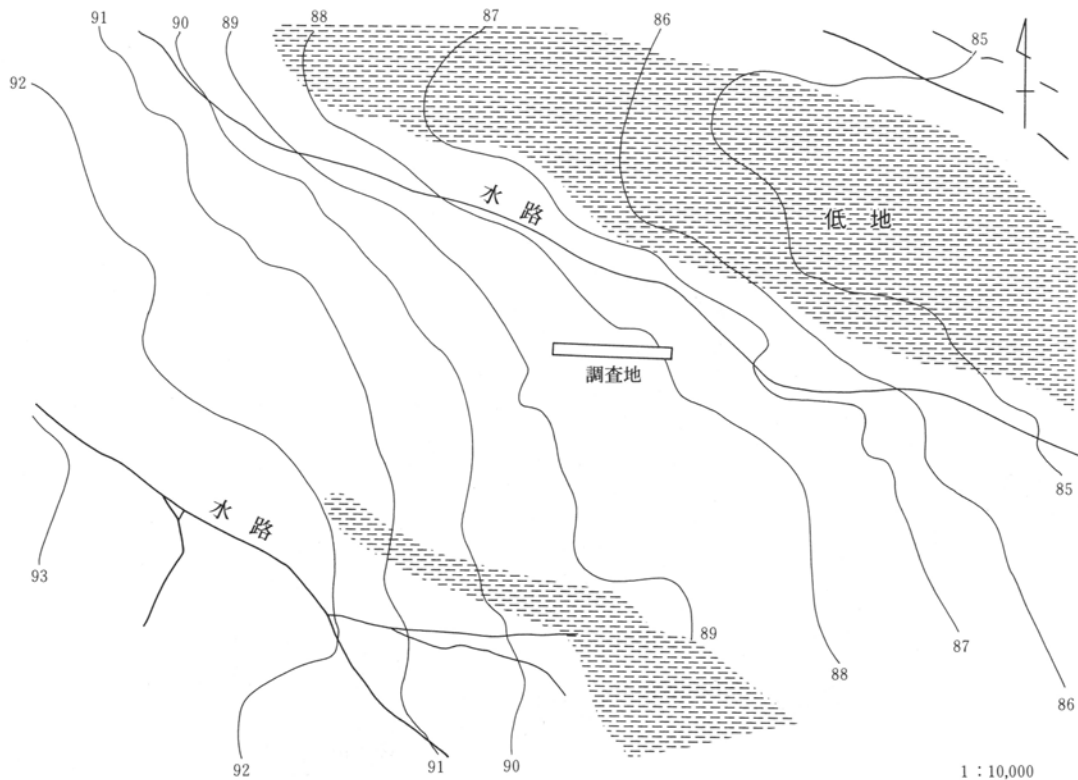
1 : 200,000

第4図 前橋台地の地形分類図

遺跡地の現在の標高は89～88mで、西から北東方向に緩い傾斜面（約1%）となっている。この微高地上は現在宅地化が進んでおり、所々で畠が営まれているが、明治18年測量の陸軍迅速図によれば、周辺は大部分が水田化されていた。調査地の北側約80mで、灌漑用水路が東流し、これより北側は井野川の低地帯となっており、現在も水田として利用されている。調査地東端と最寄水田面との比高は約1mで、北東300mほどで標高84mの最低面に達する。さらに遺跡地から北東500mには東南東方向に延びる微高地がある。遺跡の立地する微高地は、きわめて小規模な窪地を除いて約1.5kmの幅で北西から南東方向へ展開し、微高地の南西側はJR高崎線付近から烏川左岸にかけて広い低地帯が広がる。古墳時代以降の氾濫堆積物が被う利根川流域に比べれば、古地形を残すと考えられよう。

2 周辺の遺跡

現在の前橋市と高崎市の市街区を載せる通称前橋台地は、2.1万年前の浅間山山体崩壊による前橋泥流堆積物が10mを越える厚さで堆積していることは前述した。この地域では旧石器時代の遺跡が皆無といってよいほど確認されていないが、この泥流堆積の前後期にあたる環境条件が大きく影響しているのだろう。高崎市域では、雨壺遺跡、少林山台遺跡、岩鼻坂上北遺跡、融通寺遺跡が尖頭器を出土した遺跡として知られるが、いずれも単独出土であり、融通寺遺跡以外は、本来の出土層位も不明確である。本遺跡周辺の微高地は、ローム層の堆積が未発達であり、小河川による台地上の侵食、堆積作用が盛んな地形形成期にあたっていて、旧石器人の生活の場としては適していなかったのかも知れない。



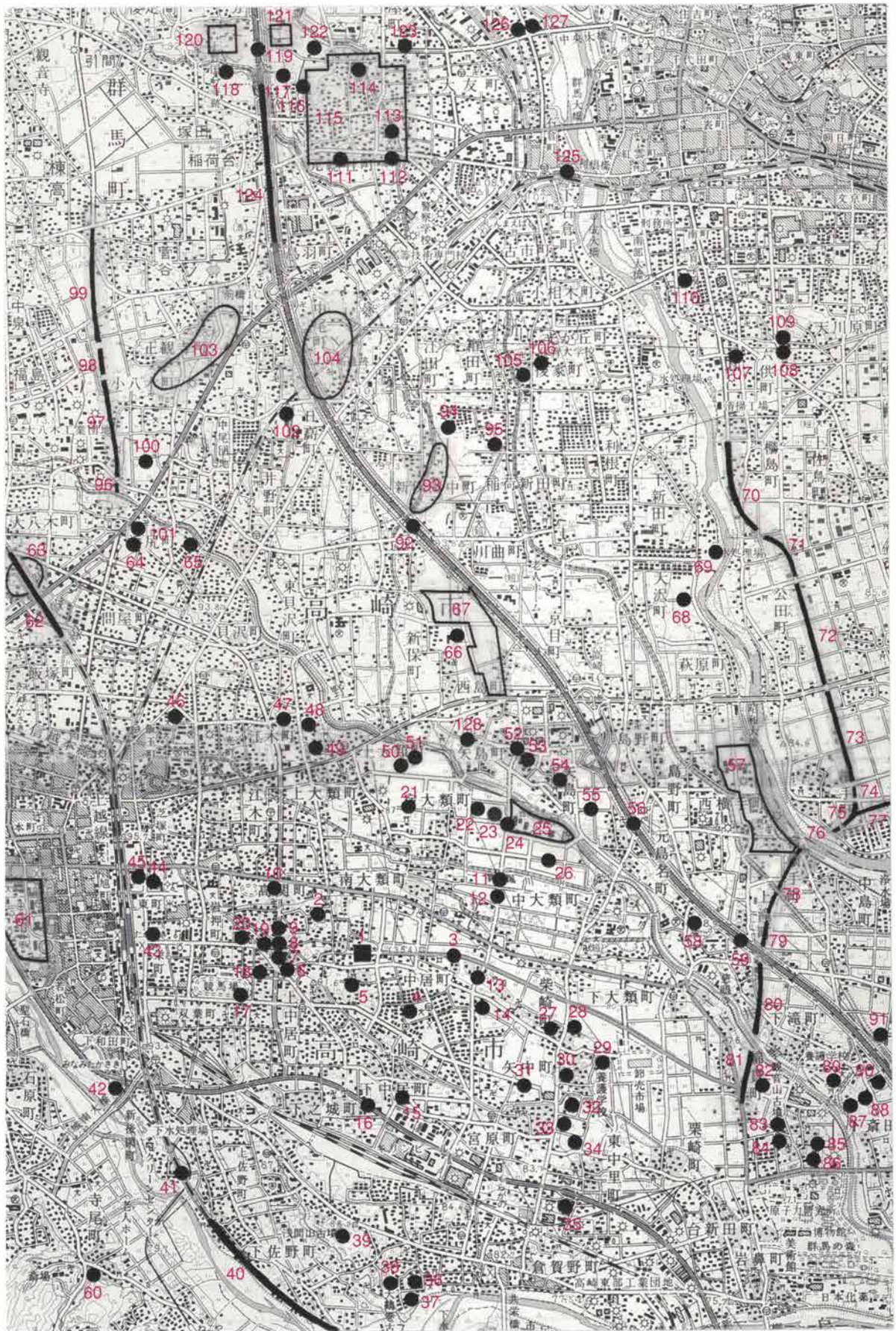
第5図 遺跡周辺の微地形図

高崎市域における縄文時代の遺跡の分布傾向は、群馬県内の他地域と同様の推移をたどるようである。ただし、烏川右岸の観音山丘陵での濃い分布密度は突出しており、本遺跡の立地する前橋台地上は非常に稀薄である。いちおう前期から後期までの土器や石器の分布は認められるが、遺構を伴う例は少ない。沖積層に埋没して発見出来ない、あるいは侵食作用で消滅した遺跡も当然想定できるが、埋蔵文化財発掘調査件数に比較して、これだけ少ないのはやはり縄文時代の遺跡分布傾向として現状は捉えておくべきだろう。井野川右岸の山鳥・天神遺跡(22・23)では、前期諸磯b～c期の小規模な集落が確認されている。また、前橋台地南端の烏川左岸の下佐野遺跡(40)でも前期の土器片が出土するが、この時期における他地域での遺跡急増状況は、ここ前橋台地では明瞭には認識できない。多くの遺構を伴う集落の形成が確認出来るのは、中期後半の加曾利E式期だろう。下佐野遺跡、倉賀野万福寺遺跡(37)、高崎情報団地Ⅱ遺跡では、中期後半からの大規模な集落の存在を推測することが出来る。後期になると再び遺跡数や遺構量の減少が見られるが、一方で低地帯周辺への遺跡の進出が注目されている。

本遺跡の立地する前橋台地微高地上が本格的な遺跡形成期を迎えるのは、弥生時代中期後半以降のことである。分布密度や遺構量・遺物量において、縄文時代以前の状況を遙かに凌ぐとってよい。弥生時代中期後半の土器は、昭和初期頃に発見された高崎市竜見町(43)出土土器を基準に「竜見町式土器」の呼称で知られる。現在では、長野県中～北部に分布する「栗林式」に属する一地方様式との見方も多く、その呼称に問題を残すが、いずれにせよ「栗林式」と同様の簡描文で特徴付けられる土器文化が、この地域を中心に花開いたことは確かである。本遺跡から西約3km烏川左岸に達し、ここには高崎城三の丸遺跡(61)や竜見町遺跡など中期後半の著名な遺跡が分布する。また近隣の西方1.3kmには競馬場遺跡(17)、北西1km地点には高関堰村(10)・高関村前遺跡(9)等が知られ、弥生中期後半の集落や墓

が高い密度で分布する。高崎城三の丸遺跡の方形周溝墓は、中期後半に遡る群馬県での最古例として知られる。

中居町一丁目遺跡の立地する微高地北辺には、弥生後期～古墳前期の遺跡が並列する。本遺跡の東方300m地点には弥生後期の遺物散布地、900m地点では方形周溝墓、さらに1.2km地点でも方形周溝墓の存在が知られる。一方、本遺跡の北側に展開する低地に沿って北方1.8km地点には上大類北宅地遺跡(49)があり、弥生後期～古墳時代前期の集落と方形周溝墓群が知られる。またこの低地の北方対岸の井野川自然堤防上には宿大類村西遺跡(21)がある。ここでは、住居跡から後期前半の南関東系壺が出土しており、中居町一丁目遺跡に先行して南関東地域との交流を示す例として注目される。また、本遺跡の北東1.2km付近の井野川兩岸の自然堤防上には矢島竹之内(52)、矢島町薬師(53)、万相寺(25)、高崎情報団地遺跡(26)、鈴ノ宮(54)、元島名(55)など弥生後期～古墳時代前期の遺跡が林立する。さらに井野川左岸には前期の大型前方後方墳である元島名將軍塚古墳(58)が存在する。本遺跡ののる微高地上の東南方約2km地点には、小規模古墳ながら「正始元年」銘の三角縁神獸鏡出土で著名な柴崎蟹沢古墳(28)が存在していた。さて本遺跡北側の低地では、As-B直下水田の存在が知られるが、この低地を取り巻く微高地上には以上に掲げたような弥生中期後半～古墳時代の集落が濃密に分布することから、弥生～古墳時代においても水田として利用されていたのは間違いないところであろう。以上に見るように、本遺跡ののる前橋台地上では、弥生中期後半以降についても遺跡が継続する傾向がうかがえ、多少の断絶期間はあるにせよ、平安時代まで長期にわたって連綿と集落が存続する遺跡群が多く分布する。このことは、井野川流域を中心とした低地帯が、稲作農耕などの安定した生産基盤であったことを推測させる。また、大小河川の合流する重要な交通上の要衝であることも理由のひとつになるだろう。



第6図 周辺の遺跡分布図（1：50000）

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	文献	番号	遺跡名	時代	文献
1	中居町一丁目	古平	本報告書	65	浜尻旭貝戸	弥奈平中近	96
2	岡久保	奈平	105	66	西島相ノ沢	弥古奈平中近	34
3	芝崎南大類	古奈平中近	117	67	西島遺跡群Ⅱ・Ⅲ	古奈平中近	32
4	念仏塚古墳	古		68	萩原団地	古奈平中近	88
5	稲荷塚古墳	古		69	下新田	奈平	59
6	上中居西屋敷Ⅱ	中近	107	70	礪島川端	縄弥古奈平	36・57
7	上中居辻薬師	中近	113	71	公田東	古奈平中近	57
8	上中居辻薬師Ⅱ	古中近	93	72	公田池尻	古奈平中近	57
9	高関村前・村前Ⅱ	縄弥古奈平中近	8・97	73	亀里平塚	奈平中近	24
10	高関堰村	縄弥	27	74	横手宮田	古奈平	24
11	南大類東沖	弥奈平中近	110	75	横手早稲田	縄古奈平中近	24
12	南大類稲荷	古奈平	110	76	横手南川端	古奈平中近	24・33
13	芝崎西浦・吹手西	古奈平中近	86・87	77	横手湯田	古奈平中近	33
14	天王前	古奈平	70	78	宿横手三波川	古奈平中近	30・111
15	下中居条里	縄古奈平中近	92	79	上滝榎町北・上滝Ⅱ	古奈平中近	115
16	下之城条里	古奈平中近	68	80	下滝天水	縄弥古奈平中近	113
17	高崎競馬場	古	84	81	綿貫小林前	古奈平中近	90
18	上中居西屋敷	奈平	85	82	綿貫	古奈平中近	13
19	上中居早場道	古奈平中近	98	83	綿貫観音山古墳	古	108
20	上中居平塚Ⅱ	古奈平中近	104	84	普賢寺裏古墳	古	123・124
21	宿大類村西	縄弥古奈平中近	95	85	綿貫堀米前Ⅱ	縄古奈平	29
22	山鳥	古奈平	72	86	不動山東	古奈平	118
23	天神	縄奈平	72	87	下滝赤城	古中近	25
24	天神久保	奈平	21	88	下滝高井前	縄古奈平	25
25	万相寺	縄弥古奈平中近	73	89	下滝梅崎	縄古中近	106
26	高崎情報団地	縄弥古奈平中近	11	90	下滝齊田北	奈平	25
27	柴崎村間	古中近	89	91	下滝社宮司東	古	25
28	蟹沢古墳	古	120・124	92	新保	縄弥古奈平中近	82
29	柴崎熊野前	古奈平中近	39	93	新保田中村前	弥古奈平中近	74
30	砂内	古	77	94	箱田境	奈平	41
31	下村北	奈平中近	77	95	稲荷	古奈平	43
32	矢中村東	古奈平	15	96	小八木井野川	縄弥古奈平中近	38
33	矢中村東B	古奈平	79	97	小八木志志貝戸	縄弥古奈平中近	38
34	矢中村東C	古奈平中近	80	98	正観寺西原	弥奈平	26・38
35	倉賀野中里前	古奈平中近	47	99	菅谷石塚	弥古奈平中近	26・38・91
36	倉賀野万福寺Ⅱ	縄古中近	6	100	小八木	縄弥古奈平中近	65
37	倉賀野万福寺	縄古	5	101	浜尻A	弥	54
38	大鶴巻古墳	縄古	125	102	中尾村前V	古奈平	103
39	浅間山古墳	古	121・122・124	103	正観寺遺跡群	縄弥古奈平中近	26
40	下佐野	縄弥古奈平中近	1・2	104	日高	弥古奈平	4・109・119
41	船橋	縄弥古奈平中近	40	105	村前	奈平	42
42	城南小校庭	弥	99	106	五反田	奈平中近	45
43	竜見町	弥	100	107	六供中京安寺	縄古奈平中近	16
44	東町Ⅲ	弥古奈平中近	28	108	六供東京安寺	古奈平	18
45	東町Ⅳ	弥古奈平	94	109	六供下堂木Ⅲ	奈平	16
46	稲荷町Ⅰ	古奈平	17	110	生川	古奈平	46
47	貝沢柳町	古奈平中近	12	111	天神	奈平	64
48	上大類薬師	弥古奈平	75	112	元総社寺田	旧縄弥古奈平中近	14
49	上大類北宅地	弥古奈平	3	113	元総社明神	縄弥古奈平中近	22・23
50	天田	縄奈平中近	35・71	114	総社閑泉明神北	縄古奈平中近	52
51	川押	奈平	35	115	上野国府跡	奈平	61
52	矢島竹ノ内	弥古奈平	78	116	草作	縄古奈平	63
53	矢島町薬師	弥古奈平中近	31	117	元総社小見	縄古奈平	53
54	鈴ノ宮	弥古奈平	116	118	元総社西川	縄弥古奈平中近	20
55	元島名	弥古奈平中近	10	119	上野国分寺尼寺中間	縄弥古奈平中近	51・62
56	元島名B	中近	83	120	上野国分僧寺	縄古奈平中近	67・76
57	西横手遺跡群	古奈平中近	7・81・111	121	上野国分尼寺跡	縄古奈平中近	60・76
58	元島名將軍塚	古	19	122	元総社小見内Ⅱ	縄弥古奈平中近	48
59	上滝	古奈平中近	9	123	閑泉樋南	縄古奈平中近	69
60	寺尾町下	古中近	44	124	鳥羽	縄古奈平	50
61	高崎城	弥古奈平中近	101・102・114	125	石倉下宅地	古奈平	56
62	下小鳥	古奈平	37	126	石倉城	古奈平中近	49
63	大八木水田	奈平	66	127	王山古墳	古	58
64	浜尻B	弥	55	128	矢島町村西・増殿	縄古奈平	127

中居町一丁目遺跡文献一覧〔群埋文〕は群馬県埋蔵文化財調査事業団、「教委」は教育委員会

番号	発行者	発行年	文献名				
1	群埋文	1986	〔下佐野遺跡 II 地区〕	65	高崎市教委	1979-80	〔小八木遺跡調査報告書 (I)・(II)〕
2	群埋文	1989	〔下佐野遺跡 I 地区〕				
3	高崎市教委	1983	〔上大類北宅地遺跡〕	66	高崎市教委	1979	〔大八木水田遺跡〕
4	高崎市教委	1979～82	〔日高遺跡発掘調査報告 (I)～(IV)〕	67	群馬町教委	1975	〔上野国分僧寺寺域縁辺の調査〕
5	山武考古学研究所	1983	〔倉賀野万福寺遺跡〕	68	群埋文	1981	〔下之城条里遺構の調査〕
6	高崎市遺跡調査会	1994	〔倉賀野万福寺 II 遺跡〕	69	山武考古学研究所	1986	〔閑泉樋南遺跡〕
7	群埋文	2001	〔西横手遺跡群〕	70	高崎市教委	1982	〔天王前遺跡〕
8	高崎市教委	1995	〔高関村前 II 遺跡、高関東沖、村前遺跡〕	71	高崎市教委	1984	〔天田遺跡 (II)〕
9	群埋文	1981	〔八幡原 A・B、上滝、元島名 A〕	72	高崎市教委	1984	〔山鳥・天神遺跡〕
10	高崎市教委	1979	〔元島名遺跡〕	73	高崎市教委	1985	〔万相寺遺跡〕
11	高崎市遺跡調査会	1997	〔高崎情報団地遺跡〕	74	群埋文	1990～93	〔新保田中村前遺跡 I～III〕
12	高崎市	1986	〔貝沢柳町遺跡〕	75	高崎市教委	1985	〔上大類薬師遺跡〕
13	高崎市教委	1985	〔綿貫遺跡〕	76	群馬県教委	1988	〔史跡上野国分寺跡〕
14	群埋文	1993～96	〔元総社寺田遺跡 I～III〕	77	高崎市教委	1986	〔下村北・砂内遺跡〕
15	高崎市教委	1984	〔矢中遺跡群 (VII) 矢中村東遺跡〕	78	高崎市教委	1988	〔矢鳥竹之内遺跡〕
16	前橋市教委	1998	〔六供中京安寺遺跡・六供下堂木 III 遺跡〕	79	高崎市教委	1985	〔矢中遺跡群 (VIII)、矢中村東 B 遺跡〕
17	高崎市遺跡調査会	1992	〔稻荷町 I 遺跡〕	80	高崎市教委	1988	〔矢中遺跡群 (X)、矢中村東 C 遺跡〕
18	前橋市埋文調査団	1992	〔六供東京安寺遺跡〕	81	高崎市教委	1989-90	〔西横手遺跡群 (I)・(II)〕
19	高崎市教委	1981	〔元島名將軍塚古墳〕	82	群埋文	1986～88	〔新保遺跡 I～III〕
20	群埋文	2001	〔元総社西川遺跡〕	83	群埋文	1982	〔元島名 B・吹屋遺跡〕
21	高崎市	1985	〔天神久保遺跡〕	84	高崎市教委	1987	〔高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告〕
22	前橋市教委	1983・84	〔元総社明神遺跡 I・II〕	85	高崎市遺跡調査会	1994	〔上中居西屋敷遺跡〕
23	前橋市埋文調査団	1986～94	〔元総社明神遺跡 III～X III〕	86	高崎市教委	1991	〔西浦・吹手西遺跡〕
24	群埋文	2001	〔亀里平塚遺跡、横手宮田遺跡、横手早稲田遺跡、横手南川端遺跡〕	87	高崎市教委	1992	〔西浦・隼人・吹手西遺跡〕
25	高崎市	1990	〔上滝社宮司東・齊田北遺跡、下滝高井前・赤城遺跡〕	88	高崎市教委	1993	〔萩原団地遺跡〕
26	高崎市教委	1972～82	〔正観寺遺跡群 (I)～(IV)〕	89	高崎市遺跡調査会	1990	〔萩崎村間遺跡〕
27	高崎市教委	1992	〔高関塚村遺跡〕	90	群埋文	2006	〔綿貫小林前遺跡〕
28	高崎市教委	1994	〔東町 III 遺跡〕	91	群埋文	2003	〔菅谷石塚遺跡〕
29	高崎市遺跡調査会	2000	〔綿貫堀米前 II 遺跡〕	92	高崎市教委	1996	〔下中居条里遺跡 III〕
30	群埋文	2001	〔宿横手三波川遺跡〕	93	高崎市教委	1992	〔上中居辻薬師 II 遺跡〕
31	高崎市教委	1994	〔矢鳥町薬師遺跡〕	94	高崎市教委	1995	〔東町 IV 遺跡〕
32	高崎市教委	1985-86	〔西島遺跡群 (II)・(III)〕	95	高崎市教委	1987	〔宿大類町村西遺跡〕
33	群埋文	2002	〔横手南川端遺跡、横手湯田遺跡〕	96	高崎市遺跡調査会	2002	〔浜尻旭貝戸遺跡〕
34	高崎市教委	1990	〔西島相ノ沢遺跡〕	97	高崎市教委	1993	〔高関村前遺跡〕
35	高崎市教委	1983	〔天田・川押遺跡〕	98	高崎市教委	1992	〔上中居早道場遺跡〕
36	群埋文	1996	〔鷺島川端遺跡〕	99	高崎市教委	1973	〔群馬県高崎市城南小校庭弥生遺跡〕
37	群埋文	1991	〔下小島遺跡〕	100	高崎市遺跡調査会	1938	〔柴町 I 遺跡発掘調査報告書〕
38	群埋文	1999～02	〔小八木志志貝戸遺跡群 1～4〕	101	高崎市教委	1990	〔高崎城遺跡 III・IV・V〕
39	群埋文	1998	〔柴崎熊野前遺跡〕	102	高崎市教委	1994	〔高崎城三ノ丸遺跡〕
40	群埋文	1989	〔舟橋遺跡〕	103	高崎市遺跡調査会	1988	〔中尾村前 V 遺跡〕
41	前橋市	1985	〔箱田境遺跡〕	104	高崎市遺跡調査会	1996	〔上中居平塚 II 遺跡〕
42	前橋市	1987	〔村前遺跡〕	105	高崎市教委	1983	〔岡久保遺跡〕
43	前橋市埋文調査団	1997	〔稻荷遺跡〕	106	高崎市教委	1995	〔下滝梅崎遺跡〕
44	群埋文	2002	〔寺尾町下遺跡〕	107	高崎市遺跡調査会	1997	〔上中居西屋敷 II 遺跡〕
45	前橋市教委	1987	〔五反田遺跡〕	108	群埋文	1996	〔綿貫観音山古墳 I・II〕
46	前橋市教委	1988	〔生川遺跡〕	109	高崎市教委	1999-04-05	〔史跡 日高遺跡〕
47	高崎市遺跡調査会	1996	〔倉賀野中里前遺跡〕	110	高崎市教委	1997	〔南大類東沖・稻荷遺跡〕
48	前橋市埋文調査団	2001	〔元総社小見内 III 遺跡〕	111	群埋文	2002	〔宿横手三波川遺跡、西横手遺跡群〕
49	群馬県教委	2004	〔石倉城遺跡〕	112	高崎市教委	1989	〔上中居辻薬師遺跡〕
50	群埋文	1990	〔取羽遺跡 L・M・N・O 区〕	113	群埋文	2004	〔下滝天水遺跡〕
51	群埋文	1986～92	〔上野国分僧寺・尼寺中間地域〕(1)～(8)〕	114	群埋文	2006	〔高崎城 X V 遺跡〕
52	前橋市埋文調査団	1999	〔総社閑泉明神北遺跡〕	115	群埋文	2002	〔上滝榎町北遺跡、上滝 II 遺跡〕
53	前橋市埋文調査団	2000	〔元総社小見遺跡〕	116	高崎市教委	1978	〔鈴ノ宮遺跡〕
54	県史編纂委員会	1986	〔群馬県史〕資料編 2 原始古代 2 弥生・土師〔浜尻遺跡〕	117	高崎市教委	1993	〔柴崎遺跡群、南大類遺跡群〕
55	高崎市遺跡調査会	1981	〔石倉下宅地遺跡、紅雲村東遺跡〕	118	高崎市遺跡調査会	1986	〔不動山東遺跡〕
56	石倉線遺跡調査会	2001	〔鷺島川端遺跡、公田東遺跡、公田池尻遺跡〕	119	群埋文	1982	〔日高遺跡〕
57	群埋文	1997	〔群馬県史〕資料編 2 原始古代 2 弥生・土師〔下新田遺跡〕	120	東京国立博物館	1983	〔東京国立博物館図版目録〕古墳時代篇関東 II
58	観光資源保護財団	1977	〔上野国分尼寺跡発掘調査報告書〕	121	高崎市教委	1996	〔高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書〕10
59	県住宅供給公社	1979	〔上野国分尼寺跡発掘調査報告書〕	122	高崎市教委	1998	〔平成 9 年度高崎市内小規模埋蔵文化財発掘調査概報〕2
60	群馬県教委	1969-70	〔上野国分尼寺跡発掘調査報告書〕	123	山川出版社	1994	〔前方後円墳集成〕東北・関東編
61	前橋市教委	1966～68	〔上野国分寺周辺地域発掘調査報告書〕	124	高崎市	1999	〔新編 高崎市史〕資料編 1 原始古代 I
62	群馬県教委	1971	〔上野国分寺周辺地域発掘調査報告書〕	125	県史編纂委員会	1981	〔群馬県史〕資料編 3 原始古代 3 古墳
63	前橋市埋文調査団	1985	〔草作遺跡〕	126	小林行雄・杉原莊介	1968	〔弥生式土器集成本編 2〕
64	前橋市埋文調査団	1987	〔天神遺跡〕	127	高崎市教育委員会	1968	〔矢島町村西・殿敷遺跡〕

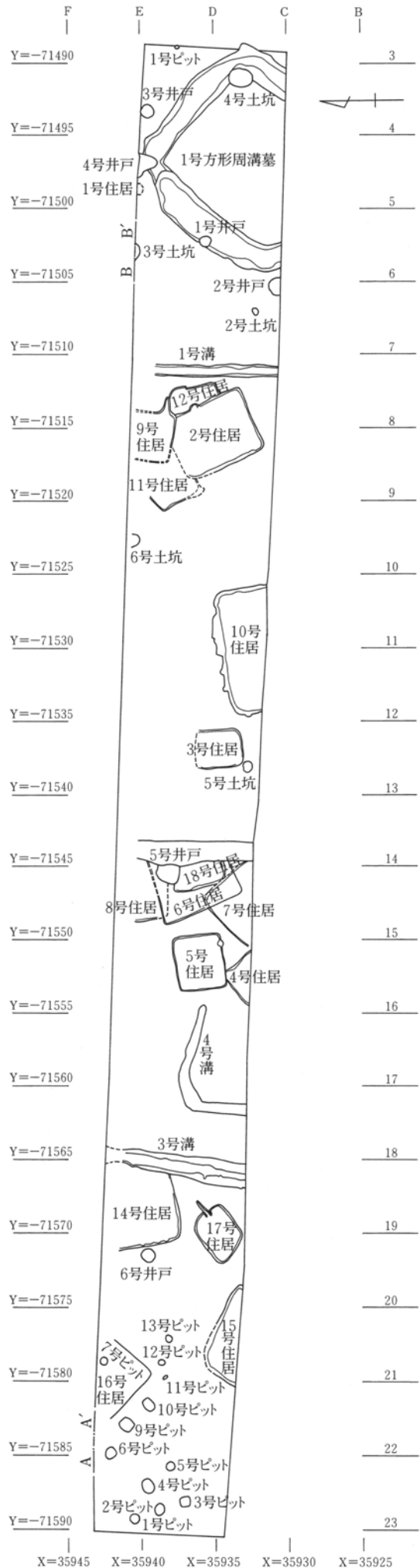
第3章 遺構と遺物

概要 本遺跡で検出された遺構は住居跡17棟、方形周溝墓1基、井戸6基、土坑4基、溝3条、火葬跡1基である。掲載出土遺物は縄文土器25点、石器14点、中・近世の陶磁器類3点のほか、大部分は古墳時代のもので占められる。

遺構の主体をなすのは、古墳時代前期に属する住居跡15棟と方形周溝墓1基で、1428㎡という狭い調査範囲での遺構数であるから、遺構の密集度はかなり高いというべきだろう。集落本体から墓域にかけての地点であると想定して相異なるまい。

調査区の東端では1号方形周溝墓が位置する。南半部が調査区外のため、厳密には「方形」であると確定してはいない。方台部形状と規模、及びこれに沿った溝形状から、前方部の発達した「前方後方型周溝墓」ではないだろうとの見通しから、「方形周溝墓」とした。古墳前期という時期から想定して、複数の周溝墓から構成される墓群のなかの一基とおもわれるが、少なくとも調査区内では、他に墓に関する遺構は検出されなかった。

方形周溝墓北端隅を切って構築された古墳時代前期の竪穴住居跡1棟（1号住居跡）をはじめ、調査区全体に17棟の竪穴住居跡が分布する。時代別の内訳は、古墳時代前期が1号～8号住居跡・10号～16号住居跡・18号住居跡の15棟で、古墳時代後期が1棟（17号住居跡）、平安時代が1棟（9号住居跡）である。古墳前期とした竪穴住居跡15棟は、2号・11号・12号住居跡の3棟、4号～8号・18号住居跡の6棟に見るように、1カ所で集中した重複状況が見られる。従って、古墳前期といっても短期間における同時存在ではなく、比較的長期にわたって連続的に住居跡が営まれた痕跡と捉えることが出来る。その時期は、後述するように3世紀後半代～5世紀始め頃にわたると考えられる。古墳後期の17号住居跡、9世紀代の9号住居跡は一定の空白期間をおいて営まれた集落の一部と想定され、古墳前期集落との連続性は薄いと考えている。



第7図 遺構全体図 (1:400) 11

土坑とピットは、調査区西端に密集するが、住居跡や溝などとの関連性をうかがえる分布傾向は見られない。土器が出土した6号土坑以外は、時期限定が困難であり、その性格についても不明な点が多い。

溝は1号・3号・4号溝の3条が独立した遺構と考えられた。ただし、南北幅10mの範囲内での検出であったために、走向や規模などについては不明といわざるを得ない。微高地上を南北に縦断するとすれば、畠や地割り、道路に伴う溝の可能性が考えられる。時期はいずれも中世以降で限定は出来ない。

1 竪穴住居跡

竪穴住居は17軒検出された。そのうち15軒が古墳時代前期の所産と考えられる。これらの住居は比較的密集して検出された。この時期以外では竈を持つ住居が2軒（9号、17号）検出されている。2軒とも竈は東壁に付設されていた。時期は古墳時代後期と平安時代初期の9世紀代と考えられる。

1号住居（第8・9図 PL.2）

位置 D-4グリッド

遺構重複 4号井戸に切られ、1号方形周溝墓の周溝北端にのる。

形状 竪穴形状は不明。調査区境で竈ないし炉が検出され、断面で床と思われる平坦面を確認した。

埋土 埋土下層に相当する暗褐色土が8cmほどの厚さで堆積。

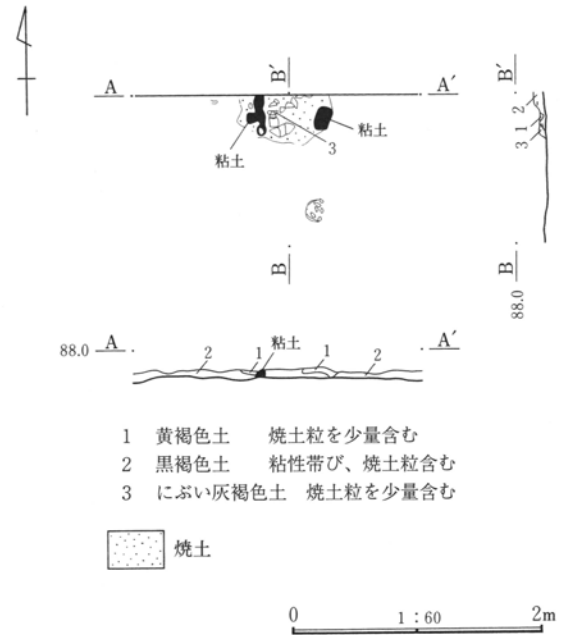
床面 硬化面は認められず、締まる。

壁溝・柱穴・貯蔵穴 検出されなかった。

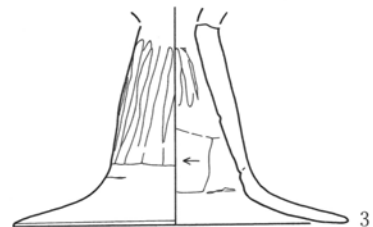
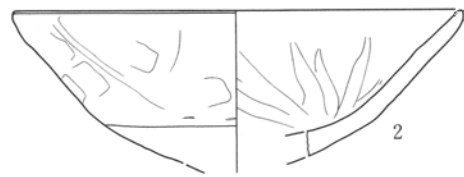
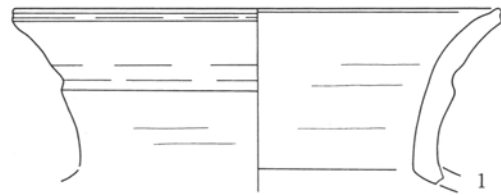
炉 焼土が東西70cm、南北35cmの半円形範囲に広がり、その東と西に幅10~15cm、高さ7cmの粘土塊を検出。上位削平により上部構造が不明だが、ドーナツ状に粘土で囲む原初的な竈の可能性がある。

遺物 焼土中央で高杯、その南50cmで大型壺口縁が出土。

所見 4世紀後半から5世紀初頭と考えられる。



第8図 1号住居跡



0 1:3 10cm

第9図 1号住居跡出土遺物

2号住居 (第10・11図 PL.2・3)

位置 C-7・8~D-7・8グリッド

遺構重複 9号、11号、12住居に切られる。

形状 長方形。規模は東西方向の短軸で4.6m、長軸の南北方向は推定で5.9m程である。壁高は30~35cmを測る。床面積は推定23.94m²を測る。

埋土 上層に黒褐色土、下層ににぶい黄褐色土が堆積、いずれもAs-Cを含んでいる。

主軸方位 N-25°-E

床面 ロームを掘り込んでおり、堅く締まっている。床面全体に炭化材と拳大礫が散らばり、焼土も四カ所確認、焼失住居と思われる。炭化材出土状況から上屋構造を復元するのは困難。南東隅に検出されたベッド状施設は1.5m×1.1m、高さ9cmで、上面は平坦で堅く締まっていた。

壁溝 西壁際で検出された。上幅は10~16cm、深さは3~5cmと浅く、底面は軟質な地山である。

ピット P1~P5が検出された。P1は径60×50cm・深さ15cm、P2は径54×48cm・深さ22cm、P3

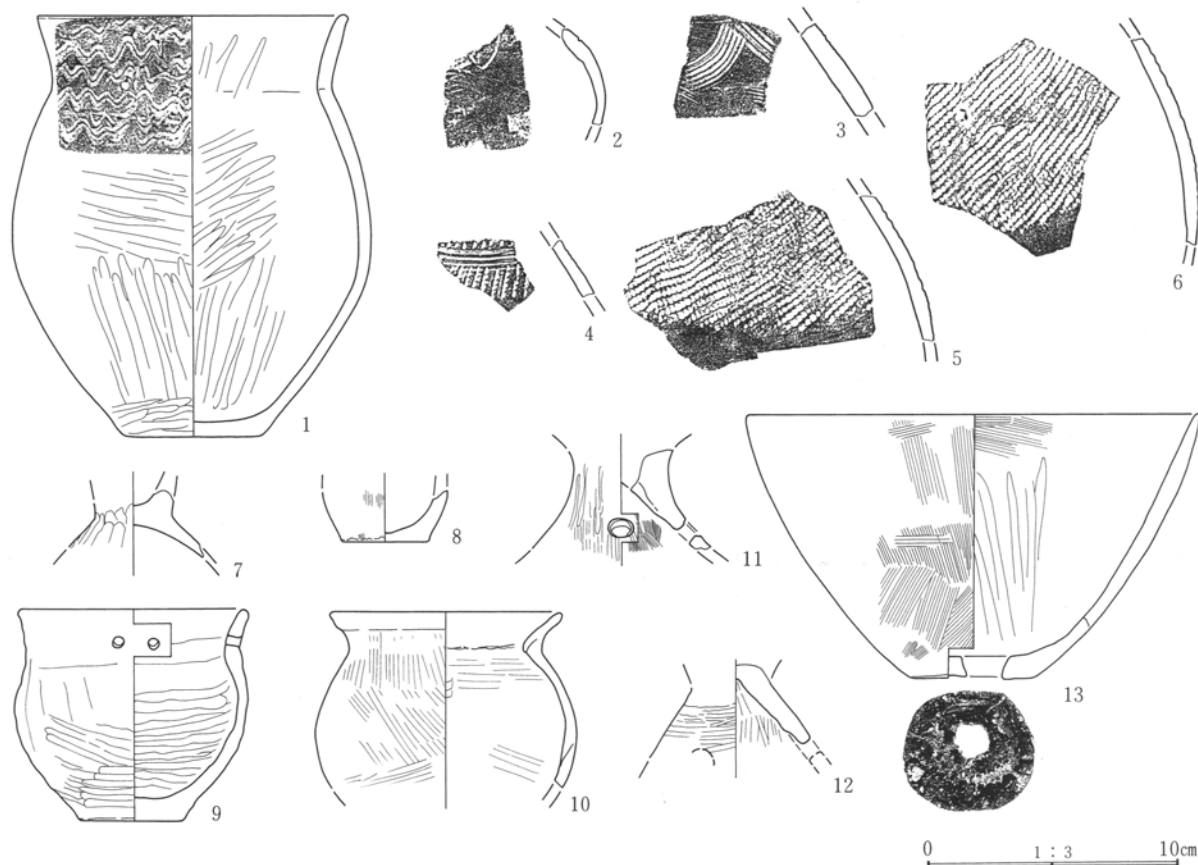
は径48cm・深さ10cm、P4は径42×38cm・深さ18cmを測る。P5は径30cm・深さ13cmを測る。P1~3は柱穴にふさわしい規模だが、支柱の配置としては住居プランとずれる。

貯蔵穴 南壁際の西寄りに検出された。規模は径90×50cm・深さ42cmを測り、周りに堅く締まった周堤帯が回る。これは床面より3cm高く、幅は15cm。

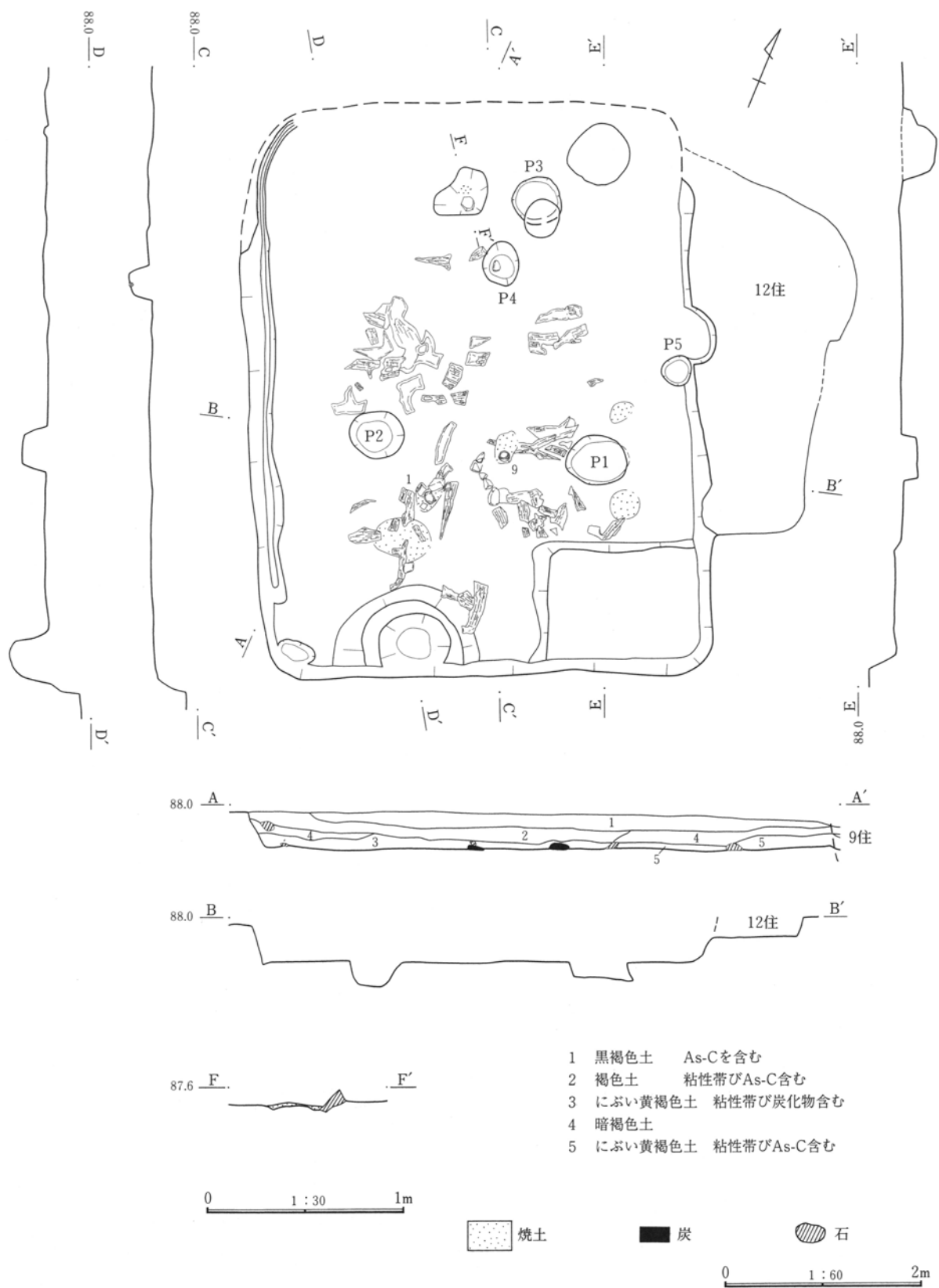
炉 北壁中央から推定50cmほど内区で検出された。55×50cmの規模で浅い掘り鉢状に3~5cm掘り込まれ、焼土と炭が部分的に見られた。南側に偏って10cm大の角礫が置かれていた。

遺物 中央床面からやや浮いた状態で樽式甕と小型短頸壺が出土、ほかに埋土から900点を超える土器片が出土しており、数量的にはS字甕や無文壺、ハケメ整形単口縁甕が主体。重複する11・12号住居跡帰属の遺物と混在している可能性が高い。

所見 樽式土器の出土と住居重複関係から、最古段階に位置づけられる。



第10図 2号住居跡出土遺物



第11図 2号住居跡

3号住居 (第12~14図 PL.3)

位置 C・D-12グリッド

遺構重複 なし

形状 隅丸長方形。北辺は削平により不明。南北方向は推定3.2m、東西方向は2.5mを測る。床面積は7.5㎡。壁高は約10cmの遺存。面積は推定7.20㎡。

埋土 二層に大別され、上層が灰黄褐色土、下層が黒褐色土が堆積していた。

主軸方位 N-5°-W

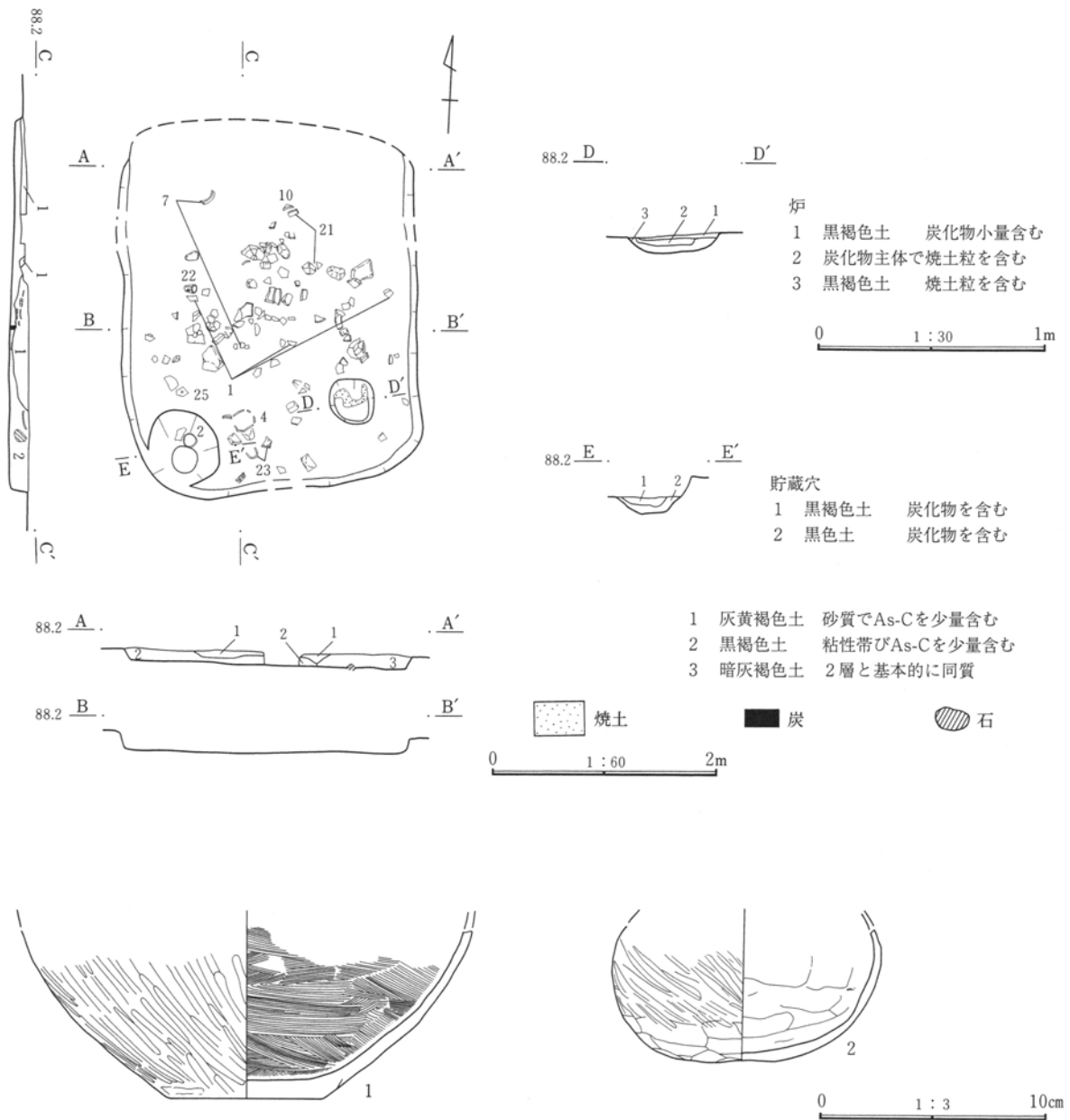
床面 平坦であるが、縮まりはほとんどない。

壁溝・柱穴 検出できなかった。

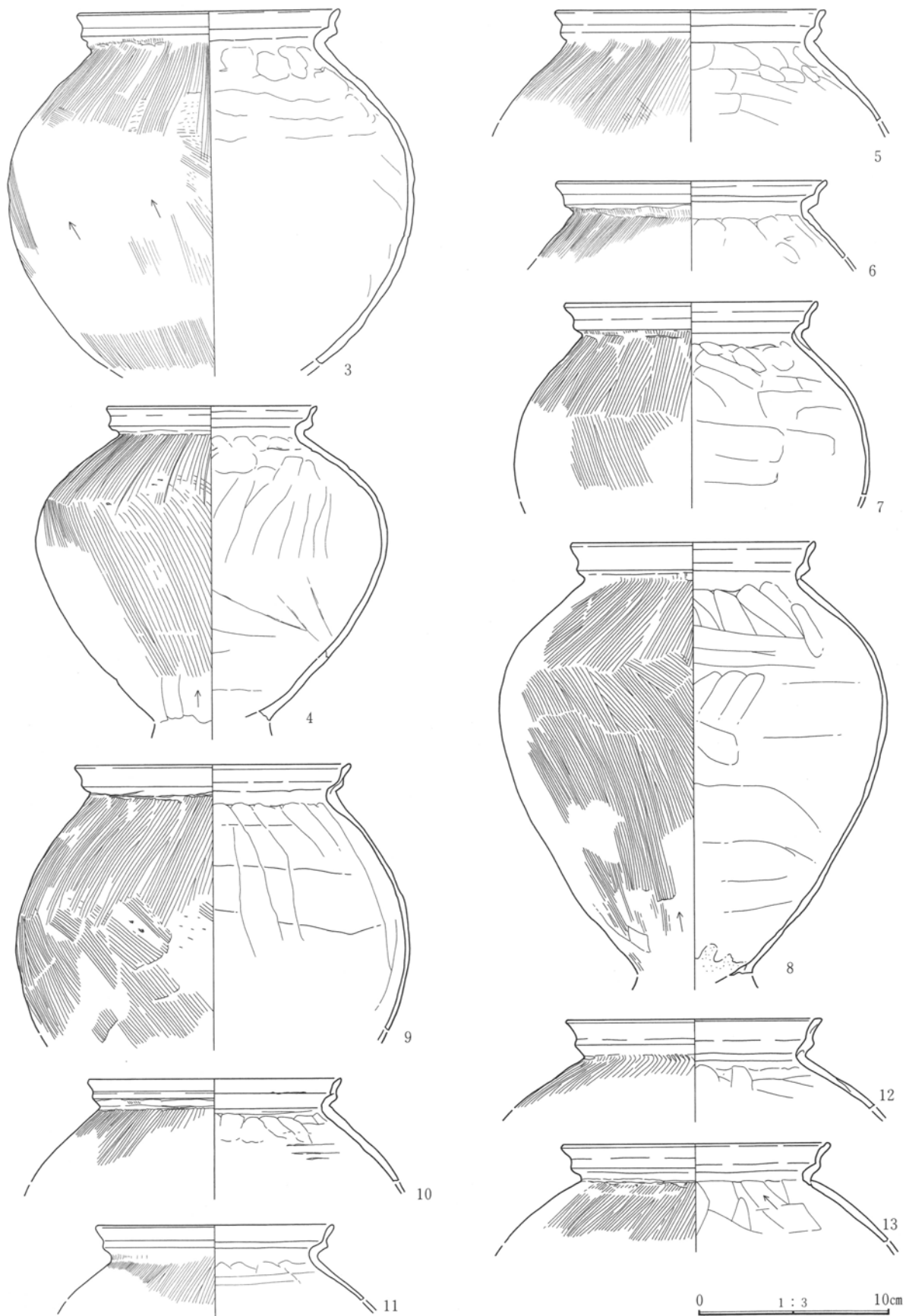
貯蔵穴 南西隅の壁際に、径70cm・深さ20cmの円形土坑が検出され、貯蔵穴と考えられる。

炉 南東寄りに検出された。径40cmのほぼ円形に近い形で、5cm程の掘り込みに焼土が堆積する。底面がやや焼土化するが、焼土面の硬化は見られない。

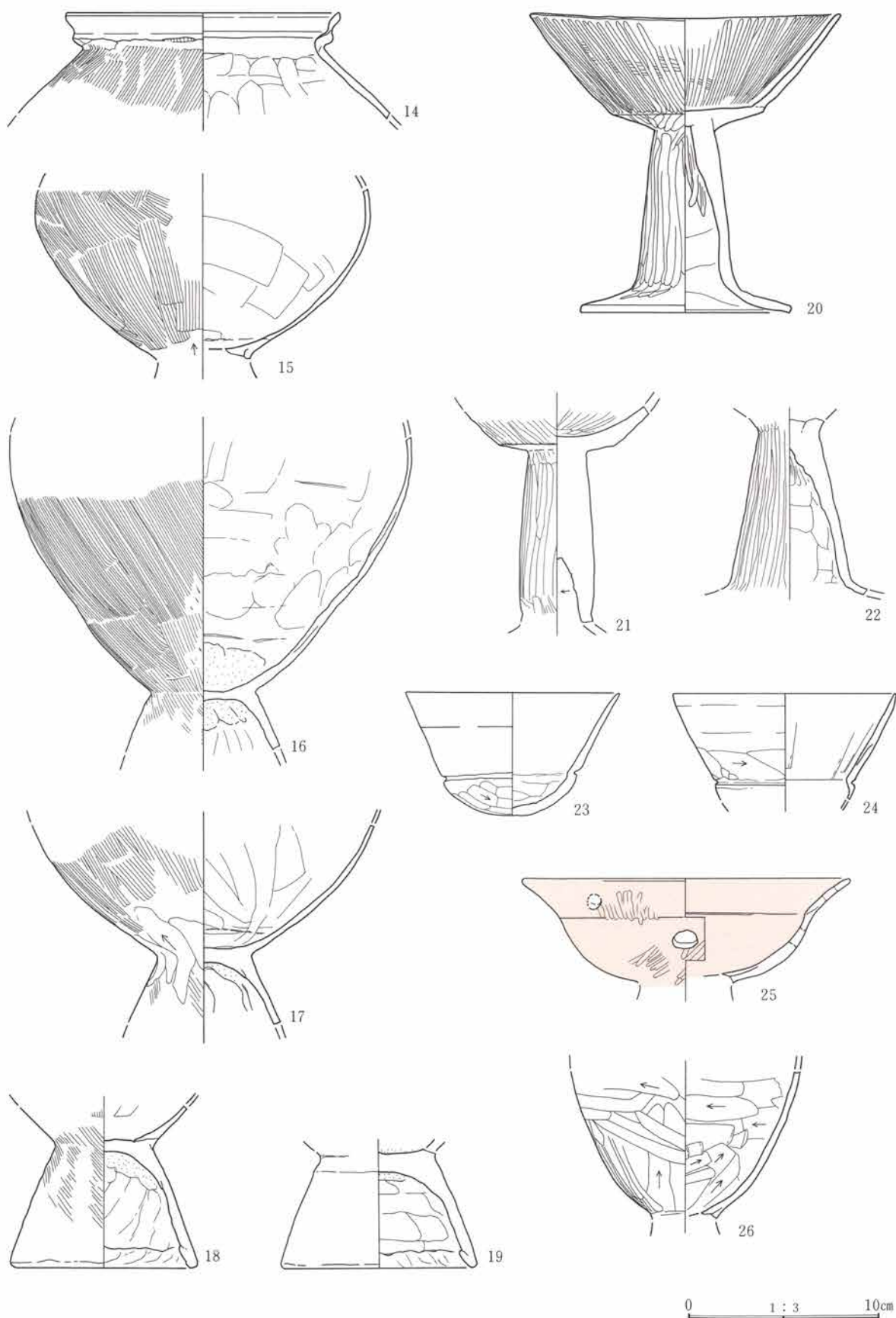
遺物 床面の埋土下層に相当する位置から古墳前期の土器破片が拳大礫とともに多量に出土している。柱状長脚高杯・S字甕・埴・無文壺を主体とする。ほとんどが住居廃絶後の廃棄品と思われる。



第12図 3号住居跡及び出土遺物(1)



第13図 3号住居跡出土遺物(2)



第14图 3号住居跡出土遺物(3)

4号住居跡 (第15・16図 PL.3)

位置 C-15グリッド

遺構重複 5号住居に北隅の一部を切られる。

形状 長方形と思われる。南半部が調査区外のため規模不明。壁高は約12~22cmを測る。遺存面積は3.25m²を測る。

埋土 ほぼ単一のAs-C混黒褐色土が堆積。

主軸方位 N-56° -E

床面 平坦で、地山と識別可能な程度の硬質。

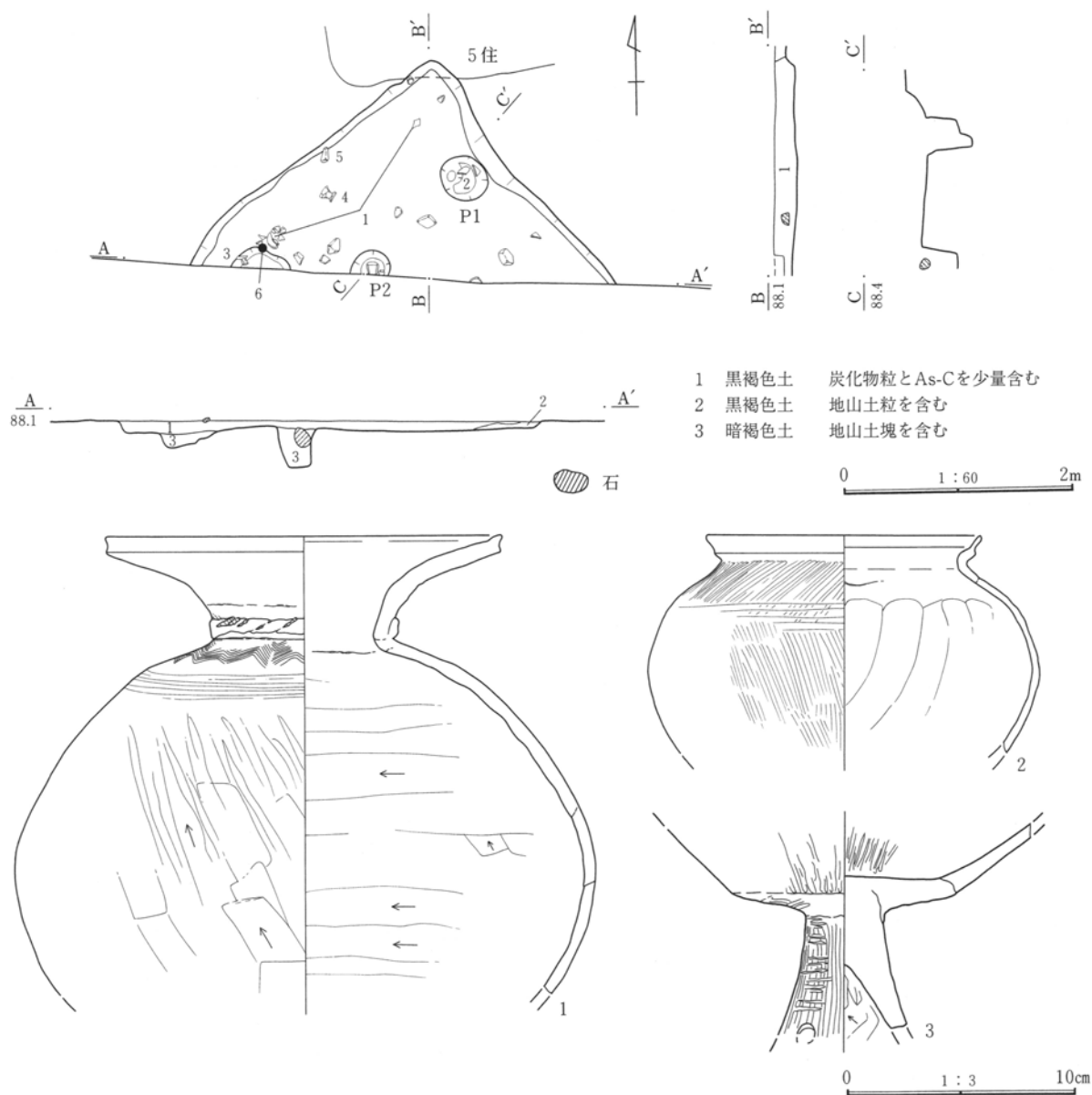
壁溝・炉 検出されなかった。

ピット P1・P2の2基が検出された。P1は北東

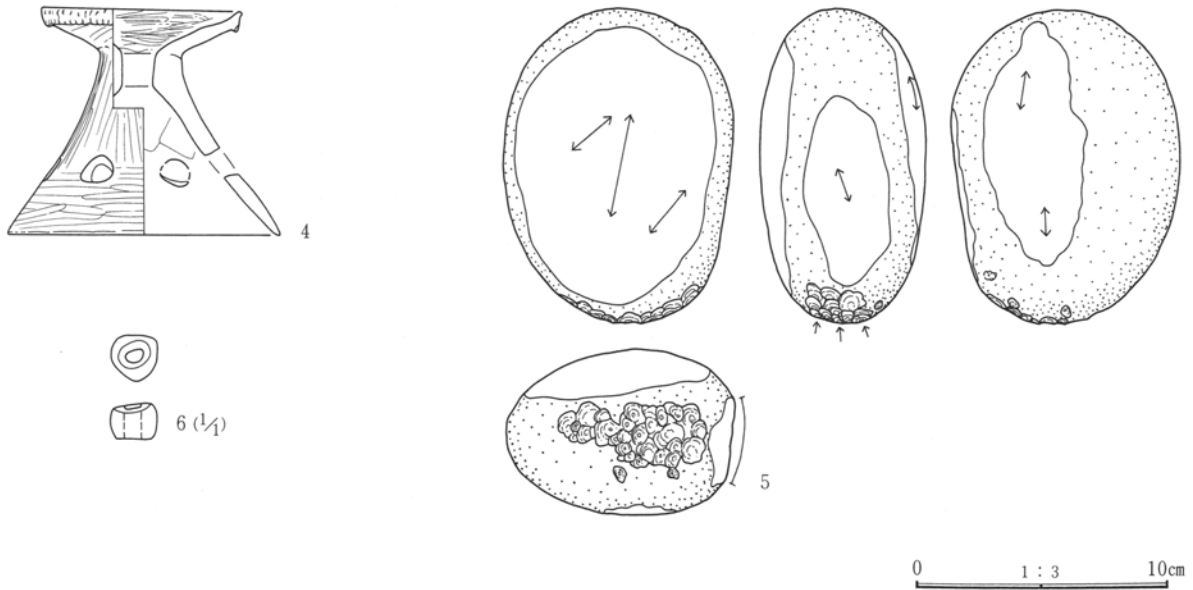
壁際にあり、径40cm・深さ40cm、P2は推定で径36cm・深さ34cmを測る。P2上位に15cm大の礫が出土。

貯蔵穴 西隅付近で検出された、推定で径50cm・深さ10cm。

炉 検出されなかった。
遺物 貯蔵穴の北脇床面から壺(1)とガラス小玉(6)、北西壁際から磨石(5)、埋土から高杯(3)、S字甕(2)、器台(4)が出土。他に140点の土器片が出土しており、単口縁甕・罎・直口壺が見られる。また、樽式壺1点と赤彩の高杯ないし鉢片2点が見られたが、混入品であろう。



第15図 4号住居跡及び出土遺物(1)



第16図 4号住居跡出土遺物(2)

5号住居跡(第17・18図 PL.3)

位置 D-15グリッド

遺構重複 南壁西端部で4号住居を切る。

形状 長方形。規模は東西方向の長軸が3.8m。南北方向の短軸が3.3mを測る。床面積は11.40m²、壁高は約10cmを測る。

埋土 層厚10cm弱で、単一のAs-C混黒褐色土が堆積。

主軸方位 N-82°-E

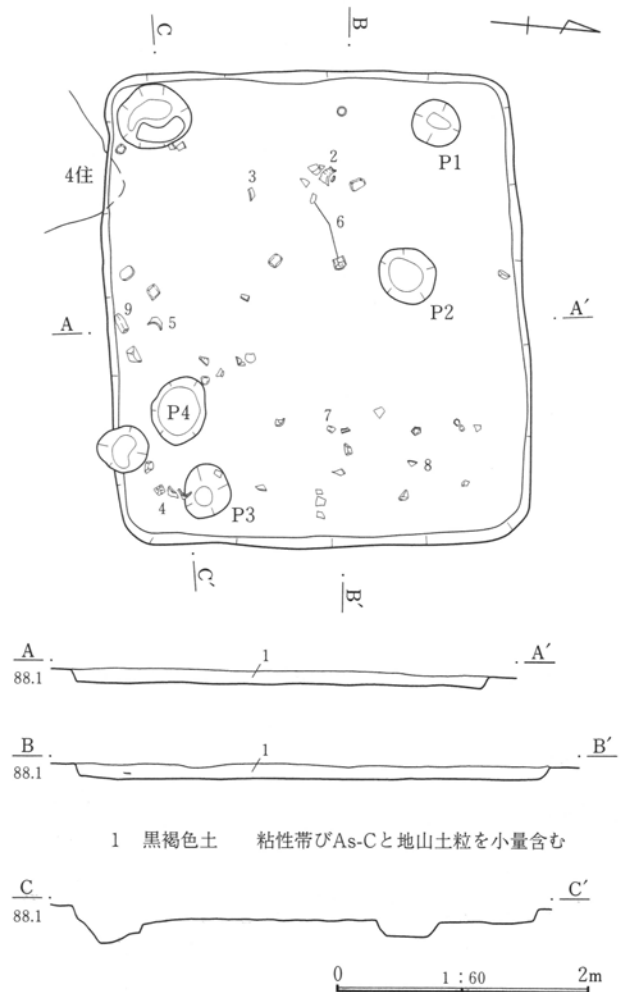
床面 平坦だが、硬質ではない。

壁溝・炉 検出されなかった。

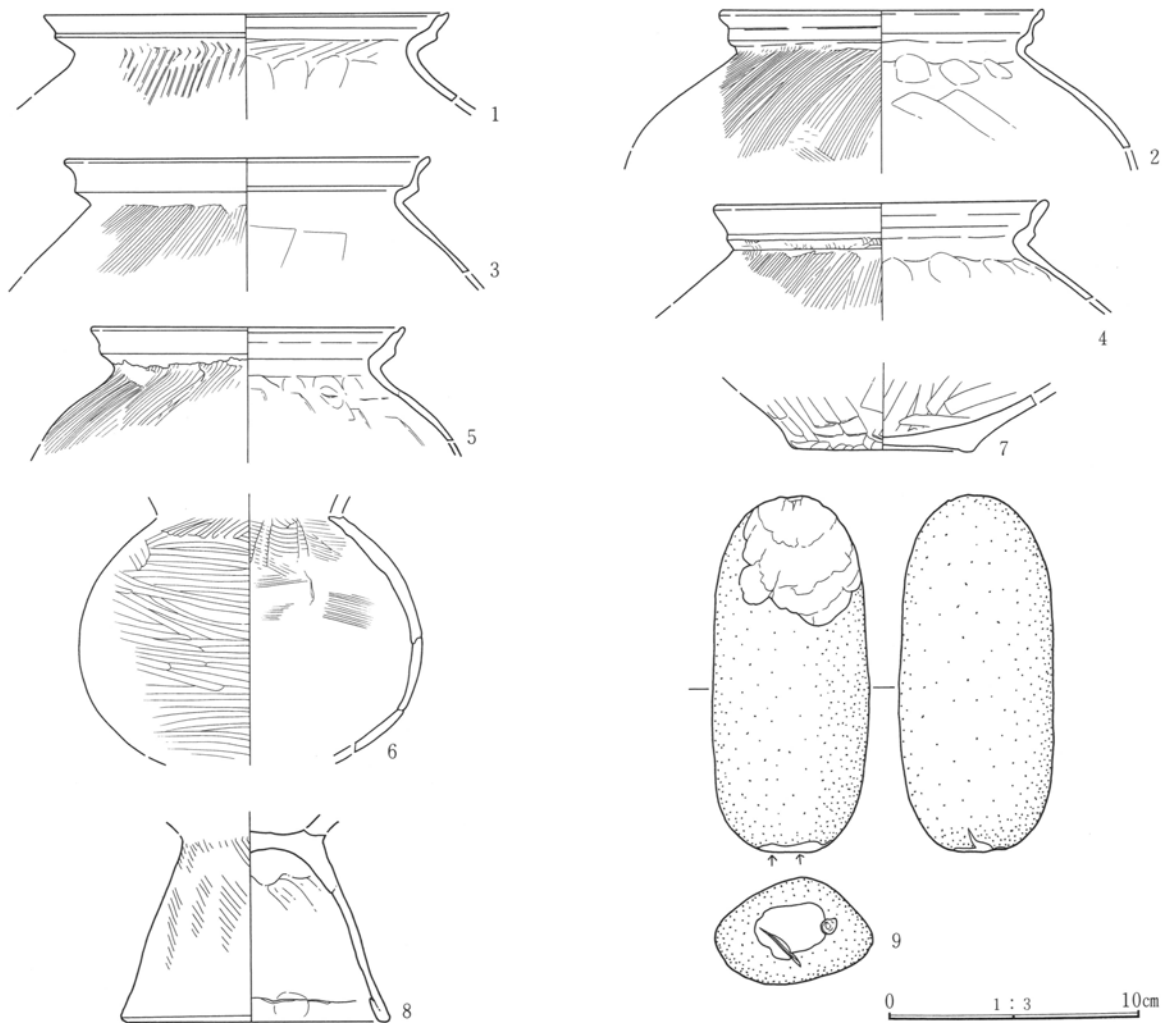
ピット P1~P4が検出された。P1は径36cm、深さ17cm、P2は径42cm、深さ25cm、P3は径42cm、深さ14cm、P4は径58×42cmを測る。南壁を切っているピットは後世のものである。柱穴と判定できるものはない。

貯蔵穴 南西隅で検出された。楕円形で径60×54cm、深さ16cmを測る。底面は5cmほどの段差がある。

遺物 土器片と拳大礫が住居全体から出土し、床面近辺からはS字甕(2・3・5・8)、直口壺(6)、壺底部(7)、磨石(9)が出土する。非掲載土器片550点のうち、6割はS字甕が占める。



第17図 5号住居跡



第18図 5号住居跡出土遺物

6号住居跡（第19・20図 PL.3・4）

位置 C・D-14グリッド

遺構重複 7号・8号住居との新旧関係は不明。18号住居を切り、中世の5号井戸と火葬跡（調査時登録7号土坑）に切られる。

形状 長方形と思われる。東側は現代攪乱のため不明。南北方向の長さは5.7m、遺存面積は17.44㎡である。壁は削平されほとんど遺存しないが、北西部で3cm程の深さを測る。

埋土 床面を黒褐色土が被っていた。

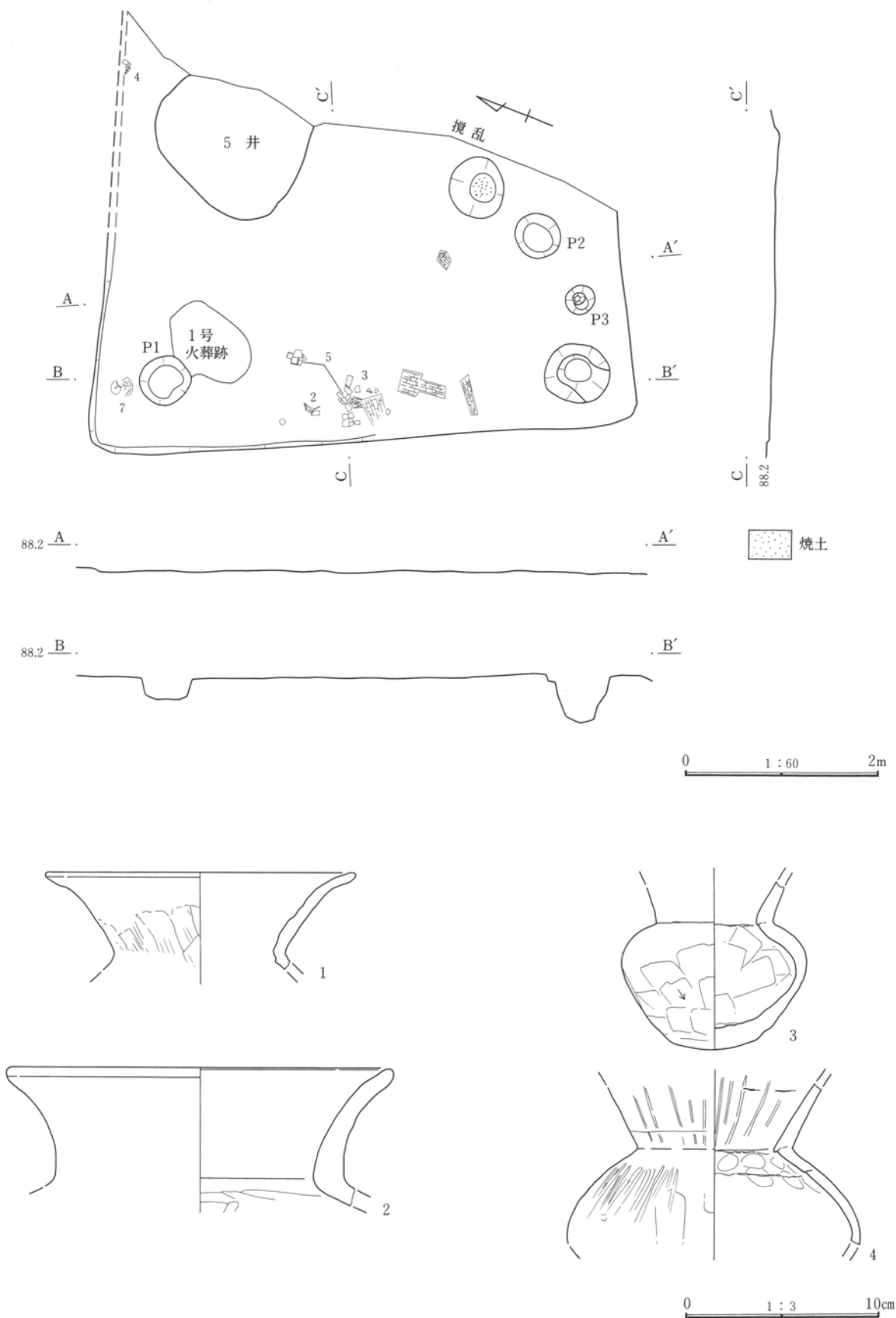
床面 平坦である。ローム粒が混入しており、締まりがある。全体に炭化材・焼土が広がっている。特に、南側半分には焼土・炭化材・灰が密に分布しており、焼失住居と思われる。

ピット P1～P3の3基が検出された。P1は北西隅で径50cm・深さ20cm、P2は径45cm・深さ23cm、P3は径32cm・深さ20cmを測る。P2・3は炉と貯蔵穴の間にある。支柱穴と判定しうるものはない。

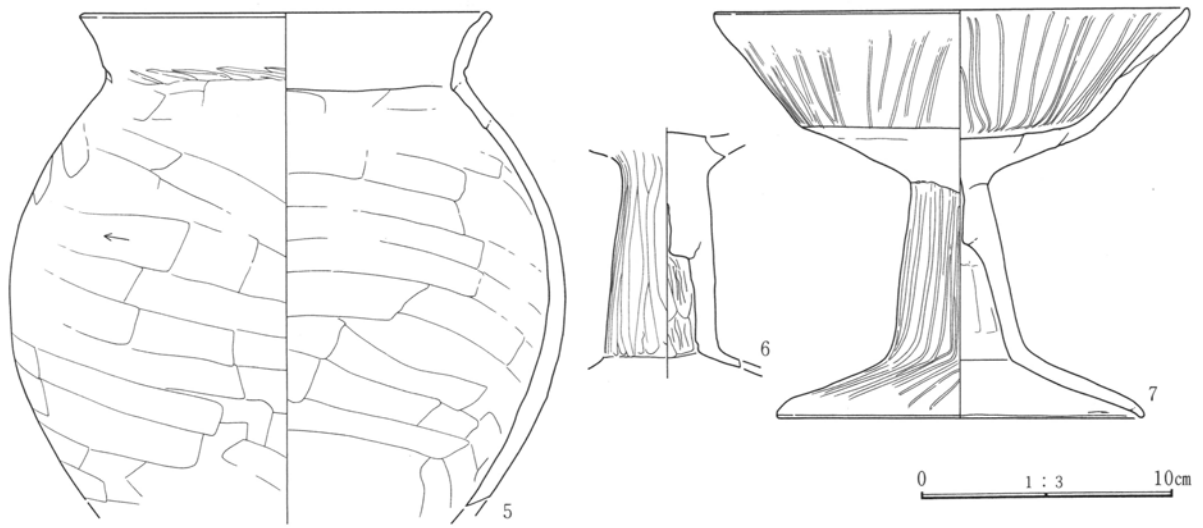
貯蔵穴 南西隅で検出され、不整円形で径64cm・深さ50cmを測る。

炉 中央付近で検出された。径60cmの円形で、5cm程の掘り込みがあり、径20cmの範囲に焼土分布。

遺物 床面付近から、壺（2）、直口壺（4）、埴（3）、甕（5）が出土。北西隅埋土下層からは高杯（7）も出土したが、重複する8号住居に帰属する可能性もある。非掲載土器片220点のうち、約半数をS字甕が占める。



第19图 6号住居跡及び出土遺物(1)



第20図 6号住居跡出土遺物(2)

7号住居跡(第21図 PL.4)

位置 C-14グリッド

遺構重複 北端で6号住居と重複、新旧関係不明。

形状 長方形と思われる。規模は不明。遺存面積は9.78m²。壁高は10cmほど確認できた。

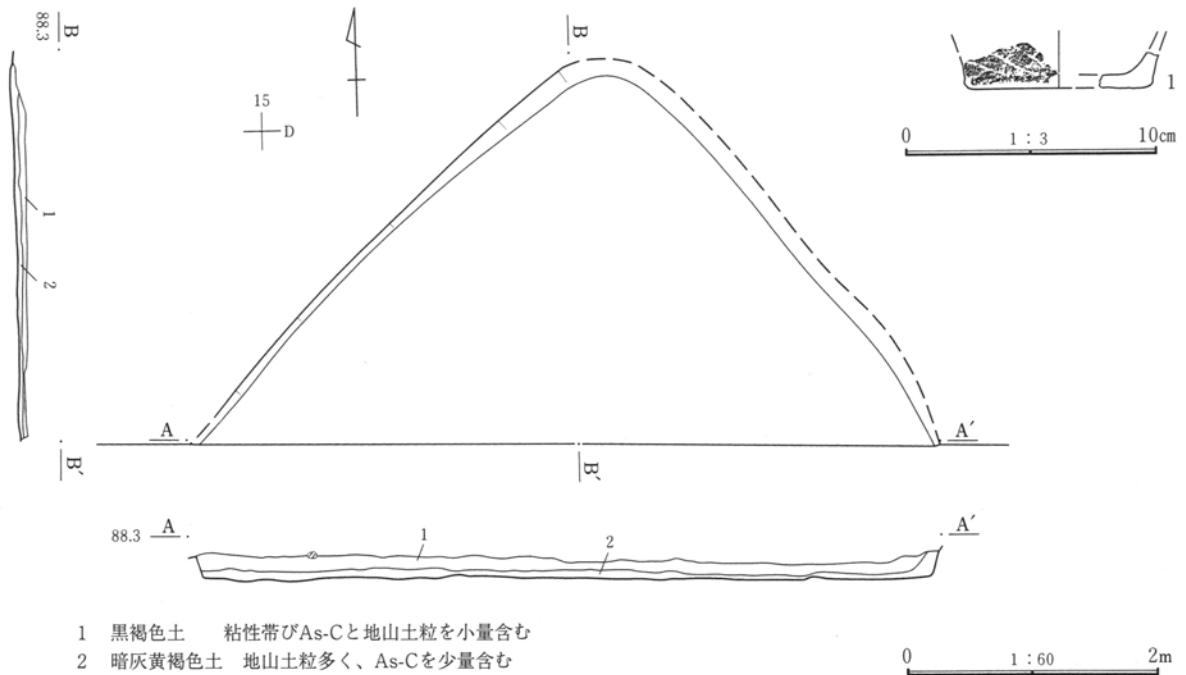
埋土 上下2層に大別され、上層が黒褐色土、下層が暗灰黄褐色土で、水平堆積であることから下層

は堀方埋土か。

主軸方位 不明 床面 平坦で軟質。

壁溝・ピット・貯蔵穴・炉 検出されなかった。

遺物 床面付近～埋土下層から土器片26点が出土し、4割をS字甕、残りを単口縁の壺と甕、長脚高杯が占める。他に東関東系後期弥生土器の甕底部小片(1)と樽式甕片1点は混入品だろう。



第21図 7号住居跡及び出土遺物

8号住居跡 (第22図 PL.4)

位置 D・E-14グリッド

遺構重複 6号住居と重複するが、新旧関係不明。

形状 長方形と思われる。西壁のみ遺存。土層断面から想定される南壁部分は第22図に破線として表した。壁高は10cm程である。

埋土 2層に大別され、上層が黒褐色土、床面上を暗灰黄褐色土が被う。

床面 平坦で、やや締めりがある。

壁溝 西壁に沿って検出され、上幅6~8cm・深さ6cmを測る。

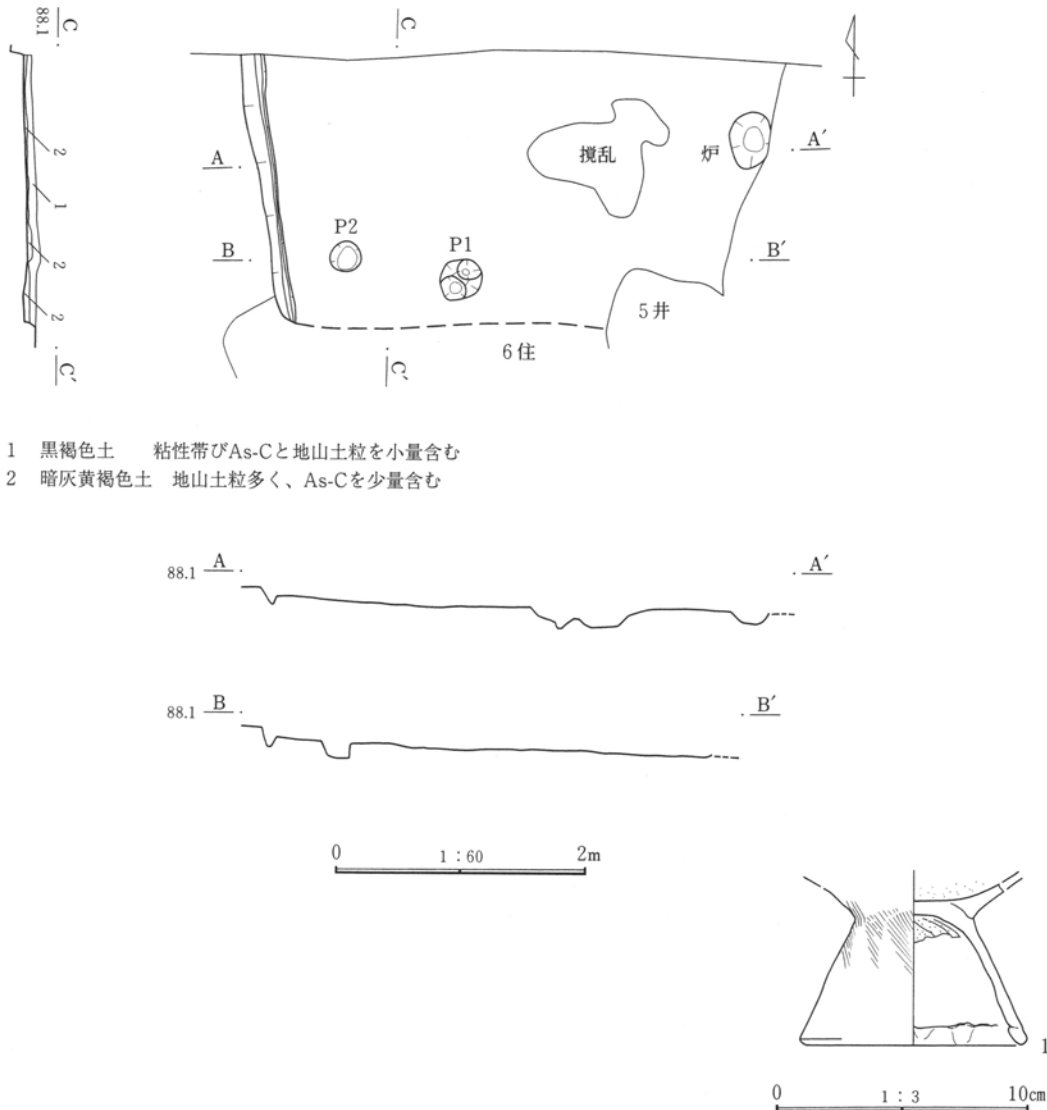
ピット P1とP2の2基が検出された。P1は径

34cm・深さ25cm、P2は径24cm・深さ13cmを測る。柱穴かどうか不明。

貯蔵穴 検出されなかった。

炉 東側に偏って検出された。径44×32cmの楕円形を呈する。10cmの浅い掘り込みで、径10~15cm程の範囲に焼土が分布する。

遺物 埋土から土器小片70点が出土し、4割弱をS字甕が占め、ほかに壺類、高杯・鉢類、単口縁甕類が見られる。刷毛目整形の甕類と円錐脚をもつ有稜高杯が見られるので、重複する6号住居出土遺物よりは古相を示している。



第22図 8号住居跡及び出土遺物

9号住居跡 (第23・24図 PL.4)

位置 D-7・8グリッド

遺構重複 2号住・11号住・12号住居を切る。

形状 長方形か。北側は調査区外で不明。東西方向の規模は3.5mを測る。遺存部壁高は25cmを測る。

埋土 主に暗褐色土が堆積していた。

主軸方位 N-120°-E

床面 平坦で、堅く締まっている。

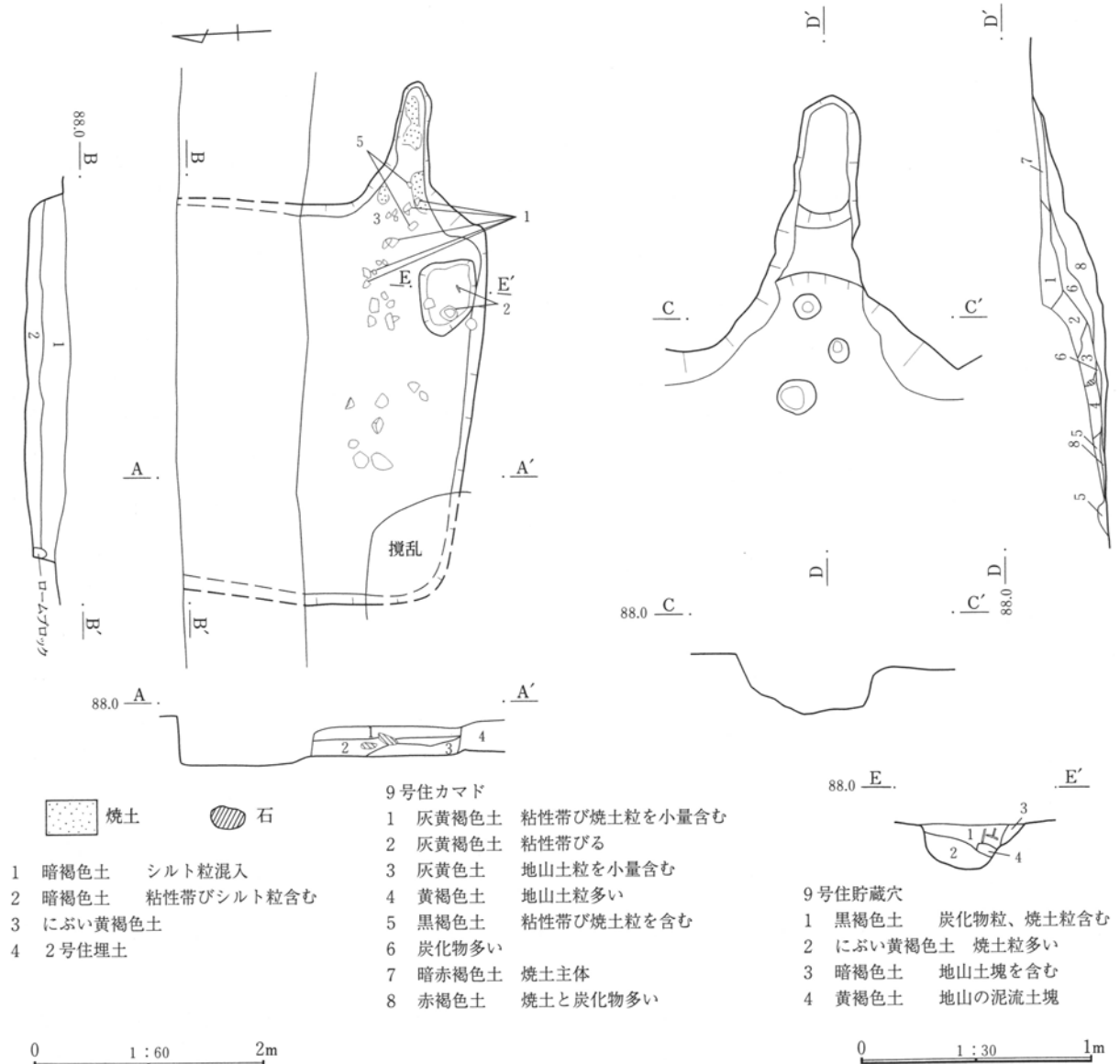
壁溝・ピット 検出されなかった。

貯蔵穴 カマドの右手前で検出。径64×45cmの不整長方形で、深さは20cm。土師器の杯(2)が出土。

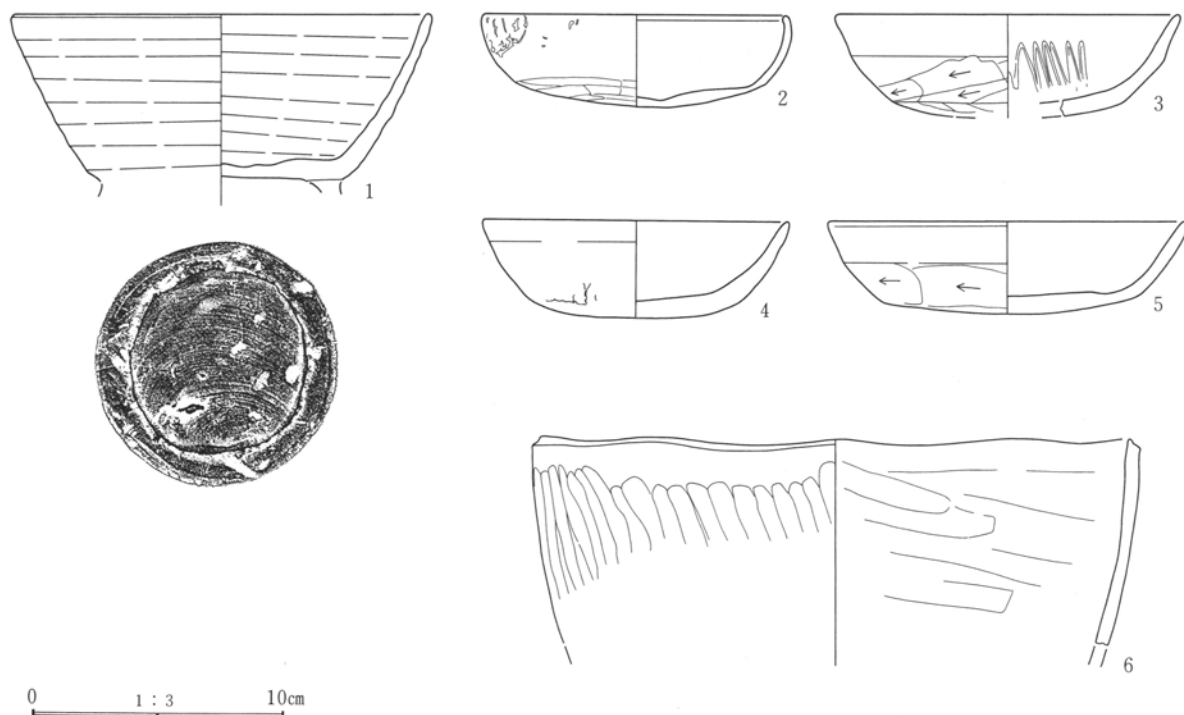
カマド 東壁南隅に付設。焚口の幅は40cm、煙道は

長さ90cm・幅27cmを測り、緩い傾斜で次第に上がる。袖は壊されて検出できず。焚口付近に焼土が分布。

遺物 竈炊口付近から9世紀前半代の須恵器高台碗(1)、土師器杯(2・3・4・5)が出土する。中央付近には拳大の礫が10数点散在する。深鉢形の甑(6)も竈内から出土したが、重複する古墳前期の住居に伴うものと考えられる。非掲載土器片は200点弱で、3割ほどが9世紀代の杯・甕類、7割はS字甕・壺・単口縁甕類・高杯などの古墳前期に帰属する。これらも重複する該期の住居に伴うものだろう。なお、樽式土器片4点・赤井戸式土器片1点が出土するが、混在したものと考えられる。



第23図 9号住居跡



第24図 9号住居跡出土遺物

10号住居跡 (第25~32図 PL.5)

位置 C-10・11グリッド

遺構重複 なし

形状 (長方形)。南側半分が調査区外のため、南北方向の規模は不明。東西方向は8.5mを測る。本調査区内では最大の竪穴住居である。壁高は40~50cmを測る。

埋土 大きく2層に分かれ、上層に黒褐色土、下層に暗灰黄褐色土が堆積していた。いずれもAs-Cを少量含む。床面直上には暗灰黄褐色土に砂・炭・焼土を多く含む土が堆積していた。

主軸方位 N-87° - E

床面 平坦で、やや締まりがある。炭化した上屋材が全体に散乱し、焼土も数カ所に見られ、焼失住居と思われる。

壁溝 調査範囲内では全周に巡る。上幅で10~15cm、深さ5~10cmを測る。

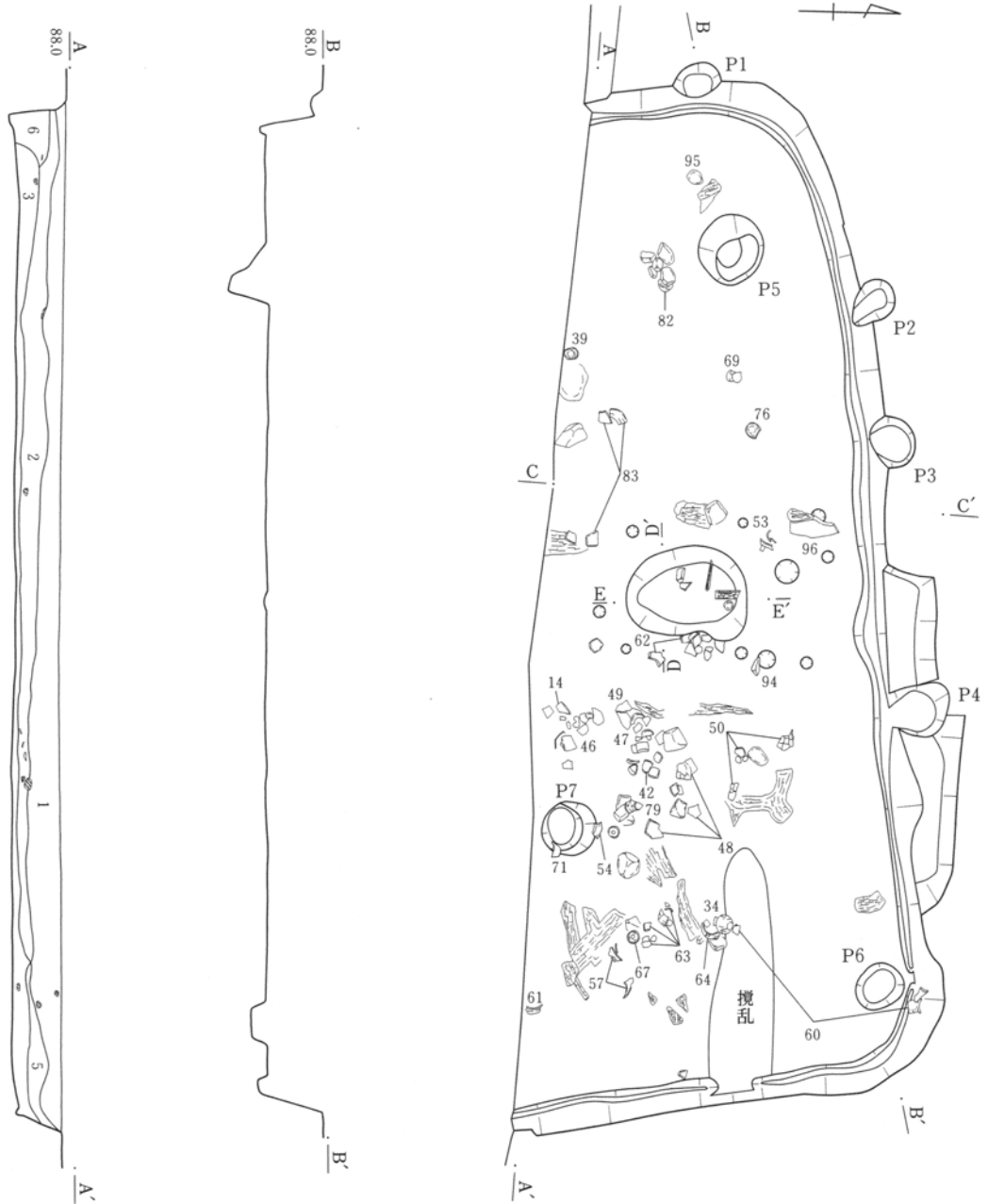
ピット 西から北の壁に住居内埋土と同質の土が堆積するP1~4の4基が検出された。西壁のP1は径40×30cm・深さ12cm、北壁のP2が径45×30cm・

深さ40cm、P3は径45×38cm・深さ40cm、P4は径50×44cm・深さ30cmを測る。床面からはP5~7の3基が検出され、P5は径58cm・深さ30cm、P6は径40cm・深さ12cm、P7は径47cm・深さ40cmを測る。その他、炉の周囲に径10cm程の小さいピット状のものが10基検出された。規模と配置からP5とP7は支柱穴と考えられる。

貯蔵穴 検出されなかった。

炉 北壁から約1m離れた主軸上で検出された。掘り込みは10cm程度で炉内全体に炭化材・焼土が広がる。規模は径100×75cmの南北に長い楕円形に近い形を呈する。

遺物 炭化材が直接床面を被い、その上に多量の土器と大小の礫が出土。樽式土器・赤井戸式土器・直口壺、器台、S字甕等が出土する。樽式と赤井戸式は小破片で埋土中、埴(39)は床面から30cm近く高い出土位置なので、本住居に伴うとは考えにくい。また、祭祀用と思われる胴部穿孔壺(46)は住居ではなく、本来近辺の墓や祭祀跡に伴った可能性も考えておきたい。

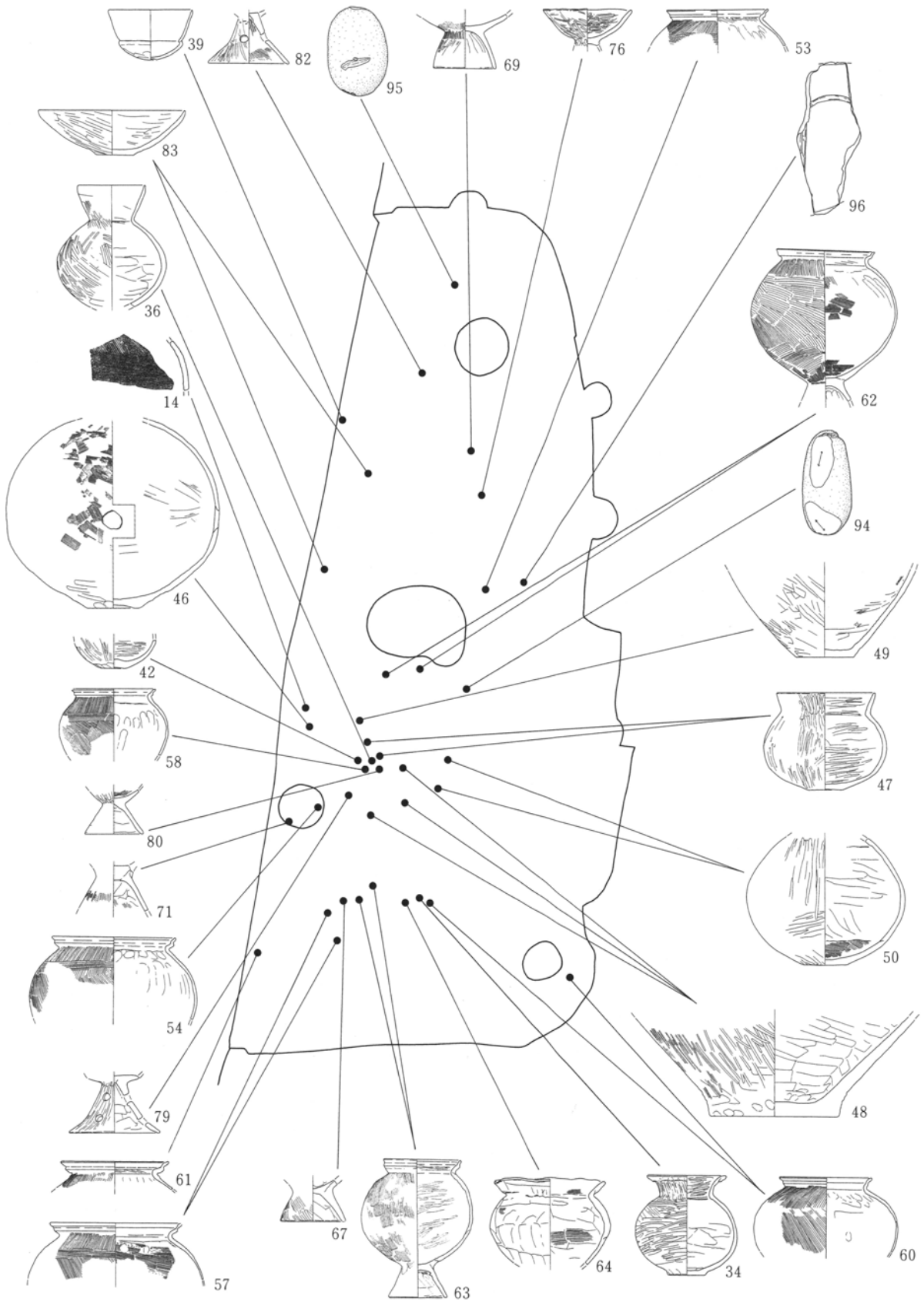


- 1 黒褐色土 粘性帯びAs-Cと地山土粒を少量含む
- 2 暗灰黄褐色土 粘性帯び地山土粒とAs-Cを少量含む
- 3 暗灰黄褐色土 砂質、炭化物含む
- 4 暗灰黄褐色土 粘性帯び地山土塊を含む
- 5 暗灰黄色土 粘性帯びAs-Cを少量含む
- 6 黒褐色土 焼土含む
- 7 黒褐色土 後世攪乱

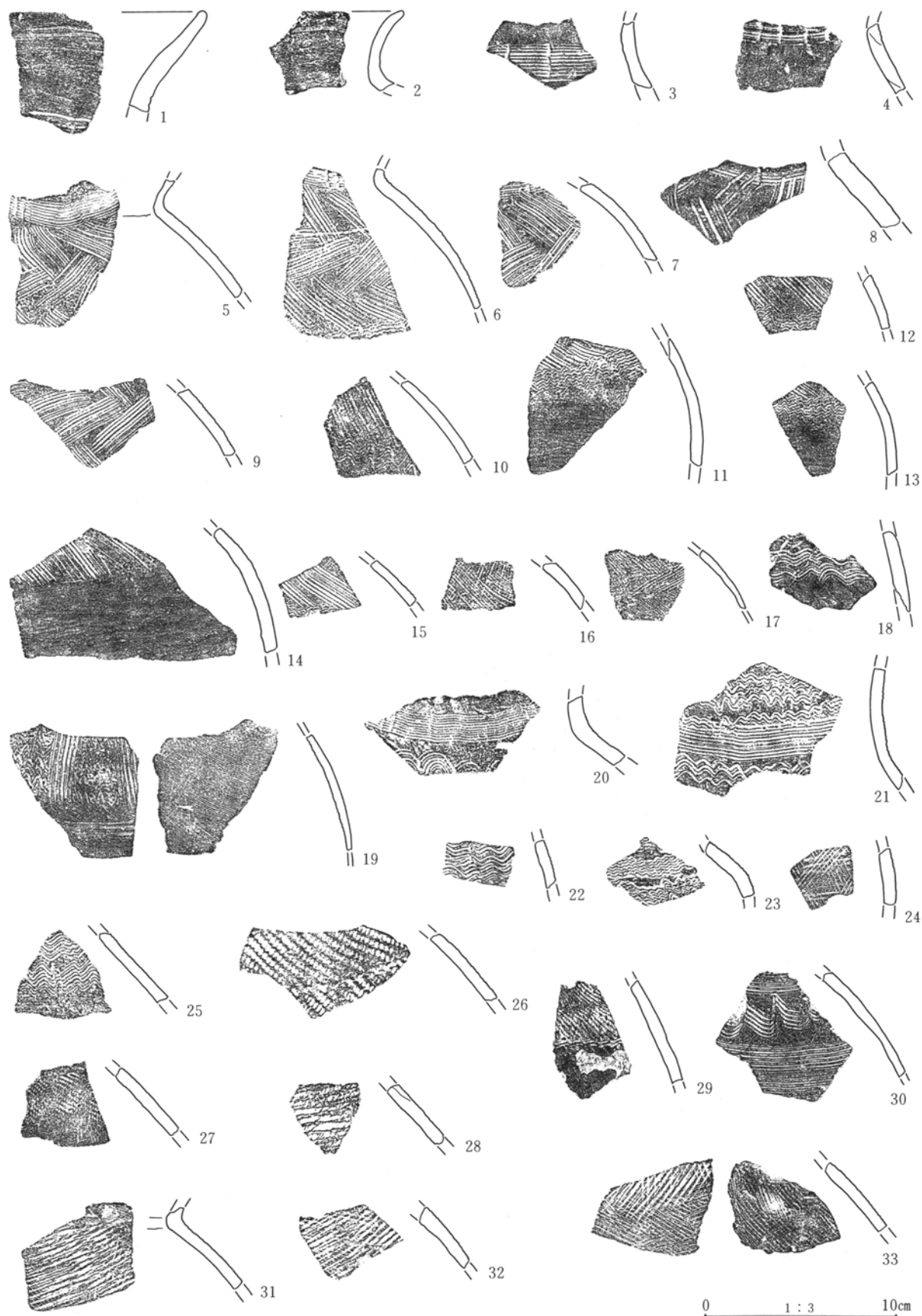
10号住炉

- 1 暗灰黄褐色土 焼土塊多く、As-C少量含む
- 2 炭化物主体
- 3 灰黄褐色土 粘性帯びる

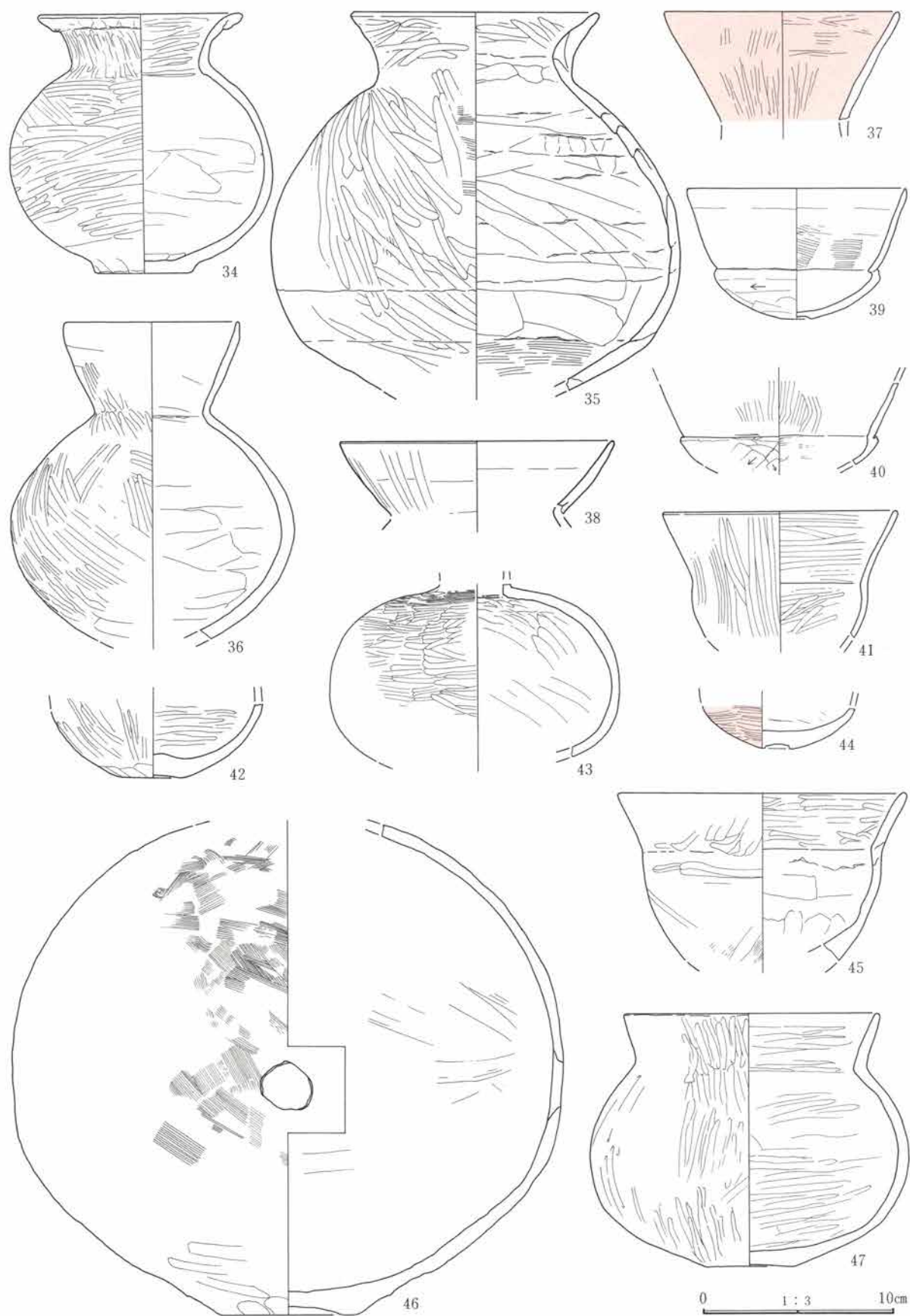
第25図 10号住居跡



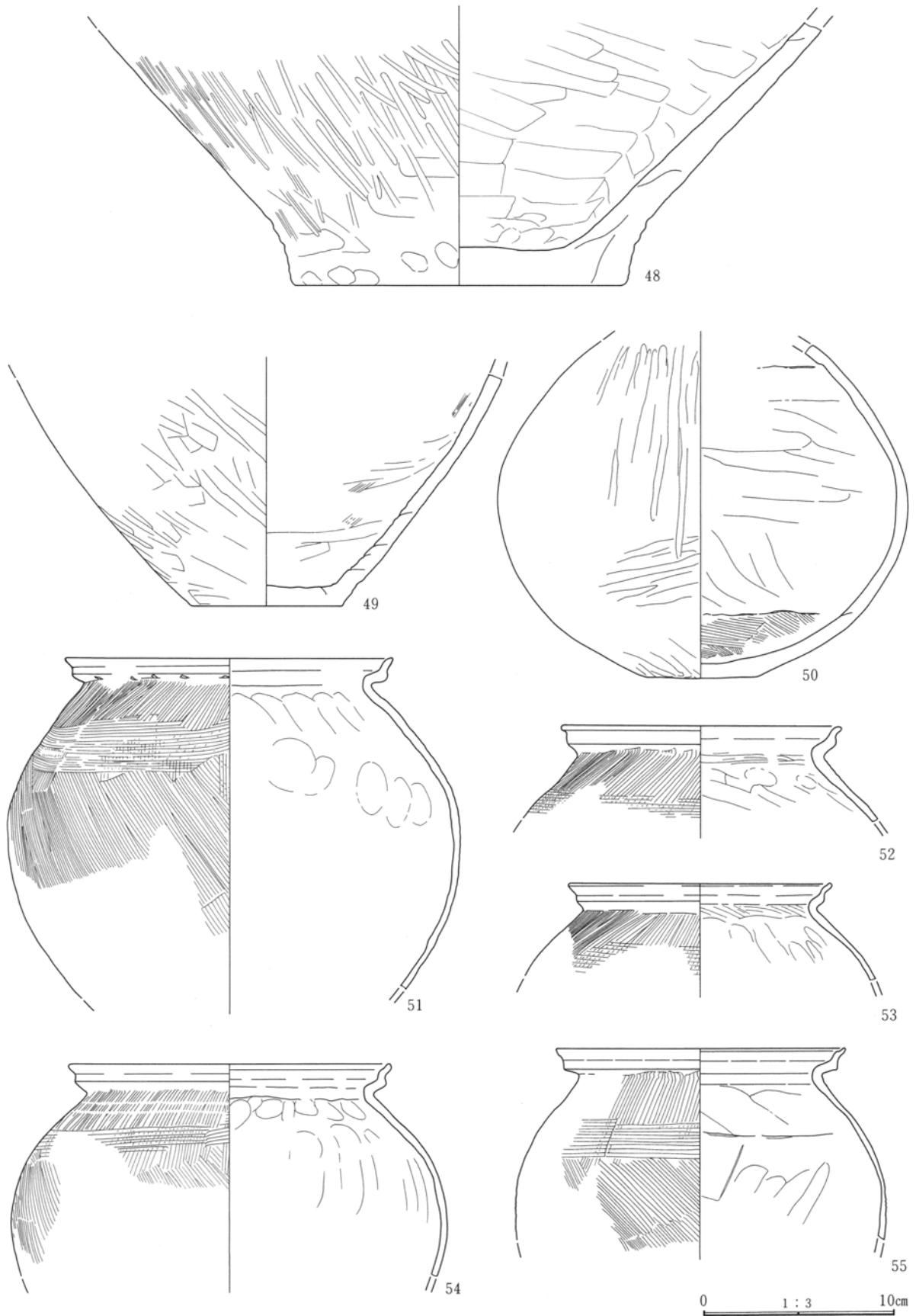
第 26 图 10 号住居跡遺物出土分布图



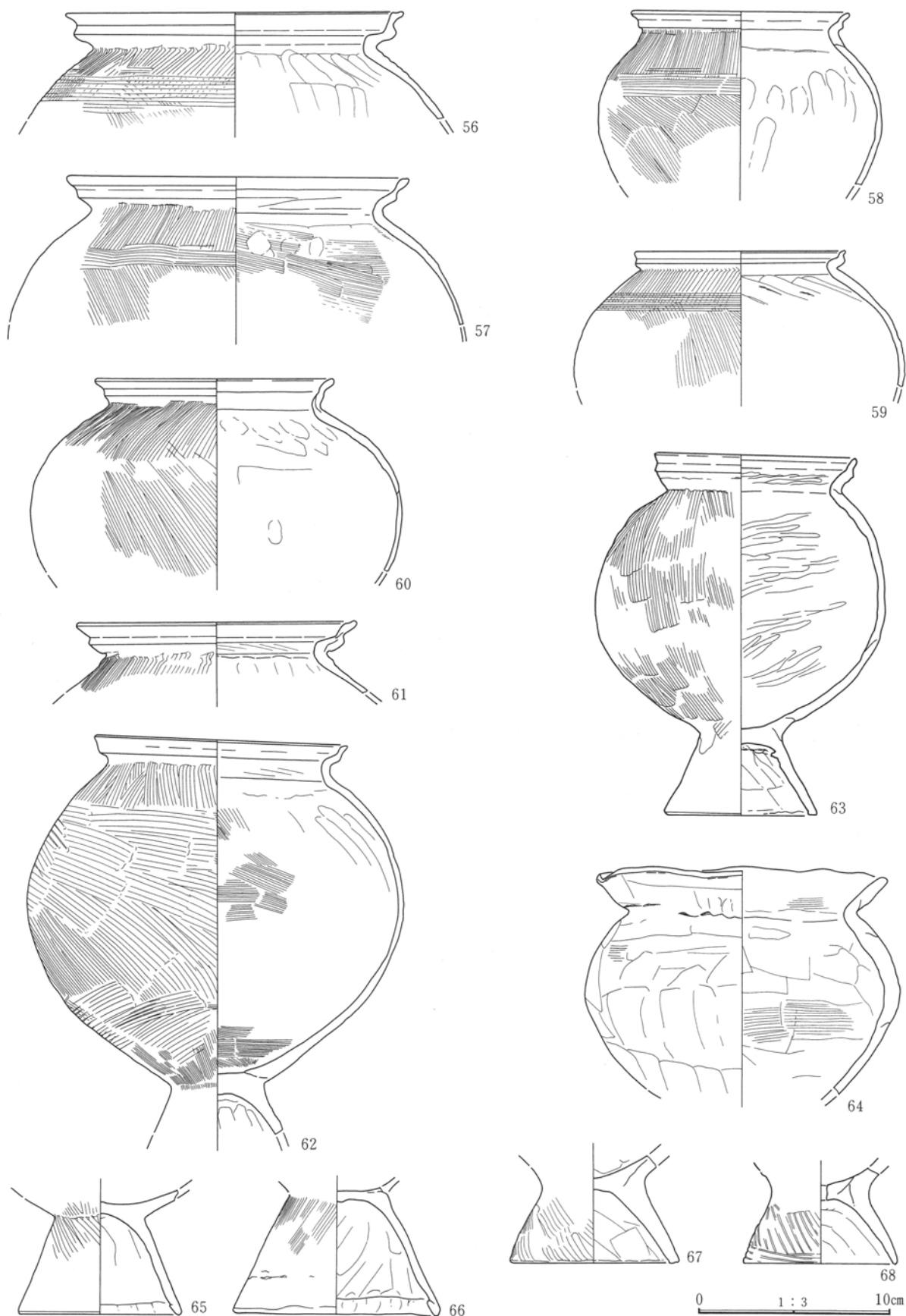
第27図 10号住居跡出土遺物(1)



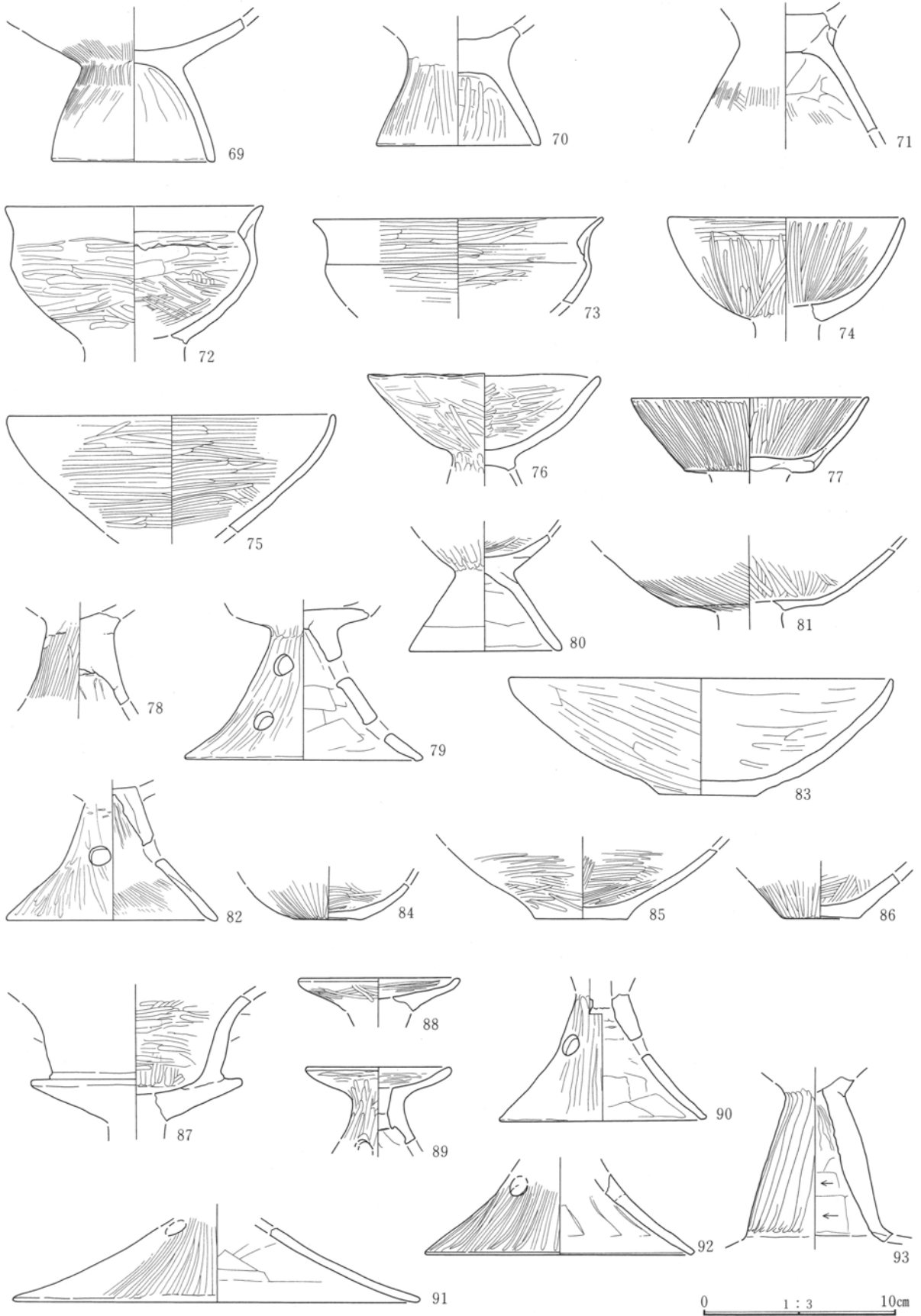
第28图 10号住居跡出土遺物(2)



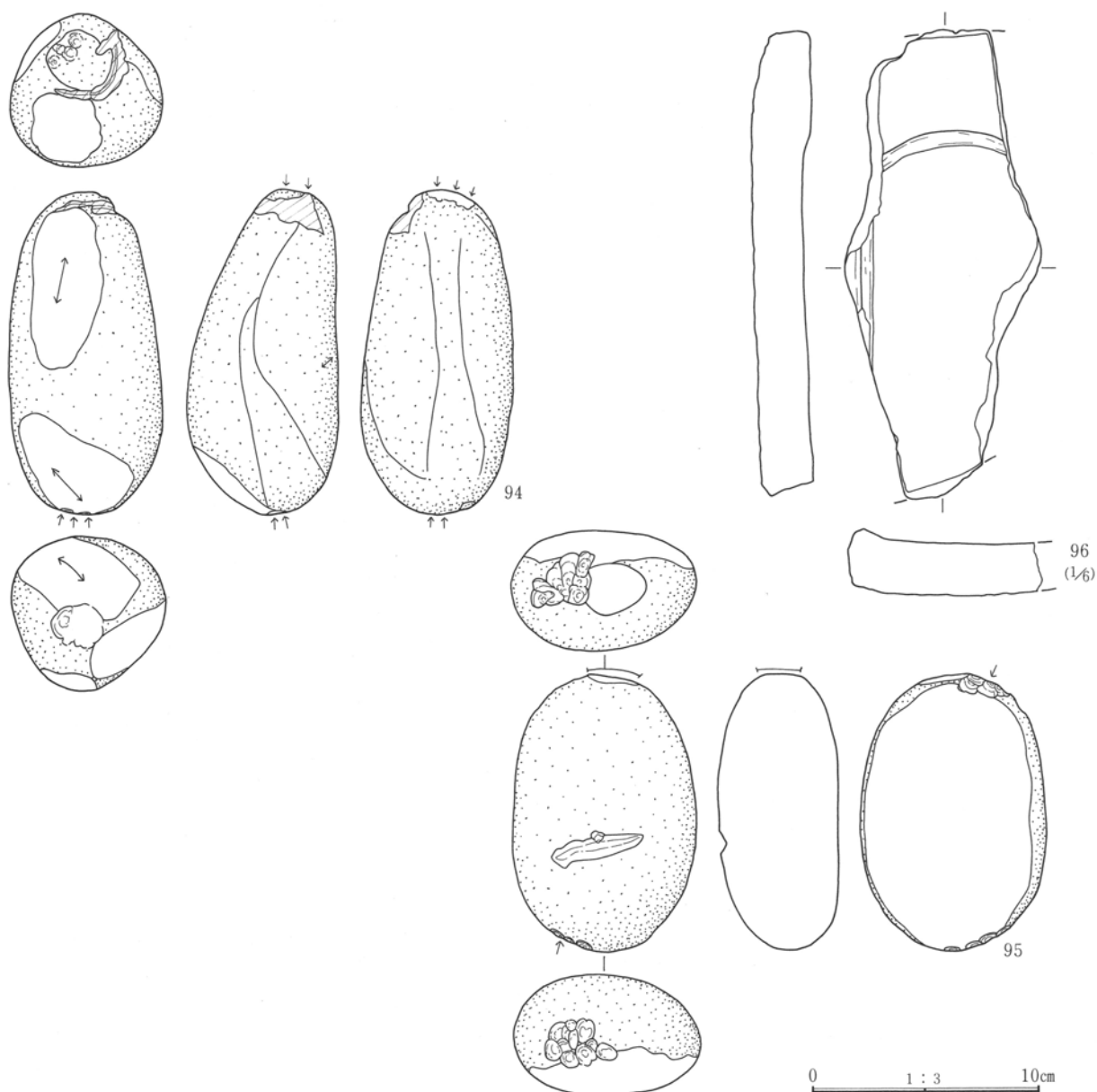
第29図 10号住居跡出土遺物(3)



第30图 10号住居跡出土遺物(4)



第31図 10号住居跡出土遺物(5)



第32図 10号住居跡出土遺物(6)

11号住居跡(第33図 PL.5)

位置 D-8グリッド

遺構重複 2号住居を切り、9号住居に切られる。住居東端を現代の井戸に切られる。

形状 長方形か。北側を試掘トレンチ、東を9号住居に切られており、規模は不明であるが、南北方向の短軸は3.1m程と推定される。遺存面積は9.03m²である。壁高は残存している西側で30cm程を測る。

埋土 2層に分かれ、上層が黒褐色土、下層が黄褐色土が堆積していた。

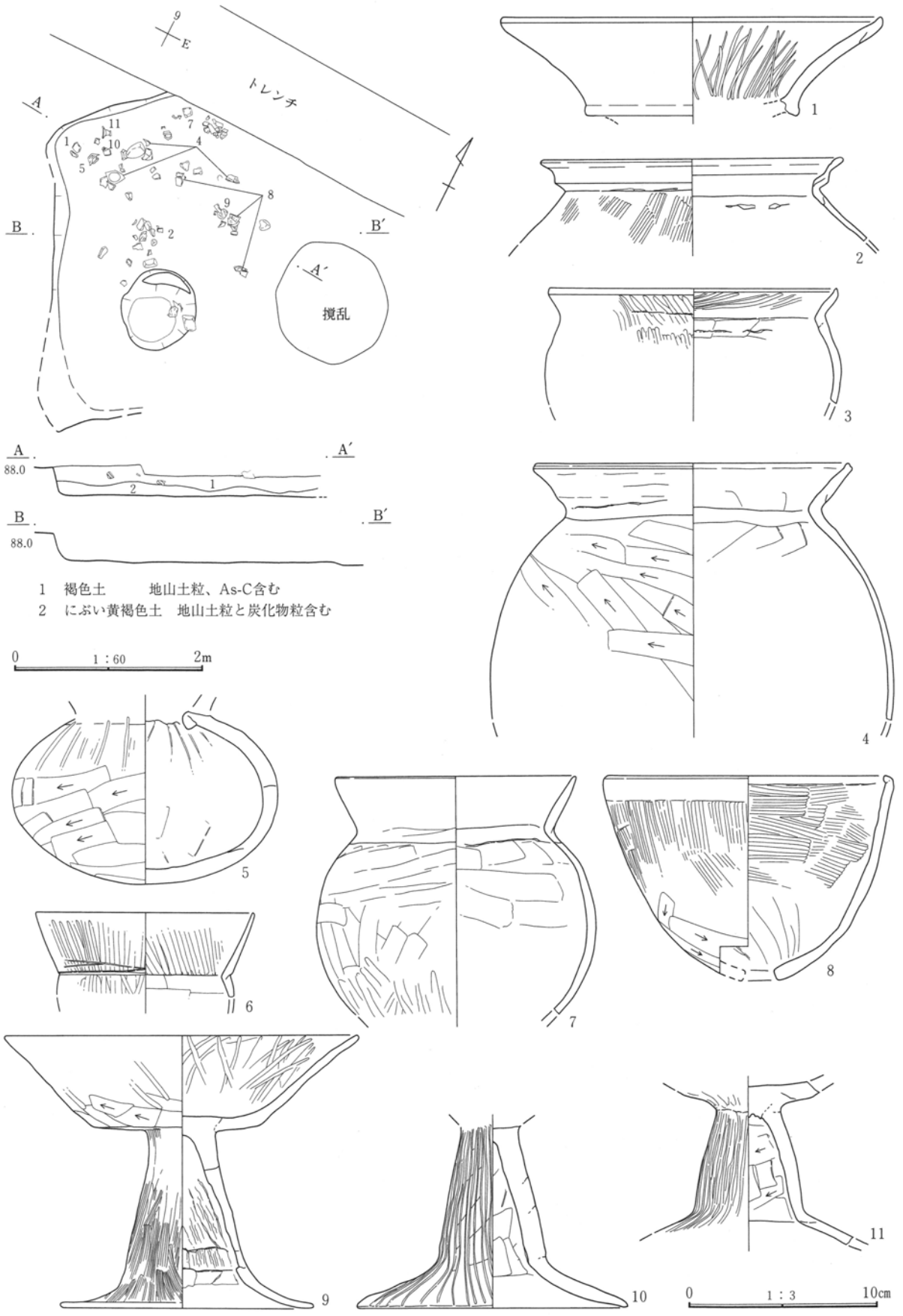
主軸方位 N-50°-E

床面 平坦で、やや縮まりがある。

壁溝・ピット・炉 検出されなかった。

貯蔵穴 南西に偏って位置し、円形で径80cm・深さ23cmを測る。

遺物 鉢(3)以外は埋土からの出土で、住居廃絶後の廃棄と推測されるなお、非掲載土器133点のうち、S字甕が4割強、削り整形の壺と甕が4割弱を占める。



第33図 11号住居跡及び出土遺物

12号住居跡 (第34~36図 PL.6)

位置 D-7グリッド

遺構重複 2号住居を切り、9号住居に切られる。

形状 隅丸長方形か。南北方向の短辺は3.2mを測る。遺存面積は4.30㎡である。壁高は10cmを測る。

埋土 全体に黒褐色土が堆積していた。

主軸方位 N-75° - E

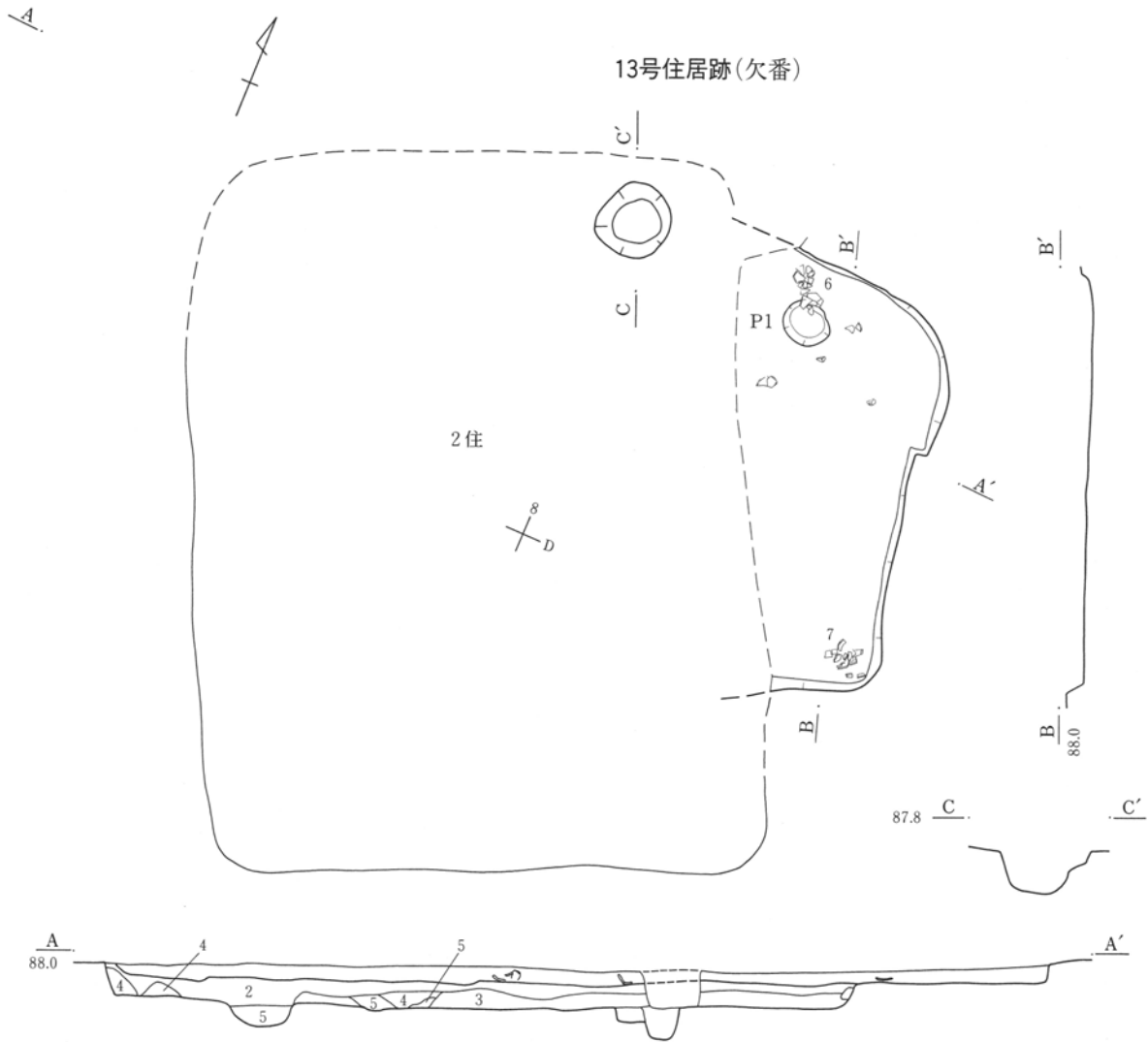
床面 平坦で、堅く締まっている。

壁溝・炉 検出されなかった。

ピット 北東側に1基検出され、径40cm・深さ10cmを測る。性格不明。

貯蔵穴 調査時に9号土坑として扱ったが、位置関係と埋土の近似性から本住居に伴う貯蔵穴と考えたい。北西に偏って位置し、不整円形で径63cm、深さ35cm前後を測る。

遺物 P1と北壁の間から甕(6)、南東隅からつぶれた状態の甕(7)が出土。他は大部分が埋土中からの出土である。

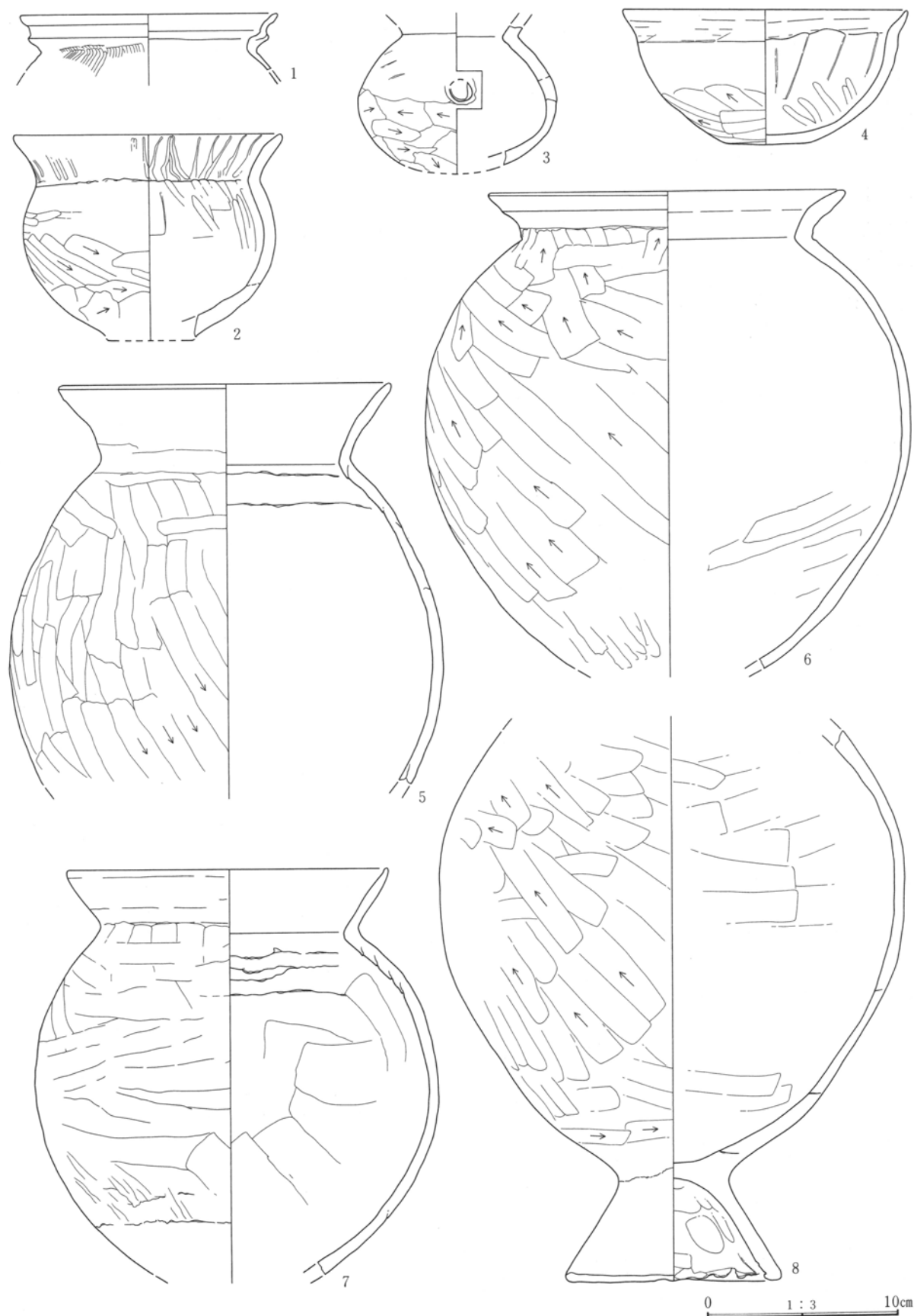


13号住居跡(欠番)

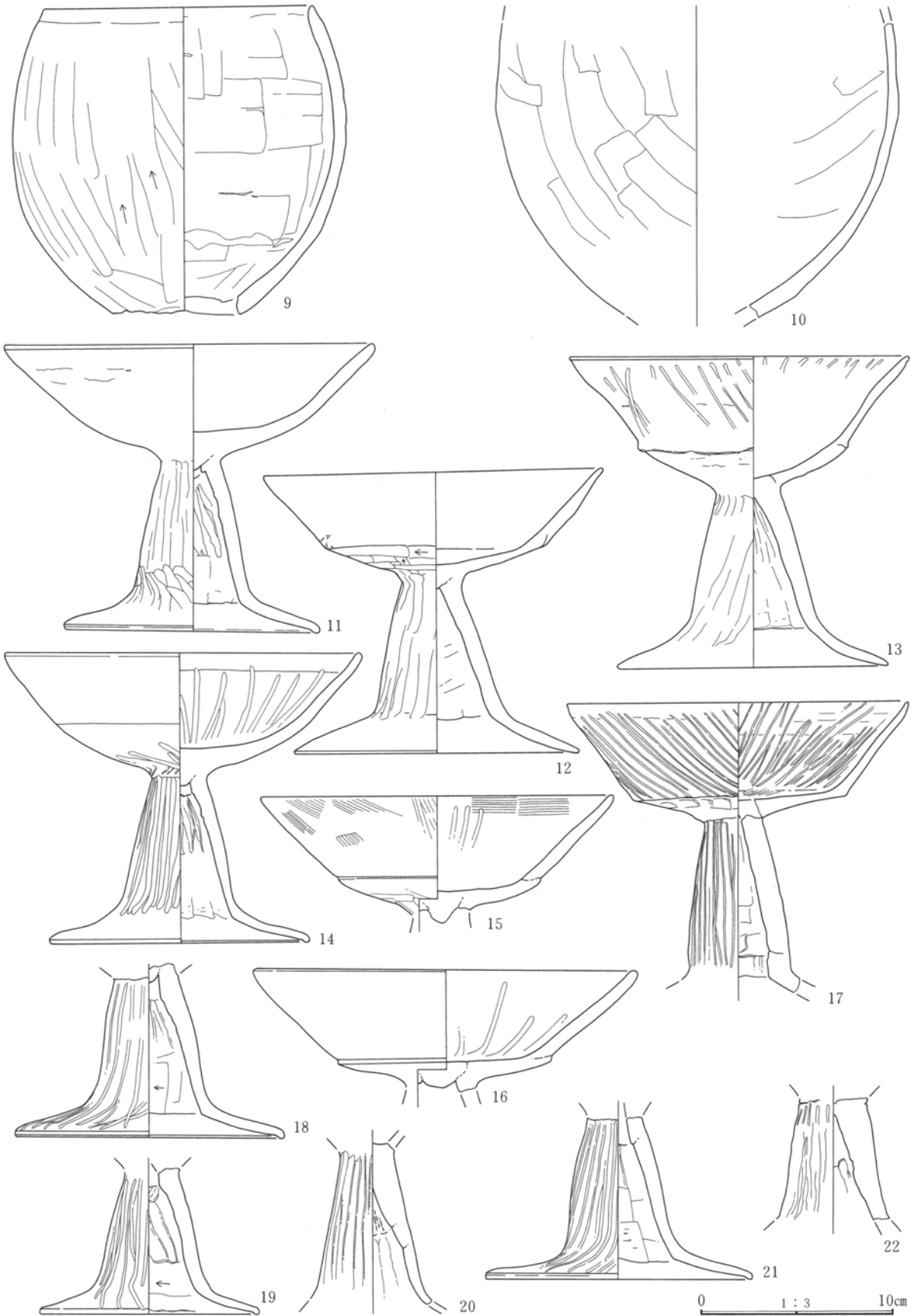
- 1 黒褐色土 地山土粒、As-Cを含む
- 2 褐色土 粘性帯び地山土粒、As-Cを含む
- 3 にぶい黄褐色土 地山土粒と炭化物含む
- 4 暗褐色土 地山土粒含む
- 5 暗褐色土 地山土粒多く粘性帯びる

0 1 : 60 2m

第34図 12号住居跡



第35図 12号住居跡出土遺物(1)



第36图 12号住居跡出土遺物(2)

14号住居跡 (第37~39図 PL.6)

位置 D・E-18・19グリッド

遺構重複 東側を3号溝に切られる。

形状 方形か。北側は遺構外で不明。遺存面積は19.25m²。壁高は西・南側で15~30cmを測る。

埋土 黒褐色土が主に堆積していた。床面直上には炭化材・焼土が部分的に見られる。

主軸方位 不明。

床面 平坦で、堅く締まりがある。全体に焼土が広がっていた。中央から南側にかけては焼土粒・灰も数cm堆積しており、焼失住居と思われる。

壁溝 調査範囲内では全周に巡る。上幅で10cm、深さ5~10cmを測る。

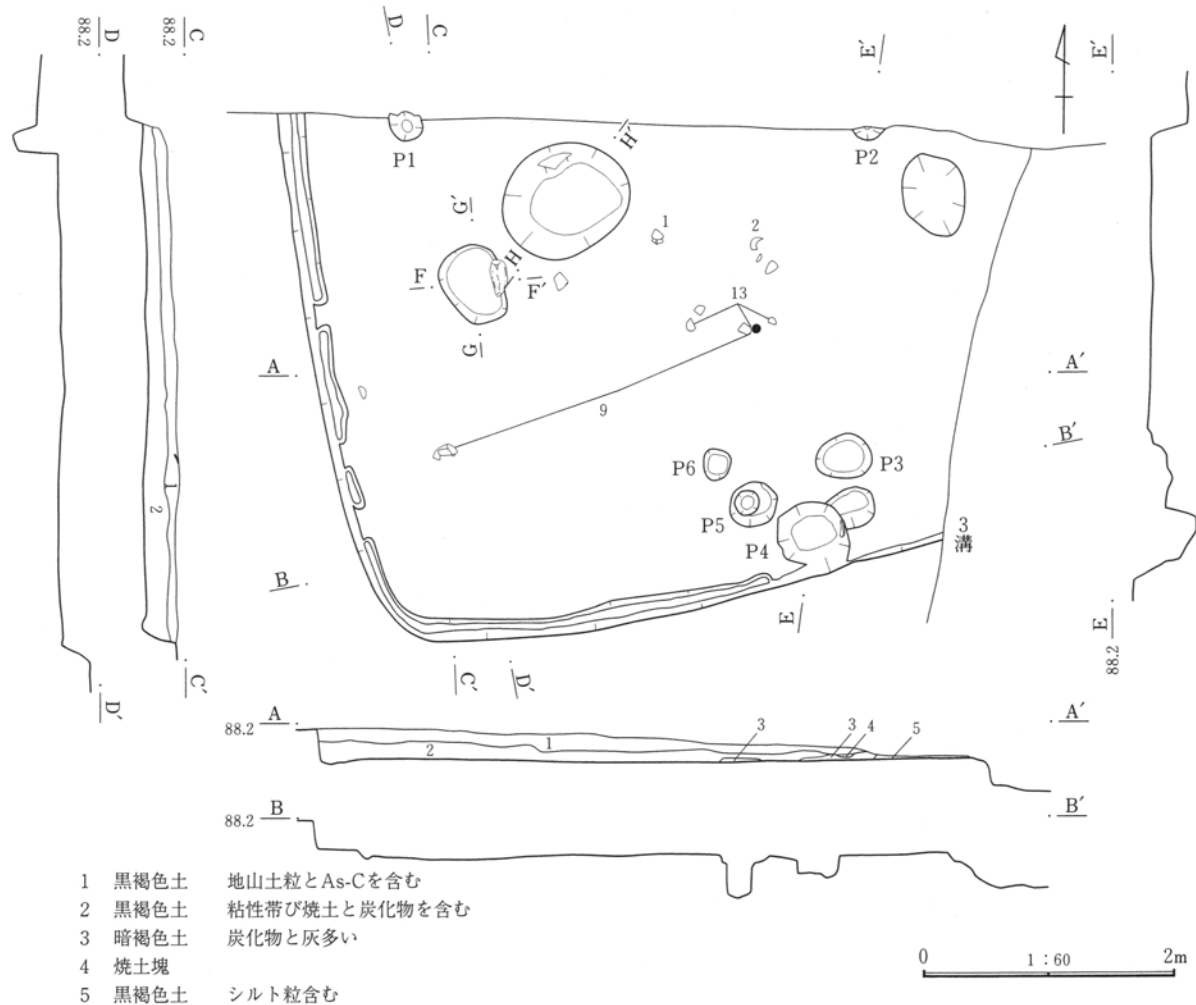
ピット 7基検出された。P1は径30cm・深さ30cm、P2は径20cm・深さ28cm、P3は径36cm・深さ10cm、P4は径50cm・深さ30cm、P5は径40cm・深さ30cm、

P6は径24cm・深さ17cmを測る。P1・P2は主柱、P3~5は出入口施設に関連する柱穴か。

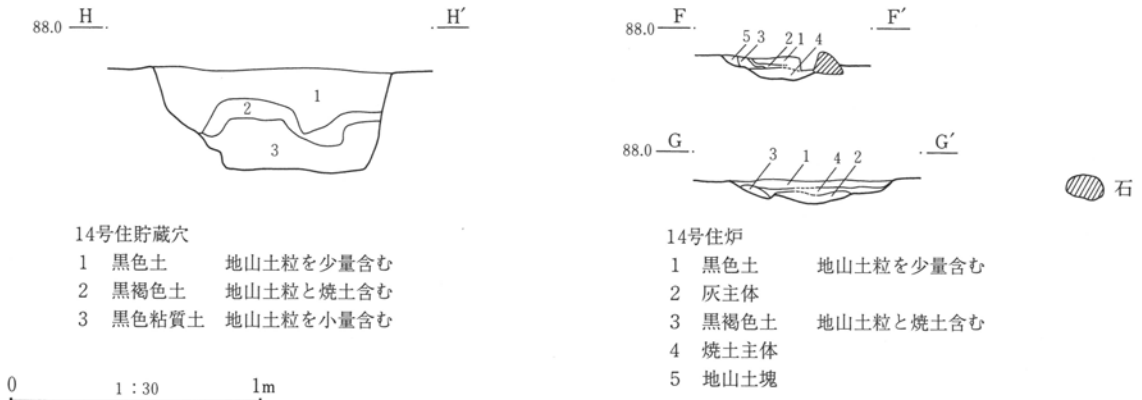
貯蔵穴 炉北東脇で検出。径104×87cm・深さ45cmを測る。通例の住居隅ではないので、別機能の施設とも考え得る。埋土は住居内埋土とほぼ同質。

炉 西壁から1.1m離れて検出された。楕円形の浅い皿状で、規模は63×55cm・深さは4~6cmを測る。炉底に焼土が4cmほどの厚さで堆積していた。東側に25cm大の楕円磔を用いた枕石が付設される。

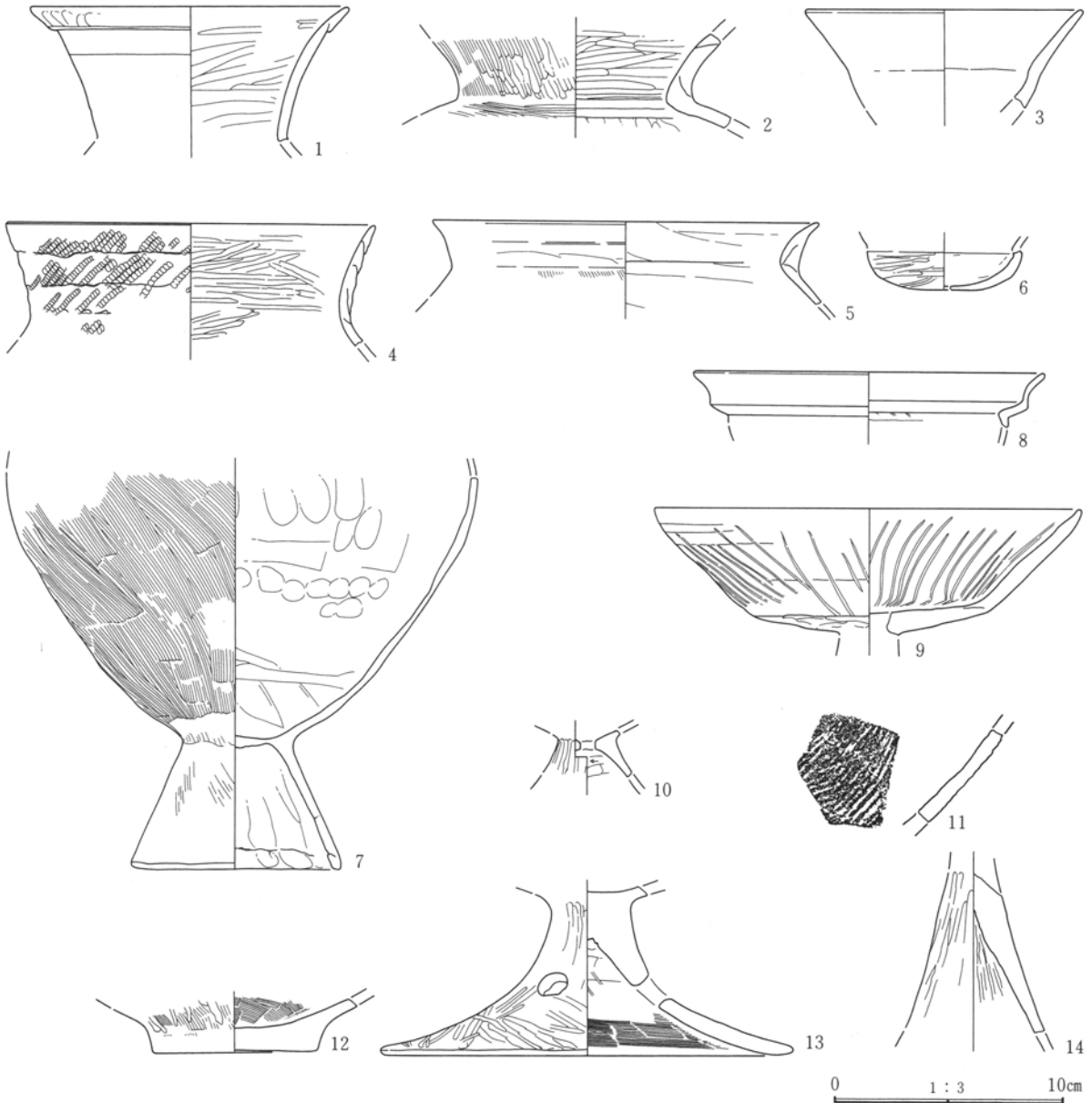
遺物 中央付近床面から壺頸部(2)、有稜高杯(9・13)が出土する。埋土からは420点の破片が出土しうちS字甕164点を数える。刷毛目整形や削り・ナデ整形の単口縁甕も90点と比較的多い。高杯に見るように時期差のあるものが混在しており、混入品も多いと思われる。また韓半島系の叩き整形鉢(11)が1点出土しており、注目される。



第37図 14号住居跡



第38図 14号住居跡炉・貯蔵穴断面図



第39図 14号住居跡出土遺物

15号住居跡 (第40・41図 PL.6)

位置 C・D-19・20グリッド

遺構重複 なし。

形状 方形の北半部を検出。全形と規模は不明。

遺存面積は8.17m²。壁高は10~15cmを測る。

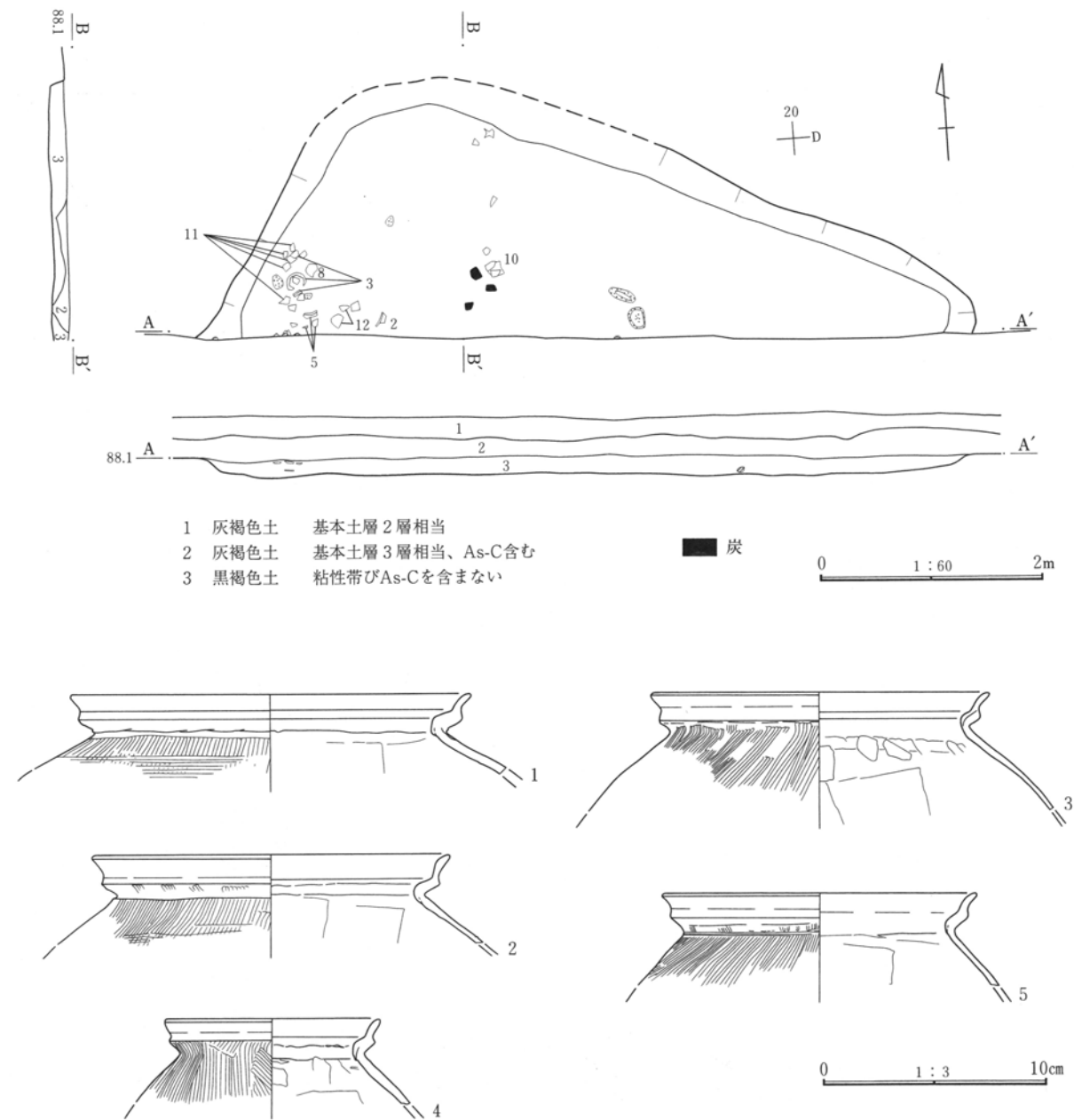
埋土 黒褐色土が主である。床面近くは炭化物が混入している。

主軸方位 N-66° -W (推定)

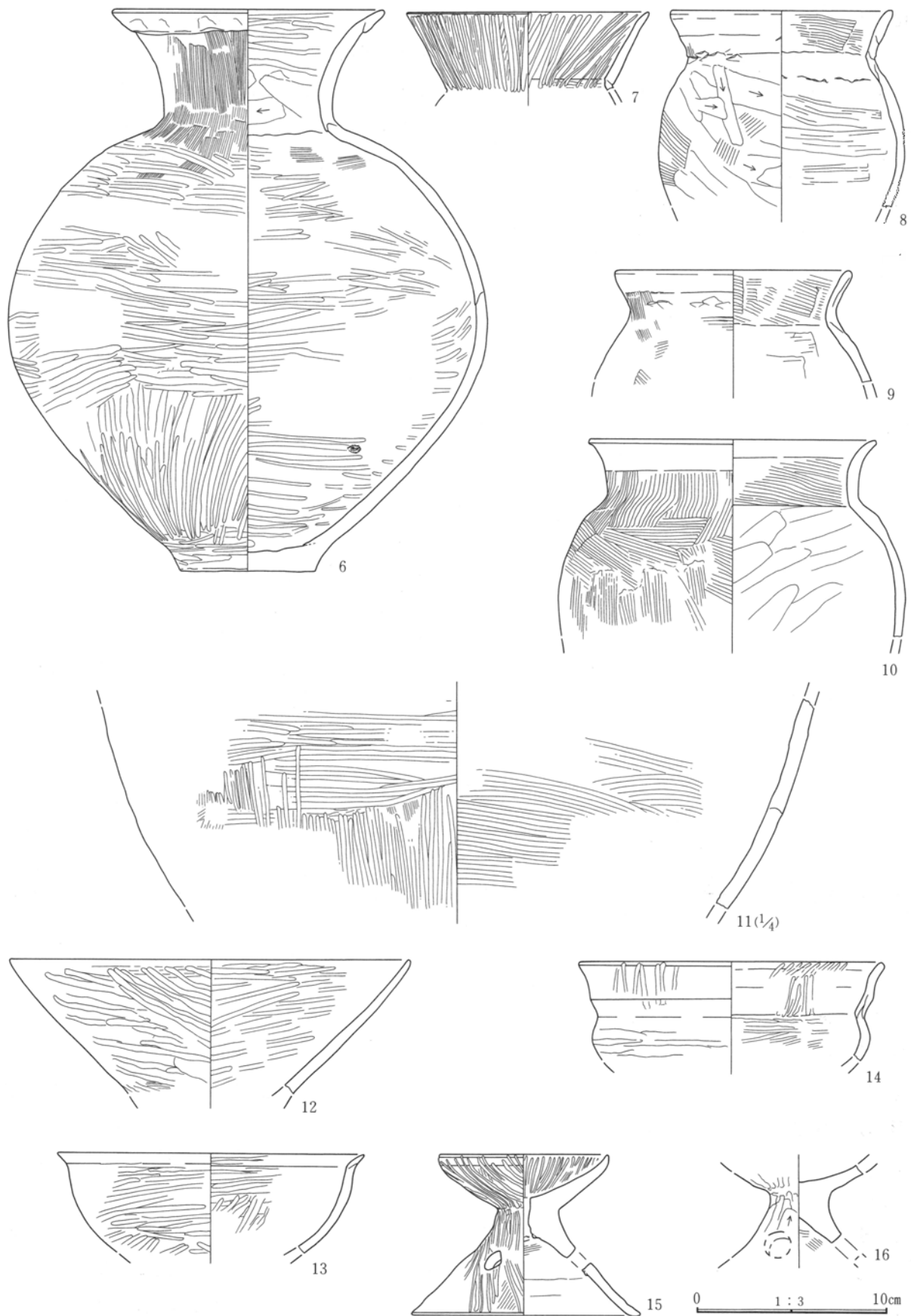
床面 平坦だが、締まりはない。

壁溝・ピット・貯蔵穴・炉 検出されなかった。

遺物 北西壁際に集中して出土したが、壺胴部片(11)、刷毛目整形単口縁甕(10)は床面、他は埋土中からの出土である。ただし1カ所に集中していることから、住居廃絶後の一括投棄の可能性がある。樽式系無文壺(6)のほか高杯(12・13)や壺・甕・鉢の破片に樽式の系統を引くものがわずかながら見られる。非掲載土器の主体はS字甕で、破片数では9割を占める。



第40図 15号住居跡及び出土遺物(1)



第41图 15号住居跡出土遺物(2)

16号住居跡 (第42図 PL.7)

位置 E-20・21グリッド

遺構重複 なし。

形状 方形の南隅部を検出。全形と規模は不明。
遺存面積は7.11m²。壁高は東壁で6～10cmを測る。
西壁は削平されていてほとんど遺存しない。

埋土 暗褐色土が主体。

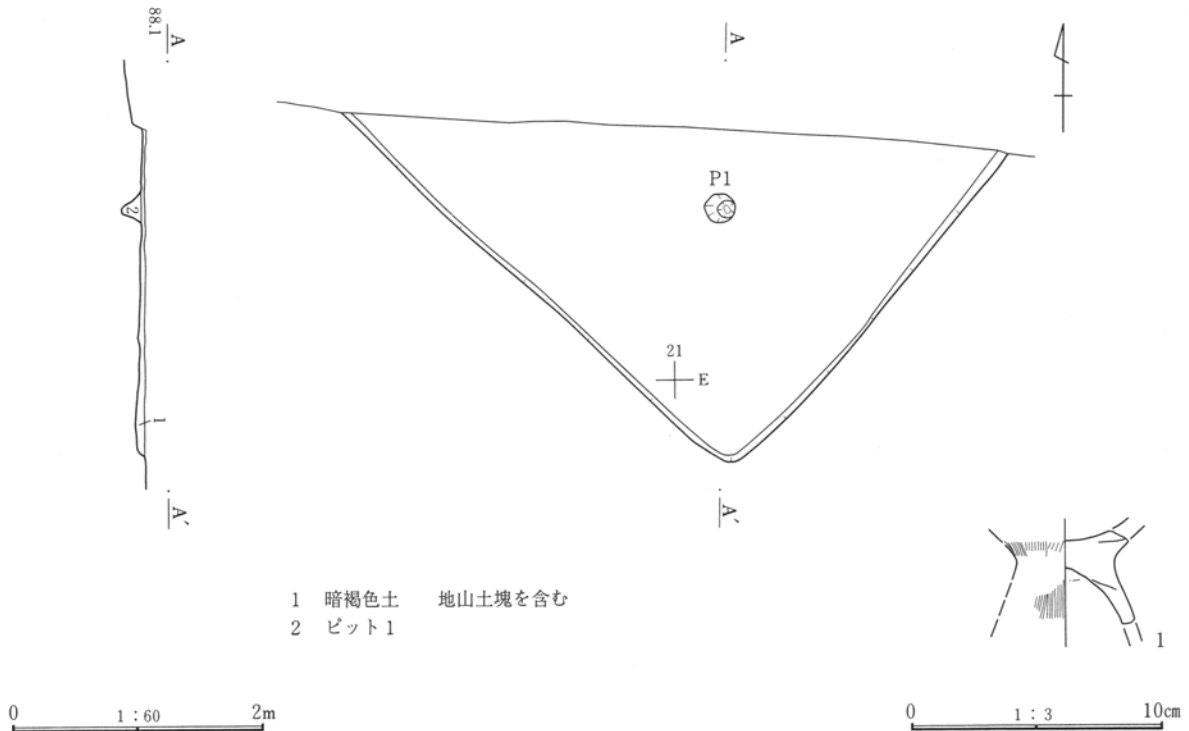
主軸方位 N-47° -W (推定)

床面 平坦で、やや締まりがある。

壁溝・貯蔵穴・炉 検出されなかった。

ピット 南東壁、南西壁の各々より1.5m離れて1基
(P1)を検出。円形で規模は径23cm・深さ10cmを
測る。やや浅いが、位置的に柱穴と考えられる。

遺物 下層埋土からS字甕を主とする小片が23点
出土した。



第42図 16号住居跡及び出土遺物

17号住居跡 (第43図 PL.7)

位置 C・D-18・19グリッド

遺構重複 なし。

形状 不整隅丸長方形。東西方向の長軸は3.4m、
南北方向の短軸は2.7mを測る。面積は7.00m²。壁高
は10cmを測る。

埋土 主に灰褐色土が堆積していた。

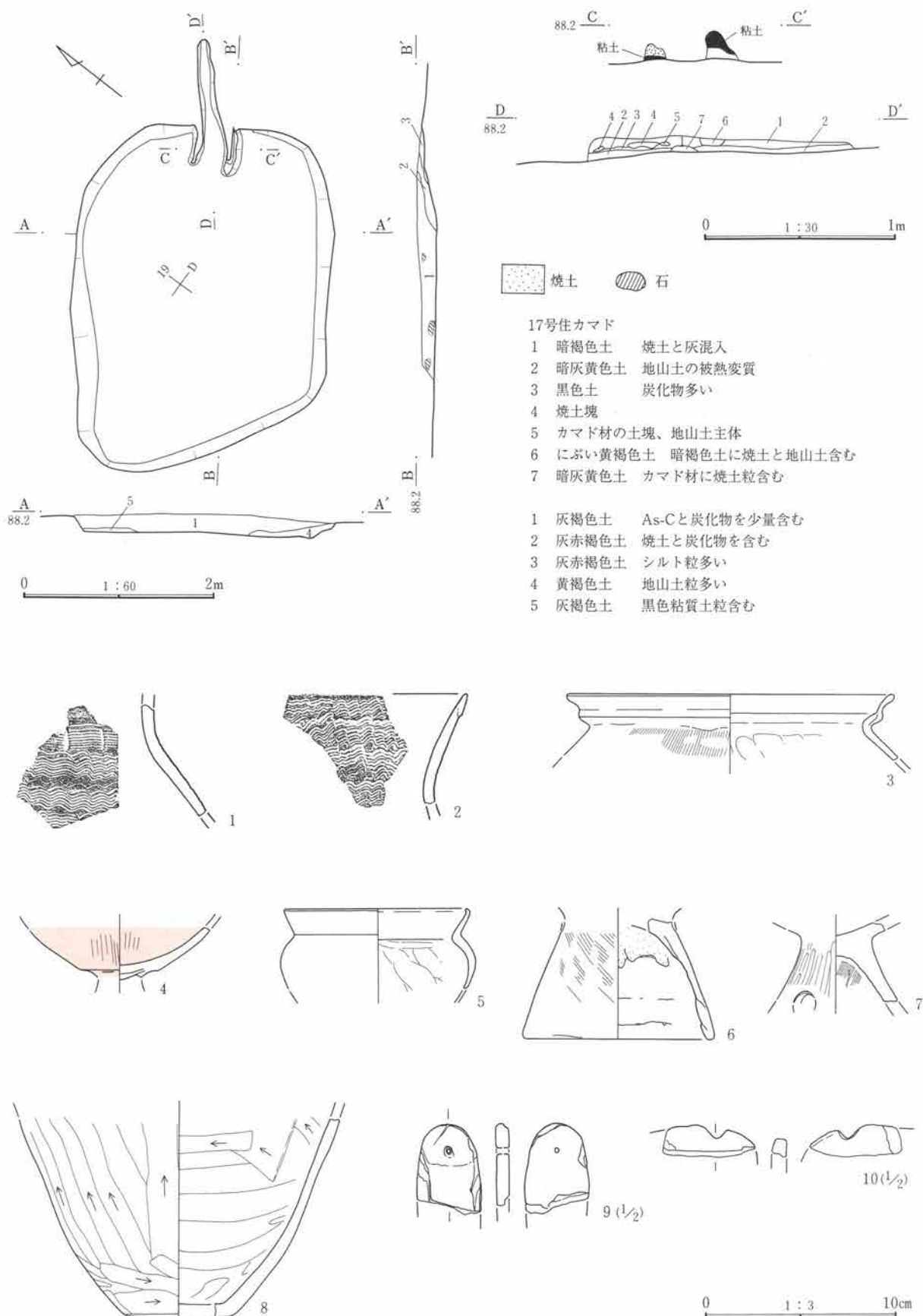
主軸方位 N-50° -E

床面 平坦で、やや締まりあり。

壁溝・ピット・貯蔵穴 検出されなかった。

カマド 東壁中央付近に付設されていた。焚口の幅
は25cm、煙道は長さ100cm・幅16cmを測る。袖部は
両方遺存し、黄褐色土のロームで構築する。右袖部
は長さ40cm・高さ15cm、左袖部が長さ30cm・高さ10
cmを測る。焚口付近に焼土ブロックや炭化粒が混じ
る。煙道はほぼ水平に延びる。

遺物 埋土から150点ほど出土遺物のうち、8割ほ
どは古墳前期の土器片で、混入品と思われる。住居
北隅出土の6世紀後半代と思われる甕(8)が本住
居跡に帰属するものだろう。



第43図 17号住居跡及び出土遺物

18号住居跡 (第44図 PL.7)

位置 D-14グリッド

重複 6号住居と5号井戸(中世)に切られる。

形状 長方形と思われるが、東半部は現代攪乱溝により破壊されて不明。南北方向で3.6mを測る。遺存面積は4.74㎡。壁高は25cmを測る。

埋土 暗褐色土が主である。最上層は6号住居の床面が残り、ローム粒が混じり堅く締まっている。

主軸方位 不明。床面 平坦で、締まりがある。

壁溝 西壁中央部に沿って1.6mの長さで検出された。上幅8~10cm・深さ3cmを測る。

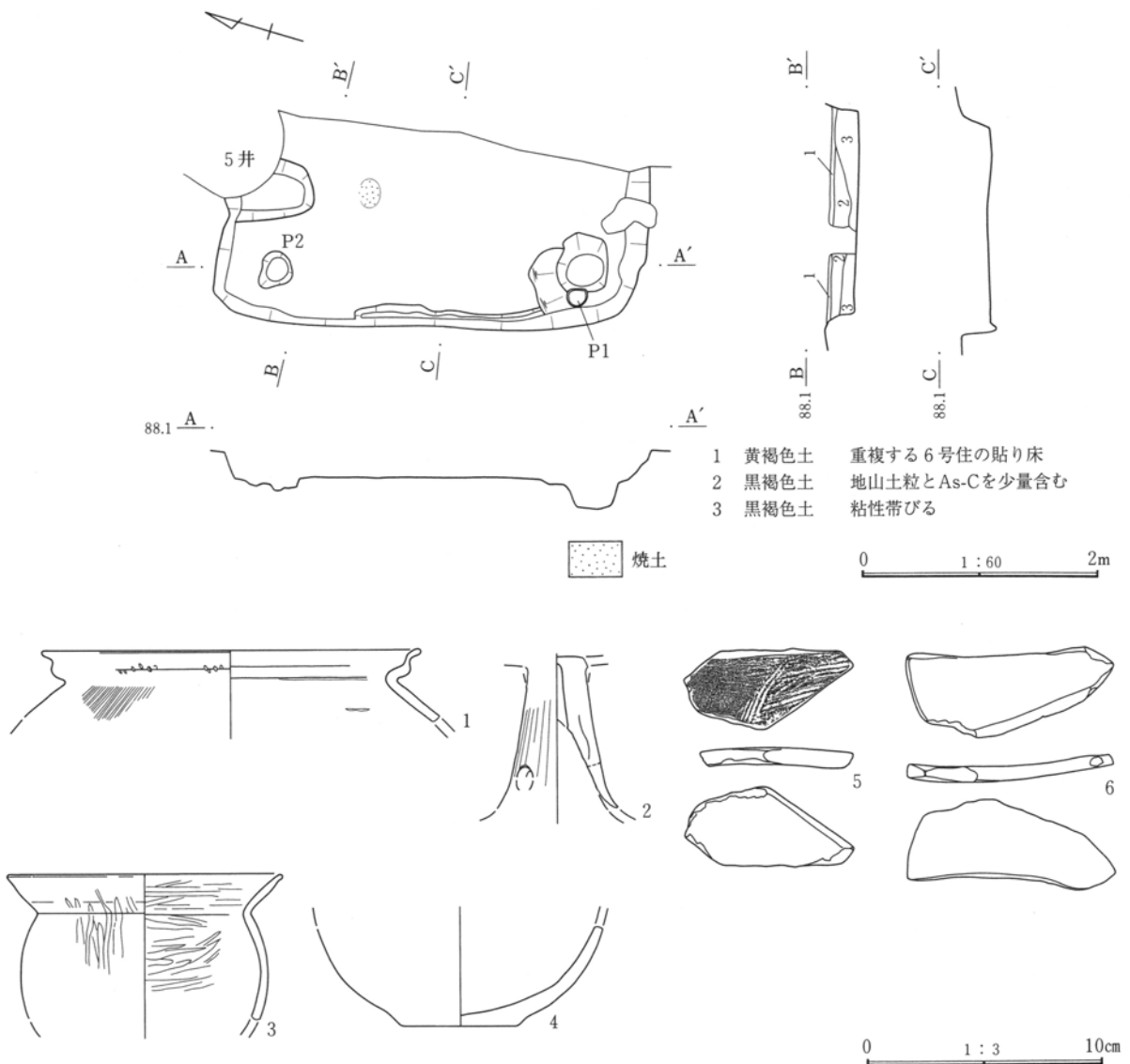
ピット P1は径16cm・深さ30cm、P2は径30cm・

深さ10cmを測る。双方とも主柱穴の可能性あり。なお、北隅で壁から隅丸長方形の掘り込みが見られたが、重複する5号井戸に関連する後世の攪乱か。

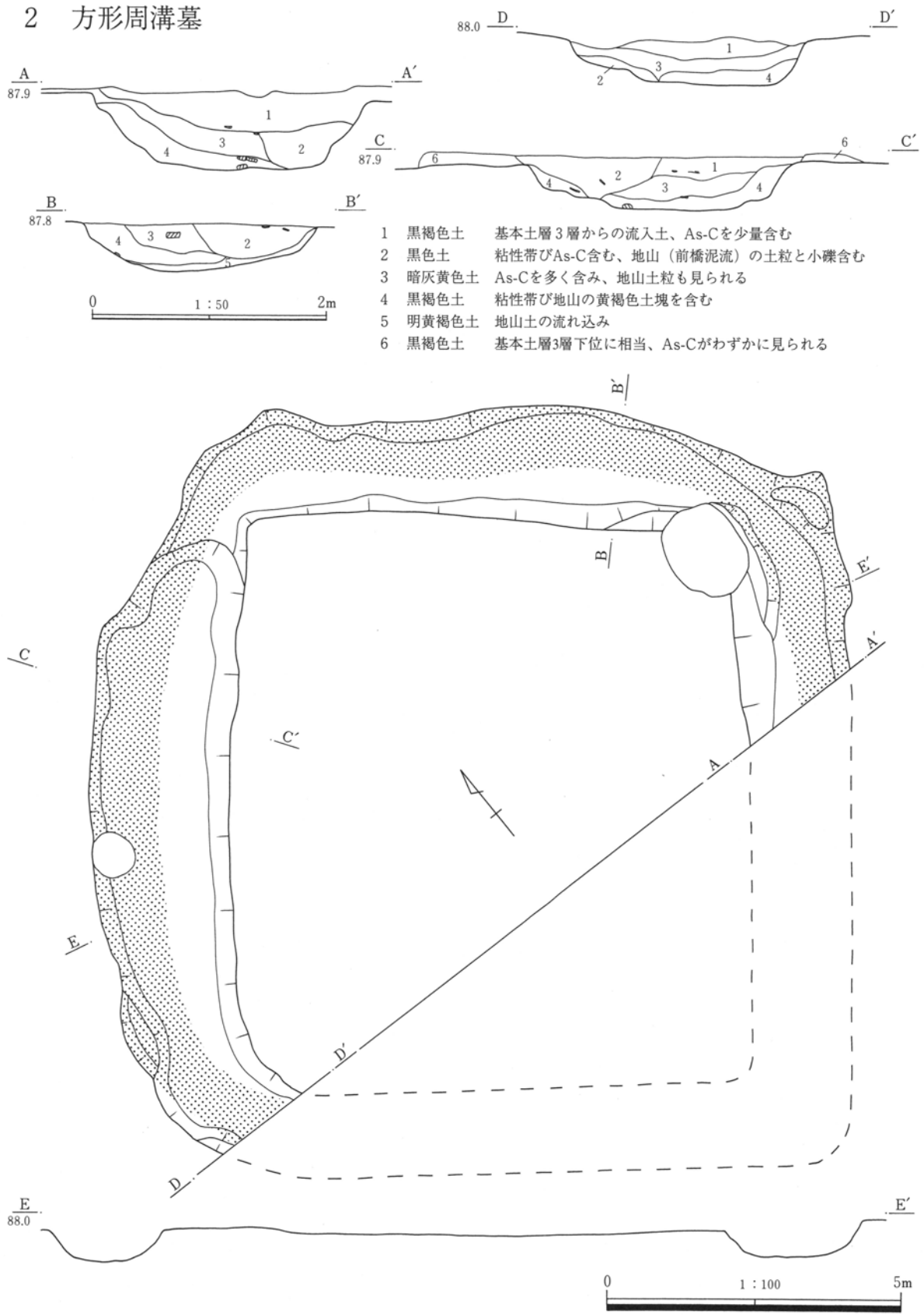
貯蔵穴 南西隅に径50cm・深さ30cmの土坑を検出、これが相当すると思われる。ただし、P2に対応する主柱穴の可能性もある。

炉 中央付近北寄りで焼土集中が径17×25cmの範囲に見られた。掘り込みは見られなかった。

遺物 ほとんどが埋土からの出土で、出土した破片84点中、S字甕が2割強、他は壺埴類、高杯等が占める。5・6は縁辺が研磨された弥生土器片で、溝切りや、細かい研ぎに用いられた再利用品である。



第44図 18号住居跡及び出土遺物



第45図 1号方形周溝墓

1号方形周溝墓(口絵2 第45~61図 PL.9~13)

位置 C・D-3~5グリッド

遺構重複 北西溝が1号井戸、北端が4号井戸、東端が4号土坑に切られる。

形状 南側約1/3程が調査区外にあたるため、全形確認はできず、平面プランは陸橋を持たない溝全周型と想定したが、調査区外の南側で中央陸橋ないし南隅陸橋の存在する可能性は比定できない。ただし、溝外縁プランが直線的で、溝幅がほぼ一定で狭いことから、全周型の前方後方型周溝墓とは考えにくい。規模は、周溝を含めた最大幅が13.2mを測る。

主軸方位 長軸方位はN-40°-E

方台部 方台部の平面規模は、北西辺で9.7m、北東辺で8.3mを測る。このことから、方台部は正方形ではなく、北東-南西方向のやや長い長方形となる。方台部の断面観察によれば、溝プランが確認できた標高87.9mのレベルまで中世以降の攪拌土が堆積していて、封土の存否は確認できなかった。主体部の痕跡も確認できなかった。

周溝 方台部上端となる内郭ラインは直線的で、外郭ラインは中央部分がやや外側に膨らむ形状を呈する。断面形は、比較的深い南東溝中央部や北西溝で台形状を呈する。溝幅は、北西溝中央部で最大値2.4m、北隅部で最小値1.3mを測る。平均値は2m前後である。下幅規模は、北西溝中央部で最大値1.8mを測るが、他の溝ではほとんどが1.0~1.5mに収まる。深さは一定ではなく各辺の中央部分がやや深く掘られており、溝断面A-A'で確認したところで最大値70cmを測る。北隅部と西隅部では浅く、深さ30cmを測る。底面標高は南東溝87.1m、東隅87.2m、北東溝中央87.2m、北隅87.5m、北西溝中央87.2m、西隅87.45mを測る。底面比高は西隅部-南東溝中央で35cmを測る。各隅部は溝中央部よりも20cmほど浅くなっているが、漸移的に傾斜しており陸橋状の高まりではない。なお、底面や土層断面には溝内埋葬や他の施設を想定させる痕跡は確認できなかった。

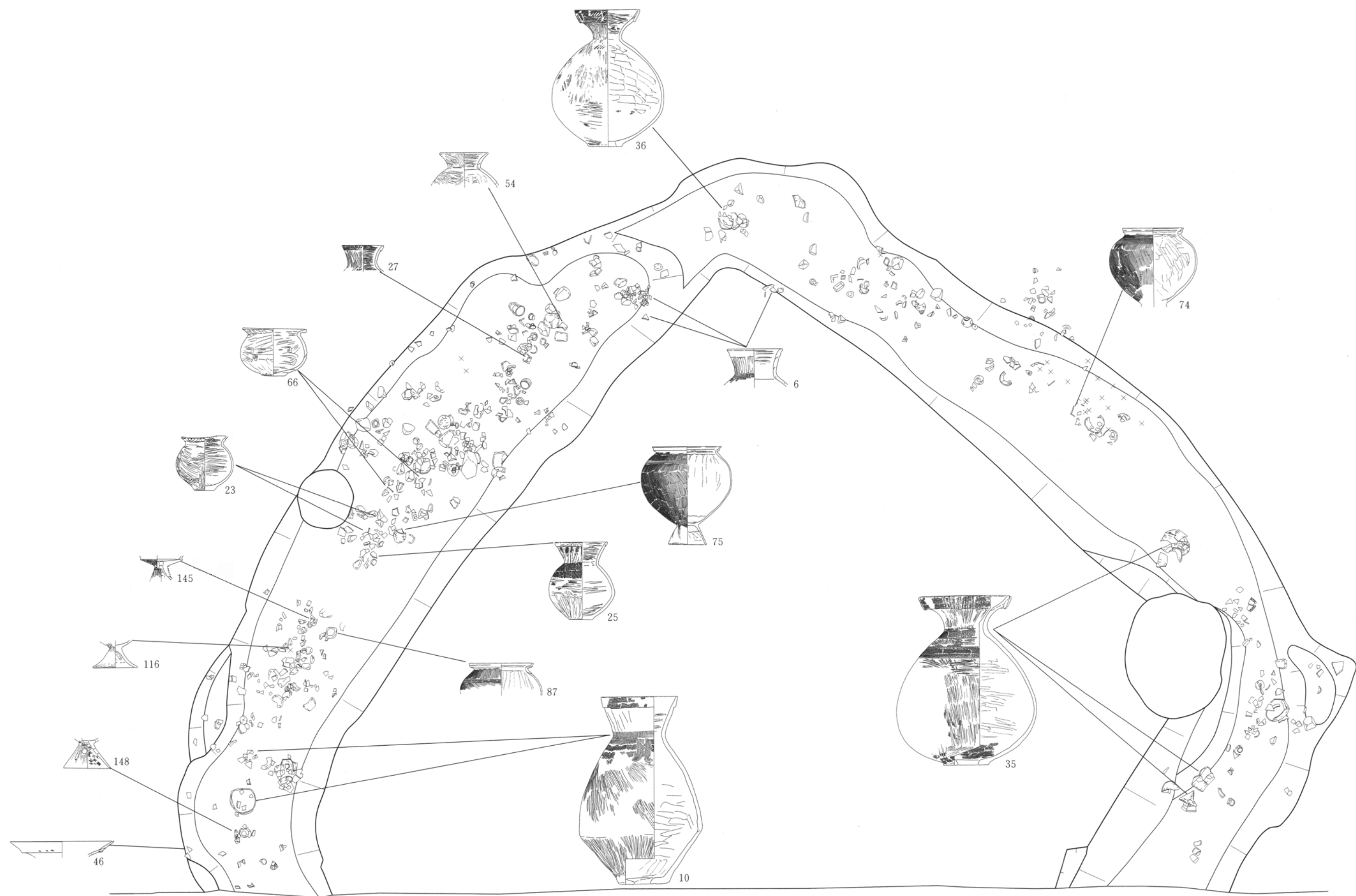
溝内埋積土は、下層に黄褐色土塊と若干のAs-C

を含む黒褐色土(1層)が方台部側から流れ込む状態で堆積する。中層に黄褐色土粒とAs-Cを多く含む灰黄褐色土(2層)が堆積する。溝外郭に沿って礫を含む黒色土(3層)が堆積する。この3層はレンズ状を呈する自然堆積状況を示さず、45°以上の急角度で1・2層を切っていることから、周溝が一定の深さで埋没した後、改めて人為的に掘削した周溝の痕跡と考えられる。このことから、本周溝墓の周溝について1・2層が堆積する「旧周溝」と「新周溝」と呼称する。

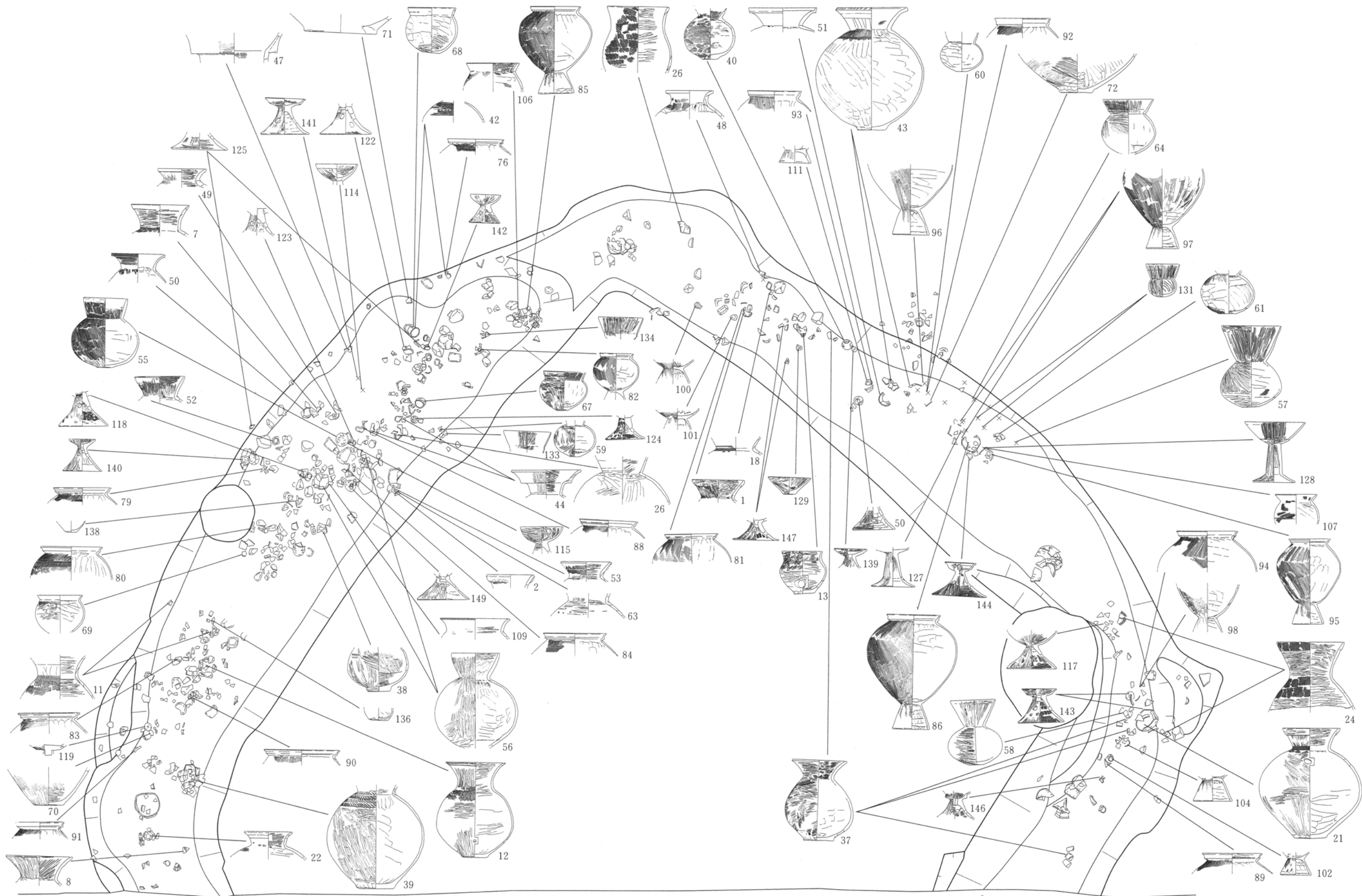
新周溝は、西隅部断面D-D'以外の土層断面で、いずれもほぼ同規模・同断面形状で確認されることから、ほぼ周溝外側ラインに沿って全周すると考えられる。土層断面から想定される規模は、上幅1m前後、深さは旧周溝底面とほぼ同じ面で止めている。旧周溝埋土の1・2層の層厚から、40cm以上の埋没土(埋没後の沈下を考慮すれば60cm前後の厚さと推測される)の堆積以後に再掘削されたと考えられる。推定された新周溝の平面プランを第45図に示した。なお、第45図(平面図)に示された東隅部内側中位の段状部分、北西溝外側の膨張部分、西隅北に見られる中位段状部分は、この新周溝の一部であろうと想定した。

遺物 方台部からの遺物の出土はなく、全て周溝内から出土している。破片を含めた出土土器総点数は4339点で、そのうち153点を選んで図化掲載した。非掲載の土器は小破片か器形の不明瞭な体部~底部破片が主で、4186点(約45kg)を数える。その内訳は、壺・埴・平底甕類1787点、S字甕2195点、高杯・器台・鉢類194点である。また石器片・自然礫も出土しており、形態の判明する石器類7点を選んで図化掲載した。

遺物の出土状況は、溝のほぼ中央付近に集中して上下に積み重なった状態で出土しており、層位毎に認定するのが困難であったため、平面位置と標高値を計測して取り上げた。平面分布では、東隅、北東溝中央、北隅、北西溝北半、北西溝南半~西隅の五群が見られる。このうち北東溝中央の一群は、この



第46图 1号方形周墓遺物出土分布图(1)



第47图 1号方形周墓遺物出土分布图(2)

部分の周溝外側包含層から出土した土器群と本来同一群であった可能性が高い。出土高は、底面から20～50cmの位置に集中する傾向を示し、特に30cm付近での出土頻度が高い。以上のような出土状況から、溝内出土遺物について、全てが周溝墓に伴うものとは考えがたく、外部からの流入、後世の廃棄・埋納等による遺物も混在していると考えべきだろう。また前述したように、造成時の旧周溝と一旦埋没した後に開削された新周溝が想定されることから、各々の埋没過程で埋積した遺物が混在しているはずである。ここで旧周溝と新周溝の各々から出土したと推測される遺物の分布図を第46・47図に示した。新周溝出土遺物としたのは、第45図で想定した新周溝範囲（網かけ部分）と、断面図上へ投影することで判定した。これ以外の出土位置にあるものを旧周溝出土遺物として扱うこととした。

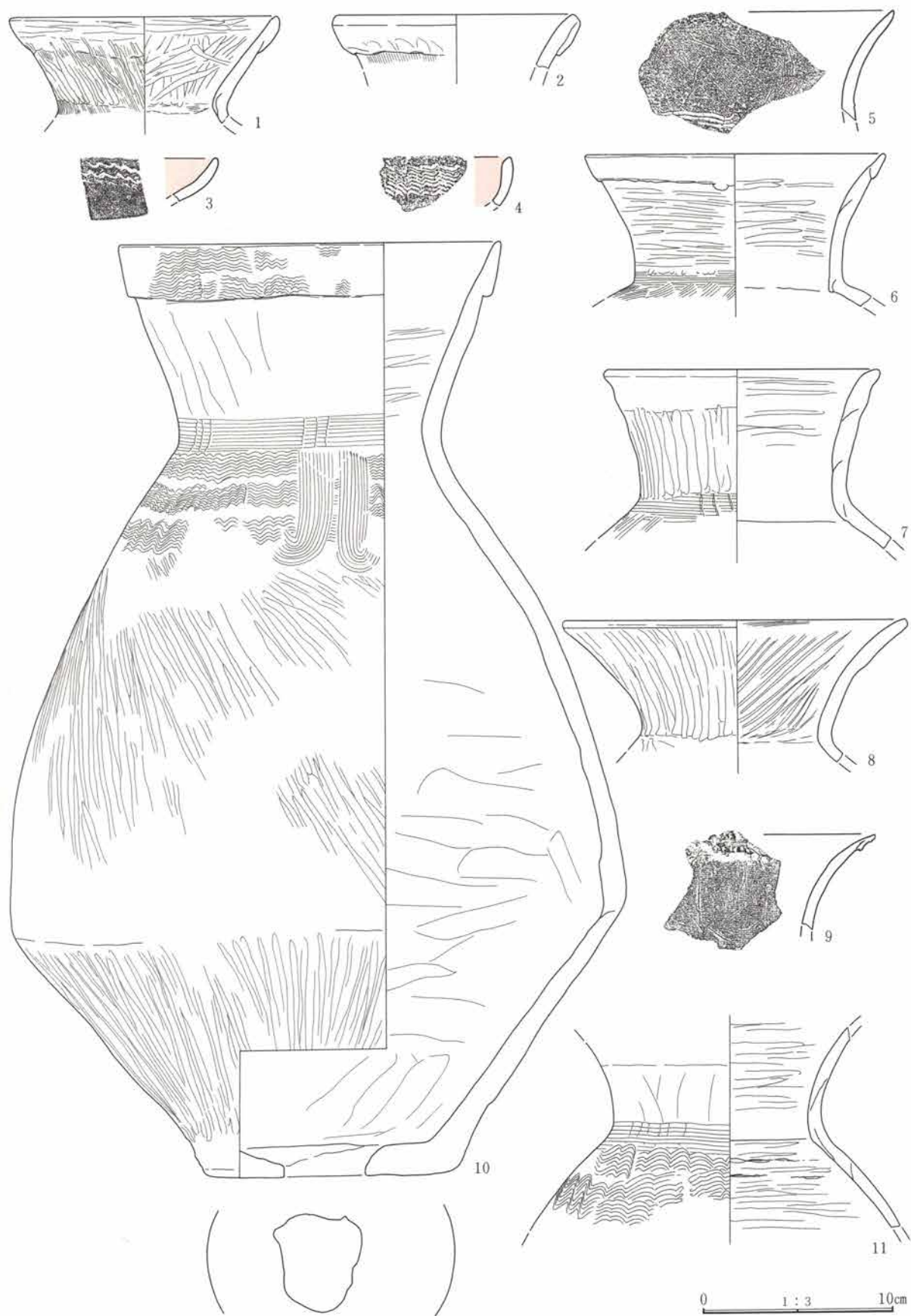
旧周溝出土遺物と判定できたものは、壺(6・10・23・25・27・35・36・54・66)、甕(74・75・87)、高杯(46・116)、器台(145・148)で、特に底部穿孔(いずれも焼成後)の壺3点が東・北・西の隅部から出土している点が注目される。南関東系の網目状捺糸文壺(35)は東隅の周溝内法面に沿った底面付近で、破碎した破片が隅部の北側と南側に分かれて出土している。この出土状況から、方台部東隅に置かれていた土器が破碎した後に溝内に転落したものと想定できよう。ちなみにこの壺はほぼ完形に復元することが出来、人為的な打撃痕は認められない。甕はいずれもS字状口縁台付甕で、北東溝と北西溝の中央付近から出土する。小型の壺類(23・25・27・54・66)は北西溝内の北半、高杯と器台(46・116・145・148)は南半から散在して出土する。以上の出土位置がそのまま方台部における配置を示すのであれば、四隅に大～中型壺、北西辺に小型壺類と高杯・器台類を二分して置き、S字甕を各辺中央付近に配するといった想定が出来よう。

新溝出土及び溝埋没過程で堆積したと思われる土器群は溝全体に分布するが、分布密度からみて大きく四群に分離することが可能だ。ここで東隅の土器

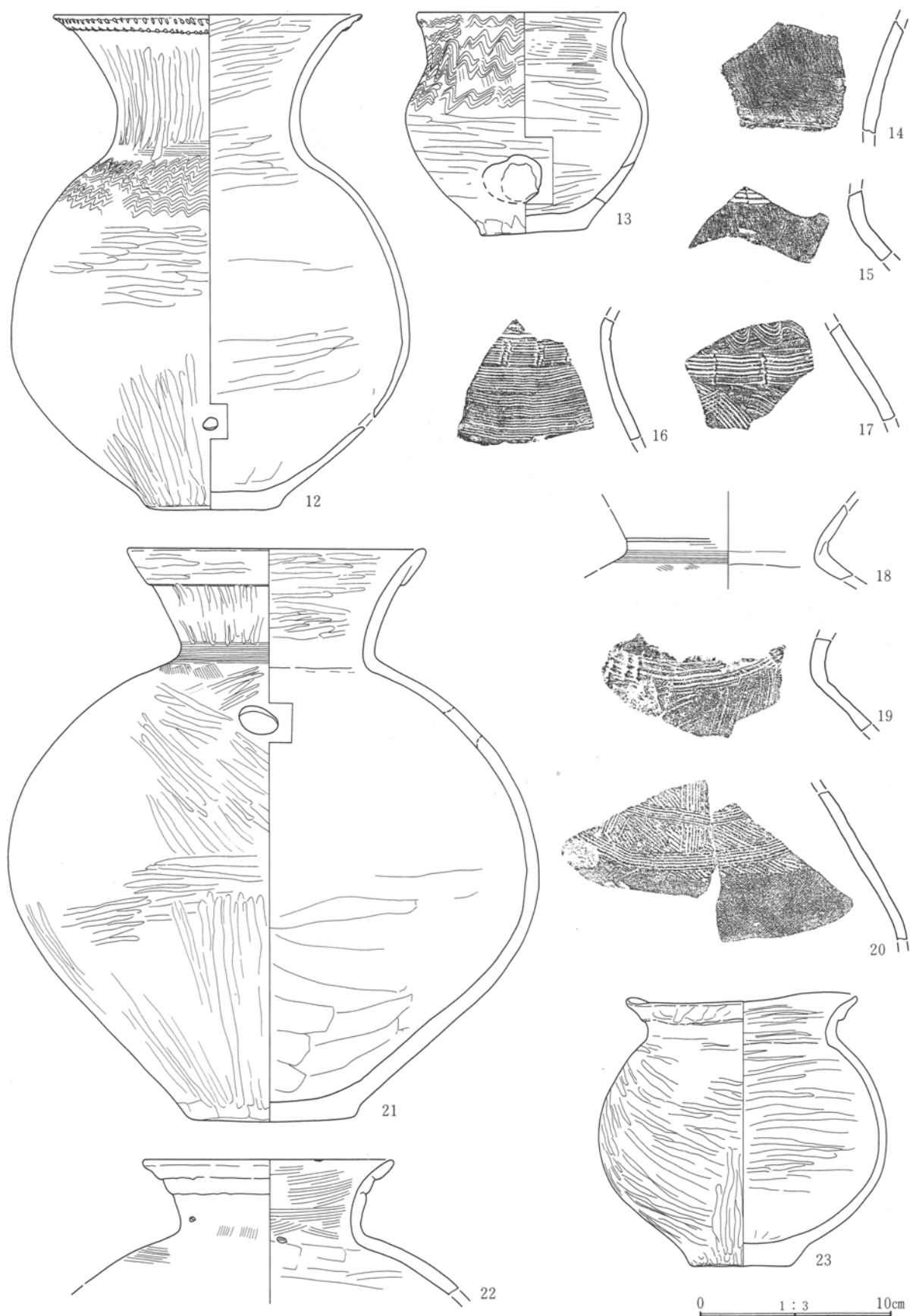
群を1群、北東溝中央部のものを2群、北西溝中央部のものを3群、西隅のものを4群と呼ぶ。1群と4群は大部分が溝埋土中の出土であるが、2群と3群は溝埋土下層から溝が埋没しきった段階のレベルのものまで見られることから、本周溝墓に伴う土器以外の後世の混入品や廃棄品も多く含まれていることが注意される。特に、2群では北東溝の上端外側にまで分布する土器破片群から流入した様子がうかがえる。各土器群の器種を見る限りでは、特定器種や特定型式土器の偏在性は認められない。東西両隅部にあたる1群と4群に方台部から落ちたと思われる壺(12・21・39)の見られることが旧溝段階での土器配置と共通する点として注目される。2群でも残存率の高い壺(43)が出土しているが、本周溝墓帰属ではなく、外部からの混入、流入の可能性を無視できない。

新溝出土土器の器種は、壺類・甕類・埴・高杯・器台・鉢である。旧溝出土遺物と異なるのは埴(131)や直口壺(57・58)の参入であり、壺(21・39・43)・S字甕(85・86・95)・高杯(128)を見る限り、明らかに後出する型式が卓越している。遺物量は旧溝出土遺物を大きく凌駕しているが、これは本来旧溝に伴ったであろうものを含んでいることや、溝上位に埋没した中には、後世の集落からの廃棄品も混在した可能性が高いためである。東隅で出土している南関東系赤彩壺(37)、西隅で出土した樽式小型壺(12)は、各々で出土している旧溝の南関東系壺(35)、樽式壺(25)に伴って配置されていた可能性も充分考えられよう。

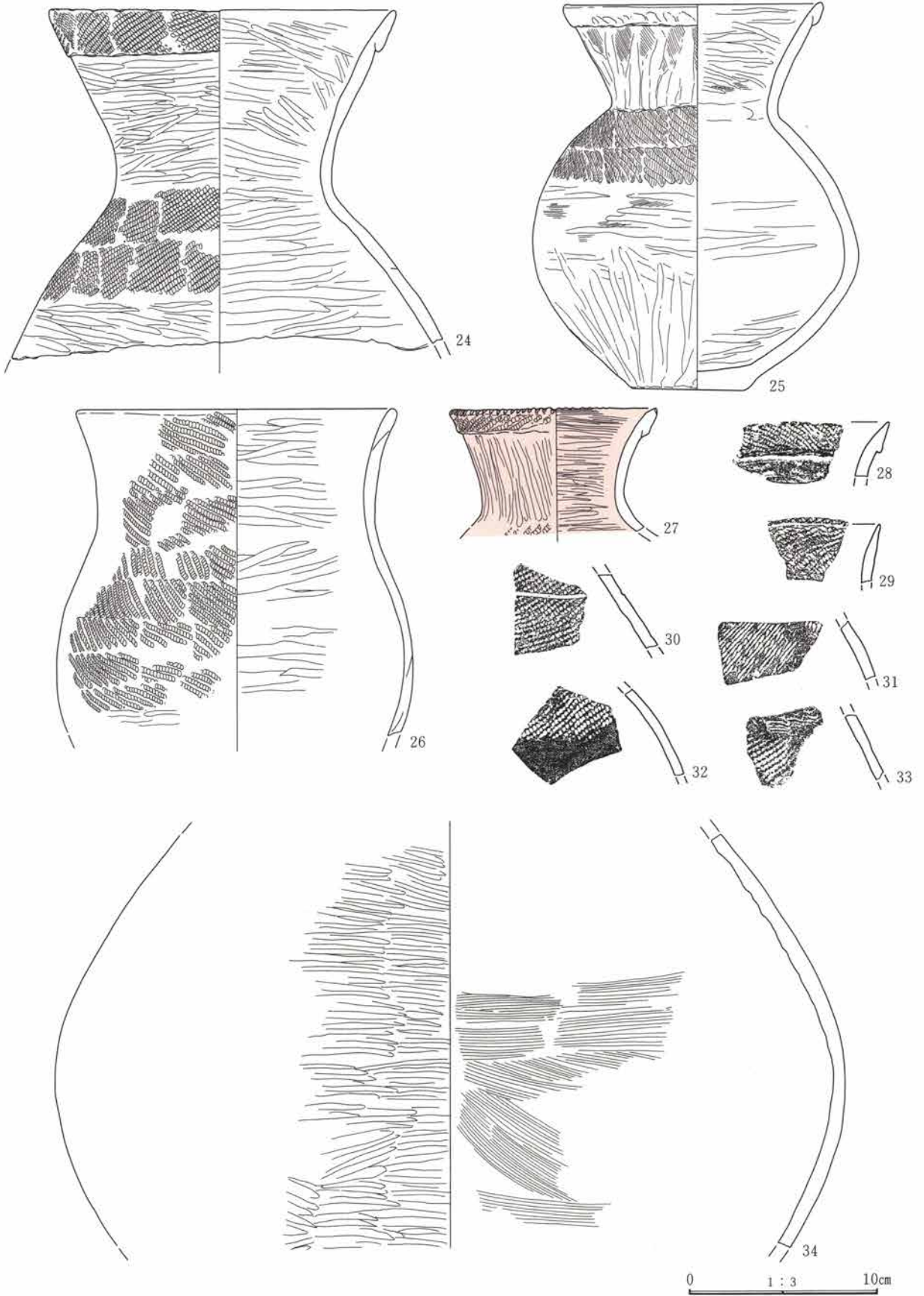
土器型式や編年の位置づけの詳細については後述(第6章)するが、旧溝出土遺物は樽式の最終段階を上限とし、新溝出土遺物は樽式最終段階から古墳前期後半段階までの時間幅をもつ。また、壺口縁(1・3・4)のように弥生中期後半竜見町式に属する例も少数見られるが、溝埋没時の混入と考えてよい。



第48図 1号方形周溝墓出土遺物(1)



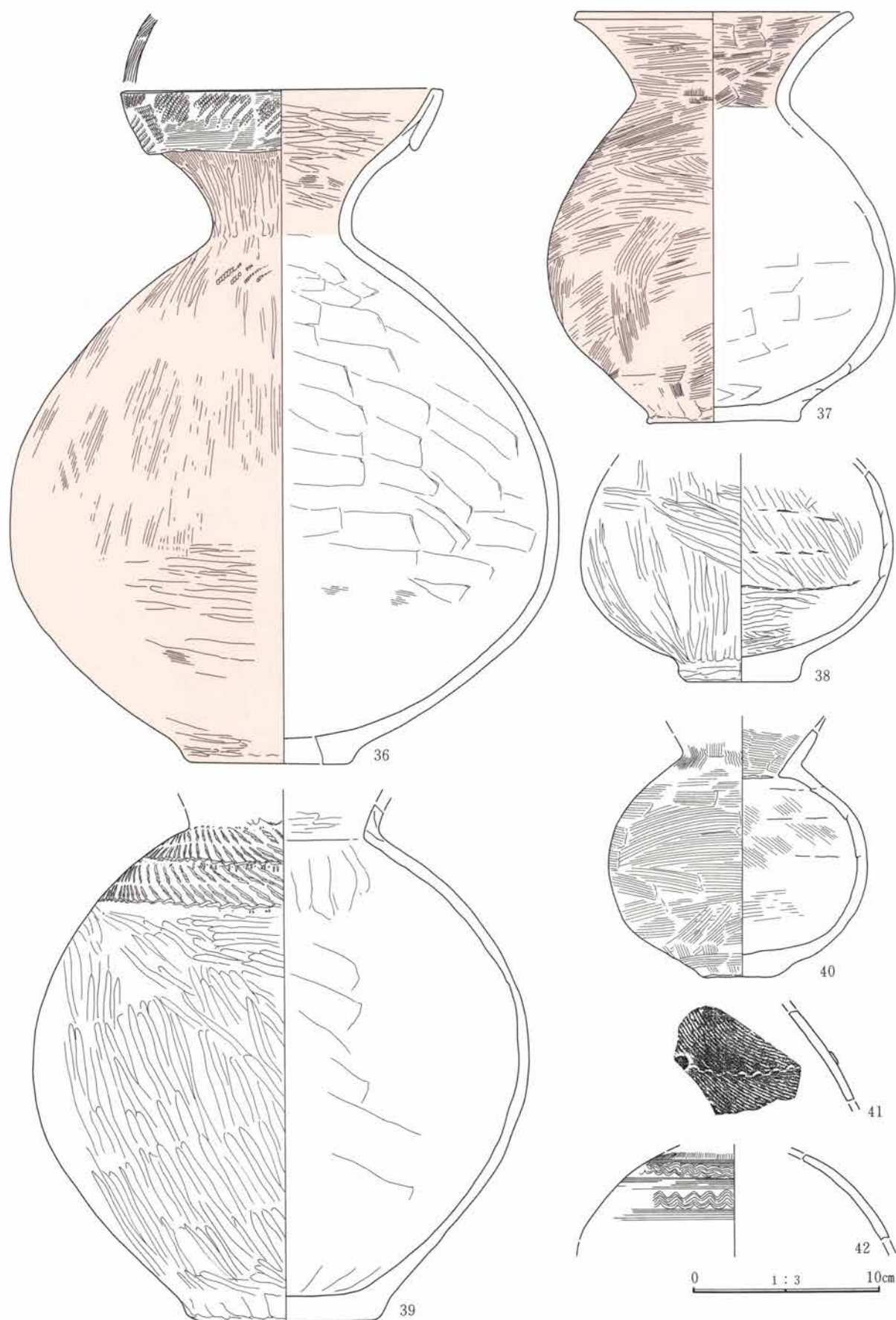
第49图 1号方形周溝墓出土遺物(2)



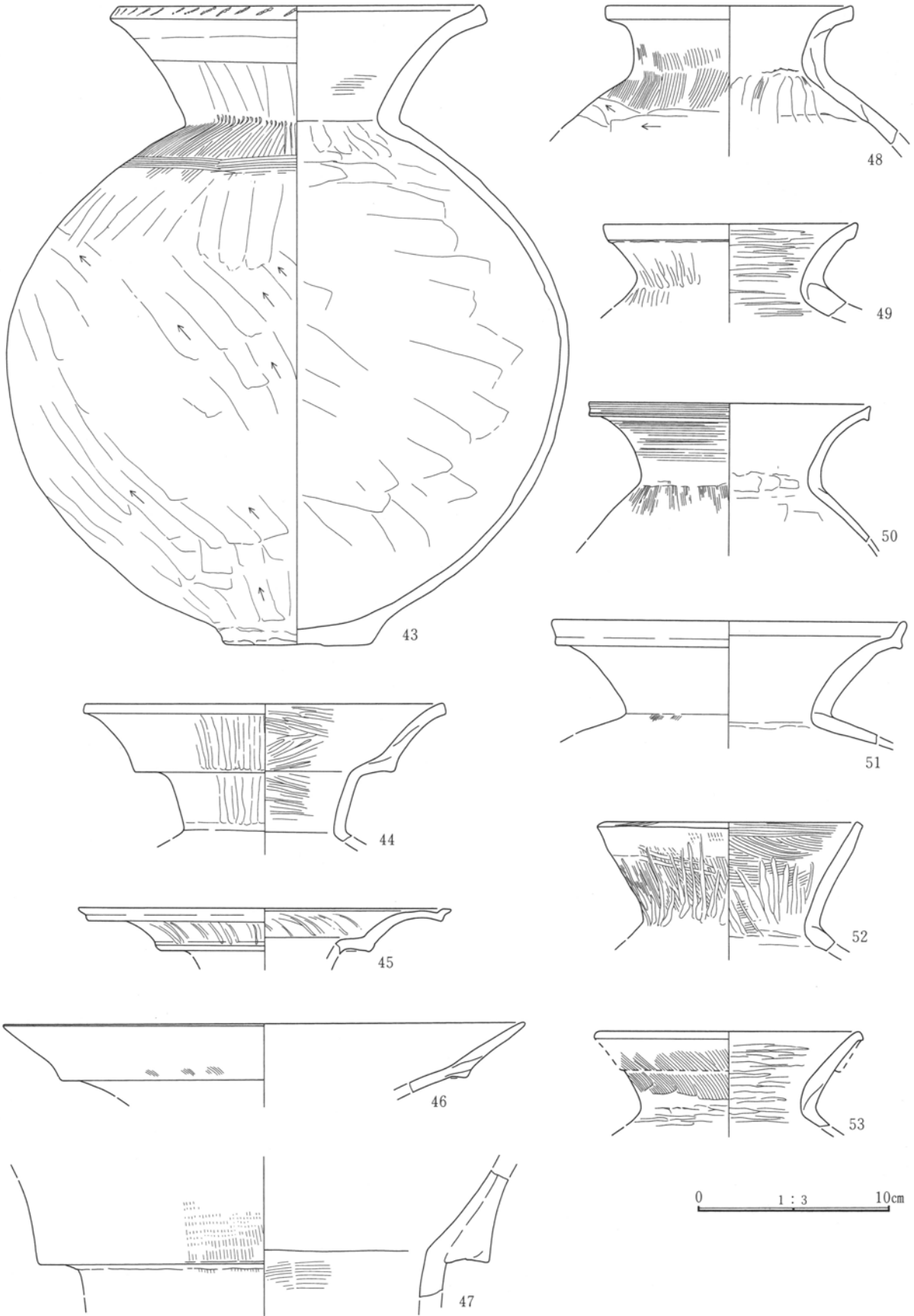
第50図 1号方形周溝墓出土遺物(3)



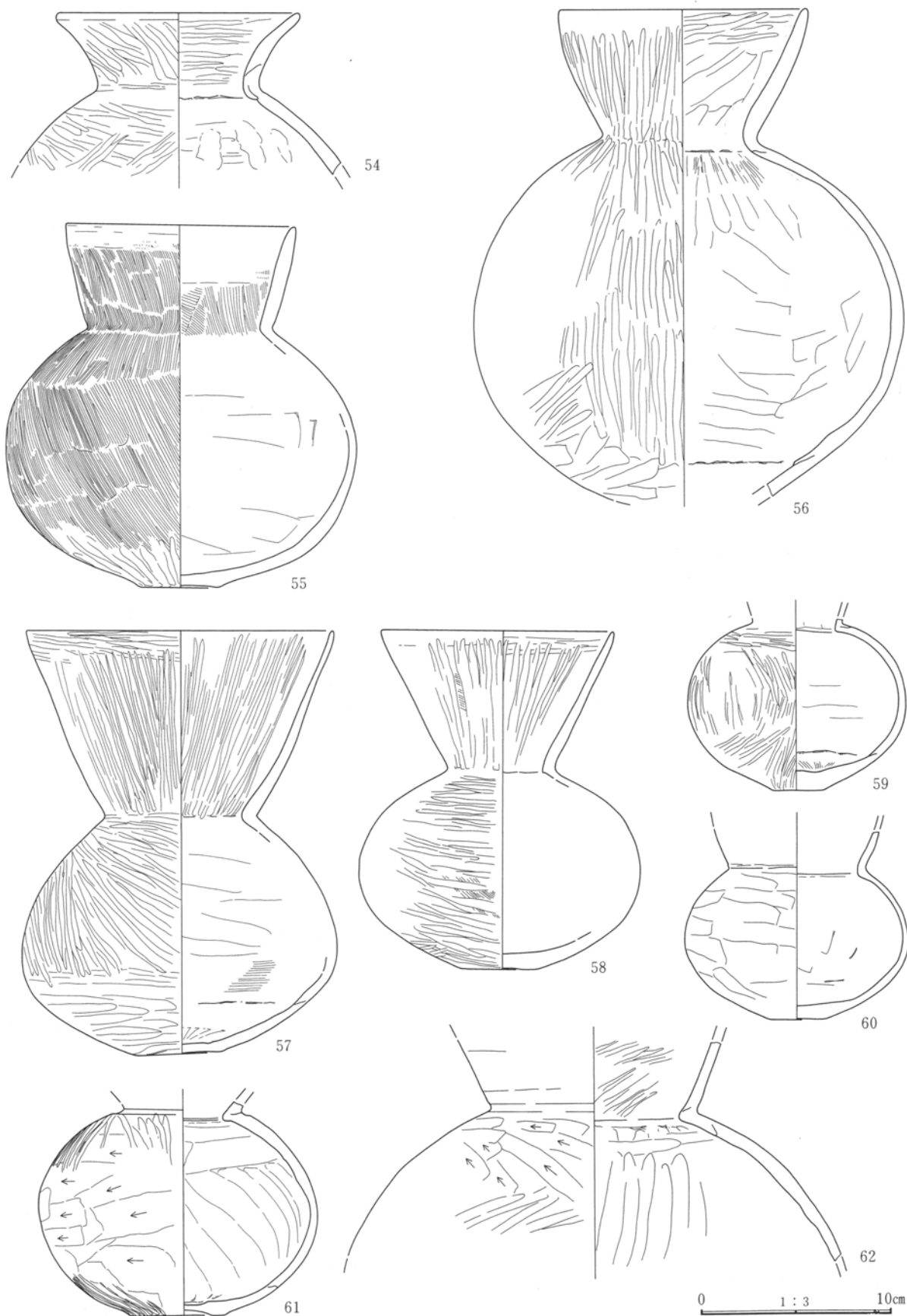
第 51 图 1 号方形周溝墓出土遺物 (4)



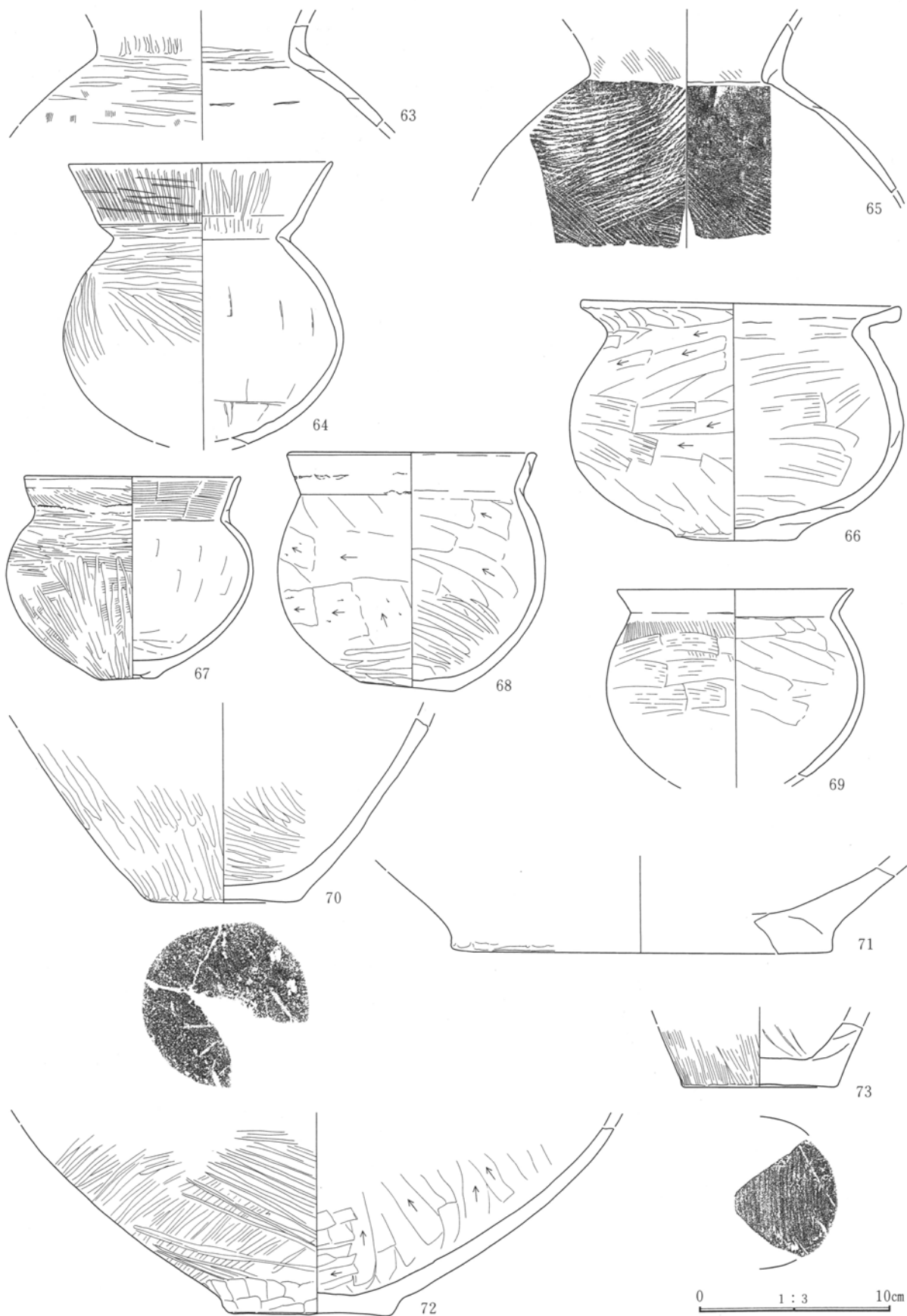
第52図 1号方形周溝墓出土遺物(5)



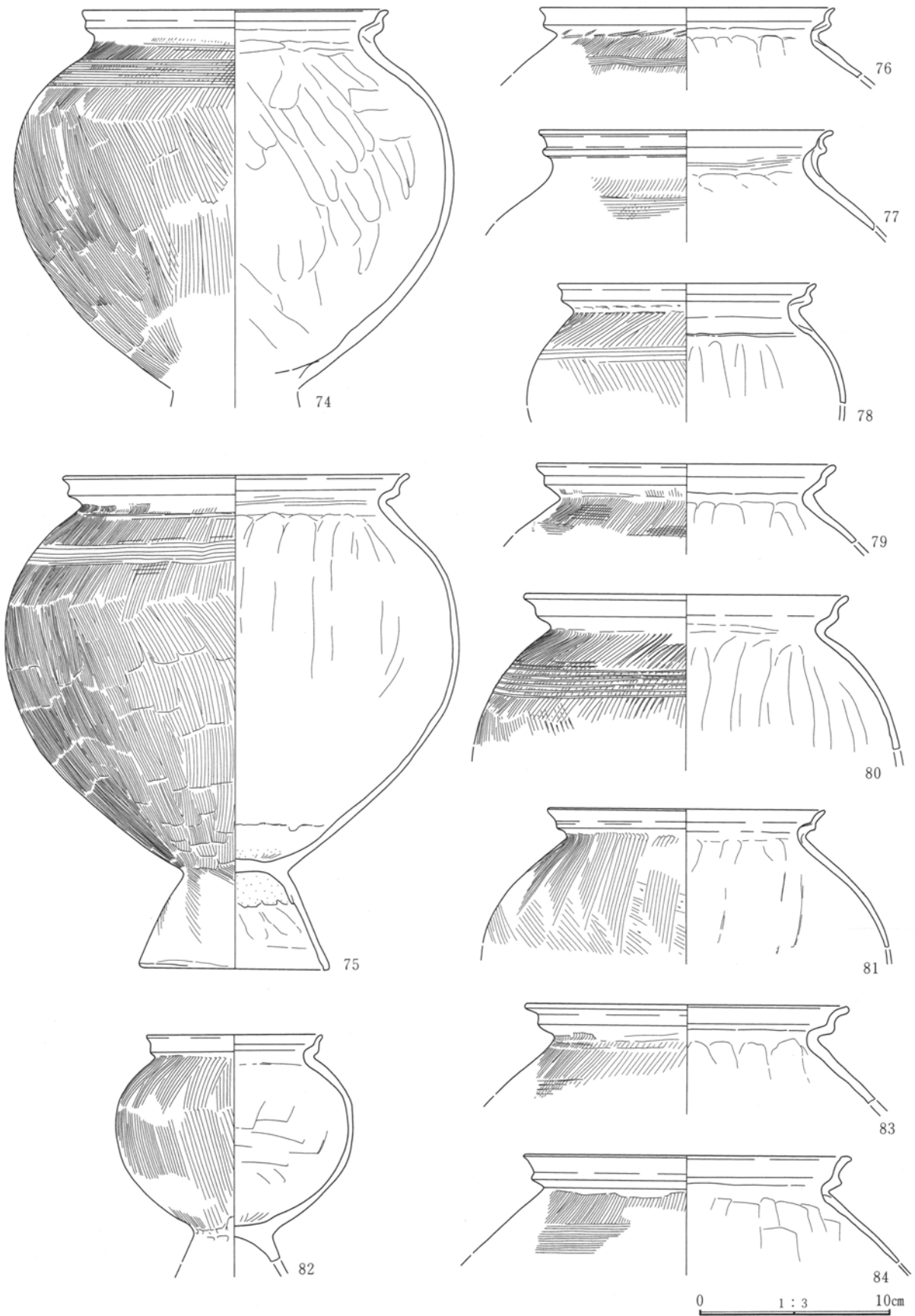
第53图 1号方形周溝墓出土遺物(6)



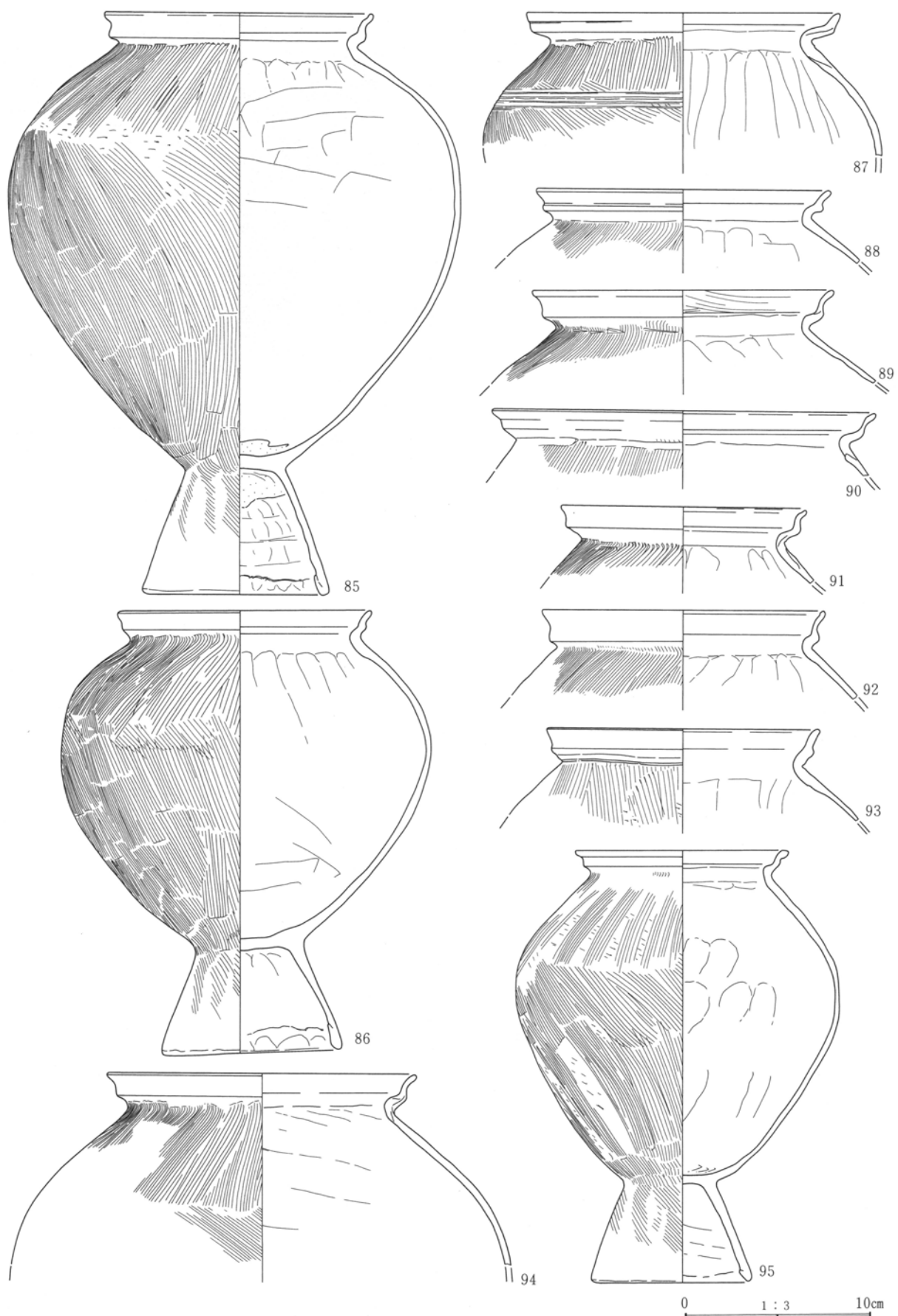
第54図 1号方形周溝墓出土遺物(7)



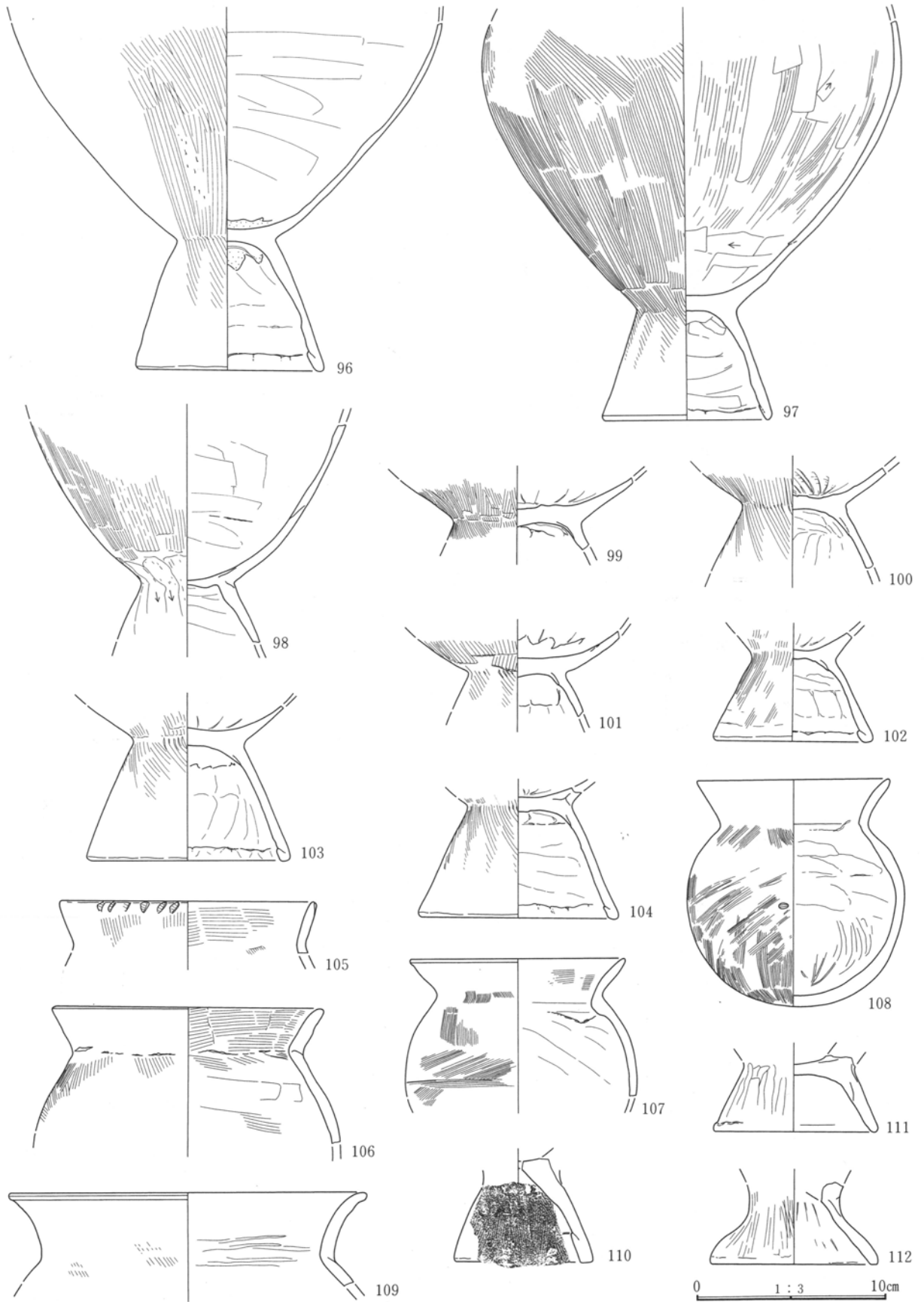
第55图 1号方形周溝墓出土遺物(8)



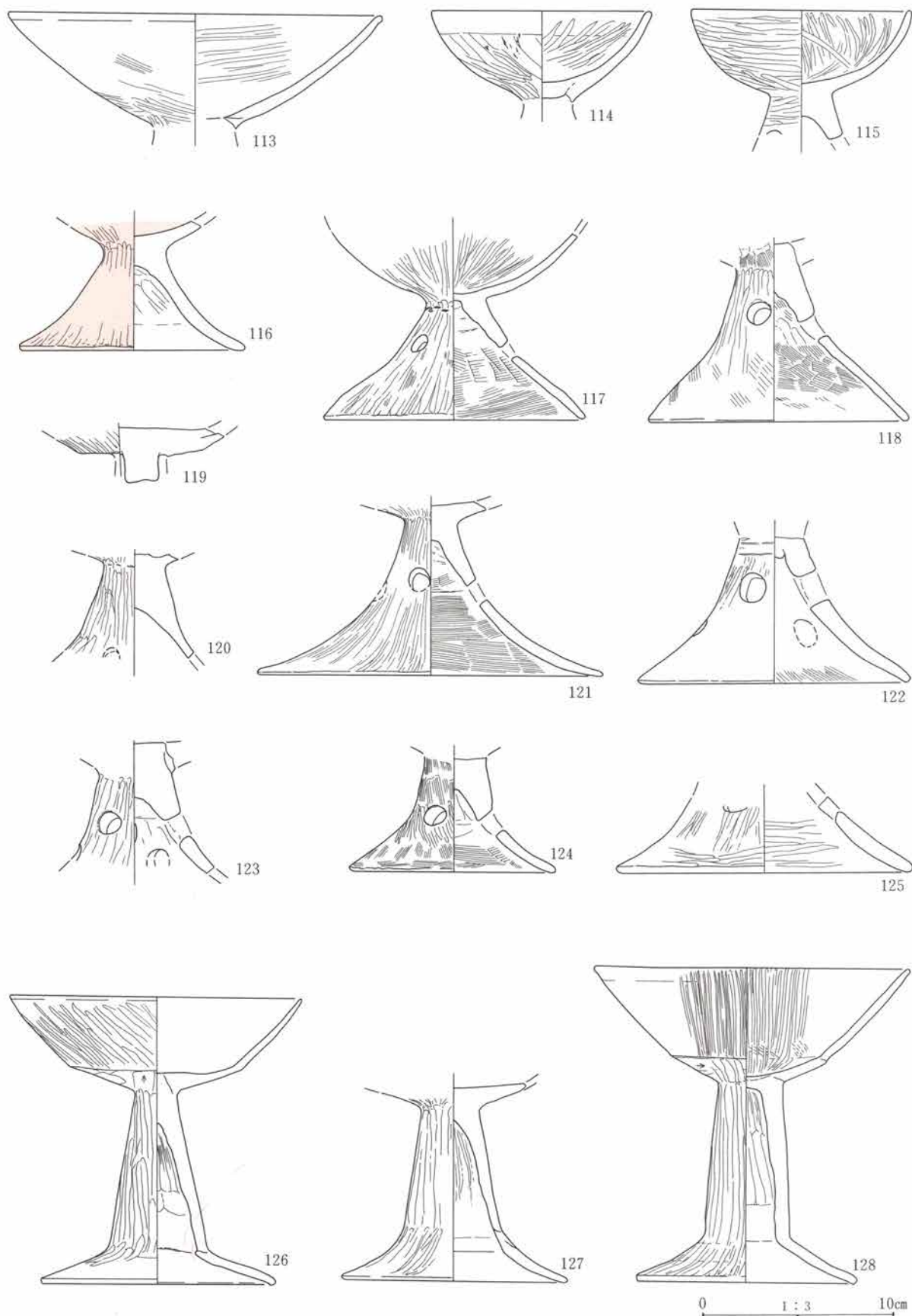
第56図 1号方形周溝墓出土遺物(9)



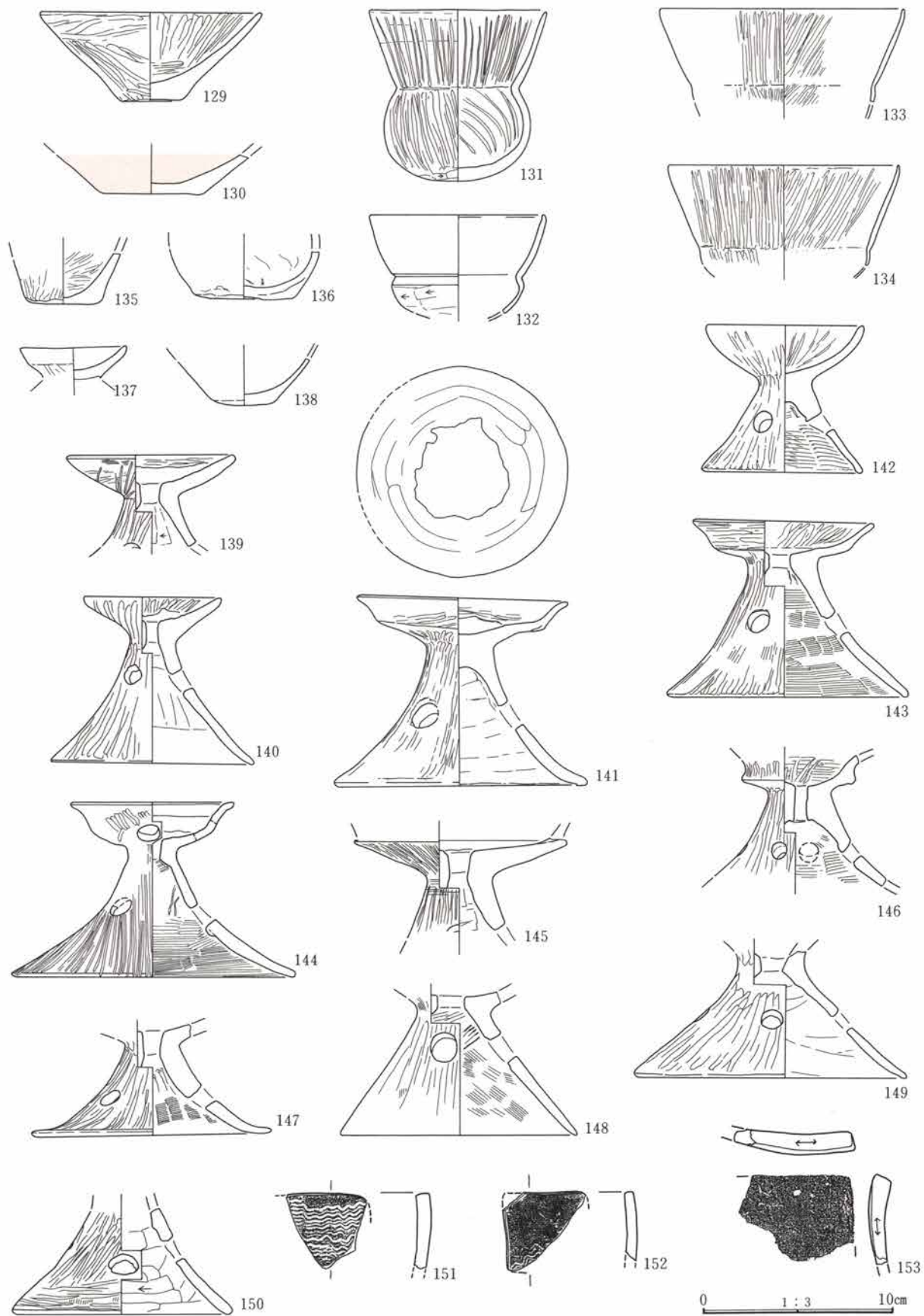
第 57 图 1 号方形周溝墓出土遺物 (10)



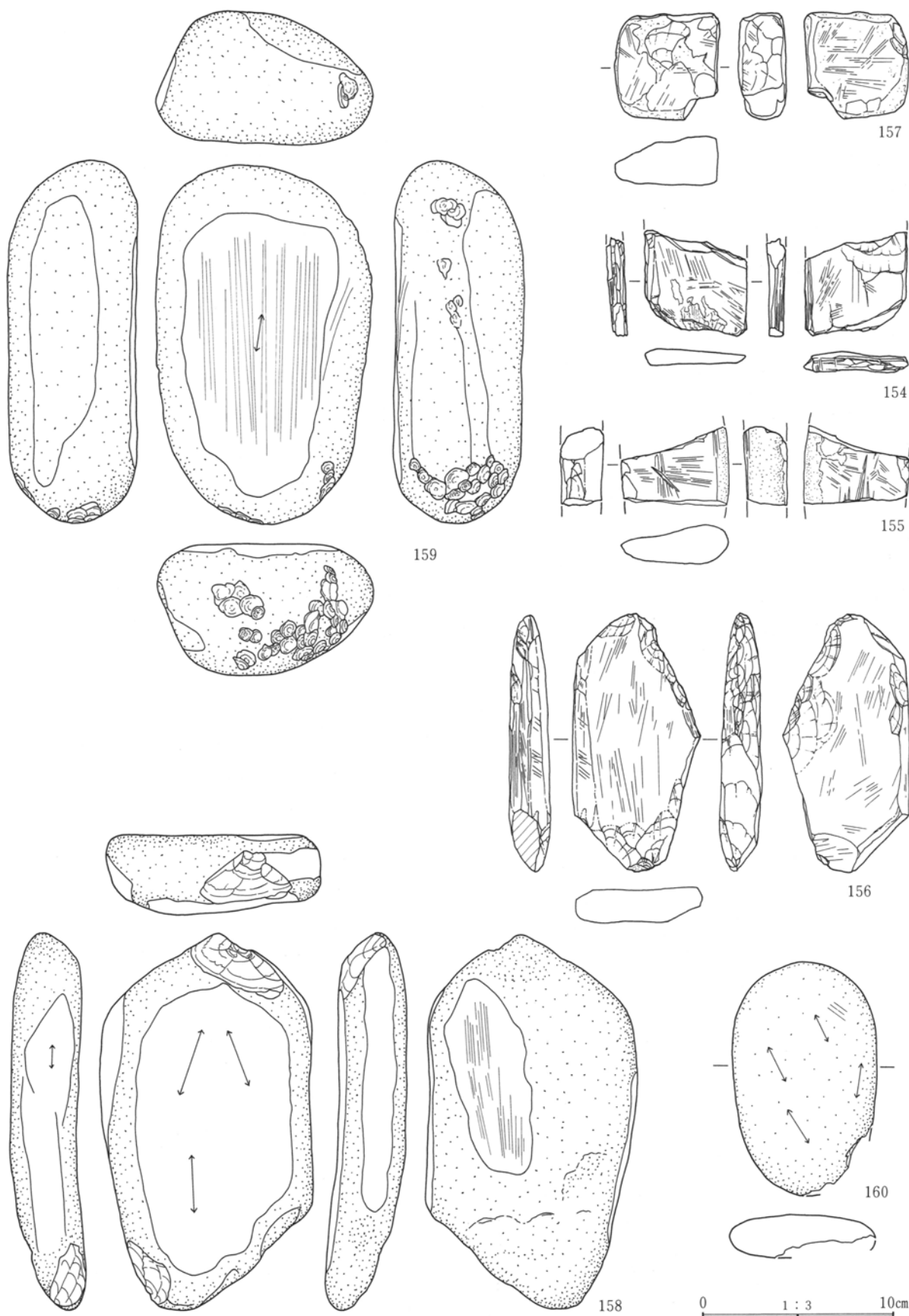
第58図 1号方形周溝墓出土遺物(11)



第59图 1号方形周溝墓出土遺物(12)



第60图 1号方形周溝墓出土遺物 (13)



第61图 1号方形周溝墓出土遺物 (14)

3 井戸

6基が検出され、中世以降の井戸と思われる。いずれも深さは1m以内と浅い。古代以前の堅穴住居が同レベルなので、中世を境に地下水位の高低差が推測される。

1号井戸跡 (第62図 PL.7)

位置 D-5グリッド。1号方形周溝墓の北西溝を切る。

形状 平面は径80cmの円形、断面は筒状で、深さ86cmを測る。

埋土 上層が灰黄色土、下層が暗灰色土。

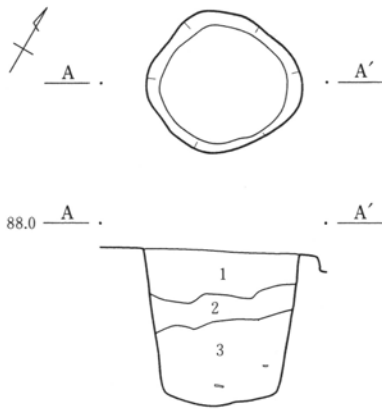
遺物 古墳前期の土器片30点が混入。

2号井戸跡 (第62図 PL.7)

位置 C-6グリッド。南半部は調査区外。

形状 平面は径120cmの円形。断面は筒状で、深さ100cmを測る。

遺物 上面から20cm下位で礫(10~20cm大)が数個出土。8世紀後半代の須恵杯、古墳前期の土器片7点が混入。



- | | |
|--------|----------------|
| 1 灰黄色土 | 砂質で、As-C黒色土を含む |
| 2 灰黄色土 | 砂質で、地山土塊を含む |
| 3 暗灰色土 | 粘性帯びた砂質土 |

1号井戸跡

0 1:40 1m

3号井戸跡 (第63図 PL.7)

位置 D-3グリッド

形状 平面は径100cmのほぼ円形。上面から20cm下で段、径80cm程の筒状。深さ60cm。

遺物 段部で10~20cm大礫が多く詰まる。

4号井戸跡 (第63図 PL.7)

位置 D-4グリッド。1号住と1号方形周溝墓北端を切る。

形状 平面は南と西にやや突出する不整形、中位以下円筒状。平面は東西160cm南北114cm、深さ90cm。

遺物 古墳前期の土器片50点が混入。

5号井戸跡 (第63図 PL.8)

位置 D-14グリッド。6・8・18号住を切る。

形状 平面は径150×180cmの楕円形。20cmの深さで掘り鉢状、以下径90cmの円筒状。深さ80cmを測る。

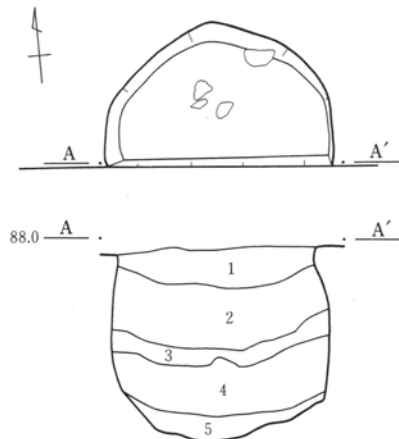
遺物 古墳前期の土器小片18点が混入。

6号井戸跡 (第63図 PL.8)

位置 D-19グリッド

形状 平面径90cmの円形、断面筒状。深さ85cm。

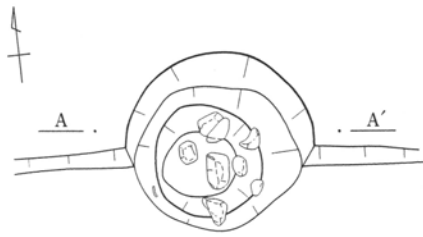
遺物 古墳前期の土器片7点が混入。



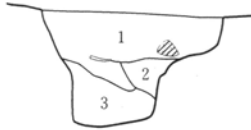
- | | |
|---------|---------------|
| 1 灰褐色土 | 砂質土にパミス、焼土粒含む |
| 2 灰色土 | 砂質土に地山土塊を含む |
| 3 暗灰色土 | シルト質 |
| 4 暗灰色土 | 砂質 |
| 5 暗黄褐色土 | 地山の崩落堆積土 |

2号井戸跡

第62図 1号・2号井戸跡

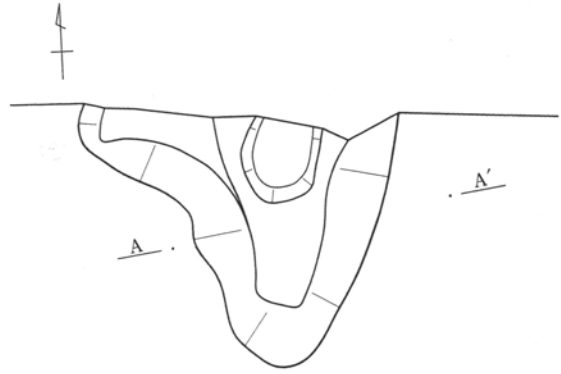


88.0 A . . . A'



- 1 灰黄色土 砂質土に地山土塊を含む
- 2 暗灰色土 シルト質で地山土粒含む
- 3 暗灰色土 砂質

3号井戸跡

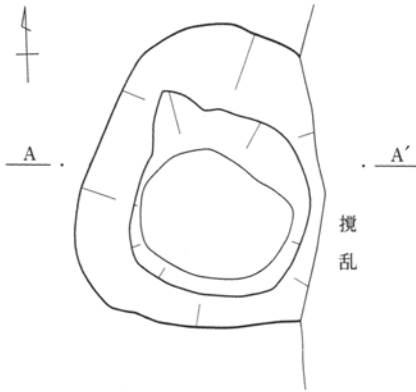


87.8 A . . . A'

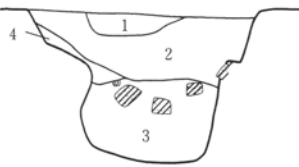


- 1 黒褐色土 やや粘性帯びる
- 2 黒褐色土 シルト質
- 3 褐色土 シルト質でAs-Cを含む
- 4 黒色粘質土
- 5 灰黄色土 地山崩落土に黒色土粒含む
- 6 灰黄色土 粘性帯びる地山土

4号井戸跡

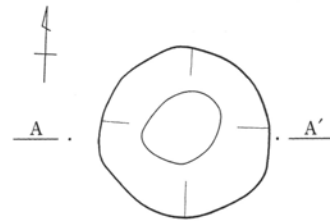


88.1 A . . . A'

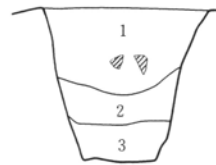


- 1 灰褐色土 砂質でパミス、焼土含む
- 2 灰赤色土 シルト質
- 3 黒色粘質土
- 4 暗灰色土 シルト質で粘性強い

5号井戸跡



88.3 A . . . A'



- 1 灰黄色土 砂質、As-C混黒色土塊含む
- 2 灰黄色土 地山土塊含む
- 3 暗灰色土 粘性帯びた地山土

6号井戸跡



0 1 : 40 1m

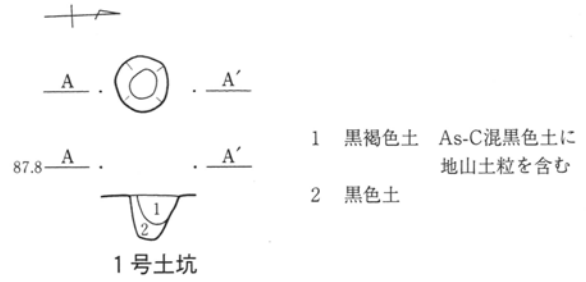
第63図 3号・4号・5号・6号井戸跡

4 土坑

6基検出された。1号・6号土坑は古墳時代前期のものと思われる。その他は古墳後期以降の土坑である。

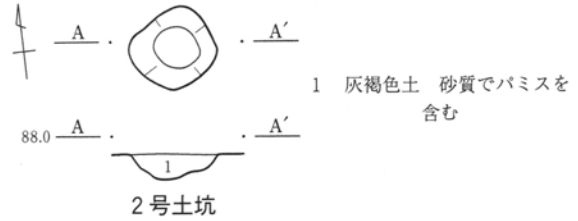
1号土坑 (第64図 PL.8)

位置 D-2グリッド
形状 径30cmの円形を呈する。深さ30cmを測る。
埋土 上層は黒褐色、下層は黒色土。
遺物 埴の小片2点。
所見 古墳前期の土坑か。



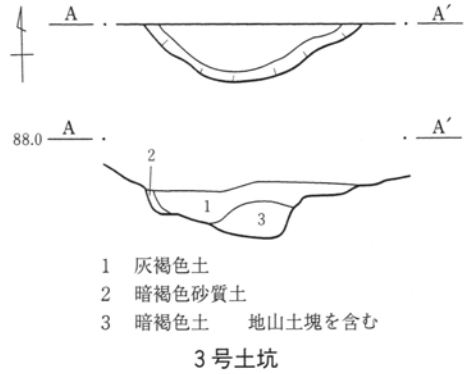
2号土坑 (第64図 PL.8)

位置 C-6グリッド
形状 径20cmの円形を呈する。深さ10cmを測る。
埋土 灰褐色の砂質土。
遺物 古墳前期の土器片2点が混入。



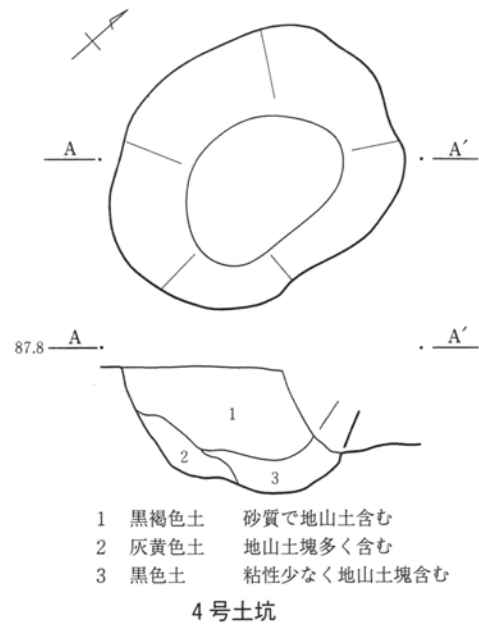
3号土坑 (第64図 PL.8)

位置 E-5グリッド
形状 北側半分は調査区外で不明。底面凹凸著しい。長径120cm・深さ30cmを測る。
埋土 上層は灰褐色、下層は暗褐色土。
遺物 古墳前期の土器片が混入。



4号土坑 (第64図 PL.8)

位置 C-3グリッド
重複 1号方形周溝墓方台部東隅を切っている。
形状 径160×140cmの楕円形を呈する。深さ60cmを測る。
埋土 暗褐色土の泥流堆積物。
遺物 なし。
時期 埋土の特徴から、古墳時代後期～平安時代と思われる



0 1:40 1m

第64図 1号・2号・3号・4号土坑

5号土坑 (第65図 PL.8)

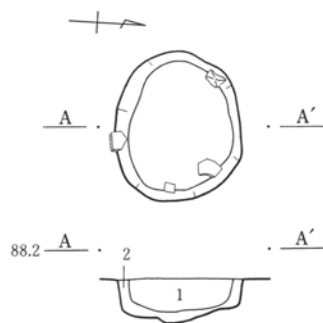
位置 C-12グリッド

形 状 径80×64cmの楕円形を呈する。深さ20cmを測る。断面は箱形で、底面はほとんど平坦。

埋 土 泥流再堆積物と思われるシルト質灰褐色土が堆積する。

遺 物 古墳前期の土器片が数片混入。

所 見 埋土の特徴から、古墳時代後期～平安時代のものであると思われる。



- 1 灰褐色土 砂質土に地山土粒含む
- 2 褐色シルト 地山と思われる

5号土坑

6号土坑 (第65・66図 PL.8)

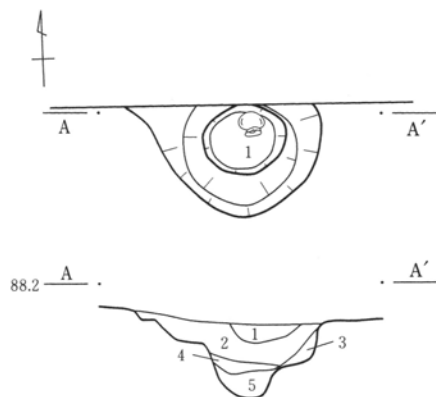
位 置 E-9グリッド

形 状 径75cmの円形を呈する。断面は2段構造で、中央部は円筒状に深く、深さ40cmを測る。

埋 土 上層は暗褐色、下層は灰褐色土で、いずれも浅間Cテフラ (As-C) を含む。

遺 物 直口壺 (略完) 1個体が底から10cm上で出土。ほかにS字甕片等5点が出土。

所 見 形状、出土遺物、埋土の特徴から、古墳前期に属し、近接して住居跡が検出されているので、削平された住居跡の貯蔵穴の可能性はある。

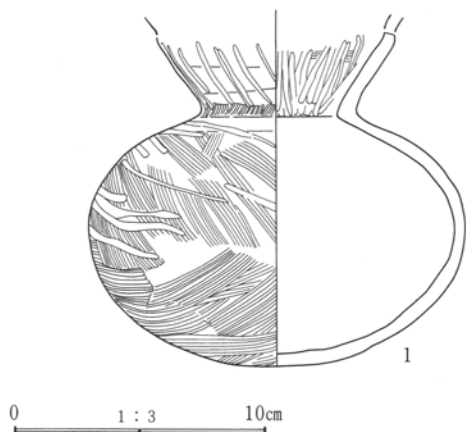


- 1 黒褐色土 粘性帯びAs-Cを少量含む
- 2 暗褐色土 地山土粒多い
- 3 灰黄褐色土 地山土粒多い
- 4 灰黄褐色土 地山土塊多い
- 5 灰褐色砂質土

6号土坑

0 1:40 1m

第65図 5号・6号土坑



第66図 6号土坑出土遺物

5 溝 跡

1号溝 (第67図 PL.9)

位 置 C・D-7グリッド

形 状 ほぼ南北に走っており、調査区外に延びている。検出された部分の規模は、長さ8.36m、最大幅0.8m、深さ20~30cmを測る。断面形は蒲鉾形。

埋 土 大きくは二分され、上層が灰褐色シルト質土、下層が黒褐色シルトで、洪水堆積物と思われる。

遺 物 青磁の破片が2点出土。その他は古墳時代前期の土器片が混入している。

2号溝 方形周溝墓の溝と判明したため欠番

3号溝 (第68図 PL.9)

位 置 C・D・E-17・18グリッド

重 複 14号住居跡を切る。

形 状 ほぼ南北に走っており、調査区外に延びる。規模は、長さ8.40m、最大幅1.80mを測る。南側が幅広く、北側ほど幅狭くなり、北端で幅1m、深さは25~35cmを測る。断面形は台形に近い。南寄り溝中から3基のピットが検出された。いずれも径20cm程で深さが10cm弱。柱穴等の可能性が考えられるが、溝に伴うとの確証は得られなかった。底面に流水痕が見られる。

埋 土 洪水堆積物と思われるシルト質土や砂層で埋没する。

遺 物 片岩製棒状礫と近世かわらけが出土。

4号溝 (第68図)

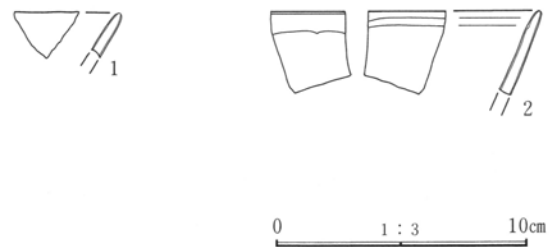
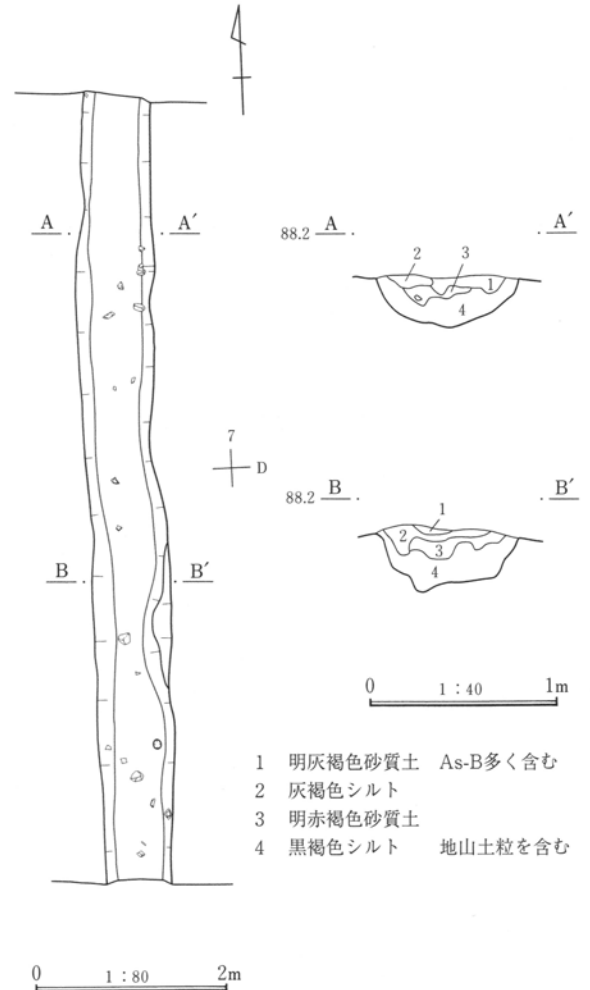
位 置 C・D-15~17グリッド

形 状 東西方向に7m程、L字状に折れて南に走る。最大幅1.0m、深さは屈曲部分で35~40cmを測る。断面形は蒲鉾状。底には水流痕あり。

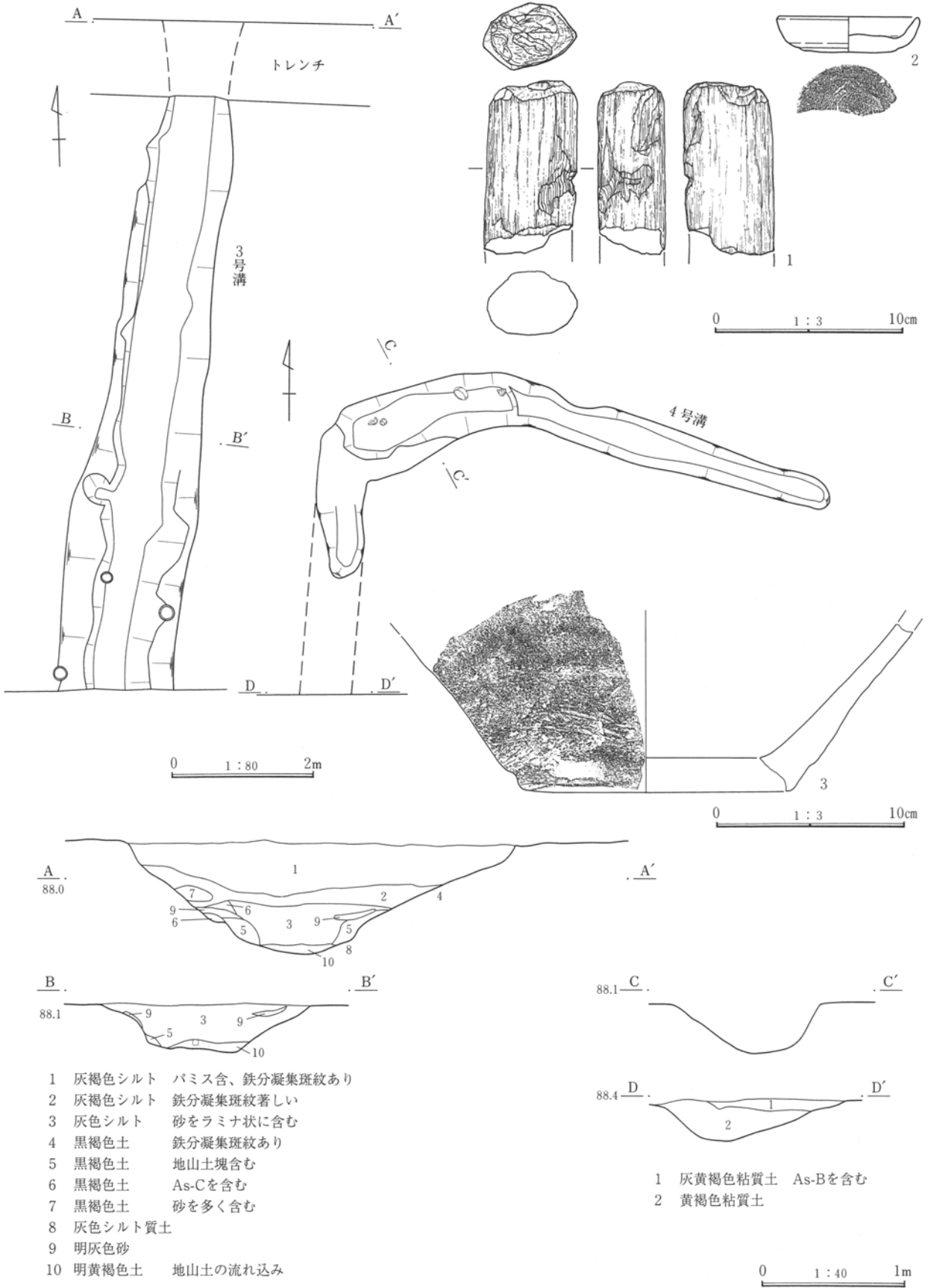
埋 土 シルト質土で、3号溝埋土と近似する。

遺 物 軟質陶器鉢片が出土している。その他に古墳時代前期の土器片が混入。

所 見 3号溝と4号溝が並行することから、南北道路の側溝の可能性も考え得る。その場合には、東方に折れた部分は分岐道と想定できようか。



第67図 1号溝及び出土遺物



第 68 図 3号・4号溝及び出土遺物

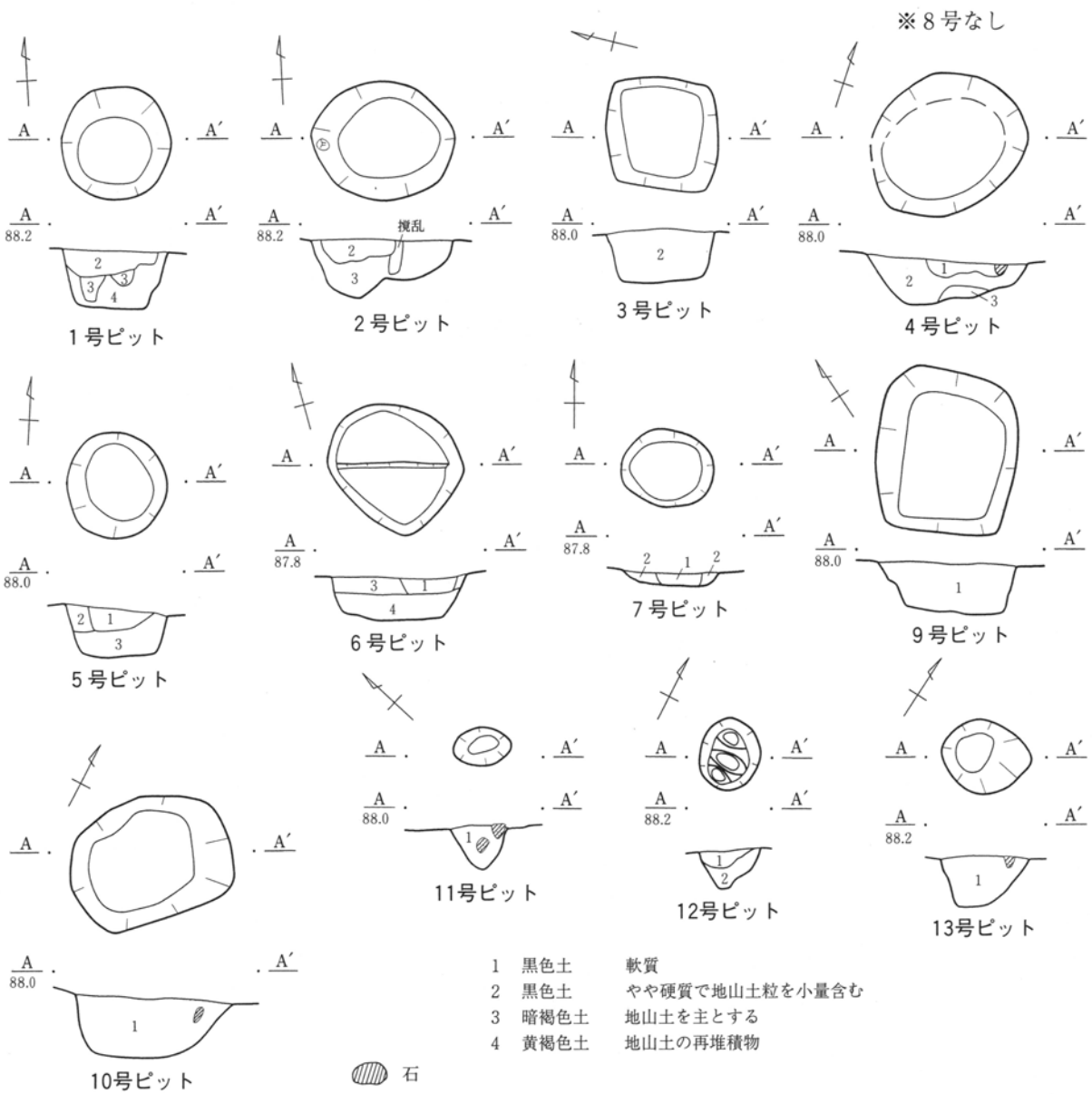
6 ピット

調査区西側に12基検出された。中世以前と考えられる。

表2 ピット計測表

(単位: cm)

番号	位置	形状	規模	番号	位置	形状	規模
1	E-22	円形	68×68×32	7	E-20	楕円形	54×44×11
2	D-22	楕円形	84×70×32	9	E-21	方形	92×82×30
3	D-22	方形	66×66×32	10	D-21	方形	98×72×35
4	D-22	楕円形	92×80×28	11	D-20	楕円形	34×22×18
5	D-22	円形	60×60×28	12	D-20	円形	42×38×24
6	E-21	円形	70×70×24	13	D-20	円形	50×46×25



第69図 1～13号ピット

7 火葬跡

1号火葬跡 (第70図 写真1~3 PL.9)

位置 D-14グリッド

重複 6号住居跡内で検出。

形状 西向きの凸字形を呈し、西側が焚き口になっている。規模は長径120cm・短径60cm・凸部90cmを測る。全体に焼土、炭化材、人骨が散在していた。確認面からの掘り込みは5~10cmだが、中央付近は

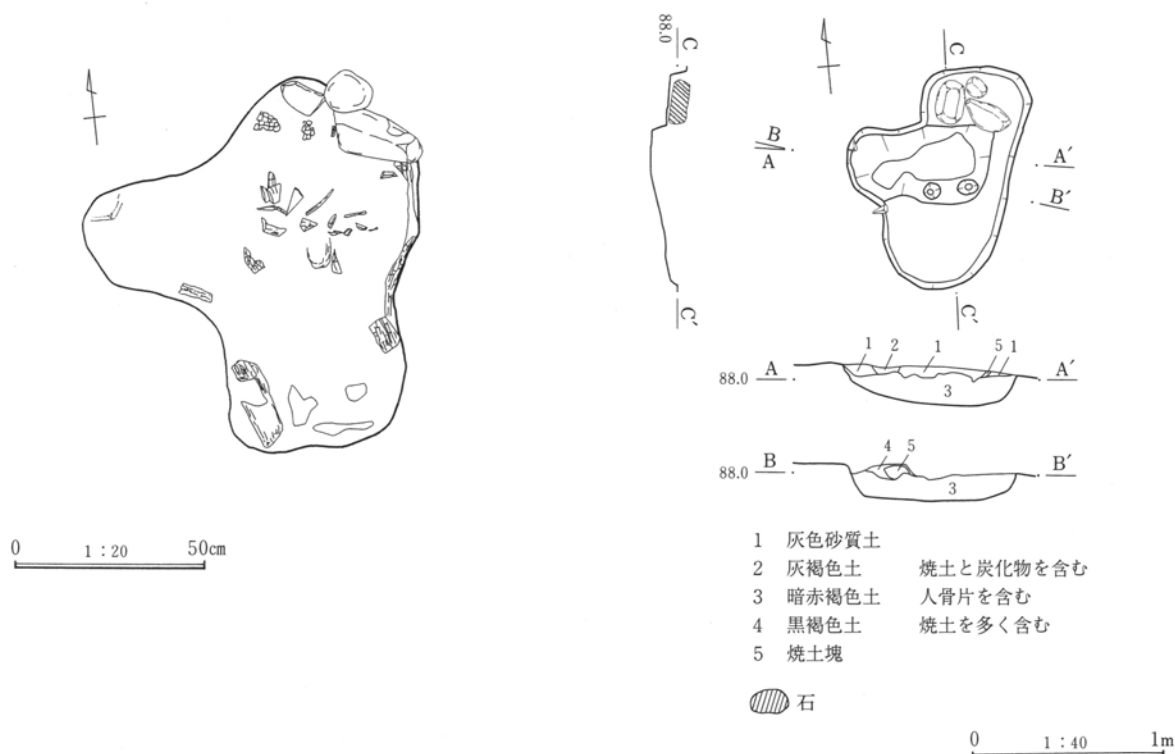
15cmと深くなっている。北壁際に10~20cm大の石が3個底面直上に置かれていた。

埋土 大きくは2層で、上層が灰色土、下層が赤暗色土で、焼土・炭化材・人骨が混ざる。

方位 N-20° - E

遺物 人骨・歯が出土したが、火葬跡に伴う遺物はなし。古墳前期の土器片が10点混入していた。人骨については第5章に詳述。

所見 中世の火葬跡と考えられる。



第70図 1号火葬跡

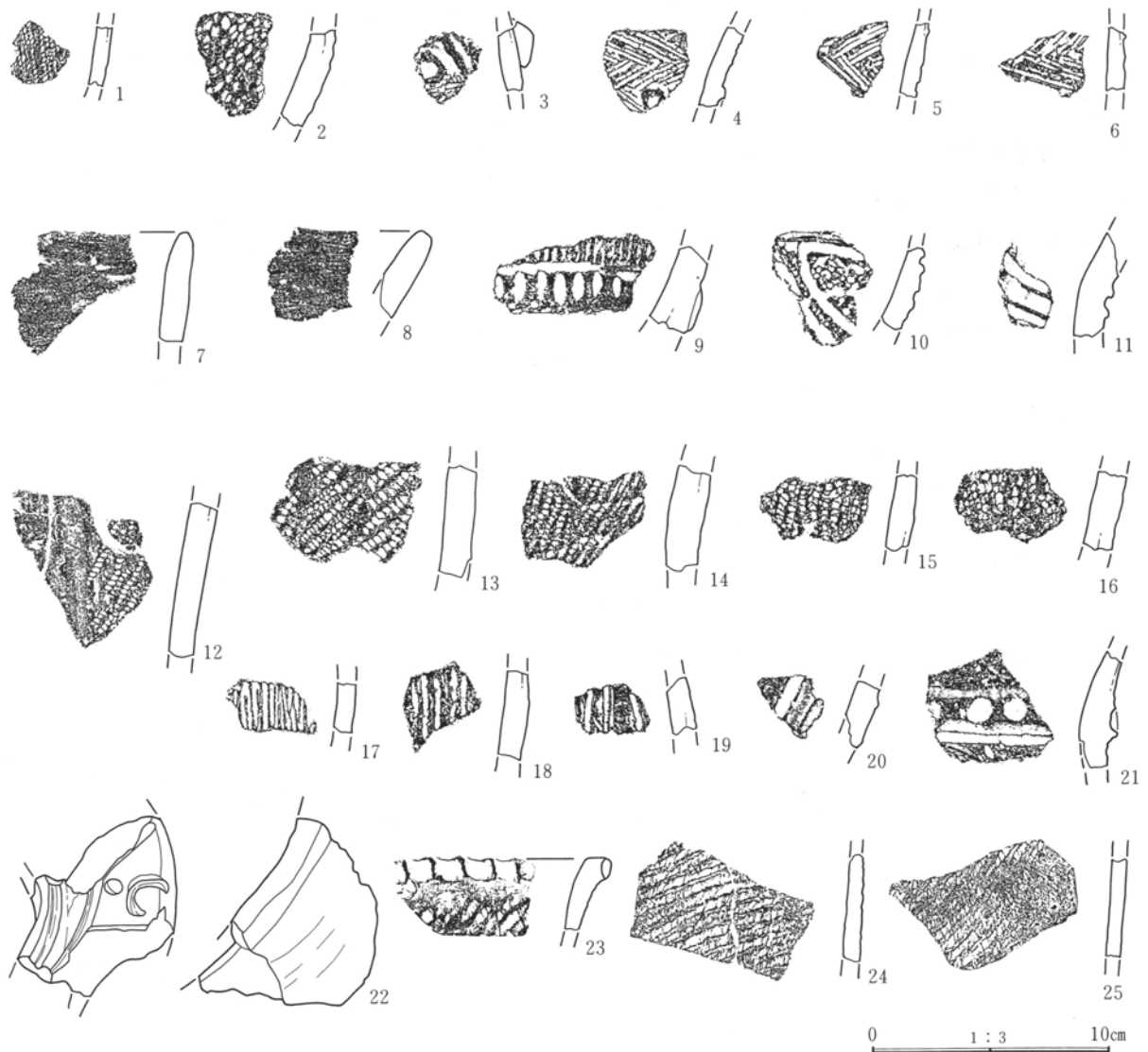
8 遺構外出土遺物 (第71~75図)

遺構外出土遺物は、住居跡や土坑、溝などの遺構以外の包含層出土品、遺構出土であるが明らかに帰属する時期の異なるもの、出土地点不明のものを一括して取り扱う。ここでは、縄文土器、弥生・古墳時代遺構の土器、石器に分割して図示掲載した。

個々の遺物に関する詳細は第4章出土遺物観察表に記してあるので、ここでは各々の遺物についての概要を記すこととする。

縄文土器 (第71図)

図示可能なものを25点掲げたが、いずれも小破片である。時期は、早期の1・2が最古で、加曾利B式の23~25が最も新しい。前期の諸磯c (3~6)、中期の加曾利E I~III (10~12)、後期では堀之内1 (21~22) と、数量の少ないわりには早期から後期まで通して土器が出土している。出土分布は調査区全域 (東西約100m) に散在する状況みせるが、諸磯cは3・10号住居跡埋土から出土しているの



第71図 遺構外出土遺物（縄文土器）

C-10~12グリッド付近に何らかの遺構が存在した可能性があろう。加曽利Bの3点（23~25）は同一個体と思われ、14号住居跡付近に帰属する遺構が存在したものであろうか。

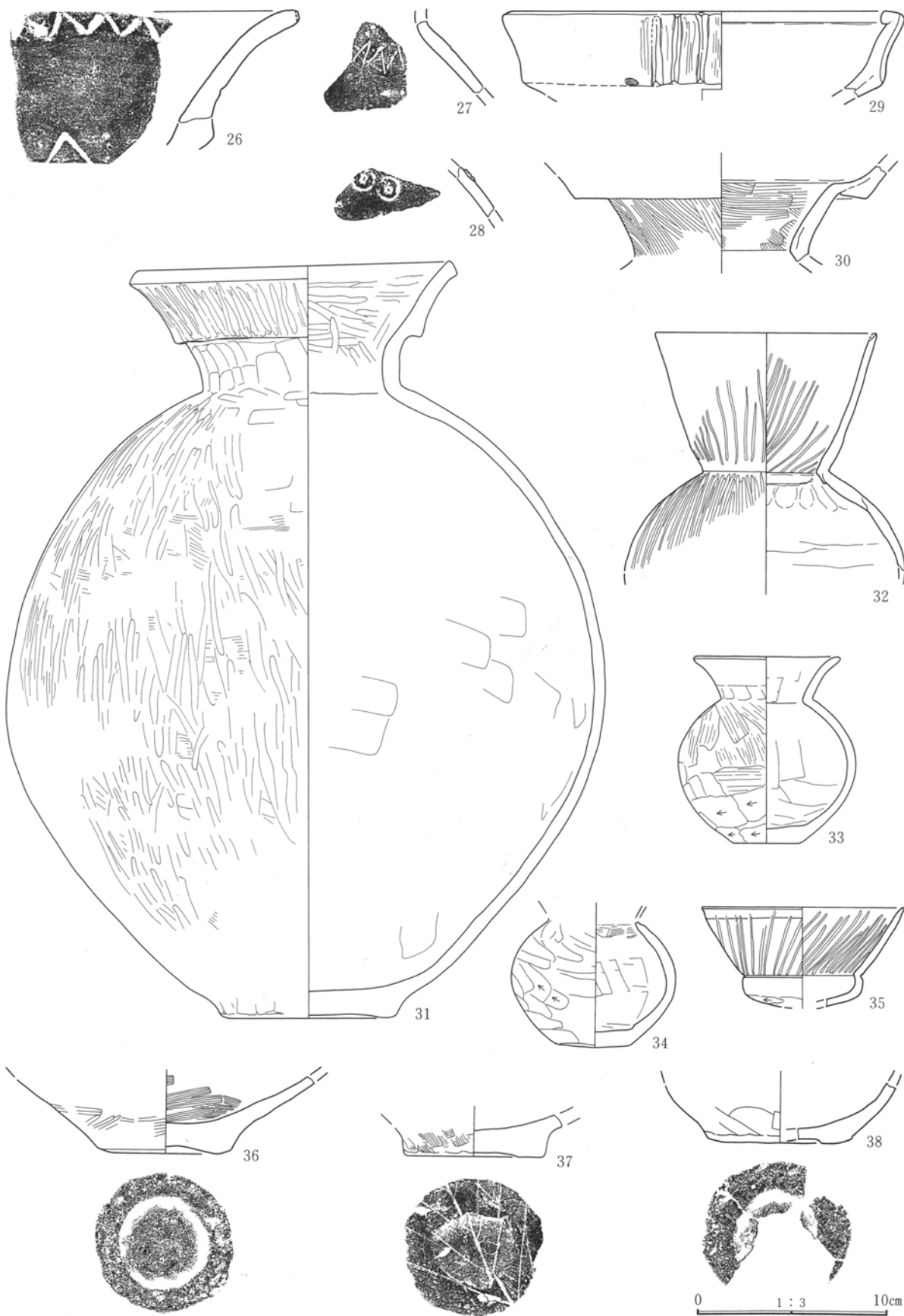
石器（第75図）

定型の縄文時代の石器としては打製石斧1点（63）のみである。磨石や敲石の類は4号住居跡-5、5号住居跡-9、10号住居跡-94・95、1号方形周溝墓-158~160のように、帰属時期が確定できないために、各々の遺構出土遺物に分類した。土器と同様に少数散在する分布状況がうかがえる。

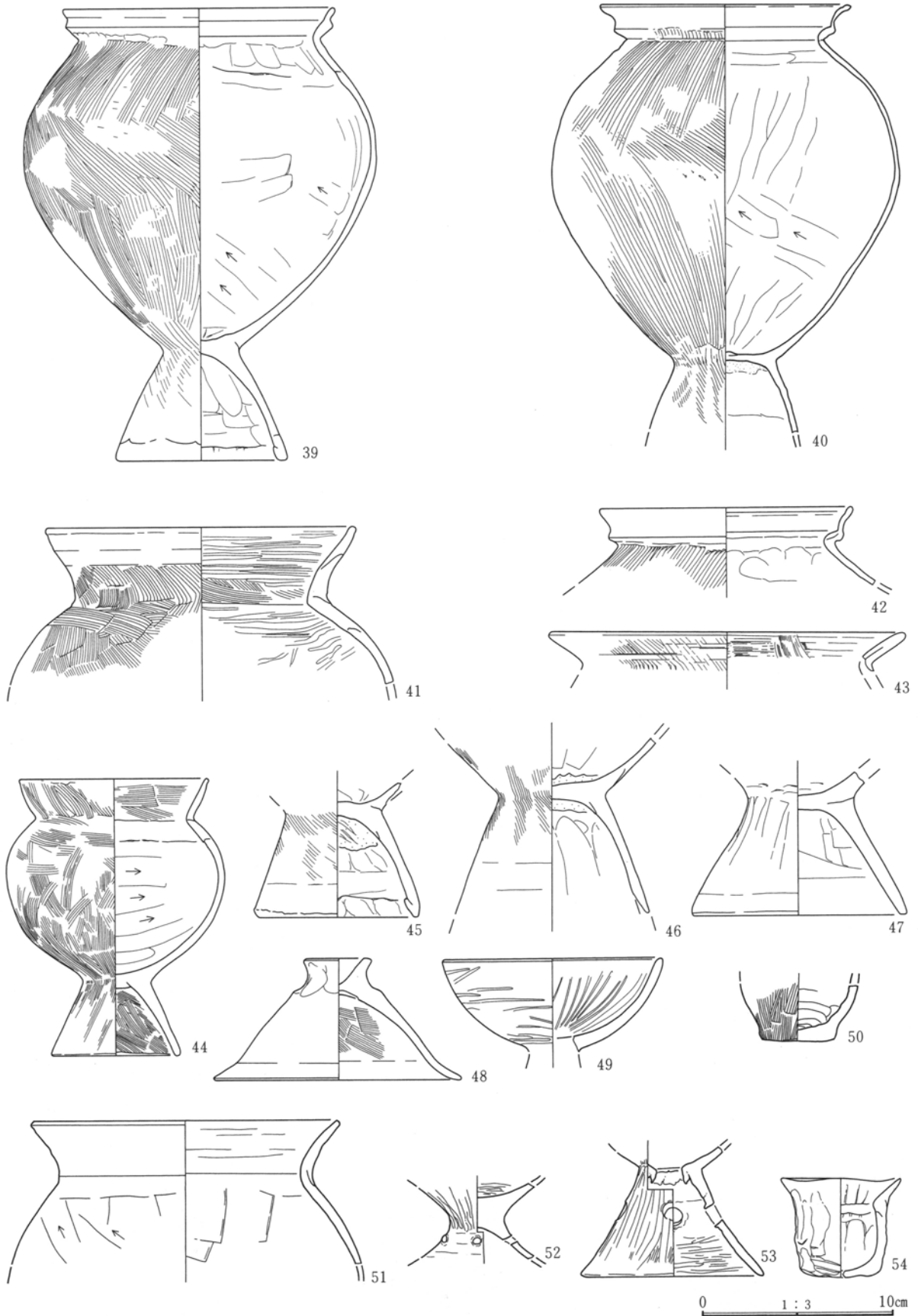
弥生・古墳時代以降の土器（第72~74図）

東関東系中期後半以降の弥生土器と思われる59、6世紀代の甕60、須恵器蓋62の3点を除いて、ほとんどが古墳前期に属する。従って、本来は調査区に散在する竪穴住居跡や、土坑、方形周溝墓に伴うか、この集落内で廃棄された遺物群と思われる。ただし、31の大型壺は1号方形周溝墓の東端で出土しており、同墓の祭祀との関連性がうかがえる。

図示できた土器を見る限り、住居跡と方形周溝墓から出土した土器群と時期・型式にほぼ包括される。なかでも畿内系と思われる壺片28、大廓式系の29が



第72図 遺構外出土遺物（古墳時代土師器1）



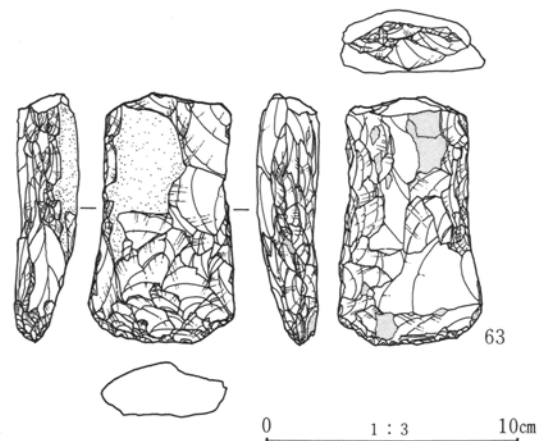
第73図 遺構外出土遺物（古墳時代土師器2）



第74図 遺構外出土遺物（古墳時代・古代土器）

外来系として注目される。

60の甕は古墳前期の7号住居跡から出土したと記録されているが、6世紀代と想定される唯一の遺構である17号住居跡に帰属する可能性もある。



第75図 遺構外出土石器

第4章 出土遺物観察表

ここで取り扱う出土遺物は、前掲の挿図に対応するものである。「出土位置」に関しては、住居の場合は床面、溝・土坑に関しては底面からの高さをcm単位の数値で示した。この場合、「+」は上、「-」は下に位置する事を示す。

1号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第9図-1 PL14	壺	+1	口縁部	口 19.2 底 - 高 -	①片岩・石英の細礫～粗砂多い ②橙	口唇つまみナデ。口縁内外面とも横ナデ。	
第9図-2 PL14	高杯	+0.5～3	杯部(一部欠)	口 17.8 脚 - 高 -	①チャート・石英細礫、輝石・バミスの粗砂多い②にぶい赤褐	口唇つまみナデ。杯部横ナデ後、外面は縦ヘラナデ、内面は斜位放射状ヘラナデ。	
第9図-3 PL14	高杯	+3	脚部(一部欠)	口 - 脚径(10.0) 高 -	①チャート・石英・輝石・白岩片 ②赤褐	脚柱の外面は縦ヘラナデ、内面は絞り目残し下位ヘラケズリ、裾部は内外面横ナデ。	

2号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第10図-1 PL14	小型甕	+1.5	1/3	口 12.4 底 6.0 高 16.9	①赤色粒・石英・チャート・輝石の粗砂多い ②にぶい黄橙	口唇部は弱い面取り。体部内外面ともヘラミガキ。口縁～頸部に5段の櫛描波状文(3歯単位)を重ねる。	樽式
第10図-2	小型壺	埋土	肩部片	口 - 底 - 高 -	①細砂を含む ②にぶい黄褐	沈線のみ鋸歯文、無文部は粗いミガキ。内面はナデ。	樽式系
第10図-3	壺	埋土	胴上部片	口 - 底 - 高 -	①輝石の細砂多い ②灰白	横沈線の下位に櫛描(7歯/13mm 2mmスパン)による連弧文か鋸歯文を描く。	樽式
第10図-4	壺	埋土	肩部片	口 - 底 - 高 -	①キメ細かく微細砂含む ②橙	櫛状具による列点文と横線を交互施文。	東海系
第10図-5	壺or甕	埋土	肩部片	口 - 底 - 高 -	①輝石の粗～細砂多い ②暗褐	肩部に斜縄文(LR)を4段以上横位施文。内面は横ミガキ。	吉ヶ谷・赤井戸 外面に煤付着
第10図-6	(甕)	埋土	肩部片	口 - 底 - 高 -	①輝石・石英・白色岩片の細砂多い ②暗褐	肩部に斜縄文(LR)を4段以上横位施文。内面は横ミガキ。	吉ヶ谷・赤井戸
第10図-7	蓋	埋土	破片	口 - 底 - 高 -	①チャート・白岩片の粗砂 ②にぶい黄褐	つまみ部内面は丁寧なナデ、天井内外面は粗いミガキ、天井内面は吸炭。	
第10図-8	ミニチュア (鉢)	埋土	底部片	口 - 底 (3.4) 高 -	①石英・チャート・白岩片の細砂を少量含む ②橙	全体にナデ。体部外面に細かいハケメを残す。	
第10図-9 PL14	小壺	+1	口縁一部欠	口 9.0 底 4.2 高 8.4	①石英・チャート・白岩片・バミス・輝石の粗砂多い②橙	口縁外面は板小口ナデ。体部外面は縦ハケメ後斜～縦位のミガキ。内面は丁寧な横位ミガキ。口縁対称に2孔一対の小孔。	在来弥生系
第10図-10	小型甕	埋土	口縁～体部 1/4	口 (9.1) 底 - 高 -	①チャート・石英・白岩片の粗砂多い ②黒褐	口縁は丁寧な横ナデ。体部外面は斜～縦ハケメ、内面は横ハケメのうち中位のみナデ。	
第10図-11	(器台)	埋土	脚部片	口 - 底 - 高 -	①チャート・石英・白岩片の細礫多い ②橙	全体に外反形状。外面縦ミガキ、脚内面は細かいハケメ。脚部4カ所対称に円孔。	
第10図-12	高杯	埋土	脚部片	口 - 脚 - 高 -	①きめ細かく、雲母微砂を含む ②明赤褐	やや低い円錐形。外面横ミガキ。内面ヘラナデ。脚部3カ所の円孔。	(畿内系)
第10図-13 PL14	有孔鉢	埋土	口～底部片	口 (17.8) 底 4.9 高 (10.3) 孔 1.4	①白岩片・石英・バミスの細砂多い ②にぶい黄褐	単口縁、内彎器形、安定した平底単孔。外面と口縁内面に細かいハケメ。体部内面は縦位ヘラナデ。焼成前穿孔。	底内面に灰汁状白色付着物あり。

3号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第12図-1	壺	-0.5~ +1	胴下部1/5 ~底部	口底 高 6.8 —	①赤色粒・片岩の細礫 ~細砂含む ②浅黄	外面は斜ケズリ→斜ハケメ→縦ミガキ。内面は 反時計回りで下方へハケメ。底面ミガキ。工具 は針葉樹板小口(15歯/14mm)。	
第12図-2	直口壺	+1~2	胴部1/3~ 底部	口底 高 — —	①赤粒・パミス・白岩 片の細礫~粗砂多い ②にぶい黄橙	底面は小さな凹み底。外面は斜ケズリ→斜ミガ キ。内面は指頭ナデ、凹凸著しい。	
第13図-3	S字状口縁 台付甕	-0.5	口縁~胴下 部1/4	口底 高 13.8 —	①石英・白岩片・輝石 の粗砂多い ②明黄褐	口縁ヘラ横ナデ。外面はケズリ→胴下半左上方 方向ハケメ→頸から肩へ斜ハケメ。内面は幅広 ヘラのナデ、上位は指押さえ。	
第13図-4	S字状口縁 台付甕	±0~ +3.5	口縁~胴下 部1/2	口底 高 11.0 —	①チャート、白岩片、 石英の粗砂多い ②にぶい赤褐	口縁横ナデ、頸部ヘラ先ナデ。胴外面ケズリ→ 下半斜ハケメ→肩ハケメ(幅27mm強、3mmスバ ン)。内面ヘラナデ、上位は指ナデ。	
第13図-5	S字状口縁 台付甕	-0.5	口縁~肩部 片	口底 高 (14.1) —	①白岩片・チャート・ パミス・輝石等の細砂 多い②暗褐	口唇部上面に弱い面取り。口縁横ナデ。肩部外 面ケズリ→斜ハケメ(15歯/幅38mm程 2mmス パン)。内面ヘラ横ナデ→指ナデ上げ。	
第13図-6	S字状口縁 台付甕	+2.5	口縁部片	口底 高 (14.1) —	①片岩の粗~細砂多い ②黒褐	口唇内面は沈線状。頸部から肩外面に斜ハケメ (25歯以上/27mm以上 1.5~1mmスパン)。ヘ ラ横ナデ→指ナデ上げ。	
第13図-7	S字状口縁 台付甕	-0.5~ +2.5	口縁~胴部 片	口底 高 (13.2) —	①輝石・チャート・黒 色岩片・パミスの粗砂 多い②褐	口唇部内面に弱い面取り、口縁横ナデ。胴外面 ケズリ→斜ハケメ(幅30mm以上 2mmスパン)。 内面ヘラナデ、指押さえとナデ。	
第13図-8	S字状口縁 台付甕	-0.5~ ±0	口縁~胴下 部1/4	口底 高 (12.6) —	①雲母微砂を含む ②にぶい黄橙	口縁横ナデ。胴外面ケズリ→下半左上方→肩左 下方のハケメ(21歯/33mm、2mm前後スパン)。内 面ヘラナデ→上位指ナデ上げ。底面に砂目粘土 付加。	
第13図-9	S字状口縁 台付甕	±0	口縁~胴部 1/3	口底 高 (14.2) —	①石英、輝石、パミス の粗~細砂多い ②にぶい黄褐	口唇部内面に弱い面取り。頸部ヘラ先ナデ、胴 外面ケズリ→斜ハケメ(19歯/38mm 3~2mm スパン)。内面ヘラナデ→縦指ナデ。	
第13図-10	S字状口縁 台付甕	±0~ +8.5	口縁~肩部 片	口底 高 (13.1) —	①パミス・輝石を含む ②暗褐	口縁内面に積上げ痕。口縁外面中位にヘラ先横 ナデ。肩外面斜ハケメ(幅28mm以上 2~1.5mm スパン)、内面横ハケメ→ナデ。	
第13図-11	S字状口縁 台付甕	±0	口縁部片	口底 高 (12.4) —	①白岩片・輝石・片岩 の粗~細砂 ②にぶい黄褐	口縁横ナデ。肩外面に斜ハケメ(20歯以上/33 mm以上 2~1.5mmスパン)。内面指ナデ。	
第13図-12	S字状口縁 台付甕	-0.5	口縁~肩部 1/3	口底 高 (13.4) —	①石英・輝石の粗砂多 い ②橙	口唇上面に面取り、口縁横ナデ。肩外面は斜ハ ケメ(22~24歯/43mm 2mmスパン)、内面はヘ ラナデ→指ナデ上げ。	
第13図-13	S字状口縁 台付甕	埋土	口縁1/3~ 肩部片	口底 高 (14.0) —	①赤色粒・輝石・チャ ート・白岩片の粗砂多 い ②にぶい橙	口唇内面に弱い沈線。頸部外面ヘラ先ナデ。肩 外面に斜ハケメ(幅18mm以上 2~1.5mmスバ ン)、内面指ナデ上げ。	
第14図-14	S字状口縁 台付甕	-0.5~ ±0	口縁~肩部 1/3	口底 高 (14.2) —	①石英・輝石・ガラス の微砂多い ②にぶい黄褐	口縁横ナデ。頸部外面ケズリ。肩外面ハケメ (24~25歯/35mm前後 2mmスパン)。内面指ナ デ上げ。	
第14図-15	S字状口縁 台付甕	±0	胴部3/4	口底 高 — —	①白岩片・パミス・赤 色粒の岩の細砂 ②灰褐~暗褐	外面ケズリ→左上方へハケメ(20歯/24mm 1.5 mmスパン)。内面は幅広ヘラの横ナデ。	内面下半に1mm 大の炭化物付着 による斑点
第14図-16	S字状口縁 台付甕	±0	胴下部~脚 上部1/2	口底 高 — —	①石英、白色・黒色片 岩等の粗砂 ②黒褐	脚部から胴外面は左上方へハケメ(25歯/35mm 2~1.5mmスパン)。内面は円滑で幅の広いヘラ 状具の横ナデと指押さえ。	底内外面に砂目 粘土付加。
第14図-17	S字状口縁 台付甕	±0	胴下~脚部 1/2	口底 高 — —	①石英・白岩片・輝石・ 赤色粒の粗砂 ②黒褐	外面ケズリ→左上方へハケメ(2mmスパン)。内 面は幅広ヘラのナデ。底面と脚部天井に砂目粘 土付加。	底内外面に砂目 粘土付加。
第14図-18	S字状口縁 台付甕	±0	脚部	口 脚径 9.6 高 —	①片岩の微砂含む ②にぶい黄橙	外面は左上方へ斜ハケメ。内面は裾部折り返し 後指押さえとナデ。天井部に砂目粘土の付加。	
第14図-19	台付甕	±0	脚部1/3	口 脚径 (10.2) —	①石英・白岩片・チャ ートの粗砂多い。片岩細 砂も見る②橙	外面幅の狭いヘラ状具小口によるミガキ状の縦 ナデ→胴との接合部横ナデ。内面指ナデ。底面 と天井部に砂目粘土付加。	S字甕模倣品か
第14図-20	高杯	±0~ +8.5	1/2	口 16.0 脚径 11.0 高 15.4	①白岩片・石英・片岩・ 輝石等粗~細砂含む ②橙~灰橙	口縁内外面は横ハケメ→放射状ミガキ。脚柱外 面は粗い縦ミガキ、内面は絞り目残し下位を横 ナデ。裾部内外面は横ナデ。	
第14図-21	高杯	+2.5~8.5	口縁・裾部 欠	口 脚高 — —	①パミス・輝石の粗砂 多い ②にぶい赤褐	杯部内外面は丁寧な放射状ミガキ。脚柱部外面 は縦ミガキ、内面は中実部をヘラで抉り→横ケ ズリ。	S字甕模倣品か

第14図-22	高杯	+3	脚柱部	口 脚 高	- - -	①赤色粒・白岩片・石英の粗～細砂を含む ②極暗赤褐	高背の円錐形、裾部外折。脚柱外面は縦ミガキ、内面は紋目残し、下位は指ナデ。	
第14図-23	埴	+1	口縁一部欠	口 底 高	11.2 7.0 6.4	①石英・白岩片の多い雑多な中～細砂を含む ②橙	口縁やや外反、小さな丸底。口縁外面上位と内面全体に横ナデ、口縁外面下位に斜ミガキ。底内面ナデ、外面ケズリ。	
第14図-24	埴	-0.5～±0	口縁部1/2	口 底 高	(11.6) - -	①バミス、石英、チャート、砂岩、輝石の中～細砂②橙	口縁幅広ヘラ状具小口による横ナデ→外面下半ケズリ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	
第14図-25	装飾器台	+9	器受部片	口 底 高	(17.0) - -	①白くきめ細かい。片岩の微砂を少量含む ②赤褐	赤色顔料をハケ状具で横位塗布→ミガキ。口縁と体部に交互2段3カ所の円孔。	全面赤彩
第14図-26	台付甕	埋土	胴下部片	口 底 高	- - -	①きめ細かく、白色岩片粗砂を少量含む ②灰褐	内外面ともヘラ状具によるナデ。擦痕をほとんど残さない。	外面下半はススける。

4号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考	
第15図-1 PL14	壺	-2～+3 (ピット1内)	口縁～胴部 1/4	口 底 高	17.0 - -	①赤粒・バミス白岩片の粗砂多い ②橙	口唇つまみナデ、口縁全体に横ナデ。頸部凸帯に櫛歯具刺突。肩に櫛描波状文と横線文。胴外面ヘラナデ→斜ミガキ、内面横ヘラナデ。	
第15図-2 PL14	S字状口縁 台付甕	+3	口縁～胴上 半部1/3	口 底 高	(11.9) - -	①片岩・チャート・石英・黒岩片の粗砂多い ②にぶい黄橙	口縁横ナデ、内面の段は弱い。外面斜ハケメ→肩部横ハケメ(13歯/30mm 2.5mmスパン)。内面指ナデ上げ。	
第15図-3 PL14	高杯	+8.5	杯底～脚部 片	口 脚 高	- - -	①赤色粒・チャートの細礫～粗砂、ガラス微砂②にぶい黄橙	杯部内外面とも丁寧で密な放射状ミガキ。脚外面縦ミガキ→部分的な横ミガキ、内面はヘラえぐり→ヘラナデ。3カ所円孔。	布留型高杯
第16図-4 PL14	器台	+6	完形	口 脚 径 高 孔	7.8 10.7 9.0 1.3	①チャート・白岩片・石英の細礫多い ②にぶい黄橙	口唇つまみナデ→上下端にヘラ刻み。受部内面は同心円ミガキ。脚外面上半縦ミガキ、下半横ミガキ、内面ヘラナデ、横ナデ。脚部下位に2孔対面一対の計4孔を穿つ。	
第16図-5 PL14	磨石	+4	完形	長さ 重量	12.3 985.4g	幅9.2 厚6.6 ①デイスイト	下面に集中敲打痕。主に右側面の磨滅著しい。	
第16図-6 PL14	ガラス玉	+1	完形	長さ 重量	0.45 0.20g	幅0.6 孔径0.20 ①ガラス②藍色	上下端切断、側面弱いミガキ。	

5号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考	
第18図-1 PL14	S字状口縁 台付甕	埋土	口縁部小片	口 底 高	(16.0) - -	①片岩・輝石・白岩片の粗砂多い ②灰黄	口唇上面に凹線状面取り。頸部～肩外面に斜ハケメ(3mmスパン)。頸部内面に横ハケメ→指ナデ上げ。	
第18図-2 PL14	S字状口縁 台付甕	+2	口縁部1/3	口 底 高	(12.6) - -	①片岩・石英・チャートの粗～細砂 ②灰黄褐	口縁薄く、口唇内面やや沈線状。頸部外面横ヘラナデ。肩外面ケズリ→斜ハケメ(22歯/33mm 2～1mmスパン)。内面指ナデ上げ。	
第18図-3 PL14	S字状口縁 台付甕	+2	口縁部片	口 底 高	(14.4) - -	①片岩・バミス・白岩片の細砂 ②にぶい黄橙	口唇内面に弱い面取り。頸部～肩外面にケズリ→斜ハケメ(15歯以上/23mm以上 1.5mmスパン)。内面横ヘラナデ→指ナデ上げ。	
第18図-4 PL14	S字状口縁 台付甕	+6	口縁部1/2	口 底 高	13.1 - -	①チャート・石英・輝石の粗～細砂 ②にぶい黄橙	口縁内面は浅い凹線状。肩部外面ケズリ→斜ハケメ(12歯以上/22mm以上 2mmスパン)。肩内面は指押さえ→ナデ。	
第18図-5 PL14	S字状口縁 台付甕	+1	口縁部1/4	口 底 高	(12.3) - -	①片岩・チャート・石英・バミスの粗～細砂 ②にぶい黄橙	口唇内面に弱い沈線。頸部外面横ナデ。肩外面ケズリ→斜ハケメ(19歯/38mm 3～1.5mmスパン)。内面横ヘラナデ→指ナデ上げ。	
第18図-6	直口壺	-0.5～+3	胴部1/4	口 底 高	- - -	①きめ細かく、石英細砂を含む ②にぶい黄橙	外面丁寧な横ミガキ。内面頸部は紋り→横ハケメ、体部内面はヘラナデ。	
第18図-7	壺	±0	底部3/4	口 底 高	- 7.0 -	①白岩片・石英の粗砂多い ②にぶい赤褐	外面縦ケズリ、内面幅広のヘラナデ。底面はやや上げ底でケズリ。	
第18図-8	S字状口縁 台付甕	±0	脚部	脚 径 高	(10.6) - -	①片岩・輝石・白岩片の粗砂多い ②にぶい橙	外面に左上方へ斜ハケメ(2.5mmスパン)。内面指押さえ、指ナデ。底面と天井面に砂目粘土付加。	
第18図-9 PL14	敲石	±0	ほぼ完形	長さ 重量	14.0 560.4g	幅6.2 厚3.9 ①粗粒輝石安山岩	下面は細かい敲打によってつぶれる。上端は剥離欠損。	

6号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第19図-1	壺	埋土	口縁部片	口 (16.0) 底 - 高 -	①赤色粒・白岩片・パミス・輝石の粗砂多い ②灰黄褐	口縁端弱く外折。口縁内外面全体に横ナデ、外面下半に浅い縦ハケメ。	
第19図-2 PL14	壺	+0.5	口縁部1/2	口 20.0 底 - 高 -	①チャート・白岩片の細礫多い ②橙	内外面とも幅広の横ナデ。胴内面ケズリ。	
第19図-3 PL14	埴	+3	口唇部欠他 2/3	口 - 底 - 高 -	①チャート・赤色粒・白岩片の粗砂多い ②にぶい褐	口縁ヘラナデ。胴外面ナデ→下半ケズリ、内面ヘラ状具小口によるナデ。	
第19図-4 PL14	直口壺	+3.5	口縁～肩部 片	口 - 底 - 高 -	①チャート・赤粒・石英・パミス・輝石の粗～細砂含む②にぶい褐	口縁横ナデ→まばらな縦ミガキ。胴外面はケズリ→縦ミガキ、内面は頸部絞り目残し指押さえと指ナデ。	
第20図-5 PL14	甕	+3～3.5	底部欠	口 (16.0) 底 - 高 -	①片岩・石英・白岩片の細礫～粗砂多い ②にぶい黄橙	口唇部弱い面取り、口縁横ナデ。胴外面斜～横ケズリ、内面横ケズリ。	
第20図-6	高杯	埋土	脚柱部	口 - 脚 - 高 -	①チャート・石英・パミスの粗砂多い ②明赤褐	杯底面はミガキ。脚外面縦ミガキ。内面絞り棒痕跡残し、縦しわ著しい。裾部横ナデ。	
第20図-7 PL14	高杯	+14.5	ほぼ完形	口 18.7 脚径 14.4 高 16.3	①大粒のガラス質黒色鉱物の粗砂多い ②明赤褐	杯部は幅広い横ナデ→暗文状放射ミガキ。杯底外面は指押さえ→ナデ。脚外面は暗文状ミガキ、内面は横ケズリ。裾部横ナデ。	

7号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第21図-1	甕	埋土	底部片	口 - 底 (7.4) 高 -	①白岩片・石英の細砂多い②内面にぶい褐、外面黒褐	外面斜縄文(L付加の絡縄体、軸縄痕見られず)。底面は砂底。	東関東系後期弥生土器

8号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第22図-1	S字状口縁 台付甕	埋土	脚部1/4	脚径 (8.9) 高 -	①石英・輝石の粗砂多い ②にぶい橙	外面ナデ→斜ハケメ(2mmスパン)、内面指ナデ。底面と天井部に砂目粘土付加。	

9号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第24図-1 PL17	須恵器 高台付碗	竈内埋土	口縁部2/3 高台部剥離	口 16.7 底 - 高 -	①白岩片の細砂を少量含む ②褐灰	右回転糸切り。付け高台。	
第24図-2 PL17	土師器 杯	+10.5～14	口縁部1/3 欠	口 12.0 底 - 高 3.6	①輝石・ガラス微砂を含む ②橙	口縁内外面横ナデ。底内面に凹凸残し、外面はケズリ。口縁外面に細かい皺を残す。	
第24図-3 PL17	坏	竈内埋土	1/5	口 (13.6) 底 - 高 -	①きめ細かく、雲母の細～微砂多い ②明赤褐	口縁外反し内外面横ナデ。体部外面と底面ケズリ。内面の体～底部にやや左傾する放射状暗文。	
第24図-4 PL17	土師器 杯	竈然焼面	1/8	口 (12.1) 底 - 高 -	①赤色粒・チャート・片岩・ガラスの細礫～微砂②橙	口縁外面～内面全体に横ナデ。体部外面ナデ、底外面はケズリ。体部外面に細かい皺を残す。	
第24図-5 PL17	土師器 杯	竈内埋土 +10.5	1/2	口 14.1 底 - 高 3.7	①白岩片・ガラスの細～微砂 ②橙	口縁外面～内面全体に横ナデ。底内面にヘラナデ。体部外面横ケズリ、底外面は方形ケズリ。	
第24図-6 PL17	鉢	竈内埋土 貯蔵穴内	口縁～体上 部1/4	口 (23.4) 底 - 高 -	①赤色粒・チャート・石英・輝石の細礫～細砂②橙	口唇つまみナデ。外面ナデ→まばらな縦ミガキ、内面はヘラ状具小口による横ナデ。	古墳前期の混入品か

10号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第27図-1	壺	埋土	口縁部片	口底高	①安山岩片・輝石・石英の粗～細砂多い ②灰白	口唇内彎気味で丸い。頸部に簾状文(4mmスパン)。内外面とも板状具小口による横ナデ。	樽1式
第27図-2	甕	埋土	口縁部片	口底高	①金雲母多い ②褐	口唇丸く、口縁は弓なり外反。内外面とも横ナデ。	
第27図-3	壺	埋土	頸部片	口底高	①輝石・石英・チャート・赤粒の粗～細砂を含む②灰白	22mm以上の間隔による等間隔簾状文(11歯/20mm)。内面剥離。	樽1式
第27図-4	壺	埋土	頸部片	口底高	①石英・安山岩・輝石の細砂含む ②灰白	10～12mm 間隔の等間隔簾状文。無文部は縦ヘラナデ。内面ナデ。	樽1式
第27図-5	壺	埋土	頸～肩部片	口底高	①石英・輝石の粗砂目立つ ②にぶい黄橙	頸部4連以上の多連止簾状文、肩に櫛描横羽状文(櫛歯10歯/12.5mm)。口縁内面は横ミガキ、胴内面はナデ。	樽3式(富岡型)
第27図-6	壺	埋土	肩部片	口底高	①石英・輝石の粗砂多い ②にぶい黄橙	頸部4連以上の多連止簾状文、肩に櫛描横羽状文、下端に波状文。口縁内面は横ミガキ、胴内面はナデ。	樽3式(富岡型)
第27図-7	壺	埋土	肩部片	口底高	①安山岩片・パミス・輝石・赤粒の粗砂多い ②橙	頸部に多連止簾状文、肩に櫛描横羽状文(10歯/18mm)。内面ナデ。	樽3式(富岡型)
第27図-8	壺	埋土	肩部片	口底高	①白安山岩・パミスの細砂～粗砂多い ②橙	間隔の広い簾状文→櫛描横羽状文(10歯/17mm)。内面ナデ。	樽3式(富岡型)
第27図-9	壺	埋土	肩部片	口底高	①石英と輝石粗砂目立つ ②にぶい黄橙	櫛描横羽状文(10歯/13mm)。施文櫛状具のあて方は、上2段は同じ、3段目は上下逆で施文。内面ナデ。	5・6と同一個体と思われる。 樽3式(富岡型)
第27図-10	壺	埋土	胴部片	口底高	①輝石・パミス・石英の粗砂多い ②橙	櫛描横羽状文(8歯前後/12mm前後)、下位に波状文で区画。内面ナデ。	樽式(富岡型)
第27図-11	壺	埋土	胴部片	口底高	①輝石・石英・白岩片の粗砂多い ②にぶい黄橙	櫛描横羽状文、下位に波状文で区画。無文部は横ミガキ。内面ナデ。	6と同一個体だろう。樽式(富岡型)
第27図-12	壺	埋土	胴部片	口底高	①輝石・石英・パミス・赤粒の粗砂多い ②にぶい黄橙	櫛描横羽状文、下位に波状文で区画。内面ナデ。	樽式(富岡型)
第27図-13	壺	埋土	胴部片	口底高	①石英・輝石の粗砂目立つ ②にぶい橙	櫛描横羽状文、下位に波状文で区画。無文部は横ミガキ。内面ナデ。	樽式(富岡型)
第27図-14	壺	+6.5	胴部片	口底高	①白岩片・石英・輝石等の細砂～粗砂多い ②にぶい灰褐	櫛描横羽状文。内面横ミガキ。無文部横ミガキ。内面ヘラナデ。	樽式(富岡型)
第27図-15	壺	埋土	胴部片	口底高	①細砂を多く含む ②橙	櫛描横羽状文→波状文。	樽式(富岡型)
第27図-16	壺	埋土	肩部片	口底高	①白岩片の細砂含む ②橙	櫛描横羽状文。内面横ミガキ。	樽式
第27図-17	壺	埋土	肩部片	口底高	①片岩・石英・チャート・白岩片の細砂多い ②明赤褐	細かい櫛状具(12～13歯/14mm)による横羽状文を描く。	富岡型壺の模倣品か。
第27図-18	壺	埋土	胴部片	口底高	①輝石・石英の粗～細砂多い ②灰白	櫛描波状文。無文部は丁寧な斜ミガキ。内面ナデ。	樽式
第27図-19	壺	埋土	肩部片	口底高	①安山岩片・パミス・輝石の細砂 ②橙	櫛描波状文を重ねる→短い間隔で縦垂下文(9歯/15mm)。文様帯下端に浅い櫛描横線を廻らす。内面は目の整った細かいハケメ(1mmスパン)	東海系、樽式模倣
第27図-20	(壺)	埋土	頸部片	口底高	①安山岩片・輝石・石英の粗砂多い ②黒褐	頸部に二連止簾状文、肩にコンパス文状の波状文。内面横ミガキ。	樽式
第27図-21	(甕)	埋土	頸～肩部片	口底高	①チャート・石英・安山岩片等の粗砂 ②黒～灰褐	頸部に8cm以上と間隔の広い簾状文か横線文→頸部～口縁及び肩に櫛描波状文(11歯/18mm)を重ねる。内面横ミガキ。	樽式
第27図-22	(壺)	埋土	肩部片	口底高	①安山岩片・パミス・輝石の粗～細砂 ②にぶい黄橙	櫛描波状文を重ねる。内面は幅広いヘラ状具小口によるナデ	樽式

第27図-23	壺	埋土	肩部片	口底高	- - -	①赤粒・石英・輝石の粗～細砂 ②灰黄褐	櫛描波状文(7歯/11mm)を多段に重ねる。内面ナデ。	樽式
第27図-24	(甕)	埋土	胴部片	口底高	- - -	①安山岩系の岩片・鉱物の粗～細砂多い ②灰白	櫛描斜格子文。内面ケズリ→ミガキ。	樽1～2式か
第27図-25	壺	埋土	肩部片	口底高	- - -	①石英・白岩片・輝石の粗～細砂多い ②暗褐	わずかに間隔を開けて櫛描波状文を廻らす。内面は浅い横ハケメ→横ヘラナデ。	樽式
第27図-26	壺	埋土	肩部片	口底高	- - -	①粘土粒子はキメ細かく、砂岩・チャート・片岩・白岩片等の細礫～粗砂多い②暗赤褐	横位2段の斜縄文(RL)。内面横ミガキ。	吉ヶ谷・赤井戸式
第27図-27	壺	埋土	肩部片	口底高	- - -	①キメ細かく、白岩片・チャート・石英の細礫目立つ②黄褐	横位斜縄文(RL)。内面ヘラ状具による横ナデ。	南関東系
第27図-28	壺or甕	埋土	肩部片	口底高	- - -	①輝石・石英・パミス・チャート等の細礫～細砂を含む②黄橙	撚りの粗い横位斜縄文(RL)。内面ケズリ。	
第27図-29	壺	埋土	肩部片	口底高	- - -	①チャート・白岩片・輝石・パミス等の細礫～粗砂を多く含む②橙	無節縄文(R)を上下2段に施文、縄文帯下位に末端結節の回転圧痕を残す。胴無文部に赤彩。	南関東系
第27図-30	壺	埋土	肩部片	口底高	- - -	①輝石・石英・片岩・パミス等の細砂を含む②灰褐	外面に鋭い櫛歯状具(11本/20mm)で横線・波状文・横線文の順に施文し、横線文部に赤彩。内面は板状具小口によるナデ。	東海型の文様構成で、手法は中部高地型。
第27図-31	壺	埋土	頸～肩部片	口底高	- - -	①赤粒の細礫、他細砂を含む②橙	左下がりの斜位平行叩き目→胴部に交差方向の細かいハケメ。内面は指ナデ、弱いハケメ。	畿内系か
第27図-32	甕(壺)	埋土	胴部片	口底高	- - -	①キメ細かく細砂含む②暗赤褐	左下がり平行叩き目→交差方向の細かいハケメ。内面は指ナデ。	31・33と同一個体ではないか
第27図-33	甕	埋土	胴部片	口底高	- - -	①赤粒の細砂多く、輝石もみる②橙	浅く目の細かい平行叩き目→細かい斜ハケメ。内面はハケメ、上位は指ナデ。	畿内系
第28図-34 PL15	小型壺	+1	口縁2/3欠他完形	口底高	(10.7) 5.0 13.5	①石英・チャート・パミス・輝石の粗～細砂②にぶい黄橙	口縁は粘土帯付加の折り返しで、指押さえにより中央くぼむ。頸部は縦、胴部横のミガキ、口縁内面横ミガキ、胴内面はヘラナデ。底面は一方のミガキ。	樽式系
第28図-35	壺	埋土	口縁～胴下部1/4	口底高	(13.0) - -	①赤粒・片岩・チャートの細礫と粗砂含む。きめ粗い②橙	外面斜ハケメ→横・斜ミガキ。口縁内面横ミガキ、胴内面は横ヘラナデ、下位は接合前に横ハケメ。	
第28図-36 PL15	直口壺	+8	底部欠他1/2	口底高	9.2 - -	①輝石・チャート・石英の粗砂多い②にぶい橙	口縁横ナデ。口縁下半～胴外面縦～斜ミガキ。胴内面ヘラナデ。	
第28図-37	壺	確認面	口縁部1/5	口底高	(12.2) - -	①細角礫を多く含む②橙	外面縦ハケメ→赤彩→縦ミガキ、内面横ハケメ→赤彩→縦ミガキ。	
第28図-38 PL15	埴あるいは高杯	埋土	口縁部	口底高	14.4 - -	①白岩片と片岩微細多い②橙～赤橙	口縁横ナデ→外面に暗文状の縦ミガキ	
第28図-39 PL15	埴	+29	2/3	口底高	(11.5) 1.6 6.8	①赤色粒・石英・輝石の粗～細砂②明赤褐	口縁横ナデ、口縁内面にハケメ残す。体部内外面はナデ。底面は同心円状のケズリで、中央は小さな凹み底。	
第28図-40	埴	埋土	体部小片	口底高	- - -	①白岩片・片岩・石英・輝石の粗～細砂②灰黄	口縁内外面は縦ミガキ。底外面ケズリ、底内面は板状具小口によるナデ。口縁と体部の境外面にはヘラ先による沈線を廻らす。	
第28図-41	埴	埋土	口縁～体部1/4	口底高	(12.2) - -	①輝石・石英・パミスの粗砂多い②にぶい黄橙	口縁と体部境の稜は弱い。外面縦ミガキ、内面横ミガキ。	
第28図-42 PL15	(壺)	+16.5	底部	口底高	- 3.2 -	①赤色粒・チャート・石英・白岩片の粗～細砂多い②にぶい橙	外面縦ミガキ、内面横ミガキ。底面ミガキ。	二次的被熱痕は見られない。
第28図-43 PL15	小型壺	埋土	頸～胴下部1/2	頸内径 口底高	3.0 -	①赤色細礫・石英と輝石の粗～細砂を含む②橙～赤褐	外面は光沢をもつ細かく丁寧な横ミガキ。頸部内面ケズリ、肩内面は指頭押圧、胴内面は斜ケズリ→下位を水等で湿した道具による丁寧なナデ。	畿内系二重口縁壺と思われる。
第28図-44	埴	確認面	底部	口底高	- - -	①石英・長石・チャート等の細角礫～細砂を含む②橙	底中央は小さな凹み底。外面全体に赤彩→横ミガキ。内面ナデ。	

第4章 出土遺物観察表

第28図-45 PL15	鉢	埋土	口縁~体部 1/4	口底高 (15.0) — —	①チャート・石英・白 岩片・輝石の粗~細砂 ②橙	口縁外面横ナデ→斜ミガキ、口縁内面横ミガキ。 体部外面ハケメ→雑な斜ミガキ、体部内面は指 押さえ、ナデ。	
第28図-46 PL15	壺	+6.5	口縁部欠 他1/3	口底高 7.6 —	①赤色粒・片岩の細礫 ~粗砂多い ②橙	外面ケズリ→多方向のハケメ→まばらなミガ キ、内面斜ケズリ。胴中位に外側から焼成後穿 孔(径2.5cm)。	
第28図-47 PL15	広口短頸壺	+6~13.5	3/4	口底高 (13.3) 4.8 13.2	①チャート・石英・パ ミスの粗~細砂 ②灰黄褐	外面縦ミガキ、内面丁寧な横ミガキ。底縁辺摩 滅。	
第29図-48 PL15	壺	+13.5~14	底部2/3	口底高 — 17.4 —	①石英・輝石・白岩片 の粗砂多い ②黄褐	外面ヘラナデ→縦ミガキ、内面ヘラ小口による 横ナデ。底面ミガキ。	底周縁部は摩 滅。
第29図-49 PL15	壺	+7.5	胴下部~底 部1/3	口底高 — 7.9 —	①チャート・石英・輝 石の細礫~粗砂 ②明赤褐	外面斜~縦ミガキ、内面ハケメ→横ミガキ。底 面一方向のミガキ。	底縁辺は摩滅。
第29図-50 PL15	壺	+6~9	頸~底部片	口底高 — 5.6 —	①赤色粒・チャート・ 片岩・石英の細礫~粗 砂多い②褐	胴上半は縦、下半は横、底付近は斜方向のミガ キ。底付近内面横ハケメ→胴中位以上積みあげ →内面ヘラナデ。底面ミガキ。	
第29図-51 PL15	S字状口縁 台付甕	埋土	口縁~胴部 1/3	口底高 17.0 — —	①白岩片・石英・チャ ート・輝石の粗砂。ガラ ス微量②黒褐	口唇内面は部分的な面取り。胴外面斜ハケメ→ 肩横ハケメ(22歯/40mm 2mmスパン)。頸内面 ヘラナデ、胴内面指押さえと指ナデ上げ。	
第29図-52 PL15	S字状口縁 台付甕	埋土	口縁~肩部	口底高 14.5 — —	①石英・輝石・砂岩・ 片岩等の細礫~粗砂多 い ②にぶい黄褐	口縁横ナデ。口縁下半~胴外面縦~斜ミガキ。 胴内面ヘラナデ。胴外面斜ハケメ→肩横ハケメ (17歯/30mm 2mm前後スパン)。頸内面横ハケ メ、胴内面は指押さえと指ナデ上げ。	
第29図-53 PL15	S字状口縁 台付甕	+15.5	口縁~肩部	口底高 13.6 — —	①赤色粒・チャート・ 石英・片岩・輝石の粗 砂多い ②にぶい黄褐	口唇内面は弱い沈線、口縁横ナデ。胴外面斜ハ ケメ→肩横ハケメ(13歯以上/23mm以上 2.5~ 2mmスパン)。頸内面は横ハケメ、胴内面は指ナ デ上げ。	
第29図-54 PL15	S字状口縁 台付甕	+10	口縁~胴上 部2/3	口底高 16.8 — —	①金雲母少量含む ②にぶい黄橙	口唇内面に凹線状横ナデ。胴外面斜ハケメ→肩 横ハケメ(15歯/30mm 2mmスパン)。内面横 ナデ→指ナデ上げ。	
第29図-55 PL15	S字状口縁 台付甕	埋土	口縁~胴部 片	口底高 (15.0) — —	①赤色粒・チャート・ 片岩・輝石の粗~細砂 ②浅黄橙	口唇内面は沈線状。口縁横ナデ。胴部外面斜ハ ケメ→肩横ハケメ(14歯以上/25mm以上 2mm 前後スパン)。胴内面横ヘラナデ→指ナデ上げ。	
第30図-56 PL15	S字状口縁 台付甕	埋土	口縁~肩部 1/4	口底高 (17.6) — —	①チャート・黒岩片・ 石英・片岩の粗~細砂 ②にぶい黄橙	口唇肥厚し上面に凹線、内面中段は平坦面。胴 外面斜ハケメ→肩横ハケメ(14歯/33mm 3mm スパン)。頸内面横ナデ、胴内面横ヘラナデ→指 ナデ上げ。	
第30図-57 PL15	S字状口縁 台付甕	+9.5~11.5	口縁~肩部	口底高 18.0 — —	①雲母片多い ②にぶい黄褐	口唇肥厚し上面に平坦面。胴外面斜ハケメ→肩 横ハケメ(10歯以上/20mm以上 2~3mmスバ ン)。頸内面ヘラナデ、胴内面は細かな横ハケメ。	
第30図-58 PL15	S字状口縁 台付甕	+8	口縁~胴部 1/2	口底高 11.2 — —	①赤色粒・チャート・ 石英・白岩片の粗~細 砂多い ②にぶい黄褐	口縁内面中段は沈線状。口縁は板状具小口によ る横ナデ。胴外面斜ハケメ→肩横ハケメ(15歯 以上/30mm前後 2mmスパン)。頸内面横ヘラナ デ、胴内面指ナデ上げ。	
第30図-59 PL16	S字状口縁 台付甕	埋土	口縁~胴上 部	口底高 11.0 — —	①チャート・石英・輝 石の粗砂多い ②にぶい黄橙	口唇小さくつまみナデ、内面は沈線状。胴外面 斜ハケメ→肩横ハケメ(17歯以上/23mm以上 1.5mmスパン)。胴内面ヘラナデ→指ナデ上げ。	
第30図-60 PL16	S字状口縁 台付甕	+4~21.5	口縁3/4~ 胴上部1/4	口底高 12.4 — —	①チャート・石英・片 岩・輝石・白岩片の粗 砂多い ②褐	口縁横ナデ、内面中段は沈線状。肩外面左下方 へ斜ハケメ→胴下半は左上方へ斜ハケメ(15歯 以上/30mm以上 2mmスパン)。胴内面横ヘラナ デ→指ナデ上げ。	ハケメは反時計 回り、胴→肩と 通常と反対。模 倣品の可能性。
第30図-61 PL16	S字状口縁 台付甕	+7~19.5	口縁部1/2	口底高 (15.0) — —	①チャート・片岩・黒 岩片の粗砂多い ②黄橙	口唇肥厚し、上面は凹線状。頸部外面ヘラナデ、 胴外面斜ハケメ(12歯以上/23mm以上 2mmス パン)。頸内面横ハケメ、胴内面指押さえと指ナ デ上げ。	
第30図-62 PL16	S字状口縁 台付甕	+10.5~ 14.5	口縁~脚上 部3/4	口底高 13.1 — —	①チャート・石英の細 礫~粗砂、輝石の細砂 ②黒褐	口唇肥厚し上面に平坦面。口縁内面中段は幅広 平坦面。肩外面縦ハケメ→胴中位横ハケメ→胴 下位横ハケメ(8歯/21mm 3mmスパン)。頸内 面横ハケメ→ヘラナデ、胴内面は細かな横~斜 ハケメ(22歯前後/22mm前後 1mmスパン)。脚 接合部外面は細かいハケメ、底内面は粗いハケ メ。脚部外面横ナデ、内面は指ナデ。	模倣品

第30図-63 PL16	S字状口縁 台付甕	+5~8.5	3/4	口 10.4 脚径 7.9 高 19.0	①赤粒・石英・白岩片・ バミス・輝石の粗砂 ②にぶい黄褐	口縁横ナデ→内面横ミガキ。胴外面は上方への 縦ハケメ(2mmスパン)。胴内面は横ミガキ。脚 外面ナデ、内面ヘラナデ。脚裾下端は平坦面。	在来手法(樽式) による模倣品か
第30図-64 PL16	甕	+2.5~7	底部欠 他1/2	口 15.1 底 - 高 -	①赤色粒細礫・石英・ 輝石の粗~細砂 ②灰黄褐	口縁内外面ナデ。胴外面横ケズリ→下半縦ナデ、 胴内面は板状具小口によるナデ(浅く平滑なハ ケメ)。	口縁~胴中位外 面に煤付着。
第30図-65 PL16	台付甕	埋土	脚部片	脚径(8.5) 高 -	①チャート・石英・砂 岩・輝石・片岩の粗砂 多い②浅黄橙	脚中位~胴下半に左上方へ斜ハケメ(2.5mmス パン)。内面指押さえと横ナデ。底面には砂目粘土 を付加。	
第30図-66 PL16	S字状口縁 台付甕	埋土	脚部	脚径 10.5 高 -	①骨針が少量見られ る。石英黒色鉱物の粗 砂。ガラス微細②灰黄	外面ナデ→上位に左下方へ斜ハケメ。内面斜ヘ ラナデ、裾部指押さえ。	模倣品か
第30図-67 PL16	台付甕	+7	脚部	口 - 脚径 8.8 高 -	①チャート・白岩片の 粗~細砂を少量含む ②橙	胴脚接合部外面は横ナデ、脚外面に粗い斜ハケ メ(2.5mmスパン)。底内面と脚内面はヘラナデ。 脚裾端は下面に平坦面。	
第30図-68	台付甕	埋土	脚部1/4	口 - 脚径(8.0) 高 -	①石英・チャートの他、 大粒の黒色鉱物を多く 含む②にぶい黄褐	外面は深く粗い斜ハケメ(3.5mmスパン)→胴脚 接合部外面ナデ。内面指ナデ。	No67と同型式
第31図-69 PL16	台付甕	+5	脚部3/4	口 - 脚径(8.5) 高 -	①赤色粒・チャート・ 白岩片・石英の細礫、 輝石粗砂②橙	外面細かい縦ハケメ(10歯前後/13mm前後 1 ~2mmスパン)。胴内面はヘラ先ナデ、脚内面は 縦ヘラナデ。脚裾端は丸い。	
第31図-70 PL16	台付甕	埋土	脚部片	脚径(8.5) 高 -	①赤色粒・チャート・ 大粒の黒色鉱物 ②にぶい黄橙~灰白	外面ナデ→粗い縦ハケメ(4mm以下のスパン)。 底内面はヘラナデ、脚内面はミガキ状の丁寧な ヘラナデ。	胎土は68と近似
第31図-71	台付甕	+20.5	脚部1/3裾 部欠	口 - 底 - 高 -	①バミス・石英の他、 ガラス質で大粒の黒色 鉱物を多く含む②赤橙	胴脚接合部外面に横ナデ、脚中位外面にハケメ。 底内面ミガキ、脚内面は板状具小口によるナデ。	
第31図-72 PL16	高杯	埋土	杯部1/4	口(13.4) 脚 - 高 -	①石英・チャート・バ ミス・輝石の粗~細砂 ②浅黄橙	口縁弓なりに外反。→体部上位が膨らむ。内外 面とも横ミガキ。	樽式系
第31図-73	高杯	埋土	杯部片	口(15.0) 脚 - 高 -	①石英・バミス・輝石 の粗~細砂 ②灰黄	口縁内面の屈曲強く、外反。内外面とも横ミガ キ	在地弥生系
第31図-74	高杯	埋土	杯部1/4	口(12.2) 脚 - 高 -	①赤色粒・チャート・ 石英・輝石の粗~細砂 ②にぶい橙	口縁外面横ミガキ→体部内外面とも縦ミガキ。	
第31図-75	(鉢)	埋土	口縁~体部 片	口(16.8) 底 - 高 -	①チャート・石英・白 岩片・輝石の細礫~粗 砂多い②橙	内外面とも丁寧な横ミガキ。	
第31図-76 PL16	高杯	+16	杯部	口 - 脚 - 高 -	①バミス・石英・輝石 の細砂 ②にぶい橙	杯部内外面とも横ミガキ。脚外面縦ミガキ、内 面は指ナデ。脚内面天井部に接合補強と思われ る粘土付加。	
第31図-77	高杯	埋土	杯部1/3	口(12.2) 脚 - 高 -	①白岩片・輝石・チャ ートの粗~細砂 ②にぶい黄橙	内外面とも丁寧な放射状ミガキ、底外面はケズ リ。	
第31図-78	高杯	埋土	脚部片	口 - 脚 - 高 -	①白岩片・石英・輝石 の粗砂多い ②橙	外面縦ミガキ、杯底面ナデ、脚内面指ナデ。	
第31図-79 PL16	高杯	+14	杯底部~脚 部2/3	脚径(12.4) 高 -	①石英・白岩片・チャ ート・輝石の粗砂多い ②にぶい橙	杯部外面と脚外面は縦ミガキ。杯部底内面にナ デ、イネ殻圧痕1カ所。脚内面はナデ。上下 二段並列三カ所計6孔。	
第31図-80 PL16	高杯	+7	杯下半~脚 部	口 - 脚径(8.0) 高 -	①石英・チャート・白 岩片・バミスの細砂多 い②にぶい黄褐	杯部内外面は丁寧なミガキ。脚裾内外面横ナデ →脚外面縦ミガキ	
第31図-81	高杯	埋土	杯体部片	口 - 脚 - 高 -	①キメ細かく白色粒の 細粒を少量含む ②灰黄	外面は縦ミガキ、内面は左上方への放射状ミガ キ。	
第31図-82 PL16	高杯	+11.5	脚部	口 - 脚径 11.0 高 -	①石英・赤色粒・大粒 の輝石・片岩等の粗砂 多い。きめ細かい粘土 ②にぶい黄橙	外面縦ミガキ、内面上位に絞り目残し、下半は 斜ハケメ→横ナデ。断面観察によると、幅広い 板状粘土帯を接合面広く重ねて成形する。中位 3カ所の円孔。	輝石等黒色鉱物 が大きく、他と 異質
第31図-83 PL16	鉢	+1.5~4	2/3	口 19.3 底 5.4 高 6.0	①石英・白岩片の粗~ 細砂多い ②明赤褐	外面横~斜ミガキ、内面横ミガキ。底面ミガキ。	
第31図-84	(埴)	埋土	底部片	口 - 底 3.5 高 -	①石英・白岩片の粗~ 細砂 ②灰黄	胴外面縦ミガキ、内面横ミガキ。底面ミガキ。	

第4章 出土遺物観察表

第31図-85	(鉢)	埋土	底部片	口 底高 4.8 高 —	①チャート・石英・輝石の細礫～粗砂多い ②にぶい橙	胴外面横ミガキ、内面は上から見て方形のミガキ。底面ミガキ。	75と同一個体か。
第31図-86	壺か鉢	埋土	底部3/4	口 底高 4.0 高 —	①チャート・石英・白岩片の粗～細砂多い ②にぶい黄橙	ケズリ→外面縦ミガキ、内面斜ミガキ	被熱痕ほとんどなし。
第31図-87 PL16	装飾器台	埋土	器受部1/3	口 底高 — 高 —	①バミス・石英・輝石・チャートの粗砂 ②橙	器受部と脚接合面にハケメ。外面は板状具小口によるナデ。内面横ミガキ。器受け部外面に鈿状装飾の接合痕跡を残す。	
第31図-88	器台	埋土	器受部1/3	口 (8.4) 底 — 高 —	①石英・白岩片・輝石の粗～細砂 ②にぶい黄橙	口縁横ナデ、内外面横ミガキ。	
第31図-89 PL16	器台	埋土	器受～脚上部1/2	口 (7.6) 孔径 1.3 高 —	①赤粒・バミス・チャートの粗～細砂多い ②にぶい黄橙	器受け部内外面に横ミガキ。脚外面縦ミガキ、内面ヘラナデ。	受け部中央剥離。
第31図-90 PL16	器台	埋土	脚部1/3	脚径 (10.8) 孔径 1.1	①石英・輝石・チャートの粗砂多い ②にぶい黄橙	外面縦ミガキ、内面ナデ。脚端下面に面取り。中位に3カ所の円孔。	
第31図-91	高杯	埋土	脚部片	口 脚径 (21.0) 高 —	①石英・チャート・白岩片の粗～細砂多い ②にぶい橙	裾端は丸める。外面は丁寧な放射状ミガキ、内面ヘラナデ、裾部横ナデ。3カ所の円孔。	
第31図-92	器台or高杯	埋土	脚部1/3	脚径 (14.0) 高 —	①輝石粗砂、ガラス微砂 ②にぶい橙	脚中位でやや外折して開く。外面縦ミガキ、内面は幅広のヘラナデ。	
第31図-93 PL16	高杯	埋土	脚柱部	口 脚 — 高 —	①バミス・ガラスの細～微砂を含む ②橙	外面は幅広の縦ミガキ、内面上位にしぼり目、下位は横ケズリ。脚柱部紋り段階のねじれがひび割れて残る。	
第32図-94 PL16	磨石	+12	ほぼ完形	長さ 14.2 幅 6.7 厚 6.5 重量 880.7 g	①粗粒輝石安山岩	上下端に細かい敲打痕、側面は斜走向の擦痕を残す摩滅面。	
第32図-95 PL16	磨石	-2.5	ほぼ完形	長さ 12.2 幅 8.3 厚 5.2 重量 814.0 g	①粗粒輝石安山岩	上下端に細かい敲打痕、裏面全体に摩滅面。	
第32図-96 PL16	石皿	-1.5	側縁が欠損	長さ 41.1 幅 — 厚 5.2 重量 5340 g	①緑色片岩	楕円形形状に縁取り整形。磨面はほぼ平坦で、摩滅のため光沢をもつ。	

11号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第33図-1	高杯	+16	口縁部片	口 (20.0) 脚 — 高 —	①白岩片・チャート・赤色粒の粗～細砂 ②赤褐	口唇部は内屈し、つまみナデ。口縁内外面は幅広い横ナデ→内面縦ミガキ。	
第33図-2	S字状口縁台付甕	+6	口縁～肩部片	口 (16.0) 底 — 高 —	①石英・輝石・赤色粒の粗～細砂多い ②浅黄橙	口縁内面中位に沈線。口縁横ナデ。口縁下段外面～頸部はヘラナデ。肩外面は斜ハケメ (13歯以上/20mm以上 1.5～2mmスパン)。内面は指押さえと指ナデ。	
第33図-3	鉢	+4.5	口縁～肩部片	口 (15.0) 底 — 高 —	①チャート・石英・赤色粒・輝石の細礫～細砂 ②にぶい赤褐	口唇部つまみナデ。口縁→胴外面縦ミガキ。口縁内面は横ミガキ、胴内面は丁寧なヘラナデ。	
第33図-4 PL17	甕	+13～22	口縁部～胴上部1/3	口 16.6 底 — 高 —	①赤色粒・チャート・白岩片の細礫 ②にぶい赤褐	口唇部つまみナデ。口縁内外面横ナデ。胴外面斜ケズリ。胴内面を指ナデとヘラ状具小口によるナデ。	外面全体に煤付着。
第33図-5 PL17	直口壺	+14	口縁部欠	口 — 底高 — 高 —	①赤色粒・白岩片の細礫 ②橙	胴外面下半を横ケズリ→肩に縦ミガキ。頸内面に紋り目、胴内面ヘラナデ。	底に円形黒班。
第33図-6	埴	埋土	口縁部1/3	口 (11.5) 底 — 高 —	①輝石粗砂多く、片岩粒も見られる ②にぶい橙	口縁内外面→胴外面は縦ミガキ。口縁胴部接合部にヘラ先で沈線を廻らす。胴内面は横ナデ。	
第33図-7 PL17	小型甕	+20	口縁部2/3～体部1/4	口 12.6 底 — 高 —	①赤色粒・チャート・石英の細礫、輝石の粗砂 ②にぶい褐	口縁内外面横ナデ。胴外面横ヘラナデ→下位を斜ミガキ。胴内面を指押さえ→ヘラナデ。	胴外面に煤付着。内面に焦げ痕。
第33図-8 PL17	有孔鉢	+15～19	底部一部欠	口 15.2 孔 (1.8) 高 10.9	①赤色粒・チャート・白岩片の細礫 ②にぶい橙	口唇部内屈。口縁横ナデ。体部外面縦ハケメ、下位斜ケズリ。体部内面横ハケメ、下位は丁寧な縦ナデ。	体部外面下位に摩滅痕と2次的被熱痕あり。
第33図-9 PL17・18	高杯	+19	ほぼ完形	口 18.8 脚径 (13.4) 高 14.4	①チャート・白岩片の細礫 ②にぶい黄褐	口縁横ナデ。杯外面下半をケズリ→ヘラナデ→まばらな縦ミガキ。杯部内面全体に縦ミガキ。脚部外面は幅5mm前後のヘラ状具小口による縦ナデ。脚内面は縦皺著しい。裾部横ナデ。	

第33図-10 PL17	高杯	+ 15.5	脚部1/2	口 ー 脚径 (14.2) 高 ー	①赤色粒・石英・輝石の粗～細砂 ②明赤褐	外面は暗文状の放射状ミガキ。内面ケズリ。裾部横ナデ。右上方へのらせん状紋り痕を残す。	
第33図-11 PL17	高杯	+ 15	脚柱部3/4	口 ー 底 ー 高 ー	①チャート・白岩片の細礫・輝石粗砂 ②にぶい赤褐	杯底部～脚部外面に縦ミガキ。杯底内面はミガキ。脚部内面は横ケズリ。裾部横ナデ。	

12号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第35図-1	S字状口縁 台付甕	埋土	口縁部片	口 (13.4) 底 ー 高 ー	①赤色粒・石英・輝石・白岩片等の細砂 ②褐灰	口縁上段は丸く肥厚。頸～肩外面は斜ハケメ(1.5mmスパン)。肩内面は指押さえ。	
第35図-2 PL17	小型甕	埋土	底部欠	口 14.0 底 ー 高 ー	①石英・赤色粒・チャート・輝石等の粗～細砂 ②にぶい橙	口縁横ナデ→内外ともまばらな縦ミガキ。胴外面斜～横ケズリ→肩にヘラナデ。内面は横ヘラナデ→粗い斜ミガキ。	胴外面に煤付着。
第35図-3 PL17	甕	埋土	頸～胴下部 3/4	口 ー 底 ー 高 ー	①赤色粒・石英・チャート等の細礫～細砂 ②橙	胴外面上半ヘラナデ、下半は同心円状ケズリ。内面指ナデ。胴中位に径11mmの円孔。	
第35図-4 PL17	鉢	埋土	完形	口 14.8 底 4.5 高 7.0	①片岩の細礫・微粒多い ②橙	口縁横ナデ。胴外面縦ケズリ、内面は横ヘラナデ。体部外面ナデ→下位を斜～横ケズリ。体部内面ヘラナデ→まばらな斜ミガキ。底面ケズリ。	
第35図-5 PL17	甕	埋土	口縁～胴部 1/2	口 (17.4) 底 ー 高 ー	①片岩・白岩片等の礫多い ②明黄褐	口縁横ナデ。胴外面縦ケズリ、内面は横ヘラナデ。	他の甕と胎土が異質。
第35図-6 PL17	甕	+ 2.5～8.5	口縁～胴下部 2/3	口 18.6 底 ー 高 ー	①赤色粒・チャート細礫多い ②にぶい褐	口縁上位肥厚し、弱く屈曲。胴外面を強い斜ケズリ、内面は平滑なヘラナデ。	外面下半に煤付着、被熱赤変。
第35図-7 PL18	甕	+ 4	口縁～胴下部 3/4	口 16.6 底 ー 高 ー	①赤色粒・石英・白岩片の細礫～粗砂多い ②にぶい褐	口唇部は内側に小さく肥厚し丸い。口縁横ナデ。胴内外面ともヘラナデ→底付近外面は粗いミガキ。	胴外面に煤付着とふきこぼれ痕。
第35図-8 PL18	台付甕	埋土	肩～脚部 1/4	口 ー 脚径 11.2 高 ー	①石英・チャート・赤色粒の粗砂多い ②黒褐	胴外面全体に斜ケズリ、内面は横ヘラナデ。脚部内外面とも指頭押圧の凹凸を残してナデ。	
第36図-9 PL18	甕	埋土	3/4	口 14.0 底 ー 高 ー	①チャート・パミスの細礫多い ②橙	口縁つまみ横ナデ。体部外面は上方ヘケズリ、内面幅広のへら状具小口による横ヘラナデ。	底部縁辺欠損のまま使用。内面に灰状白色物付着。
第36図-10	甕	埋土	胴部片1/2	口 ー 底 ー 高 ー	①赤色粒・チャート・パミス・輝石等の粗～細砂②暗褐	内外面ともヘラ状具小口によるナデ→内面下位に粗いミガキ。	
第36図-11 PL18	高杯	埋土	ほぼ完形	口 19.3 脚径 13.3 高 14.9	①赤色粒・チャート・白岩片の細礫多い ②橙	杯部内外面を幅広の横ナデ、杯底外面は細かいケズリ。脚部外面は粗い縦ミガキ、内面は回転しながらの横ケズリ。裾部横ナデ。	
第36図-12 PL18	高杯	埋土	ほぼ完形	口 17.7 脚径 14.9 高 14.6	①白岩片・片岩・ガラスの粗砂～微砂多い ②赤橙	杯部内外面を幅広の横ナデ。脚部外面は粗い縦ミガキ、内面は上位にしほり目残し、横ケズリ。裾部横ナデ。裾端は下方に肥厚。	
第36図-13 PL18	高杯	埋土	1/2	口 (17.6) 脚径 14.0 高 16.1	①片岩細礫～微砂多い ②橙	杯部内外面とも幅広い横ナデ→まばらな縦ミガキ。杯底外面は指押さえと指ナデ。脚外面縦ミガキ、内面は上位にしほり目残し下位を横ケズリ。裾部横ナデ。	
第36図-14 PL18	高杯	埋土	裾部一部欠	口 18.6 脚径 13.5 高 15.1	①赤色粒・輝石・白岩片・石英の粗～細砂 ②にぶい黄橙	口縁～杯部外面横ナデ→杯底外面に斜ミガキ。杯部内面は縦ミガキ。脚部外面縦ミガキ、内面は絞り目残し下位を横ケズリ。裾部横ナデ。裾端は下位に肥厚。	
第36図-15 PL18	高杯	埋土	杯部のみ	口 18.4 底 ー 高 ー	①赤色粒粗砂の他微砂含む ②明赤褐	外面横ナデ→斜ハケメ、杯底外面は浅いケズリ。口縁内面横ハケメ→杯部に縦ミガキ。脚部との接合は杯部からの粘土塊充填。	
第36図-16 PL18	高杯	埋土	杯部のみ	口 20.0 底 ー 高 ー	①パミス・白岩片の粗砂多い ②明赤褐	口唇部は弱い面取り。杯部内外面は横ナデ。杯底外面は指押さえとナデ。脚部との接合は杯部からの粘土塊充填。	
第36図-17 PL18	高杯	埋土	裾部欠	口 17.7 底 ー 高 ー	①白色岩片の中～細砂多い ②橙	口縁つまみ上げ横ナデ。杯部内外面とも丁寧な横ナデ→暗文状放射状ミガキ。杯底外面は指押さえとナデ。脚部外面は丁寧な縦ミガキ、内面横ケズリ。	

第4章 出土遺物観察表

第36図-18 PL18	高杯	埋土	脚部2/3	口 ー 脚径(13.8) 高 ー	①赤色粒細礫、チャート含む ②にぶい褐	脚部～裾部外面は縦ミガキ、内面は上位にしぼり目残し全体に横ケズリ。裾部内面横ナデ。裾端は下方に肥厚。
第36図-19 PL18	高杯	埋土	脚部2/3	口 ー 脚径(11.4) 高 ー	①赤色粒・輝石・石英の粗～細砂 ②にぶい黄橙	脚部～裾部外面は丁寧な縦ミガキ、内面は上位にしぼり目残し下位を横ケズリ。裾部内面横ナデ。裾端は下方に肥厚。
第36図-20 PL18	高杯	埋土	脚柱部片	口 ー 脚 ー 高 ー	①赤色粒の細礫～粗砂 ②橙	外面丁寧な縦ミガキ、内面は上位にしぼり目残し下位は指ナデ。杯部との接合はソケット挿入による。
第36図-21 PL18	高杯	埋土	脚部3/4	口 ー 脚径 14.0 高 ー	①赤色粒・チャート・輝石・石英の粗～細砂 ②にぶい褐	脚部～裾部外面はまばらな縦ミガキ、内面は上位にしぼり目残し下位を横ケズリ。裾部内面横ナデ。裾端は下方に肥厚。
第36図-22	高杯	埋土	脚柱部片	口 ー 脚 ー 高 ー	①赤色粒・パミス・石英・白岩片の粗～細砂 ②にぶい赤褐・内面黒	外面縦ミガキ、内面ナデ→ヘラ押さえ。

14号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第39図-1 PL19	壺	+8	口頸部2/3	口 13.6 底 ー 高 ー	①赤色粒・輝石・石英・白岩片の粗砂多い ②明赤褐	口縁は薄い粘土帯付加による折り返しで、外面指押さえと横ナデ。頸部外面は縦ナデ→上位横ナデ。内面は横ミガキ。	樽式系
第39図-2 PL19	壺	+2.5	頸部1/2	口 ー 底 ー 高 ー	①雲母微砂含む ②褐	頸部外面縦ミガキ、肩外面横ミガキ。頸部内面横ミガキ。頸～肩内面指押さえ→横ナデ。	
第39図-3	埴	埋土	口縁部片	口 (12.0) 底 ー 高 ー	①赤色粒の他ガラス微砂多い ②褐	口縁と胴部接合部の屈曲は弱い。口縁内外面横ナデ。胴部外面ナデ、胴内面はヘラナデ。	
第39図-4	甕	埋土	口縁部片	口 (16.0) 底 ー 高 ー	①きめ細かく、赤色粒・石英・チャートの細礫～細砂多い②暗褐	外面に3段の粘土帯積みあげ痕残り、斜縄文(LR)施文。内面丁寧な横ミガキ。	吉ヶ谷・赤井戸式
第39図-5	甕	埋土	口縁部片	口 (16.8) 底 ー 高 ー	①輝石・ガラス微砂多い ②暗褐	口縁は板状具小口による横ナデ。肩外面縦ハケメ、内面は横ヘラナデ。	
第39図-6	埴	埋土	底部片	口 ー 底 6.7 高 ー	①赤色粒・パミス・ガラスの細砂含む ②黒褐	胴部～底面横ミガキ。内面ナデ。	
第39図-7 PL19	S字状口縁 台付甕	埋土	胴下～脚部 1/2	口 ー 脚径 8.8 高 ー	①赤色粒・石英・チャート・ガラスの細礫～細砂含む ②暗褐	胴部外面は左上方への4段以上のハケメ(幅20mm以上 1.5～1mmスパン)。胴内面は横ヘラナデ→指押さえ→上位指ナデ。脚部外面左上方へ斜ハケメ、内面指ナデ上げ。	
第39図-8	鉢	埋土	口縁部片	口 (15.0) 底 ー 高 ー	①赤色粒・チャート細礫・輝石・角閃石の粗砂②明赤褐	内外面ともナデ→口縁は横、体部は縦のミガキ。	
第39図-9 PL19	高杯	+4～17.5	杯部2/3	口 18.5 脚 ー 高 ー	①白岩片・チャート・ガラス・パミスの細礫～細砂②明赤褐	杯部内外面は幅広い横ナデ→まばらな放射状ミガキ。杯底外面に横ナデ→ミガキ→部分的なケズリ。	
第39図-10	器台ミニチュア	埋土	脚柱上部片	口 ー 孔 0.7 高 ー	①パミス・赤色粒の粗～細砂 ②赤褐	外面縦ミガキ、内面ケズリ	
第39図-11 PL19	鉢	埋土	胴部片	口 ー 底 ー 高 ー	①白岩片細礫・石英・くされ礫・チャートの粗砂を多く含む ②明赤褐	外面は斜位の平行叩き目。内面は横ナデ。	韓半島系
第39図-12 PL19	壺	埋土	底部のみ	口 ー 底 7.1 高 ー	①赤色粒・石英の粗砂、ガラス微砂 ②明赤褐	外面縦ハケメ→斜ミガキ。内面は斜ハケメ(2～1.5mmスパン)。底面ケズリ。	底周縁はやや摩滅。
第39図-13 PL19	高杯	+3～4	脚部	口 ー 脚径 17.8 高 ー	①片岩・白岩片・チャートの細礫～粗砂多い ②明赤褐	脚部は弓なりに大きく外反して開く。杯底面ミガキ。外面縦及び斜ミガキ、内面は上位指ナデ、下位横ハケメ。中に3カ所の円孔。	
第39図-14	高杯	埋土	脚柱部	口 ー 脚 ー 高 ー	①赤色粒・パミス・チャート粗砂 ②明赤褐	外面縦ミガキ、内面絞り目を残す。	

15号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第40図-1 PL19	S字状口縁 台付甕	埋土	口縁部片	口底 (17.8) - 高 -	①赤色粒・輝石・石英 等の中～細砂 ②にぶい黄橙	口縁横ナデ、頸部～肩外面に斜ハケメ→頸部ヘ ラ先ナデ、肩に横ハケメ(2mm強スパン)。肩内 面ヘラナデ、頸横ヘラナデ。	
第40図-2 PL19	S字状口縁 台付甕	+6	口縁部片	口底 (16.0) - 高 -	①石英・輝石等の中～ 細砂 ②にぶい黄橙	口縁横ナデ、頸部～肩外面斜ハケメ(2mmスパン) →頸部ヘラ先ナデ、肩に横ハケメ。肩内面 に幅広いヘラナデ→頸部内面ヘラナデ。	
第40図-3 PL19	S字状口縁 台付甕	+9.5～10	口縁～肩部	口底 15.0 - 高 -	①片岩細礫～細砂 ②黒褐	口縁はヘラ状具小口による横ナデ、肩外面縦ハ ケメ(2.5mmスパン)。頸部内面指ナデ、肩内面 横ヘラナデ→指ナデ。	
第40図-4 PL19	小型S字状 口縁台付甕	埋土	口縁～肩部 片	口底 (9.6) - 高 -	①石英等の細砂 ②黒褐	口縁横ナデ。頸～肩外面に縦ハケメ(2mm強ス パン)。頸～胴内面ヘラナデ。	外面に煤付着。
第40図-5 PL19	S字状口縁 台付甕	+15	口縁部片	口底 (14.0) - 高 -	①微細なガラス・石英 をみる ②灰黄褐	口縁横ナデ。頸～肩外面に斜ケズリ→斜ハケメ (1.5mmスパン)→頸に細い櫛歯具による横ハケ メ。頸～肩内面ヘラナデ。	
第41図-6 PL19	壺	埋土	1/4	口底 (14.2) 7.2 高 (29.2)	①安山岩片・石英・黒 岩片・赤色粒の粗砂多 い ②赤橙～灰褐	口縁は粘土帯付加による折り返し、外面に指押 さえ痕→ナデ。頸部外面に縦ハケメ。胴外面上 半は横、下半は縦のミガキ。口縁～胴内面横ハ ケメ→横ミガキ。底面ミガキ。	胴内面下半に7 ×4mmの粉圧痕
第41図-7 PL19	柑	埋土	口縁部のみ	口底 12.6 - 高 -	①白岩片・石英等の粗 ～細砂多い ②橙	外面縦ハケメ→縦ミガキ。内面横ナデ→縦ミガ キ。	
第41図-8 PL19	甕(台付)	+10.5	口縁～胴上 部片	口底 (11.6) - 高 -	①赤色粒・石英・白色 粒の粗砂 ②にぶい黄橙～赤変	口縁外面縦ハケメ→横ナデ、内面横ハケメ。胴 外面は不定方向の斜ハケメ→ケズリ。胴内面指 押さえとナデ→横ハケメ。	
第41図-9	甕	埋土	口縁部片	口底 (12.4) - 高 -	①白色岩片・石英・輝 石等の粗～細砂 ②にぶい黄橙～灰白	頸～胴外面に縦～斜ハケメ→口縁横ナデ、頸部 に部分的なケズリ。口縁内面横ハケメ(2mm素 スパン)、胴内面は板状具小口面によるナデ。	
第41図-10 PL19	甕	+2	口縁～胴上 部片	口底 (15.0) - 高 -	①赤色粒細礫著しい ②にぶい黄橙	口唇外面に弱い面取り。外面は口縁～頸部に縦 ハケメ、肩に横ハケメ、胴部下半に縦ハケメ→ 口縁に横ナデ。口縁内面横ハケメ→横ナデ。胴 内面ケズリ→ヘラナデ。	千種甕類似
第41図-11	壺	+5	胴部片	口底 - - 高 -	①赤色粒細礫の他チャ ート・バミス・片岩 等の粗砂多い ②橙～暗赤	外面縦ハケメ→横ミガキ→下位縦ミガキ。内面 横ハケメ(3～4mmスパン)	内面全体に吸 炭。
第41図-12	高杯	+10	杯部片	口脚 (21.0) - 高 -	①赤色粒・チャート・ バミス・石英等の粗砂 多い②橙	内外面とも、斜ケズリ→横ハケメ→横ミガキ。	在来弥生系
第41図-13	高杯	埋土	杯部片	口脚 (16.0) - 高 -	①キメ細かく、チャ ート・バミス・砂岩等 の細砂含む②にぶい黄 橙	内外面とも丁寧な横ミガキ→体部内面下半を縦 ミガキ。	在来弥生系
第41図-14	鉢	埋土	口縁～肩部 片	口底 (16.0) - 高 -	①赤色粒・バミス・チ ャート等の粗～細砂 ②にぶい黄褐	口縁は外面に稜線をもって緩く屈曲。口縁横ナ デ→縦ミガキ。胴部横ミガキ。	北陸系か。
第41図-15 PL19	器台	埋土	1/2	口脚径 (8.8) 高 11.8 8.4 高 0.8	①黒色粒・赤色粒・石 英の粗～細砂 ②外面暗灰黄・内面橙	外面は縦～斜ハケメ→横ナデ→縦ミガキ。器受 け部内面はナデ→放射状ミガキ。脚部内面は横 ハケメ→横ナデ。脚中位に3カ所の円孔。	
第41図-16 PL19	高杯	埋土	杯底～脚上 部	口脚 - - 高 -	①白岩片・バミス・石 英の粗～細砂多い ②にぶい黄橙	外面縦ミガキ、杯底面ミガキ。脚部内面ハケメ。 脚上位に3カ所の円孔。	

16号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第42図-1	台付甕	埋土	脚部片	口底 - - 高 -	①チャート・石英・赤 色粒の細礫～粗砂多い ②橙	外面縦ハケメ→脚接合部をナデ。底面ナデ、脚 内面は植物茎状具による掻き目を残し指ナデ。	

17号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第43図-1	壺か甕	埋土	頸~胴部片	口底高 —	①チャート・石英・赤岩片の粗~細砂 ②暗褐	頸部に等間隔簾状文(10歯/13mm)→肩に3段以上の櫛描波状文。内面は丁寧な横ミガキ。	樽1式か2式古
第43図-2	甕	埋土	口縁部片	口底高 —	①赤色粒・輝石・石英等細砂多い ②明赤褐	やや下位が肥厚する折り返し口縁。口縁~頸部に上から下方へ櫛描波状文(9歯/14mm)を重ねる。内面は丁寧な横ミガキ。	樽3式
第43図-3	S字状口縁台付甕	埋土	口縁部片	口(17.0) 底高—	①片岩・石英・チャートの粗砂多い ②黄橙	口縁横ナデ。頸~肩外面斜ハケメ(1mm前後スパン)→頸部横ナデ。肩内面指ナデ上げ。	
第43図-4	高杯	埋土	杯部片1/3	口底高 —	①パミス・石英・輝石の粗~細砂多い ②橙	杯底下端に小さな稜。内外面赤彩→縦ミガキ。	樽式と東海系小型高杯の折衷。
第43図-5	埴	埋土	口縁~肩部片1/6	口(9.7) 底高—	①輝石・ガラスの細砂 ②にぶい黄橙	口唇部は内屈し、小さく肥厚。胴外面ナデ→下半は粗いミガキ。胴内面は指ナデ→口縁横ナデ。	
第43図-6	S字状口縁台付甕	埋土	脚部片	口脚径(10.0) 高—	①チャート細礫・粗砂多い ②明赤褐	外面左上方への斜ハケメ(2~1.5mmスパン)。内面横ナデ。天井部に砂目粘土付加。	
第43図-7	高杯	+5	脚上部	口底高 —	①石英・輝石の粗砂多い ②明赤褐	脚部外面縦ミガキ。杯底面ミガキ、脚部内面は幅の狭い板状具小口によるハケメ。3カ所の円孔。	
第43図-8 PL19	甌	+4	胴下部1/3	口(5.8) 底(3.8)	①白岩片・チャート・石英の細礫~粗砂多い ②明黄褐	外面縦ケズリ→下端横ケズリ。内面は幅広い横ヘラナデと指ナデ。底孔は焼成後に大きく穿孔し直す。	
第43図-9 PL19	滑石製模造品	埋土	1/2	長さ 3.1 幅 2.2 厚さ 0.4 孔径 0.2 重量 5.51g ①褐色の かった滑石		剥離した板状素材→片側から穿孔→研磨。	剣形か
第43図-10 PL19	滑石製模造品	埋土	破片	長さ 1.1 幅 3.1 厚さ 0.5 重量 1.59g ①灰オリーブ色の滑石		側縁に研磨による抉り。	器形不明

18号住居遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第44図-1	S字状口縁台付甕	埋土	口縁部片	口(16.0) 底高—	①片岩・雲母の粗砂多い ②にぶい黄橙	口縁は小さく屈曲土は強い。肩外面に斜ハケメ(2mmスパン)、口縁下段にハケメ整形時の櫛歯のあたり痕を残す。内面は浅いハケメ→ナデ。	
第44図-2	高杯	埋土	脚柱部片1/6	口底高 —	①輝石・石英・パミス・チャート ②明赤褐	外面縦ミガキ、内面上位に軸孔を残し、縦ナデ。中位に3カ所の円孔。	
第44図-3	小壺	埋土	口縁~胴部片	口(11.6) 底高—	①輝石・石英・チャートの粗砂 ②橙	外面は口縁横ナデ→全体に縦ミガキ。内面全体に横ミガキ。	
第44図-4 PL19	(壺)	埋土	底部のみ	口底高 4.9	①赤色粒・チャート・輝石・石英の粗砂多い ②赤褐	外面は縦と横ミガキ。内面ナデ。底面はケズリ。	
第44図-5	土器片利用の砥具	埋土	破片	口底高 —	①輝石粗砂多い ②淡黄	樽式壺肩片の側縁を研面とする。側縁はほぼ直線的で、長軸方向の研磨擦痕を残す。軟質な対象物への溝切りとも考えられる。	
第44図-6	土器片利用の砥具	埋土	破片	口底高 —	①輝石・石英の粗砂多い ②にぶい黄橙	壺胴部片の側縁を研面とする。側縁はやや湾曲し、長軸方向の研磨擦痕を残す。軟質な対象物への溝切りとも考えられる。	

1号方形周溝墓遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第48図-1 PL20	壺	北東辺北寄+35	口縁部	口底高 14.3	①パミス・白岩片・石英の粗~細砂を多く含む ②灰褐~黒	粘土帯付加による肥厚口縁でやや内彎気味に開く。頸部外面縦ハケメ→頸部縦ミガキ、口縁横ミガキ。頸部内面は縦~斜ミガキ、口縁内面横ミガキ。	

第48図-2	壺	北西辺中央+55.5	口縁部片	口底高 (12.8) -	①石英・長石・チャート・輝石等の粗～細砂を含む②灰褐色	幅広い粘土帯付加による折り返し口縁。口唇外縁に面取り。口縁外面横ナデ、下端指押さえ、頸部外面縦ハケメ。口縁内面は横ミガキ。	
第48図-3	壺	埋土	口縁部	口底高 -	①粗い粘土に粗～細砂多い。輝石・石英・砂岩・赤色粒目立つ③灰白	口縁弱く内彎して開く。外面に櫛描波状文(3歯/12mm)。内面赤彩→ミガキ。	(中期末～後期初)
第48図-4	壺	埋土	口縁部	口底高 -	①粗い粘土に粗砂多い。片岩・輝石・赤色粒目立つ②灰白	口縁内彎して立ち、口唇部丸い。外面に櫛描波状文(8歯/16mm)。内面赤彩→横ミガキ。	中期後半～後期初
第48図-5	壺	北西辺西寄+35.5	口縁部	口底高 -	①石英・輝石の細砂多い②灰褐	口縁内彎気味に開き口唇部はとがる。頸部に乱れた等間隔簾状文。外面は縦ヘラナデ→口縁横ナデ。内面は横ミガキ。	樽1式
第48図-6 PL20	壺	北西辺北寄-1～+38.5	口縁～頸部1/2	口底高 (14.5) -	①安山岩片・輝石・石英を多く含む②浅黄橙	口唇部外折、口縁～頸部は直立気味に開く。口縁外面横ナデ、頸部に4分割の3連止簾状文→肩に櫛描横羽状文(11歯/15mm)、頸部に縦ミガキ。口縁～頸部内面は横ミガキ、肩内面はナデ。	樽3式(富岡型)
第48図-7 PL20	壺	北西辺中央+30	口～頸部	口底高 15.8 -	①輝石・石英・パミスの細砂多い②浅橙	口縁は薄い粘土帯付加による折り返しで、口唇部はわずかに内彎する。口縁横ナデ、頸部に櫛描横線文→頸部外面に丁寧な横ミガキ、肩に櫛描横羽状文。口縁～頸部内面に横ミガキ、肩内面はナデ。	樽3式(富岡型)
第48図-8 PL20	壺	西隅+26.5～30.5	口縁部4/5	口底高 18.2 -	①パミス・輝石の粗砂多い②浅黄～灰黄	口唇外面は沈線状ナデによる面取り。口縁外面下半は弱い段。口縁外面は縦ミガキ、内面は口唇部横ハケメ→全体に斜ミガキ。肩内面はナデ。	
第48図-9	壺	埋土	口縁部	口底高 -	①石英・長石・チャート・砂岩・輝石等の粗～細砂②淡橙	口縁に2帯の細い粘土帯付加による2段の折り返し口縁とし、突出部にヘラによる刻みを廻らす。頸部外面縦ミガキ、内面横ミガキ。	樽3式
第48図-10 PL20	壺	西隅+6.5～16.5	口縁2/3、胴～底を部分的に欠く	口底高 (20.3) 13.5 48.8	①赤色粒・白岩片・チャート・輝石等川砂の細砂～粗砂多く②赤橙	口縁は幅広い粘土帯付加による折り返し口縁で、口唇部は丸い。口縁外面に2段の櫛描波状文。頸部外面に6分割の3連止簾状文→肩に3段の櫛描波状文→肩部対称位置4カ所に相対するJ字文(10歯/17mm)。頸部外面に縦ケズリ→ナデ。胴外面に縦ミガキ。口縁内面横ミガキ。胴内面はナデ。底面及び縁部は著しい摩滅。焼成後外側からの打割による穿孔。	
第48図-11 PL20	壺	北西辺西寄+18～35.5	頸～肩部1/2	口底高 -	①輝石の細砂多い②明褐色～橙	頸部外面縦ヘラナデ→上位横ナデ、頸部に弱く不安定な多連止簾状文→肩に3段の櫛描波状文(7歯/15mm)を重ねる→胴無文部はミガキ。頸部内面は丁寧な横ミガキ、胴内面はナデ→横ミガキ。	樽3式
第49図-12 PL20	壺	北西辺西寄+30	口～肩部1/2欠	口底高 (16.2) 7.0 25.0	①輝石・チャート・安山岩の粗～細砂多い②橙、まばらな黒斑あり	口縁下位に細い粘土帯付加による凸帯。口唇外端と凸帯にヘラ状具による刻みを廻らす。頸部に櫛描横線文→肩に3～4段の櫛描波状文、頸部外面に縦ミガキ、胴部上半横ミガキ、下半縦ミガキ。口縁～頸部内面は丁寧な横ミガキ、胴内面は粗い横ミガキとナデ。底面ミガキ。胴過半の1カ所に外側から直径8mmの穿孔。	樽3式。底部周縁は摩滅。
第49図-13 PL20	小型甕	北東辺北寄+19	完形	口底高 11.0 5.8 11.5	①白色岩片・輝石・石英の粗～細砂含む②赤褐	口唇部はわずかに肥厚する。口縁～頸部に縦ハケメ→5～6段の櫛描波状文(4～5歯/11mm)→胴外面横ミガキ。内面全体に横ハケメ→横ミガキ。底面は粗いミガキ。胴下位1カ所に内側から直径18mmの打割穿孔。	樽3式。底面に1カ所の刴圧痕(6×3.2mm)
第49図-14	壺	埋土	頸部	口底高 -	①赤色粒・石英・チャート・輝石等の粗～細砂含む②褐色	頸部外面に縦ハケメ→簾状文か横線文。口縁～頸部外面に縦ミガキ→下位に横ミガキ。内面は横ハケメ→横ミガキ。	樽3式か
第49図-15	壺	埋土	頸部	口底高 -	①安山岩片と石英の粗～細砂多い②橙	頸部に反時計回りの等間隔簾状文。肩外面は縦ハケメ。内面ヘラナデ。	簾状文施文方向は一般例と逆。
第49図-16	壺	北西辺中央+28.5	肩部	口底高 -	①雑多な河原砂の細砂を含む②淡橙	頸部上位に1条のヘラ描横沈線で画し、1.5～2cmの短いスパンで2連止簾状文を廻らす。その下位に3段の櫛描横線文(9歯/12mm)。内面はヘラナデ→粗い横ミガキ。	樽2式
第49図-17	壺	北西辺中央+51.5	肩部	口底高 -	①石英・白岩片・輝石の細砂多い②白灰	外面にヘラナデ→肩に上から、櫛描波状文・等間隔簾状文・櫛描縦羽状文か斜格子文を描く。櫛歯具は9歯/16mm。内面はナデとまばらなミガキ。	樽1式

第4章 出土遺物観察表

第49図-18	壺	北東辺北寄 +27.5	頸部	口底高 -	①赤色粒細礫~粗砂と輝石の細砂多い ②橙~灰	頸部に櫛描横線か感覚の広い簾状文→肩に櫛描横羽状文。頸部内面横ミガキ、肩内面ナデ。	樽式(富岡型)
第49図-19	壺	北東辺北寄 -1	頸~肩部	口底高 -	①石英・長石・白色岩片・の粗~の細砂を多く含む②暗灰橙	頸部に4分割と思われる多連簾状文(10歯/18mm)→肩に櫛描横羽状文。	樽式(富岡型)
第49図-20	壺	北西辺中央 +31.5	肩部片	口底高 -	①赤色粒・輝石・チャート等の河原砂を含む ②橙	肩外面に斜ハケメ→間隔をあけた櫛描垂下文→2条の横線文。大振りな格子目文ともいえる。胴無文部は横ミガキ。内面ヘラナデ。	
第49図-21 PL20	壺	東隅 +34.5	口縁1/4 胴部2/3	口底高 15.7 9.0 29.8	①パミス・輝石・石英の粗~細砂多い。白色針状物質も少量含 ②灰橙	口縁は幅広い粘土帯付加による無文の折り返しで横ナデ→横ミガキ。頸部に櫛描横線文→下位に櫛描斜線文(12歯/15mm)、頸部外面に縦ミガキ、胴部上半に全体を4~5分割した横~斜ミガキ→胴中位横ミガキ→胴下半縦ミガキ。口縁~頸部内面は横ミガキ、胴内面は横ヘラナデ。底面は平坦なヘラナデ。肩に外側から直径20mmの穿孔、孔縁辺を整形する。	樽式最終段階。文様は富岡型の名残。
第49図-22 PL20	壺	西隅 +35.5	口縁~肩部 3/4	口底高 13.2 -	①白岩片・片岩・石英・輝石等の細礫多い ②橙~灰	口縁は弓なりに外反し、2段の粘土帯接合痕を装飾的に残す。口縁~頸部外面は指押さえとナデ。頸部~肩外面は不定方向ハケメ。口縁~頸部内面は横ハケメ。胴内面はヘラナデ。	口唇部、頸部の内外面に計3カ所の初圧痕を残す。
第49図-23 PL20	広口短頸壺	北西辺中央 +28.5~31	口縁と胴部 一部欠	口底高 12.0 5.4 13.8	①赤色粘土混に安山岩系岩片・鉱物・パミスの粗砂含む ②赤橙	口唇部つまみナデ、口縁下位に粘土帯付加による弱い段状の折り返し。口縁外面は指押さえ、胴全体に斜ミガキ→胴下半の一部に縦ミガキ。口縁~胴内面は丁寧な横ミガキ。底面はナデ。	外面に煤付着、内面下半にオコゲ痕あり。
第50図-24 PL20	壺	東隅 +4~11.5	口~肩部 3/4	口底高 18.5 -	①白色岩片・花崗岩片・片岩の細礫多く含む ②暗褐~橙~灰黒	口縁は幅広く薄い粘土帯を付加した折り返し。口縁に1帯、肩に2帯の斜縄文(幅4cm前後LR)。無文の頸部、胴及び口縁~胴内面は横ミガキ。	吉ヶ谷・赤井戸式。口唇部の剥離、人為的な肩欠損面の整形から、倒立土器台として転用されたと思われる。
第50図-25 PL20	壺	北西辺中央 +29.5~34	口縁部1/3 胴部1/2欠	口底高 13.8 6.0 20.2	①輝石安山岩系の岩片・鉱物の粗砂多い ②暗褐~赤橙	口縁は幅狭くやや厚い粘土帯付加による折り返しで無文。口縁外面ナデと指押さえ。肩に2帯斜縄文(幅2cmRL)。頸部外面斜ハケメ→縦ミガキ。胴中位横ハケメ→横ミガキ→胴下半縦ミガキ。口縁~頸部内面横ハケメ→横ミガキ。胴内面横ミガキ。底面ケズリ。	吉ヶ谷・赤井戸式。口縁~胴上半外面に煤付着。
第50図-26 PL20	甕	北隅 +6.5	口縁~胴下 半約1/6	口底高 (17.0) -	①白岩片・石英・輝石の粗~細砂多い ②灰橙	口縁~胴中位に11帯の横位斜縄文(幅3cm弱RL)。胴外面と内面全体に丁寧な横ミガキ。	吉ヶ谷・赤井戸式。胴外面中位に煤付着。
第50図-27 PL20	壺	北西辺北寄 +0.5	口縁部	口底高 11.0 -	①きめ細かく輝石等黒色の細砂多い ②素地は黄白色	粘土帯付加による折り返し口縁、口唇部に縄押圧、口縁外面と肩に斜縄文(LR)。頸部外面は縦、口縁~頸部内面は横ミガキ。外面全体と口頸部内面に赤彩。	吉ヶ谷・赤井戸式。外面及び口頸部内面に赤彩。
第50図-28	壺	埋土	口縁部	口底高 -	①石英・白岩片の粗砂多い ②橙	口唇部の尖る折り返し口縁。口縁に斜縄文(RL)。頸部外面は横ヘラナデ。内面横ミガキ。	
第50図-29	甕	埋土	口縁部	口底高 -	①石英・輝石の粗砂多い ②赤褐色	口唇部尖り、斜縄文を施文。口縁外面に斜縄文(LR)。内面横ミガキ。	
第50図-30	壺	埋土	肩部	口底高 -	①輝石の細砂多い ②灰白	斜縄文(0段多条に燃糸を用いるLRL)→丸棒状具による横沈線。内面ナデ。	
第50図-31	甕	埋土	肩部	口底高 -	①石英・長石・チャート・輝石等雑多な河原砂(細砂)を含む ②灰白	斜縄文(L LR+2R)。	
第50図-32	甕	埋土	肩部	口底高 -	①輝石・白岩片の細砂(河原砂)を多く含む ②にぶい黄橙	肩に斜縄文(LR)、無文部横ミガキ。内面横ミガキ。	
第50図-33	壺	埋土	肩部	口底高 -	①輝石の細砂多い ②灰白	櫛描波状文、下位に斜縄文(LRL)。	30と同一個体と思われる
第50図-34 PL21	壺	北隅・東隅 +6~10	肩~部1/4	口底高 -	①白色岩片・砂岩・赤色粒・安山岩片等の亜円礫細礫、輝石の粗砂を含む②橙	外面横ミガキ、内面横ハケメ。	内面剥離著しい。

第51図-35 PL21	弥生 壺	東隅 +6.5~38	完形	口 底 高 孔	24.1 11.9 43.9 5.4	①・赤色酸化鉄粒・チャート等の砂礫・石英粒多し ②淡橙 彩色-暗赤色	幅3.5cmの粘土帯を付加した折り返し口縁。口唇部上面を平坦。口縁~口縁外面に網目状燃糸文→4カ所7~8本組の棒状貼付文→赤彩。頸部、肩部に縦ハケメ→沈線文様区画→網目状燃糸文→赤彩→無文部ミガキ。施文原体は一辺約2.5mmの方柱状軸にほとんど燃りの見られない纖維束をZ→Sに巻き付けた絛条体。胴部は中位が縦、下位が斜~横ハケメ→縦ミガキ。口頸部内面は赤彩→ミガキ、胴内面は丁寧な横ヘラナデ。底部内面にハケメを残す。底部中央に直径5.4cmの外側からの打割穿孔。	南関東系
第52図-36 PL21	弥生 壺	北隅 +25	1/2	口 底 高	17.1 8.9 35.6	①石英、長石等赤色鉱物多く赤色酸化鉄粒目立つ ②灰黄褐色	口縁は3.5cm幅の粘土帯を付加した折り返し。口唇部上面を平坦にし、櫛状具によるハケメ。口縁外面横ハケメ→斜縄文(LR)。肩の一部に斜縄文(LR)。口縁を除く外面全体と口頸部内面に赤彩→ミガキ。胴内面は横ヘラナデ、下半は横ハケメを残す。底部穿孔の可能性あるが欠損により不明。	南関東系
第52図-37 PL21	壺	東隅 +2.5~46.5	0.5	口 底 高	(14.8) (8.2) 22.0	①石英・チャート・赤色粒・黒岩片・砂岩・パミス等粗~細砂含む ②淡橙	口唇部外側に平坦面。外面全体と口頸部内面に横~斜ハケメ→板状具ヘラによる赤彩。胴内面横ヘラナデ。	南関東系
第52図-38 PL21	壺	北西辺中央 +47.5	口縁~肩部 欠	口 底 高	- 6.0 -	①赤色粒・白色岩片・輝石等の粗~細砂を含む ②暗褐(チョコレート色)	胴外面縦ミガキ→上~中位に斜ミガキ。内面へら先ナデ、下半横ミガキ。底部突出し、底面は粗いミガキ。	
第52図-39 PL21	壺	西隅 +38.5	口縁欠	口 底 高	- 10.3 -	①石英・輝石・赤色鉱物の粗~細砂多い ②明褐色	肩外面に2帯の斜縄文(RR)。原体末端の結節回転圧痕を廻らし、文様要素とする。胴外面は斜~縦ミガキ。頸部内面横ミガキ、胴内面は横~斜ヘラナデ。底面ヘラナデ。	底面中央に初圧痕1カ所。底周縁は摩滅する。
第52図-40 PL21	壺	北東辺中央 +32.5	口縁部欠	口 底 高	- 4.0 -	①白岩片・輝石・石英の粗~細砂 ②灰橙	頸部外面は縦、胴は横のハケメ。頸部内面は横ハケメ、胴内面は斜ハケメ→ナデ。底面ヘラナデ。	
第52図-41	壺	北西辺北寄 +35.5	肩部	口 底 高	- - -	①チャート・石英・輝石・白岩片等の河原砂(粗~細砂)を多く含む ②にぶい黄橙	肩に2帯の斜縄文(R)を施文し、中央に下段の縄原体末端結節を廻らす。この結節文上に小さな円形貼付文。内面ナデ。	
第52図-42	壺	北西辺北寄 +10.5~5.5	肩部片	口 底 高	- - -	①黒色岩片・チャート・石英の粗砂、ガラス細砂を含む ②淡橙	肩上位から櫛状具による縦垂下文→横線文→波状文→横線文。内面は平滑な工具によるナデ。	東海西部系(西遠江か)
第53図-43 PL21	壺	北東辺中央 +40.5~45.5	口縁部1/2 胴部1/3欠	口 底 高	19.6 7.8 32.9	①石英・無色岩片の細礫多い ②灰白色	口唇部上方へつまみナデ、外側に面取り→櫛状具による刺突。肩に縦ハケメ→横ハケメ(9歯強/20mm前後)。口頸部外面縦ヘラナデ→上半横ナデ。胴外面は左上がりの斜ケズリ→肩部縦ヘラナデ。口頸部内面横ハケメ→横ナデ。胴内面斜ヘラナデ。	底面に初圧痕(9×4mm)2カ所。
第53図-44 PL21	壺	北西辺中央 +47.5~54	口縁小片	口 底 高	(19.0) - -	①赤色粒の細礫のほか微細砂を含む ②明橙	有段の二重口縁で、口唇部は外側に平坦面。外面は縦ミガキ、内面は横ミガキ。	
第53図-45 PL21	壺	埋土	口縁部1/4	口 底 高	(19.5) - -	①石英・輝石(角閃石か)の粗砂多い ②暗灰褐(チョコレート)	有段の二重口縁で、口唇部は外折つまみナデ。口縁内外面にまばらな放射状ミガキ。	
第53図-46	高杯か器台	西隅 +9.5	坏部約1/5	口 底 高	(27.0) - -	①赤色粒・パミス・円磨した輝石等の粗~細砂多い。金雲母を微量 ②橙	口縁内面で弱く内折し、外面に突出段を作る。口縁内外面に縦ハケメ→丁寧な横ミガキ。	北陸系
第53図-47	壺	北西辺北寄 +32	口縁部片	口 底 高	- - -	①白岩片・石英・細角礫(砕いたものか)を多量に含む。 ②暗褐色	下端を厚くした粘土帯付加による折り返し口縁。口縁は直立気味の外反形状で下端に強い稜をつくる。外面縦ハケメ→横ナデ。内面横ハケメ→口縁のみ横ナデ。	駿河湾系(大廓式系)
第53図-48 PL21	壺	北東辺北寄 +12	口縁~肩部 1/3	口 底 高	(13.0) - -	①半伏砂岩・片岩・石英・輝石・パミスを含む ②橙	口縁外折し、口唇部外側に幅広い平坦面。口頸部外面に縦ハケメ→肩に横ケズリ、口縁横ナデ。口縁内面横ナデ、肩内面は絞り目残し指ナデ上げ。	北陸北東部系か
第53図-49 PL21	壺	北西辺中央 +30.5	口縁~頸部 1/3	口 底 高	(13.2) - -	①輝石・石英の粗~細砂を含む ②灰	口縁外反し、口唇部外側に弱い平坦面→横ミガキ。口頸部外面縦ミガキ。口頸部内面は丁寧な横ミガキ。肩内面ナデ。	北陸北東部系か
第53図-50 PL21	壺	北西辺中央 +27	口縁~肩部 1/3	口 底 高	14.5 - -	①片岩・輝石・石英の粗砂多い ②橙	口唇部は上下に延びる平坦面で板状具小口によるナデ。同様の工具により、口頸部外面は横ナデ、胴外面は縦ナデ。口頸部内面横ナデ、頸~肩内面はヘラナデ。	

第4章 出土遺物観察表

第53図-51 PL22	壺	北東辺中央 +39	口縁～肩部 1/2	口底 18.5 — — — — — —	①片岩・輝石・石英・ 赤色粒の粗～細砂を含 む②浅黄橙	口唇部は粘土帯付加による有段状。口頸部内外 面とも横ナデ。肩外面縦ハケメ→横ミガキ。肩 内面指押さえ、ナデ。	
第53図-52 PL22	壺 (直口壺)	北西辺中央 +28.5	口縁部	口底 13.6 — — — — —	①片岩・パミス・チャー ト・輝石・石英等粗砂 粒多い②暗褐色	口唇部外側に平坦面。口頸部外面に縦ハケメ→ まばらな縦ミガキ。口唇→口頸部内面横ハケメ →まばらな縦ミガキ。	
第53図-53 PL22	壺	北西辺中央 +55.5	口縁部1/4	口底 (14.0) — — — — —	①白岩片・片岩・パミ ス等の粗～細砂含む ②灰褐～暗褐	粘土帯付加による折り返し口縁だが剥離。口縁 外面縦～斜ハケメ。頸～肩外面横ミガキ。口頸 部内面横ミガキ。	
第54図-54 PL22	壺	北西辺北寄 +19	口縁～肩部 1/3	口底 (12.8) — — — — —	①チャート細礫・石英・ 輝石の粗～細砂を含む ②浅黄橙	口頸部外面斜ミガキ、内面横ミガキ。胴外面横 ～斜ミガキ、内面は指押さえ→粗いミガキ。	
第54図-55 PL22	壺	北西辺中央 +23	完形	口底 12.3 18.7 4.7	①キメ細かい粘土に白 色岩片・石英の粗～細 砂を多く含む②橙	外面全体に縦ハケメ→口縁横ナデ、底付近縦ミ ガキ。頸部内面斜ハケメ、胴内面横ヘラナデ。 底面はケズリ→ミガキ	
第54図-56 PL22	直口壺	北西辺中央 +23	胴部1/4と 底部を欠く	口底 12.8 — — — — —	①輝石を含む安山岩系 の岩片や鉱物の粗砂多 い②明橙	口縁外面横ナデ→外面全体に縦ミガキ、底付近 は斜ヘラナデ。頸部内面にしぼり目残し、内面 全体に斜ヘラナデ→口縁内面のみ横ミガキ。	胴外面下半に煤 付着。
第54図-57 PL22	直口壺	北東辺中央 +35	口縁～肩部 2/3欠	口底 (16.2) 4.3 22.2	①パミス・石英・輝石・ 白岩片の細砂多い ②明橙～黄橙	口縁外面横ミガキ→口頸部内外面に縦ミガキ、 胴上半斜ミガキ、下半横ミガキ。胴内面横ハケ メ→横ヘラナデ。底面は小さな平底でミガキ。	
第54図-58 PL22	埴	東隅 +33.5	口縁一部欠	口底 12.0 3.8 17.6	①長石・石英・輝石・ 白岩片の粗砂多い ②赤橙、底部黒斑	口頸部外面横ハケメ→口縁横ナデ→縦ミガキ。 胴外面斜ハケメ→横ミガキ。口頸部内面縦ミガ キ、胴内面はケズリに近い横ナデ。	
第54図-59 PL22	埴	北西辺北寄 +41	頸～底部 1/2	口底 — 2.5 — — —	①赤色粒目立ち、他に は細砂を含む ②灰黄	胴外面全体にミガキ、頸部内面ミガキ、胴内面 ナデ、底部内面にハケメ残す。	
第54図-60 PL22	埴	北東辺中央 +31.5	口縁・胴部 1/2欠	口底 — 3.2 — — —	①白色岩片・石英・赤 色粒を多く含む ②明赤褐	口頸部外面横ナデ、胴外面ナデ様のケズリ。胴 内面ヘラナデ。	
第54図-61 PL22	直口壺	北東辺中央 +29.5	口縁欠・胴 中位1/3欠	口底 (19.5) 5.2 36.1	①白岩片・赤色粒・パ ミス・輝石等の粗～細 砂含む②明赤褐	胴外面横ケズリ→肩と底付近に縦ミガキ。内面 は板状具小口によるナデ。底面やや上げ底でケ ズリ。	
第54図-62 PL22	(直口壺)	北西辺北寄 +61	頸～肩部 1/3	口底 — — — — —	①白岩片・パミス・片 岩の細礫～粗砂多い ②灰褐色～橙	口頸部外面横ナデ、胴外面斜ケズリ→斜ミガキ。 口頸部内面横ナデ→斜ミガキ、頸部内面指押さ え→胴内面指ナデ上げ。	
第55図-63 PL22	壺	北西辺中央 28.5	肩部1/3	口底 — (8.4) (4.5)	①パミス・輝石・石英・ 白岩片を含む ②灰褐色	口頸部外面縦ミガキ、肩外面縦ハケメ→横ミガ キ。頸部内面横ミガキ、肩内面は指押さえ→粗 いミガキ。	
第55図-64 PL22	小型甕(5 の字口縁)	北東辺中央 +20.5	口縁部1/3 胴1/2～底 部を欠く	口底 14.2 — — — — —	①白岩片・パミス・輝 石の粗～細砂多い ②暗灰褐～橙	口縁内外面縦ミガキ→外面にまばらな横ミガ キ。頸部～肩外面横ミガキ、胴外面斜ミガキ。 胴内面は横ヘラナデ。	北陸系
第55図-65 PL22	壺	埋土	頸～肩部 1/3	口底 — — — — —	①赤色粒・パミス・石 英・輝石(角閃石?)・ チャートの細砂 ②外面赤橙、内面黒灰	頸部内外面に斜ハケメ→横ナデ。肩外面に右上 がりの細かい平行叩き目(2.5～3mmスパン)→ 斜ハケメ。頸部内面に絞り目残し、平滑な布状 具に在るナデ、胴内面に斜ハケメ。	畿内系
第55図-66 PL22	広口甕	北西辺中央 +28.5	体部の一部 欠	口底 17.0 6.6 12.4	①赤色粒の細礫多く、 輝石・石英等の細砂を 含む ②灰黄橙	口縁強く外折して、口唇部雑な面取り。口縁外 面は縦、胴外面は横、底部付近は縦方向の板状 具小口ナデ。口頸部内面は雑な横ミガキ、胴内 面は横方向の板状具小口ナデ。底面はケズリ。	
第55図-67 PL22	小型広口短 頸壺	北西辺北寄 +45.5	ほぼ完形	口底 11.4 2.8 10.5	①輝石の粗～細砂多い ②淡黄橙	口縁内外面横～斜ハケメ→口縁外面横ナデ。胴 外面横ハケメ→肩横ミガキ→胴下半縦ミガキ。 胴内面横ヘラナデ。底面凹み底。	北陸系か
第55図-68 PL22	小型甕	北西辺北寄 +10.5	完形	口底 13.1 5.0 12.6	①赤色粒・パミス・輝 石の粗砂多い ②灰橙～暗褐	口縁外面中位に積上げ痕残り横ナデ、胴外面横 ～斜ケズリ→肩は斜ナデ、底付近横ミガキ。胴 内面上半横ケズリ→内面下半斜ヘラナデ。底面 ケズリ。	外面胴下半に煤 付着。
第55図-69 PL22	小型甕(台 付の可能性 あり)	西隅 +6.5～31	口縁～胴下 部1/2欠	口底 (12.1) — — — — —	①輝石・片岩・砂岩・ 赤色粒・パミス・石英 の粗～細砂②暗褐色	口縁内外面横ナデ。肩外面縦ハケメ→胴外面に 板状具小口による横ナデ。胴内面は目の細かい 板状具小口による横ヘラナデ	
第55図-70 PL23	壺	北西辺西寄 +20～42	口縁部片	口底 — 8.0 — — —	①赤色粒・白色岩片・ パミス・石英の粗砂多 い②赤褐～橙	外面縦ミガキ、内面横ミガキ。底面に木葉痕。	底面縁辺は摩 滅。
第55図-71	壺	北西辺北寄 +19	底部片	口底 — (19.8) — — —	①石英・輝石等黒色細 砂を多く含む ②灰白～橙	外面は粗い縦ミガキ、内面縦ハケメ。底面に木 葉痕。	

第55図-72 PL23	壺	北東辺中央 +11.5	底～胴下部	口底高 8.5	①黒色岩片・輝石・石英等の細礫～細砂を含む②にぶい橙	外面斜ミガキ→底面付近ヘラナデ。内面斜ケズリ。底面ミガキ。	
第55図-73	壺or甕	埋土	底部1/3	口底高 (8.0)	①石英・白色岩片・安山岩片の細砂多い②器肉灰黒・外面灰黄褐	外面は浅く目の揃い板状具小口による縦ハケメ。内面ヘラナデとケズリ。底面は一方のミガキ。	中期前半、岩櫃山式併行か。底面灰付着。
第56図-74 PL23	S字状口縁台付甕	北東辺中央 +5.5	口縁～体部 1/4	口底高 (15.9)	①輝石・石英片岩の粗砂多い②灰黄褐	口縁小さく外折、ヘラ状具による横ナデ。胴下半斜ハケメ→肩外面斜ハケメ→幅広い横ハケメ(18歯/35mm)→頸部横ナデ。胴内面指押さえ、指ナデ上げ。	
第56図-75 PL23	S字状口縁台付甕	北西辺中央 +33	口縁～脚部 1/3欠	口脚径 (10.0) 口底高 25.5	①片岩粒・赤色粒ほか粗砂多い②褐灰色	口唇部内面は弱い面取り状ナデ。胴外面斜ハケメ→肩外面斜ハケメ→横ハケメ(12歯以上/40mm前後)。脚外面は左上へ斜ハケメ。頸部内面に横ハケメ。胴内面指ナデ上げ。脚部内面指押さえ。底面と脚内面天井に砂目粘土付加。脚裾内面の折返し帯は剥離。	
第56図-76 PL23	S字状口縁台付甕	北西辺北寄 +0.5	口縁部1/6	口底高 (15.3)	①片岩の粗～細砂を多く含む②にぶい褐	口唇部尖る。頸部～肩外面に斜ハケメ→肩に横ハケメ(12～13歯/20mm)。頸部に肩ハケメ時の歯あて痕を残す。頸内面横ナデ、肩内面指ナデ上げ。	
第56図-77	S字状口縁台付甕	埋土	口縁部約 1/5	口底高 (15.2)	①赤色粒・チャート・砂岩・等の円磨細礫～粗砂を含む②暗褐	口縁強く外反し、口唇部は小さく肥厚。肩外面に斜ハケメ→横ハケメ→頸部横ナデ。頸内面横ハケメ、肩内面指ナデ。	
第56図-78	S字状口縁台付甕	埋土	口縁部1/5	口底高 (13.3)	①長石・石英・白岩片・輝石等の角ばった粗砂多い②暗褐～にぶい橙	口縁横ナデ、口唇部尖る。肩外面斜ハケメ→横ハケメ(8歯以上 2.5mmスパン)。頸内面ヘラナデ、胴内面横ケズリ→指ナデ上げ。	
第56図-79 PL23	S字状口縁台付甕	北西辺中央 +37.5	口～肩部約 1/3	口底高 (15.6)	①チャート・輝石等の細礫・粗砂多い②暗灰褐色	口唇部丸く肥厚。頸～肩斜ハケメ→横ハケメ(1.5mmスパン)→頸部にヘラナデ。頸内面ヘラナデ、肩内面指ナデ。	
第56図-80 PL23	S字状口縁台付甕	北西辺中央 +26.5	口縁～肩部 1/4	口底高 (16.8)	①白岩片・石英・チャート・片岩等の細礫～粗砂を多く含む②暗灰褐色	口唇部丸い。口縁内外面とも横ヘラナデ。胴外面斜ハケメ→肩斜ハケメ→横ハケメ(9～10歯/20mm強 2.5mmスパン)。頸内面横ヘラナデ、胴内面指ナデ上げ。	
第56図-81 PL23	S字状口縁台付甕	北東辺北寄 +35	口縁～肩部 約1/2	口底高 10.9	①円磨した粗～細砂(輝石・石英等)を含む②灰褐～暗褐	口唇部やや尖る。口縁内外面ヘラ状具横ナデ。胴外面斜ケズリ→斜ハケメ→頸～肩外面斜ハケメ(10歯/16mm 2mmスパン)。頸内面横ヘラナデ、胴内面ヘラ状具による幅広い横ナデ→指ナデ上げ。	
第56図-82 PL23	S字状口縁台付甕	北西辺北寄 +38.5	口縁～胴部 1/2欠脚部 欠	口底高 8.1	①輝石細砂含む②灰褐色	口縁直立気味に外反、ヘラ状具横ナデ。胴外面縦～斜ハケメ→肩外面斜ハケメ(11歯/21mm 2mmスパン)。内面横ヘラナデ。脚部外面ナデ。	
第56図-83 PL23	S字状口縁台付甕	北西辺西寄 +32	口縁部1/4	口底高 (16.8)	①粗砂多く片岩粒も目立つ②にぶい黄橙	口縁上段は強く外反し、口唇内面に浅い凹線。頸～肩外面斜ハケメ→横ハケメ(幅38mm以上 2～2.5mmスパン)。内面横ヘラナデ、肩内面指ナデ上げ。	
第56図-84 PL23	S字状口縁台付甕	北西辺中央 +52.5	口～肩部片	口底高 (17.0)	①石英・チャート・安山岩片・輝石の粗～細砂を含む②淡橙～灰白	口縁上段は直斜状に開き口唇は大きく肥厚、上面に弱い平坦面。肩外面に斜ハケメ→横ハケメ→頸部横ナデ。頸内面に横ヘラナデ、肩内面横ケズリ→ナデ。	
第57図-85 PL23	S字状口縁台付甕	北西辺北寄 +40.5	胴～脚部 1/4欠	口脚径 9.6 口底高 23.8	①赤色粒・輝石・石英等の粗～細砂を含む②灰褐色	口縁横ナデ。外面胴下半と脚部斜ハケメ→頸～肩斜ハケメ(13歯以上/28mm以上 1.5～2mmスパン)。胴内面ヘラナデ、指ナデ上げ。脚部内面指ナデ。底面と脚内面天井に砂目粘土付加。	
第57図-86 PL23	S字状口縁台付甕	北東辺中央 +26.5～ 34.5	口縁1/2欠	口脚径 10.0 口底高 31.0	①白色鉱物・岩片・赤色粒・輝石等の粗砂を含む②浅黄橙、器肉は黒～灰色	口唇部つまみナデ、内面に弱い凹線。胴外面に斜ケズリ→胴下半と脚部斜ハケメ→肩外面斜ハケメ(13歯以上/25mm以上 2mmスパン)。胴内面横ヘラナデ→指ナデ。脚部内面指押さえと指ナデ。底面と脚部内面天井部に砂目粘土付加。	
第57図-87 PL23	S字状口縁台付甕	北西辺西寄 +30.5	口縁部1/4	口底高 (16.8)	①片岩・輝石・赤褐色粒・石英等の細礫～細砂多く含む②暗褐～橙	屈曲弱く口縁上段外面にヘラ沈線。頸部外面にヘラ先沈線→胴と肩外面に斜ハケメ→肩に横ハケメ(6歯/15mm前後 2～3mmスパン)。胴内面指ナデ上げ。	
第57図-88 PL23	S字状口縁台付甕	北西辺中央 +39.5	口～肩部約 1/3	口底高 (15.8)	①赤色粒・チャート・バミス・輝石等の粗～細砂含む②にぶい橙	口唇部丸い。口縁屈曲強く外反。肩外面に斜ハケメ(2mm前後スパン)→口頸部外面横ナデ。頸内面ヘラナデ、胴内面指ナデ。	
第57図-89 PL23	S字状口縁台付甕	東隅 +44.5	口縁部1/4	口底高 (16.1)	①片岩の粗～細砂含む②にぶい黄橙	口縁は反時計回りの横ナデ。肩外面に斜ハケメ(12歯/18mm)→頸部外面ヘラ押さえ。頸内面ヘラナデ、肩内面指ナデ上げ。	

第4章 出土遺物観察表

第57図-90 PL23	S字状口縁 台付甕	北西辺西寄 +44.5	口縁部片	口 (20.5) 底 - 高 -	①赤色粒・白岩片・片 岩の細礫～細砂を含む ②灰褐～暗褐色	口縁薄く、口唇部内面は弱い面取り。肩外面に 斜ハケメ(1.5mmスパン)→頸外面にヘラ先ナデ。 頸内面にヘラナデ、肩内面指ナデ上げ。	
第57図-91 PL23	S字状口縁 台付甕	西隅 +26	口縁部1/4	口 (13.2) 底 - 高 -	①片岩の細礫～細砂を 多く含む ②暗褐色	口唇部つまみナデ、内側に浅い沈線。頸～肩外 面に斜ハケメ(2～3mmスパン)。頸内面にヘラ ナデ、胴内面指ナデ上げ。	
第57図-92 PL23	S字状口縁 台付甕	北東辺中央 +31.5	口～肩部 1/5	口 (15.0) 底 - 高 -	①片岩の粗～細砂多い ②にぶい橙	口縁間延びして屈曲、口唇肥厚し内側に弱い沈 線。頸～肩外面に斜ハケメ(2mm前後スパン)。肩 内面指ナデ上げ。	
第57図-93 PL23	S字状口縁 台付甕	北東辺中央 +45	口縁部1/4	口 (14.5) 底 - 高 -	①輝石・白色岩片の粗 ～細砂多い ②にぶい黄橙	口縁横ナデ。頸～肩外面に縦ハケメ(18歯前後 /27mm前後 2.5mmスパン)→頸外面にヘラ先沈 線。肩内面横ナデ→指ナデ。	
第57図-94 PL23	S字状口縁 台付甕	東隅 +40	口縁～肩部 1/2	口 16.8 底 - 高 -	①片岩・輝石・石英の 粗～細砂多い ②黄灰色	口縁横ナデ。胴斜ハケメ→頸～肩外面に縦ハケ メ(15歯前後/27mm前後 2～2.5mmスパン)。 肩内面横ナデ→指ナデ。	
第57図-95 PL23	S字状口縁 台付甕	北東辺中央 +37.5	3/4	口 (11.2) 脚径 8.5 高 23.0	①輝石・石英・バミス 等の粗～細砂含む ②灰白	口唇丸く肥厚し、上面に弱い面取り。胴外面斜 ケズリ→胴下半と脚外面斜ハケメ→肩斜ハケメ (2mm前後スパン)。頸内面ヘラナデ、胴内面指 押さえと指ナデ上げ。脚部内面指ナデ。	
第58図-96 PL24	S字状口縁 台付甕	北東辺中央 +33	胴下半1/6 以下～脚台 部	口 - 脚径 9.7 高 -	①片岩・石英の粗砂多 い ②暗褐色	胴外面縦ケズリ→脚部～胴外面斜ハケメ(2～ 3mmスパン)。胴内面は幅広の板状具小口による 横ナデ。脚部内面指ナデ。底面と脚内面天井部 に砂目粘土付加。	
第58図-97 PL24	台付甕	北東辺中央 +26.5～ 37.5	胴下半～脚 部	口 - 脚径 8.9 高 -	①石英・白岩片・輝石 の粗～細砂 ②にぶい黄橙	胴～脚外面は左上方への斜ハケメ(2mm前後ス パン)。胴内面は縦ハケメ→底面と胴上位にケズ リ。脚内面は指ナデ。	
第58図-98 PL24	S字状口縁 台付甕	東隅 +40	胴下部～脚 上部片	口 - 底 (3.4) 高 -	①片岩・石英の粗～細 砂 ②暗褐色	脚外面縦ケズリ。胴外面斜ハケメ(1.5～2mmス パン)。胴内面横ヘラナデ。脚内面指ナデ。	
第58図-99	S字状口縁 台付甕	埋土	脚台部	口 - 底 - 高 -	①片岩粒の粗～細砂を 多く含む(鍋川系) ②にぶい橙～暗褐	外面斜ハケメ。底面は花卉状のヘラナデ。脚天 井部は指ナデ→砂目粘土付加。	
第58図-100 PL24	S字状口縁 台付甕	北東辺北寄 +28	台部約2/3	口 - 底 - 高 -	①安山岩片・バミス・ 輝石・白色鉱物等河原 砂多く含む ②暗灰褐～橙	脚～胴外面に斜ハケメ(2mm前後スパン)。底面 横ヘラナデ、脚内面指ナデ→天井部砂目粘土付 加。	
第58図-101	S字状口縁 台付甕	北東辺北寄 +38	脚台部	口 - 底 - 高 -	①片岩粒の粗～細砂多 く含む ②にぶい灰褐～暗褐	脚～胴外面に斜ハケメ(10歯前後/20mm前後)。 底面横ヘラナデ、脚内面指ナデ。底面と脚内面 天井に砂目粘土付加。	
第58図-102 PL24	台付甕	東隅 +38	脚台部	口 (9.1) 底 - 高 (4.0)	①片岩粒・赤色岩片・ 輝石多い ②灰白色	脚部外面は下方へ縦ハケメ、胴外面は上方へ縦 ハケメ。底面ヘラナデ、脚内面指押さえ→天井 部に別の粘土を付加。	S字甕類似品
第58図-103 PL24	S字状口縁 台付甕	東隅 +38	脚台部	口 - 脚径 10.9 脚高 6.3	①輝石の細砂多い ②暗灰褐色	脚外面～胴外面に斜ハケメ(12歯/25mm)。底面 横ヘラナデ、脚内面指押さえと指ナデ→底面と 天井部に砂目粘土付加。	
第58図-104 PL24	S字状口縁 台付甕	東隅 +35	脚台部	口 - 脚径 10.3 脚高 5.8	①白色岩片・バミス・ 輝石・片岩の粗～細砂 含む②暗褐色	脚外面～胴外面に斜ハケメ。底面横ヘラナデ、 脚内面指押さえと指ナデ→底面と天井部に砂目 粘土付加。	
第58図-105	壺	埋土	口縁部小片	口 (13.4) 底 - 高 -	①白岩片・チャート・ 砂岩等円磨細礫多い ②にぶい橙	口唇に板状具小口による刻み。口縁外面縦ハケ メ、内面横ハケメ。	
第58図-106 PL24	甕	北西辺北寄 +33.5	口縁～肩部 1/3	口 (14.4) 底 - 高 -	①石英・輝石・白岩片・ バミスの粗砂多い ②暗褐色	口縁外面横ナデ、内面横ハケメ。胴外面斜ハケ メ、内面横ハケメ→ヘラナデ。	
第58図-107	小型甕	北東辺中央 +33.5	口～胴上部 1/3	口 (11.3) 底 - 高 -	①石英・白色岩片主体 の細砂を含む。 ②灰白	口縁外面縦ハケメ、内面横ハケメ→横ナデ。胴 外面は目の細かい縦～斜ハケメ。胴内面指ナデ。	
第58図-108 PL24	小型甕 (壺)	埋土	口縁部3/4 欠、胴部 1/3欠	口 (10.1) 底 - 高 11.8	①赤色粒のほか輝石・ 石英等の細砂を含む ②黄褐色	口縁内外面横ナデ。胴外面斜ハケメ→粗いナデ。 胴内面指ナデ、ヘラナデ。	胴中位外面に舂 圧痕1カ所。
第58図-109 PL24	甕	北西辺中央 +51.5	口縁部1/3	口 (18.8) 底 - 高 -	①赤色粒・バミス・石 英・輝石等の細礫～細 砂を含む②暗褐色	口唇肥厚し丸い。口縁外面斜ハケメ→横ナデ。 口縁内面横ナデ→横ミガキ。	
第58図-110	台付甕	埋土	脚部1/4	口 - 脚径 (7.2) 高 -	①石英・白色岩片・(チ ャート)の細礫～細砂 を含む②橙～灰褐	外面縦ハケメ、内面指ナデ。脚裾端下面は平坦 面。胴部との接合面をナデ	

第58図-111	台付甕	北東辺中央 +37.5	脚台部約 2/3	口 - 脚径 8.5 高 -	①赤色粒・石英・パミス・白色岩片・輝石の粗砂多い②にぶい橙	外面粗い縦ミガキ。胴脚接合面にヘラ刻み。脚内面は粗いミガキとナデ。胴底面に砂目粘土付加	
第58図-112	台付甕	確認面	脚部1/4	口 - 脚径 (8.7) 高 -	①チャート・石英・黒色岩片の細礫多くガサガサ ③外面淡橙、器肉黒灰	外面縦ハケメ→粗い縦ミガキ。内面ヘラナデ。	
第59図-113 PL24	高杯	埋土	杯部1/3	口 (19.6) 底 - 高 -	①輝石・石英・パミス等の細砂を含む ②暗褐色	口唇丸く肥厚。外面ハケメ→横ミガキ。内面横ミガキ。	
第59図-114 PL24	高杯	北西辺北寄 +15.5	杯部のみ	口 11.5 底 - 高 -	①黒色岩片・白色岩片・石英・輝石・片岩の粗砂多い②明橙	外面指ナデ→放射状ミガキ、口縁横ナデ。口縁内面横ナデ→斜ミガキ。	
第59図-115 PL24	高杯	北西辺中央 +43	脚部下半欠	口 11.4 底 - 高 -	①石英・チャート・片岩粒・赤色岩片・輝石含む②暗灰褐色	口唇丸い。杯部～脚外面横ミガキ。杯部内面放射状ミガキ。脚内面ヘラナデ。脚中位に3カ所の円孔。	
第59図-116 PL24	高杯	北西辺西寄 +10.5	脚部	口 - 脚径 11.6 高 -	①輝石粗砂多い ②明橙・暗赤	外面赤彩→縦ミガキ。杯部内面赤彩→ミガキ。脚内面は指ナデ。	
第59図-117 PL24	高杯	東隅 +36.5	口縁上半部 欠	口 - 脚径 13.7 高 -	①輝石・石英・赤色岩片等の細～微砂を含む ②黄灰褐色	杯部内外面放射状ミガキ、脚外面縦ハケメ→縦ミガキ。脚内面横ハケメ、上位指ナデ。やや上位に3カ所の円孔。	
第59図-118 PL24	高杯	北西辺中央 +26	脚部	口 - 脚径 13.4 高 -	①パミス・白岩片・輝石を多く含む ②橙～灰黄褐	外面縦～斜ハケメ→縦ミガキ。内面斜ハケメ。上位に3カ所の円孔。	
第59図-119 PL24	高杯	北西辺西寄 +25	杯底部	口 - 底 - 高 -	①白岩片・片岩等の細礫～粗砂多い ②橙	外面縦ミガキ、杯底面は丁寧なナデ。脚部接合にはぞを突出させる。	
第59図-120 PL24	器台	(埋土)	脚部上位	口 - 底 - 高 -	①赤褐色粒・輝石・石英・安山岩片等の粗砂多い②にぶい橙～灰	杯部との接合面に菊花状のヘラ刻み。脚部外面縦ミガキ、内面指ナデ。	
第59図-121	高杯	埋土	脚部約1/3	脚径(18.4) 高 -	①赤色粒の細礫多く、白色岩片・輝石の細砂含む②にぶい橙	底面ミガキ。杯部～脚外面縦ミガキ。内面横ハケメ。脚やや上位に4カ所段違いの円孔。	
第59図-122 PL24	高杯	北西辺北寄 +11.5	杯部欠 裾部3/4欠	口 - 脚径 14.2 高 -	①赤色粒の細礫多く、白色岩片・輝石の細砂含む②明赤褐	外面縦ミガキ。内面斜ハケメ→ナデ。2段3カ所互い違い計6カ所の円孔。	
第59図-123 PL24	高杯	北西辺中央 +30.5	脚部上半部	口 - 底 - 高 -	①石英・長石・パミス・赤色岩片等粗～細砂 ②黄橙	外面縦ミガキ。内面指ナデ。2段3カ所互い違いに計6カ所の円孔。	
第59図-124 PL24	高杯	北西辺北寄 +41	杯部欠	口 - 脚径 10.3 高 -	①輝石・石英の粗砂多い ②灰黄褐色	外面縦ハケメ→中位斜ミガキ。内面上位ナデ、下半横ハケメ。中位に3カ所の円孔。	
第59図-125 PL24	器台か高杯	北西辺北寄 +23.5～ 26.5	脚部下半部	口 - 脚径 15.3 高 -	①パミス・赤色粒・チャート・輝石を含む ②暗褐灰	外面縦ミガキ、裾部横ミガキ。内面横ミガキ。3カ所の円孔。	
第59図-126 PL24	高杯	埋土	杯部1/3欠	口 15.4 脚径 12.3 高 14.9	①輝石・石英等安山岩系岩片・鉱物及びチャート・砂岩の粗砂含む②橙	杯部外面放射状の斜ミガキ、杯底部外面ケズリ。脚部縦ミガキ。杯部内面横ナデ。脚部内面上位にしぼり目残し下半横ナデ。脚裾内外面横ナデ。裾端部は弱い面取り。	
第59図-127 PL24	高杯	北東辺中央 +35	脚柱～裾部 1/3	脚径(11.8) 高 -	①輝石・石英の粗～細砂多い ②明赤褐	外面縦ミガキ、杯底面は粗いミガキ。脚内面上位にしぼり目残し、下半ケズリ。裾部横ナデ。	
第59図-128 PL24	高杯	北東辺中央 +33.5	脚裾部1/2 欠	口 16.5 脚径 16.4 高 11.4	①赤色粒・安山岩片・チャート・石英等の粗砂多い ②橙	杯部内外面放射状の縦ミガキ、杯底部外面ケズリ→粗いミガキ。脚部外面縦ケズリ→縦ミガキ。脚部内面上位にしぼり目残し下半横ナデ。脚裾内外面横ナデ。裾端部は弱い面取り。	
第60図-129 PL24	鉢	北東辺北寄 +36.5	1/3	口 (11.5) 底 3.3 高 4.6	①輝石・石英・パミスの粗～細砂多い ②黄灰色	口縁外面は横、体部は斜ミガキ。内面放射状ミガキ。底面ミガキ。	
第60図-130	鉢	?	底部1/2	口 - 底 (5.0) 高 -	①石英・長石の粗～細砂多い ②にぶい明橙	内外面赤彩→横ミガキ。底面粗いミガキ。	底周縁部摩滅。
第60図-131 PL24	埴	北東辺中央 +26.5～ 29.5	口縁一部欠	口 9.2 底 - 高 8.8	①片岩・白色岩片・石英・輝石の粗～細砂含む②橙	口縁横ナデ→口縁内外面縦ミガキ。胴外面縦ミガキ、内面斜ミガキ。底面は同心円状ケズリ。	
第60図-132	埴	埋土	口縁約1/6	口 (12.7) 底 - 高 -	①チャート・石英・ガラス・安山岩系細砂を含む②暗褐色	口縁内外面横ナデ。頸部ヘラ横ナデ。胴外面ケズリ、胴内面横ナデ。	

第4章 出土遺物観察表

第60図-133	罎	北西辺北寄 +41~42.5	口縁~体上 半1/4	口 (9.2) 底高 -	①角閃石・輝石・石英・赤色粒を含む②暗褐色・チョコレート色	内外面とも縦ミガキ。	134と同一個体
第60図-134	罎	北西辺北寄 +42.5	口縁部1/3	口 (12.0) 底高 -	①白岩片・石英・片岩の細砂含む ②橙	内外面とも縦ミガキ。口唇部内屈して尖る。	133と同一個体
第60図-135	手握ね鉢	埋土	底部	口 - 底高 4.2	①赤色粒・パミス・石英・白色岩片・輝石等の細砂多い②灰褐色	外面縦ミガキ、内面斜ミガキ。底面ヘラナデ。	
第60図-136	手握ね鉢	北西辺西寄 +54.5	底部	口 - 底高 5.2	①赤色粒・チャート・石英白岩片の細礫~細砂②橙~黒褐色	外面ナデ、内面ヘラナデ。底面ケズリ。底面中央くぼむ。	
第60図-137	蓋	埋土	つまみ部 1/3	摘径 (5.7) 底高 -	①赤色粒・輝石・白色岩片の細砂含む ②にぶい橙	内外面横ナデ。	
第60図-138	ミニチュア鉢	北西辺中央 +47	底部	口 - 底高 3.2	①パミス・輝石等安山岩組成岩片に片岩の細礫含む②にぶい橙	外面ナデ、内面ヘラ状具小口によるナデ。底面ケズリ。	
第60図-139 PL25	器台	北東辺北寄 +31.5	脚部欠	口 8.9 孔径 0.9 高 -	①輝石・安山岩片・酸化鉄粒 ②灰黄褐	器受部外面横ハケメ→斜ミガキ、脚外面縦ミガキ。器受部内面横ミガキ、脚内面ケズリ。3カ所の円孔。	
第60図-140 PL25	器台	北西辺中央 +31	裾部1/3欠	口 7.2 脚径 10.5 高 8.7 孔 0.6	①石英・輝石・赤色粒の粗~細砂含む。 ②にぶい赤褐	外面縦ミガキ。器受部内面放射状ミガキ、脚内面ヘラナデ→裾部横ナデ。脚上位に3カ所の円孔。	
第60図-141 PL25	器台	北西辺北寄 +15	脚裾部 2/3欠	口 11.0 脚径 13.2 高 10.0	①石英・輝石・赤色粒の粗~細砂含む。 ②橙	器受部内外面横ミガキ。脚外面縦ミガキ、脚内面は指横ナデ。脚中位に3カ所の円孔。	器受部内面に径50mmの剥離
第60図-142 PL25	器台	北西辺北寄 +37	器受け部 2/3欠	口 (8.2) 脚径 8.4 高 7.6	①安山岩片・石英・輝石等の微細多い ②橙~暗橙	器受部内外面とも放射状ミガキ。脚部外面縦ミガキ、内面横ハケメ(12歯/25mm)。脚中位に3カ所の円孔。	
第60図-143 PL25	器台	東隅 +34.5~ 35.5	器受け部 2/3欠	口 9.4 脚径 12.8 高 9.3	①輝石・石英の粗~細砂目立つ ②明橙	器受部外面は横、内面は縦ミガキ。脚部外面縦ミガキ、内面横ハケメ。脚中位に3カ所の円孔。	器受け部内面中央は摩滅。
第60図-144 PL25	器台	北東辺中央 +38.5	1/2	口 (8.4) 脚径 14.8 高 9.1 孔 1.1	①キメ細、輝石・石英・チャートの細砂 ②にぶい黄橙	器受部内外面は縦ミガキ。脚部外面は縦ミガキ、内面は横ハケメ。器受部下位に1カ所、脚やや上位に3カ所の円孔。	
第60図-145 PL25	裝飾器台	北西辺西寄 +18.5	器受け部片	口 - 底高 -	①赤色岩片・輝石・石英の粗砂多い ②橙	器受部底面縦ミガキ、脚部外面縦ミガキ→上位に横ハケメ。脚内面ケズリ→ナデ。脚上位に円孔か。	
第60図-146 PL25	器台	東隅 +21.5	口縁と脚裾部欠	口 - 底高 - 孔 0.9	①安山岩片・輝石の粗砂多い ②灰黄褐	器受部外面横ナデ→縦ミガキ、脚部外面縦ミガキ。器受部内面横ミガキ→縦ミガキ。脚内面は横ハケメ。脚部中位対称位置に2孔一對計4カ所の円孔。	
第60図-147 PL25	器台	北東辺北寄 +37~41	脚部3/4	口 - 脚径 12.5 孔 1.0	①パミス・石英・赤色鉱物の粗~細砂多い ②暗褐~赤褐	外面縦ミガキ、内面横ハケメ→裾部横ナデ。中位に3カ所円孔。	
第60図-148 PL25	器台	西隅 +23	脚部1/4	脚径(12.2) 孔 1.3	①赤色粒・輝石・石英等の粗~細砂多い ②橙	外面縦ミガキ、内面斜ハケメ。上位に3カ所の円孔。	
第60図-149 PL25	器台	北西辺中央 +44.5	脚部のみ	口 - 脚径 14.2 孔 1.5	①石英・輝石・白岩片・赤色鉱物の粗~細砂を含む②橙~黒	外面縦ミガキ、内面上位ケズリ、下位ヘラナデ。中位に4カ所の円孔。	
第60図-150 PL25	高杯か器台	北東辺中央 +49	脚部	口 - 脚径 11.7 高 -	①石英・輝石の粗~細砂を含む ②灰褐色	外面縦ミガキ→裾部外面横ミガキ。内面ナデ→ケズリ→裾部横ナデ。下位に4カ所の円孔。	
第60図-151 PL25	研磨具	埋土	壺か甕肩部片	口 - 底高 -	①赤色細礫~細砂目立つ ②灰褐色	樽式土器片の上辺に長軸方向の摩耗擦痕あり。	土器片利用
第60図-152 PL25	研磨具	埋土	壺か甕胴部片	口 - 底高 -	①赤色粒細礫・白色細砂目立つ ②暗灰褐色	樽式土器片の上辺と左辺に長軸方向の摩耗擦痕あり。	土器片利用。母胎土器は151と同一か。
第60図-153	研磨具	埋土	壺胴部片	口 - 底高 -	①赤色粒細礫・白色細砂目立つ ②暗灰褐色	上辺と右辺に長軸方向の擦痕。	土器片利用
第61図-154 PL25	石製品 砥石	埋土		長さ - 幅 5.2 厚 0.8 重量 34.3g ①頁岩		左縁と下縁は打割、折面を残す。表裏側縁を研磨面に用いる。研ぎ減りは少なく、平坦。表裏面には不定方向の非常に細かい擦痕を残す。	

第61図-155 PL25	石製品	埋土		長さ - 幅 - 厚 2.0 重量 48.9 g ①頁岩	扁平楕円礫の表裏面中央部を研ぎ面に用いる。上下欠損。	
第61図-156 PL25	石製品 砥石	埋土		長さ 13.4 幅 - 厚 2.0 重量 160.0 g ①凝灰岩	扁平楕円礫を打割成形。表裏両側縁を研磨面として使用し、表裏面中央は研ぎ減りによりくぼむ。研ぎ傷は6 cm長で粗く鋭く直線的。	
第61図-157 PL25	石製品 砥石	埋土		長さ - 幅5.5 厚 2.6 重量 104.2 g ①粗粒輝石安山岩	表裏面と右側面に複数方向の研ぎ傷を残す。	
第61図-158 PL25	石皿	埋土	ほぼ完形	長さ 19.5 幅 11.0 厚 3.4 重量 1296.8 g ①粗粒輝石安山岩	扁平菱形礫を用い、表面を主磨面とする。側面は摩耗痕を残すが不明瞭。裏面は左に偏って長軸方向の粗い擦痕が見られる。上縁の剥離は後世と思われる。	
第61図-159 PL25	石皿	埋土	完形	長さ 18.6 幅 11.2 厚 6.8 重量 2167.7 g ①粗粒輝石安山岩	厚めの楕円礫を用い、表面中央のみ長軸方向の摩耗痕、擦痕を残す。下端には細かい敲打痕が集中する。	
第61図-160 PL25	磨石	埋土		長さ 12.1 幅 7.5 厚 - 重量 233.9 g ①粗粒輝石安山岩	裏面は下方からの打撃により欠損剥離。表面にわずかに斜方向の摩滅痕を残す。	

6号土坑遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第66図-1 PL26	直口壺	+15	口縁部欠	口 (9.4) 底 - 高 13.2	①チャート・石英・パミス・輝石の細礫～細砂②橙	口縁は沈線状の有段。口縁横ナデ→縦ミガキ。胴外面斜ハケメ→雑な横ミガキ、胴内面ナデ。	

1号溝遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第67図-1 PL26	青磁	埋土	口縁部小片	口 - 底 - 高 -	①きめ細かい ②透明度の高いオリブ褐色	口唇内側がわずかに沈線状。見込みに花卉状の陰刻。	近世
第67図-2 PL26	青磁	±0	口縁部小片	口 - 底 - 高 -	①きめ細かく、灰白色。砂含まず ②淡緑色	口縁やや肥厚し、内面に横沈線。素地面に横刷毛目痕。	中世 釉：気泡多く、厚0.5mm

3号溝遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第68図-1 PL26	石製品	埋土	頭部片	長さ - 幅 4.9 厚さ 3.4 重量 253.6 g ①結晶片岩 (黒色片岩)		頭部上端は細かい敲打により摩滅。	
第68図-2	かわらけ (杯)	埋土	1/4	口 (7.4) 底 5.0 高 1.9	①輝石・石英の粗～細砂多い ②淡黄	底部厚くやや突出。底面右回転糸切り、内面横ナデ。	

4号溝遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第68図-3	軟質陶器 描鉢	+8.5	胴下部片	口 - 底 (14.2) 高 -	①赤色粒・パミス・石英等の粗～細砂多い ②黒褐～暗紫	体外外面下半に細かい縄状の圧痕を残す→前面に横ナデ。	内面は摩滅による光沢をもつ

遺構外遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 (cm)	部位 残存	計測値 (cm)	①胎土 ②色調	成・整形技法の特徴	備考
第71図-1	深鉢	遺構外	体部	口底高 — —	①白岩片の中～細砂を含む ②赤褐	しをZ巻きにした絡条体による捺糸文。内面凹凸あり、ミガキ。	夏島or稲荷台
第71図-2	深鉢	遺構外	体部下半	口底高 — —	①輝石の粗砂多い ②浅黄	斜縄文（原体RLR）。	尖底状の可能性あり。早期or前期
第71図-3	深鉢	10号住埋土	体部片	口底高 — —	①きめ細かく粗砂多い	横位矢羽根状集合沈線文を施し、中央に刺突を加えた円形貼付文と耳状の貼付文。	諸磯c 3～5は同一個体か
第71図-4	深鉢	10号住埋土	体部片	口底高 — —	①赤粒・チャートの粗～細砂含む	横位矢羽根状集合沈線文を施し、円形貼付文を付す。上断面は粘土紐積み上げ痕の擬口縁。	諸磯c 3～5は同一個体か
第71図-5	深鉢	10号住埋土	体部片	口底高 — —	①赤粒・白岩片の中～細砂多い	横位矢羽根状集合沈線文。	諸磯c 3～5は同一個体か
第71図-6	深鉢	3号住埋土	体部片	口底高 — —	①粗～細砂含む	横位矢羽根状集合沈線文。	諸磯c
第71図-7	深鉢	10号住埋土	口縁片	口底高 — —	①白岩片・バミスの粗砂多い	無文で、内外面に横ミガキ。	縄文中期
第71図-8	深鉢	10号住埋土	口縁片	口底高 — —	①赤粒・白岩片の粗砂多い	無文で、内外面に横ミガキ。	縄文中期
第71図-9	深鉢	10号住埋土	体部片	口底高 — —	①輝石・石英・バミス・白岩片多い	幅広く薄い横帯に棒状具による縦位押圧文を廻らす。上位は縦位集合条線。	奥津式？
第71図-10	深鉢	2号住埋土	口縁部片	口底高 — —	①チャート・石英の細礫含む	渦巻き文付近の細い隆線による楕円文。地文は斜縄文（RL）。	加曾利E II
第71図-11	深鉢	1号方形周溝墓溝	体部片	口底高 — —	①輝石・石英の粗砂多い	太い沈線による蕨手あるいは渦巻き文。	加曾利E I
第71図-12	深鉢	1号方形周溝墓溝	体部片	口底高 — —	①白岩片の粗～細砂多い	たく浅い沈線を垂下区画し、内部を斜縄文（RL）で充填。	加曾利E III
第71図-13	深鉢	10号住埋土	体部片	口底高 — —	①輝石・バミス・白岩片の粗～細砂含む	斜縄文（RL）。	縄文中期
第71図-14	深鉢	10号住埋土	体部片	口底高 — —	①バミス・石英の粗砂多い	斜縄文（RL）。	縄文中期
第71図-15	深鉢	1号方形周溝墓溝	体部	口底高 — —	①赤粒の細礫目立つ	斜縄文（LR）。	縄文中期
第71図-16	深鉢	1号方形周溝墓溝	体部	口底高 — —	①バミス・白岩片・石英の粗～細砂含む	斜縄文（RL）。	縄文中期
第71図-17	深鉢	10号住埋土	体部片	口底高 — —	①粗～細砂多い	縦位の集合沈線を施す。	諸磯cか？
第71図-18	深鉢	2号住埋土	体部片	口底高 — —	①バミス等の粗～細砂多い	たくまばらな集合沈線を縦位に施す。	縄文中期
第71図-19	深鉢	10号住埋土	体部片	口底高 — —	①土器片のほか赤粒粗砂多い	先端の平坦な細いへら状具による縦位沈線文。	縄文中期
第71図-20	深鉢	1号方形周溝墓溝	体部	口底高 — —	①バミス・白岩片の粗～細砂多い	斜方向の太い沈線を描く。	縄文中期？
第71図-21	深鉢	1号方形周溝墓溝	体部	口底高 — —	①石英・片岩・チャートの細礫～粗砂含む	横帯上に円形刺突をめぐらし、上位は無文、下位には幅2mm前後の沈線による弧線文。	堀之内1

第71図-22	深鉢	8号住埋土	口縁付近	口底高	—	①輝石・石英・白岩片の粗砂多い	渦状把手部で、口縁上面からの沈線がめぐる。内面には細い沈線による渦状文を描く。	堀之内1
第71図-23	深鉢	14号住埋土	口縁片	口底高	—	①石英・チャート・白岩片・砂岩の粗～細砂を含む	口唇部を外折、大振りな円形刻みを施す。外面に斜縄文(LR前々段多条)。	加曾利B1式
第71図-24	深鉢	14号住埋土	体部片	口底高	—	①石英・チャート・白岩片・砂岩の粗～細砂を含む	外面に斜縄文(LR前々段多条)。	加曾利B1～223と同一個体だろう
第71図-25	深鉢	14号住埋土	体部片	口底高	—	①石英・チャート・白岩片・砂岩の粗～細砂を含む	外面に斜縄文(LR前々段多条)。	加曾利B1～223と同一個体だろう
第72図-26	壺	確認面	口縁部片	口底高	—	①細礫～粗砂多い ②褐	内面赤彩、口唇は外面を平坦にし、口縁下端とともにヘラ状具による鋸歯文をめぐらす。	
第72図-27	小型壺	確認面	肩部片	口底高	—	①輝石・角閃石・安山岩片等の粗砂多い ②橙	横位ハケメ→細い棒状具による鋸歯文。	
第72図-28	壺	D-20グリッド	肩部片	口底高	—	①赤岩片・輝石・角閃石目立つ ②明赤褐	2ヶ対の中央刺突円形貼付文、無文部ミガキ。	畿内系か
第72図-29	壺	確認面	口縁片	口底高	(20.6)	①赤色粒・石英の細礫 ②にぶい黄橙	縦ハケメ→口縁下位と口唇内面に粘土付加→3本単位の棒状貼付文。内面ナデ、外面縦ミガキ。	口縁下端外面に 粉圧痕(6.8×3.2mm)
第72図-30	壺	確認面	頸部1/4	口底高	—	①石英・白岩片の粗砂多い ②灰褐	鋭く深く整った針葉樹材の板小口により、外面は縦、内面は横のハケメ→口縁の外面を横ミガキ、内面ナデ。	
第72図-31 PL26	壺	D-3グリッド	口～底2/3	口底高	17.0 (8.6) 39.0	①バミス・白色岩片・輝石等粗～細砂含む ②にぶい黄橙	頸部外面にケズリ様の縦ヘラナデ、胴外面は横～斜ハケメ、胴内面は横ヘラナデ→外面は縦、口縁内面は横のミガキ。	駿河湾系か?
第72図-32	直口壺	D-18グリッド	口～胴部1/3	口底高	(11.6)	①石英・長石の粗砂多い ②浅黄橙	丁寧な横ナデ、胴内面は指押さえと横ナデ→外面全体に放射状暗文、胴部は縦ミガキ。	
第72図-33 PL26	小壺	D-9グリッド	口～底2/3	口底高	(7.7) 3.5 9.7	①チャート・赤色粒・白岩片の粗～細砂を含む ②にぶい黄橙	口縁は上位でやや外反。口縁外面横ナデ、内面ヘラナデ。胴外面はナデ様の浅いハケメ→下位をケズリ、胴内面はヘラナデ。	
第72図-34 PL26	小壺	D-9グリッド	頸～底3/4	口底高	—	①赤粒・バミスの粗砂多い ②にぶい黄褐	外面ヘラナデ→下半ケズリ。内面は横ヘラナデ、頸部指ナデ。	
第72図-35	埴	確認面	口～体部1/4	口底高	10.4	①赤粒・石英・輝石の粗砂多い ②橙～暗灰褐	内外面丁寧な横ナデ→底外面ケズリ→口縁内外面は放射状暗文。	
第72図-36	壺	E-19グリッド	底部片	口底高	—	①赤粒・石英・輝石の粗砂多い ②橙～灰褐	中央が凹み輪状底部。外面横ミガキ、内面は浅く目の粗いハケメ。	底面の摩滅著しい
第72図-37 PL26	壺	D-9グリッド	底部片	口底高	—	①白岩片・片岩・石英の粗砂多い ②にぶい褐灰～黒灰	輪状底部に二重の木葉痕、輪状粘土紐は後から付加。外面ハケメ。	底面に粉圧痕3カ所
第72図-38	壺	遺構外	底部2/3	口底高	—	①赤粒・石英・輝石の粗砂多い ②二次的被熱により色変	輪状底部。内外面ともケズリ→ナデ。	底面周縁は摩滅
第73図-39 PL26	S字状口縁台付甕	E-19グリッド	口～脚1/2	口脚径高	14.1 8.9 23.2	①石英・片岩・黒色岩片・チャートの粗～細砂多い ②にぶい黄橙	口縁横ナデ、内面の段は弱い。外面斜ケズリ→斜ハケメ(2mmスパン)。内面は上位指ナデ、中位横ヘラナデ→縦指ナデ、胴下位斜ケズリ。脚内面はヘラナデ→指ナデ。	
第73図-40	S字状口縁台付甕	D-6グリッド	口～脚部1/4	口底高	—	①雲母・片岩の細礫～粗砂多い ②にぶい黄橙	口縁薄く強く外反、頸部は鋭く「く」字状に屈曲。頸外面ヘラナデ、胴外面斜ケズリ→足の長い斜ハケメ(1.5mmスパン)。内面は浅いケズリ、縦指ナデ。脚天井と底面に砂目粘土貼付。	
第73図-41 PL26	甕	確認面	口縁部片	口底高	(16.2)	①石英・チャート・バミス・ガラスの中～細砂 ②灰黄褐	口唇丸く、口縁上半がわずかに内彎。口縁～頸部は縦～斜ハケメ、胴外面斜ハケメ→口縁横ナデ、内面横ミガキ	
第73図-42 PL26	S字状口縁台付甕	D-3グリッド	口縁部片	口脚高	(13.2)	①片岩・輝石・赤粒の粗～細砂 ②にぶい橙	口縁上段が長く外反し、口唇内側に肥厚。口縁横ナデ、頸部外面にヘラ先ナデ。肩外面は斜ハケメ(2mmスパン)、内面は指押さえ。	
第73図-43	甕	D-9グリッド	口縁部片	口底高	(18.6)	①キメ細かく微細雲母粒を多く含む ②暗褐	口唇は丸い。外面は縦ハケメ(2～3mmスパン)→横ナデ、内面は丁寧な横ナデ	

第4章 出土遺物観察表

第73図-44 PL26	台付甕	D-9グリ ッド	口~脚2/3	口 (9.9) 脚径 6.7 高 14.3	①白岩片・バミスの細砂多い ②赤褐、全体に被熱赤変	口縁は内彎気味に開き、口唇は小さく外折。口縁外面は斜、胴上位は不定方向、胴下半~脚は縦主体のハケメ(1mm以下スパン/幅8mm前後)。口縁内面横ハケメ、胴内面は乾燥が進んだ段階で浅いケズリ、脚内面は縦ハケメ。	南関東系
第73図-45 PL26	S字状口縁 台付甕	D-9グリ ッド	脚部のみ 3/4	口 - 脚径 8.5 高 -	①石英・白岩片・輝石・バミスの粗~細砂 ②にぶい黄褐	外面斜ハケメ~裾部横ナデ。底内面はヘラナデ、脚内面は横ナデ、指ナデ上げ、裾部指押さえ。天井部に砂目粘土を付加。	
第73図-46 PL26	S字状口縁 台付甕	D-3グリ ッド	底部~脚上 半	口 - 底 - 高 -	①片岩・白岩片・石英等の細砂多い ②にぶい黄橙	脚~胴下半に左上方へのハケメ(1.5mmスパン)。底内面ヘラナデ、脚内面指ナデ上げ。底面と天井部に砂目粘土付加。	
第73図-47 PL26	台付甕	D-3グリ ッド	脚部のみ	口 - 脚径 11.2 高 -	①バミス・輝石・石英の微~細砂多い ②にぶい橙、上半は被熱赤変	脚裾端は下面に小さな平坦面。器壁厚い。外面は細かい縦ヘラナデ~裾部横ナデ。底内面はヘラナデ、脚内面ヘラナデ~裾部横ナデ。	
第73図-48 PL26	蓋	確認面	1/2	摘 (3.4) 口 (12.8) 高 6.3	①バミス・黒岩片等の中~細砂 ②にぶい黄橙、内面吸炭	摘み端は小さな面取り。摘み部外面はヘラ状具で抉り、口縁~体部外面は指ナデ~口縁横ナデ。内面は細かい斜ハケメ~口縁横ナデ。	
第73図-49 PL26	高杯	確認面	杯部2/3	口 (11.4) 脚 - 高 -	①チャート・石英・輝石・白岩片の粗~細砂含む ②にぶい黄橙	口唇内面に弱く小さな面取り。外面ケズリ~雑な横ミガキ、内面は丁寧な放射状ミガキ。	
第73図-50	手捏ね	D-9グリ ッド	体~底部片	口 - 底 (3.9) 高 -	①白岩片・石英の粗~細砂を少量含む ②灰白	外面は浅く整ったハケメ、内面指ナデ、底面ケズリ。	
第73図-51	甕	遺構外	口縁~肩	口 15.6 底 - 高 -	①赤粒・チャート・片岩の中~細砂を含む ②橙	口唇小さな面取り、頸部は弓なり屈曲。胴外面縦ケズリ、胴内面ヘラナデ~口縁横ナデ	
第73図-52	ミニチュア 高杯	D-19グリ ッド	杯部下半~ 脚上半	口 - 脚 - 高 -	①チャート細礫・石英・赤粒の粗砂多い ②灰黄褐	脚上位に5カ所の円形穿孔(径4mm)。杯部外面縦ミガキ、内面横ミガキ。脚部外面横ナデ、内面ケズリ。	
第73図-53	器台	E-9グリ ッド	脚部	口 - 脚径 9.5 高 -	①輝石多く、石英・白岩片の粗砂含む ②にぶい橙	やや上位に4カ所の円形穿孔。外面縦ハケメ~縦ミガキ。内面上半ナデ~下半ハケメ~粗い横ミガキ。	
第73図-54	手捏ね	D-9グリ ッド	口~底1/2	口 (6.2) 底 (4.1) 高 5.1	①赤粒・チャート・バミス・石英の粗~細砂含む②明赤褐	体部と底部の接合部にハケメ~全体に指ナデと指押さえ。	
第74図-55 PL26	鉢	C-11グリ ッド	口~底1/3	口 (11.6) 底 3.0 高 4.3	①赤粒・石英・輝石の中~細砂多い	外面は浅く整ったハケメ、内面指ナデ、底面ケズリ。ハケメ~粗いナデ~底面付近ケズリ。内面は口縁横ナデ、下半ナデ~粗い横ミガキ。	
第74図-56 PL26	鉢	D-9グリ ッド	口~底3/4	口 13.2 底 - 高 8.7	①赤粒・バミスの粗~細砂含む ②にぶい赤褐	口縁は内彎気味に開き口唇は丸み帯びる。外面の胴上位横ナデ、下半ケズリ、胴内面横ヘラナデ~口縁横ナデ。	底面にオコゲ付着
第74図-57 PL26	高杯	C-7グリ ッド	杯部と裾部 3/4欠	口 - 脚径 (13.2) 高 -	①赤粒・石英・チャート・白岩片の粗~細砂多い ②赤褐	脚柱は中膨状、裾端は下方に折れる。杯部の外面ナデ、底面は粗いミガキ。脚部は外面縦ミガキ、内面は絞り目残し、裾部横ナデ。	
第74図-58 PL26	甕	D-9グリ ッド	口~体1/3	口 18.2 底 - 高 -	①赤粒・チャート・白岩片の細礫~粗砂多い ②明赤褐	くの字屈曲の口縁に、薄い粘土帯付加の折り返し。外面は板状具小口によるナデ、一部ケズリ状に砂粒動く。内面斜ケズリ~部分的な横ミガキ。口縁横ナデ。	口縁外面に煤付着。
第74図-59	(甕)	13号住埋 土	体部下位片	口 - 底 (9.0) 高 -	①透明度の高い石英微砂・チャート細礫・輝石微砂を含む ②にぶい黄橙	外面に斜縄文(付加条1種L2条と思われるが軸縄圧痕は見られない)。内面ナデ。	底面に木葉痕と糊圧痕(6.5×4.4mm)
第74図-60 PL26	甕	7号住埋土	口~体1/2	口 (19.0) 底 - 高 -	①チャート・白岩片・石英等の細礫~粗砂多い ②橙	口縁中位で外折。体部外面は縦ケズリ、内面は横ヘラナデ~口縁横ナデ。	
第74図-61	研磨具	D-20グリ ッド	壺破片	縦 3.5 横 4.0 厚 0.9	①キメ細かく、赤粒・片岩の細礫目立つ ②暗褐	表面に2条平行の研磨溝(スパン6mmと4mm)が残り、下辺は長軸方向の研磨擦痕を残す。上辺は研磨溝により折れ。	古墳前期の壺片利用。
第74図-62	須恵器蓋	3号溝	天井部片	口 - 底 - 高 -	①白岩片・石英・粗砂・酸化鉄鉱物の粗砂多い ②灰黄	上面にケズリ~斜格子状のヘラ描き。	
第75図-63	打製石斧	6号住埋土	完形	長さ 9.9 幅 5.7 厚 2.4 重量 173g ①頁岩		表面上半に自然面を残し、両面打割剥離で整形。両側縁中央にわずかに細部調整が見られる。刃部と裏面基部付近が擦痕方向は不明瞭だが、摩滅痕あり。	

第5章 中居町一丁目遺跡出土火葬人骨

榑崎修一郎

はじめに

中居町一丁目遺跡は、群馬県高崎市中居町一丁目に所在する。高崎駅東口線事業に伴う発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団により、平成17(2005)年1月～同年2月まで行われた。本遺跡の1号火葬跡から、中世の火葬人骨が出土したので以下に報告する。この火葬跡は、調査区のほぼ中央から検出されている。なお、調査時は、7号土坑として調査が行われている。

火葬人骨は、清掃後、観察・写真撮影を行った。なお、火葬人骨は被熱により変形しているため、計測は行っていない。

1. 人骨の出土状況

人骨は、長径約120cm・短径約60cm・深さ約5cm～10cmの土坑から出土している。長軸は、ほぼ南北方向である。

また、本土坑の西側には、約35cmの突出部が存在する。この突出部は、火葬時の焚き口と推定されるので、火葬時には恐らく西側から風が吹いていたものと推定される。このように、焚き口を持つ構造の火葬跡は、群馬県では多く検出されている。さらに、土坑の北側からは礫が3点検出されている。



写真1 1号火葬跡火葬人骨出土状況

(東から撮影)

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査した中世の火葬遺構をまとめた研究によると、173基中、本火

葬跡のような形態を持つ土坑は55基が認められており、全体で31.8%をしめるという。これら火葬遺構の大きさの平均値は、長軸約116cm・短軸約70cm・袖約40cm・深さ約26cmである。

また、長軸を南北方向に持つ火葬遺構は52基(94.5%)あり、東袖は23基(44.2%)・西袖は29基(55.8%)とやや西袖が優位である。さらに、長軸を東西方向に持つ火葬遺構は3基(5.5%)あり、いずれも南袖であるという(榑崎、2006)。

2. 被火葬者の火葬状態

人骨の出土状況から、被火葬者は、頭部を北に向けた屈位で火葬に付されたと推定される。

中世人骨から身長を推定した、北里大学の平本嘉助によると、鎌倉時代人の成人男性約159cm・成人女性約145cm、室町時代人の成人男性約157cm・成人女性約147cmである(平本、1972)。本火葬跡の被火葬者は成人女性であると推定されており、この推定身長からも、被火葬者を伸展位ではなく屈位で火葬に付したと推定される。

3. 火葬方法

火葬人骨は、白色を呈しており、約900℃以上の高温で焼成されたと推定される。また、火葬人骨には捻れ及び亀裂が認められるため、白骨化したものを焼成したのではなく遺体をそのまま火葬に付したと推定される。

4. 副葬品

副葬品は検出されていない。前出の榑崎(2006)によると、173基の中世火葬跡の内、副葬品が検出されたのは41基(23.7%)のみであり、検出されなかったのは132基(76.3%)であるという。したがって、ほとんどの火葬跡では、副葬品は検出されないということになる。

5. 火葬人骨の出土部位

火葬人骨は底面及び覆土に分けて取り上げられている。火葬人骨の出土部位は、頭蓋骨片・歯根片・

四肢骨片等が出土している。

6. 収骨方法

火葬人骨の残存量は比較的少ないため、現代にまで続く、ほとんどの火葬人骨を収骨する東日本タイプの収骨方法であると推定される(檜崎,2002)。

7. 被火葬者の個体数

出土火葬人骨の保存状態は、破片であるが明らかな重複部位は認められないため、被火葬者の個体数は1個体であると推定される。

8. 被火葬者の性別

性別推定指標となる部位が出土していないので、被葬者の性別推定は困難である。しかしながら、火葬による収縮を考慮しても、尺骨片及び上腕骨片は小さく華奢である。また、頭蓋骨片の骨壁は薄く、大腿骨骨幹部も薄いため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

9. 被火葬者の死亡年齢

被火葬者の死亡年齢推定指標となる部位が出土していないので、被火葬者の死亡年齢推定は困難である。しかしながら、歯冠部は被熱で破損しているものの、歯根部が20本以上出土しており、これは成人が32本の歯根を有すことを見ると、少なくとも老齢では無いことが推定される。

また、頭蓋骨破片からは、頭蓋縫合が外板及び内板共に癒合していないことから、被火葬者の死亡年齢は約20歳代～30歳代であると推定される。



写真2 1号火葬跡出土火葬人骨

(上下顎歯根)

10. 被火葬者の古病理

火葬人骨の出土量は少なく、観察可能な部位は少ない。20本以上出土した歯根は、被熱により、歯冠部が破損しているため歯種の同定は困難である。

しかしながら、形態及び大きさから、上顎右第3大臼歯の歯根部であると推定される歯根に一部、古病理が認められた。本歯根は、歯冠部が俗に虫歯と呼ばれる齲蝕症第4度の齲蝕のため歯冠が崩壊し、残根状態となっている状態である。

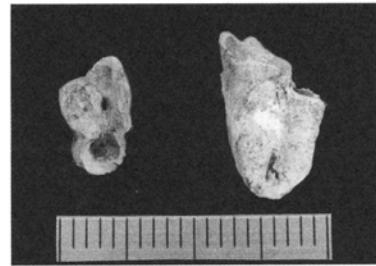


写真3 1号火葬跡出土火葬人骨

(上顎右第3大臼歯歯根：齲蝕による歯冠崩壊に注意)

まとめ

中居町一丁目遺跡の火葬跡1基から、中世の火葬人骨が出土した。被火葬者は、頭位を北にし、屈位で火葬に付されたと推定された。また、袖の位置から、火葬時に風は西側から吹いていたと推定される。

被火葬者は、約20歳代～30歳代の女性1個体であると推定された。また、上顎右第3大臼歯には歯冠部が崩壊し残根状態となった齲蝕症第4度の齲蝕(虫歯)が認められた。さらに、火葬人骨の残存量は少ないため、東日本タイプの収骨方法で収骨されたものと推定される。

謝辞

本出土人骨に関する考古学的情報をいただいた、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の大木紳一郎氏に感謝いたします。また、本出土人骨を報告する機会を与えていただいた、元群埋文で、現下仁田町立小坂小学校の柏木一男氏に感謝いたします。

引用文献

- 檜崎修一郎 2002 下小鳥神戸遺跡出土火葬人骨、「研究紀要」、20:43-50。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 檜崎修一郎 2006 火葬人骨と考古学、「第2回中世墓を考える会」『中世の火葬を考える』、発表要旨

第6章 まとめ

1 検出された遺構

本遺跡で検出された遺構は、住居跡17棟、方形周溝墓1基、溝3条、井戸6基、土坑6基、火葬跡1基である(右表)。このうち、堅穴住居跡15棟と方形周溝墓1基、土坑2基は古墳時代前期～中期に属するものであり、本遺跡検出遺構の主体を占める。堅穴住居跡では9号住居跡が9世紀代、17号住居跡が6世紀後半代であることが、出土遺物と住居形態から判明している。この時期の遺構としては、他に4号土坑と5号土坑があげられるが、出土遺物がわずかなために時期の限定が出来ない。また古墳時代後期～平安時代の遺物出土量も非常に少ない。この時期においては、遺構量、遺物量に比例して生活痕跡が稀薄であったと考えて良さそうである。調査では検出できなかったが、水田や畠といった生産域として捉えられる可能性があるだろうか。一方、古墳時代前期～中期の遺構及び出土遺物の様相からは、後述するように、時間的に連続する集落及び墓域として捉えられるもので、周辺遺跡との対比も可能である。本章では、中居町一丁目遺跡で明らかとなった古墳時代前期～中期の遺構群について、地域史における歴史的位置づけを試み、あわせて顕在化してきた問題点について概要を記すこととする。

その前に、本章で用いる時代区分と年代観について簡単に述べておく。「古墳時代」については、列島内で定型化した大型前方後円墳の成立をもってその開始と考える立場を取る。従って現時点では、奈良県の箸墓古墳をその示準とするのが妥当と考えており、最も普遍的な年代尺度となる土器についていえば、布留式の最古段階をもってあてるのがよいと考える。ただし、本報文で用いた「古墳前期」は「庄内式」や「布留式」との対比検討を試みた上での厳密な用語としては使用していないことを断っておきたい。同じく「古墳中期」としたのも同様である。詳しい土器の年代観については、出土土器分析の項で明らかにしようと思う。

1号住居跡	古墳前期
2号住居跡	古墳前期
3号住居跡	古墳前期
4号住居跡	古墳前期
5号住居跡	古墳前期
6号住居跡	古墳中期
7号住居跡	古墳前期
8号住居跡	古墳前期
9号住居跡	平安前期
10号住居跡	古墳前期
11号住居跡	古墳中期
12号住居跡	古墳中期
13号住居跡	欠番
14号住居跡	古墳前期
15号住居跡	古墳前期
16号住居跡	古墳前期
17号住居跡	古墳後期
18号住居跡	古墳前期
1号方形周溝墓	古墳前期
1号井戸	中世以降
2号井戸	中世以降
3号井戸	中世以降
4号井戸	中世以降
5号井戸	中世以降
6号井戸	中世以降
1号土坑	古墳前期
2号土坑	古墳時代以降
3号土坑	古墳時代以降
4号土坑	古墳後期～平安時代
5号土坑	古墳後期～平安時代
6号土坑	古墳前期
1号溝	(中世)
2号溝	1号方形周溝墓に改称
3号溝	近世以降
4号溝	中世以降
火葬跡	(中世)

2 出土遺物による年代観の推定

(1) 土器の分類

本遺跡出土の土器のうち、古墳時代前期～中期に相当する竪穴住居跡及び方形周溝墓出土品について分類を試みる。

器種分類と型式組列

壺、甕、高杯、鉢、器台、埴、有孔鉢（註1）、蓋、小壺（註2）、ミニチュアが見られ、このうち壺、甕、高杯の三器種については、量的に豊富なだけでなく、多様な型式が見られ、在来弥生土器と外来土器の系譜の差異が比較的明瞭である。本項では、年代比定のための土器分析を主眼とするため、この三器種について記述を進めることとし、他の器種については器種組成や系譜上の問題に関わる場合についてのみ述べることにしたい。

壺は大きく三分し、便宜的に壺A、壺B、壺Cとよぶ。壺Aは東海地方西部の単口縁広口壺に類例を求めうるもので、口縁が大きく外反して開き口唇に平坦面をもつことを特徴とする。濃尾平野での廻間遺跡分類（赤塚1990）における広口壺B類に相当しよう。壺Aは、器形と文様の特徴から、以下のよう
に6細分される。

Aa1-口縁の下半で弱く外折し、やや下ぶくれの胴部をもつ。口唇は横面と上面をへら状具でナデた小さな面取り。頸部に凸帯付加、肩に櫛描横線文と波状文の組み合わせ。

Aa2-口縁は全体的に弓なり外反し、口唇部はAa1と同じ。無文。

Aa3-口縁は短く弓なりに外反し、頸部屈曲も強い弓なり。口唇面取りはAa1と同じ手法だが、上面ナデがなく丸みをもつ。無文。これは頸部の特徴から、北陸系の可能性も考え得る。

Ab-口縁上位で弱く外折し、頸部屈曲は「く」字状となる。胴は球形。口唇に刻み、肩に櫛描垂下文と横線文の組み合わせ（S字甕と同じ文様構成）。

Ac-口頸部の形状はAbと同じで、口唇はつまみナデで外上方に間延びする。無文。

Ad-口縁中位で弱く外折して開く。口唇は小さな

つまみナデ。口縁外面中位に沈線状の段。無文。

①口縁外反形態における屈折部位の下位から上位への移行、②これに伴う頸部の「く」字状化、③口唇部面取り形状と手法の変化、④胴部球形化を変化要素として、Aa1・Aa2・Aa3→Ab・Ac→Adの3段階の変遷を想定した。Aa1・Aa2・Aa3類とAb・Ac類の各々の関係はほぼ同時期における異型式と考えた。またAd類については初期須恵器の影響も考えられ、Ab類との間に型式的ヒアタスを想定すべきと考えている。

壺Bは、有段の二重口縁を特徴とし、口頸部形状の相異から以下のように二細分する。

Ba-頸部がやや外傾して立ち、内面に明瞭な段をもって口縁が外反して開く。口唇は小さく丸みをもつ面取り。

Bb-頸部が直立、内面は不明瞭な段をなし、口縁は弱く外反して開く。口唇は外上方に弱い面取り。球形胴部。無文。

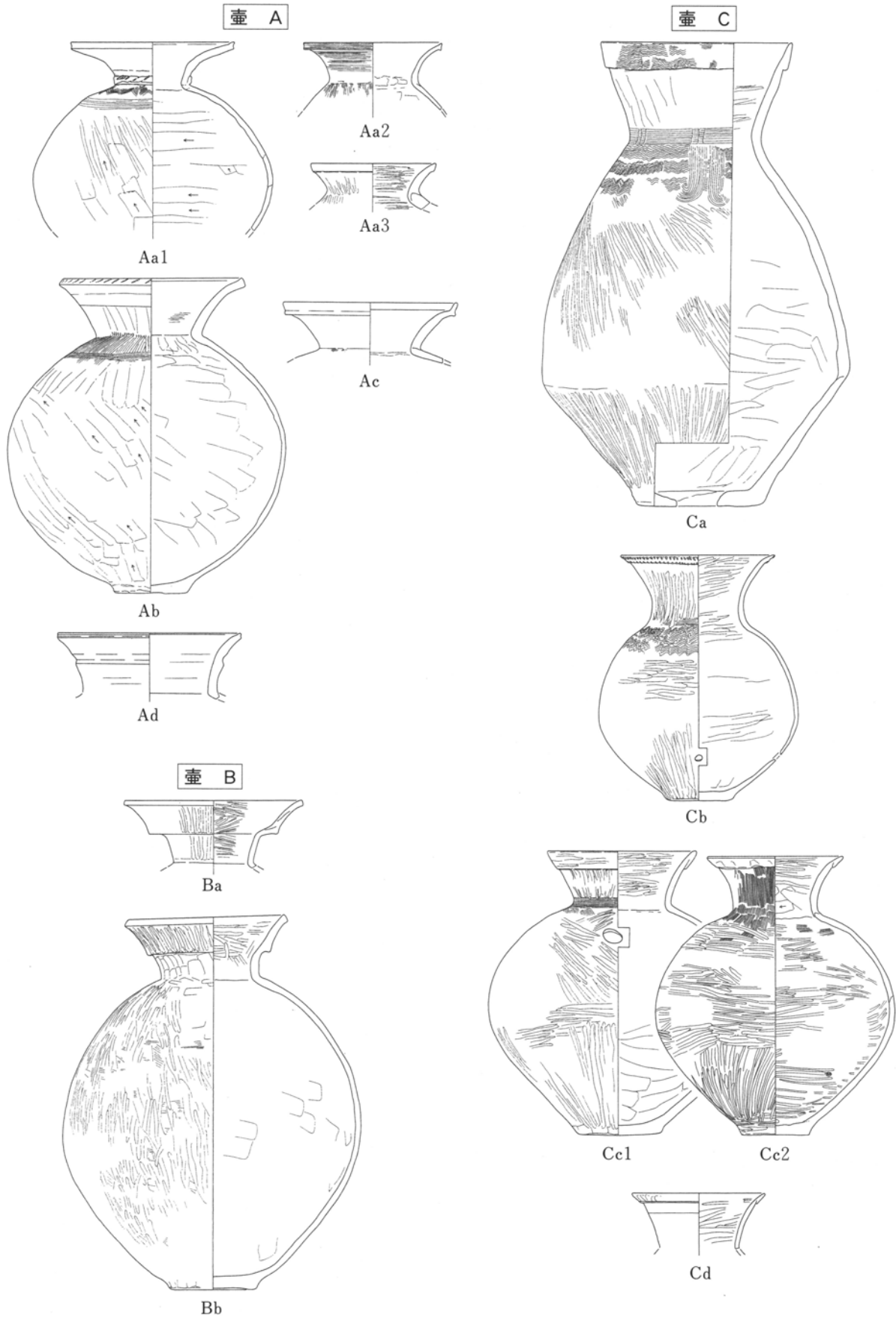
同一型式と捉えるならば、口頸部形状の形骸化としてBa類→Bb類の変遷を考え得るが、Bb類は駿河湾に分布する大廓式系に連なると捉えるならば、同時期の異型式とすべきだろう。ここでは後者の考え方を取ることとする。

壺Cは、樽式の系統に属する。器形の特徴を主とし、文様を従として、以下の5類に細分する。

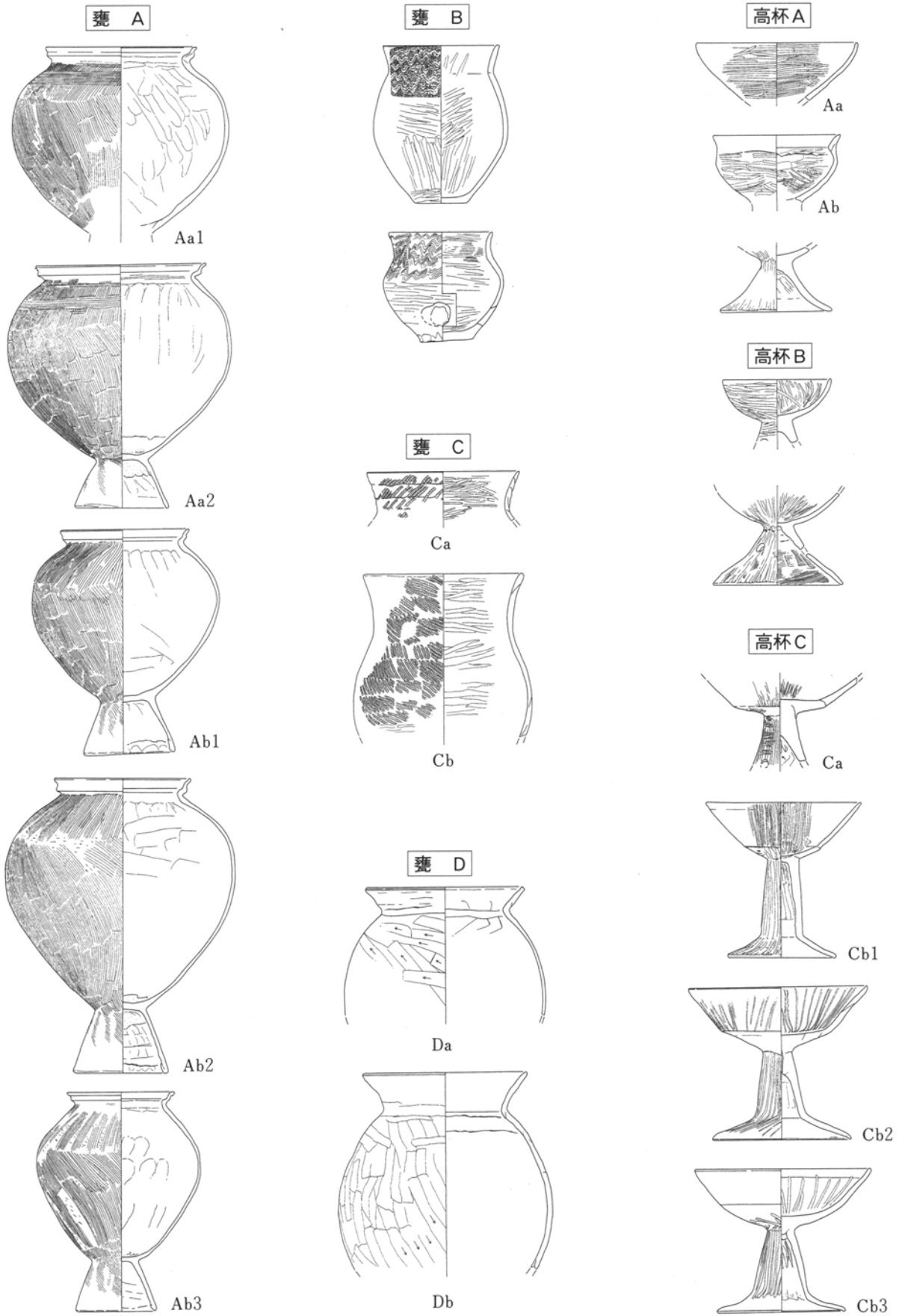
Ca-幅の広い折り返し口縁、弱い「く」字状に屈曲する頸部、なで肩で下半が算盤玉状に張り出す胴部形状。口縁に櫛描波状文、頸部に簾状文、肩に櫛描波状文を施す。図示例では肩に「J」字文が加わる。

Cb-口頸部全体が強い弓なりに外反し、凸帯状の薄い折り返し口縁。胴部はやや肩が張り下膨れの球形。口縁に刻み、頸部に簾状文、肩に櫛描波状文を施す。

Cc1-口縁は弓なりに外反し、薄い折り返し口縁をつくり、頸部は「く」字状屈曲、胴部は肩が張り中位に最大径のある球形。頸部に崩れた簾状文ないし横線文、肩に崩れた櫛描羽状文を施す。



第76図 壺の分類



第77図 甕・高杯の分類

Cc2—器形はCc1と同じ。無文。

Cd—頸部が直線的に開き、薄く小さな折り返し口縁部のみ外折気味に開く。無文。

C類は、文様の組み合わせや単位文様の差異で、さらに細分され得るが、型式組列の認識には以上分類で十分と考える。①口縁の外反化と球形化、②文様の形骸化を変化要素と捉え、Ca類→Cb類の変遷が考えられる。Cc1・Cc2類の形状は外来系壺の形態と考えられることから、短絡的にCb類からの継起的变化と捉えるのは控えたい。ただし文様の形骸化が進んでいる点から後続するタイプとすることは許されよう。Cd類は他遺跡例を参考にすれば、無文の球形胴部をもつ形態で、Cb類ないしCc1・2類に後続すると考えられる。以上の検討から、壺Cの組列は以下のように想定できよう。

Ca類→Cb類→Cc1・Cc2類→Cd類

甕は4大別され、便宜的に甕A、甕B、甕C、甕Dと呼ぶこととする。

甕AはS字状口縁台付甕（以下「S字甕」と略称する）である。これも器形と整形手法の差異によって以下の5類に細分される。

Aa類—肩の張る球形胴で、頸から肩部に横ハケメを施す。胴部のハケメは細かい単位で重ねるのが特徴。また頸部内面に横ハケメを施す例がしばしば見られる。口縁上段が短く口唇部が尖るものをAa1類とし、口唇部が丸みを持ち口縁上段がやや長く伸びる形状のものをAa2類とする。

Ab類—倒卵形の胴部に、上段が長く口唇部の肥厚する口縁形態。口径が小さく、胴下半部が直線的にすままるので、Aa類に比べて長胴形態となる。頸～肩部、胴下位～中位に斜位ハケメ。横ハケメはない。これらはさらに、3細分される。Aa2類の形状に類似し、口径がやや小さく肩部の横ハケメのないものをAb1類、典型的な倒卵形の胴部形状をもち、胴部のハケメ単位が長く一部に前整形のケズリ痕のみられるものをAb2類、口縁上段の肥厚著しく、最大径が中位に下がる胴部形状で、胴部ハケメは長くまばらに施すものをAb3類とした。

S字甕については多くの先行研究があり、群馬県においては、高崎地域を中心とした資料について詳細な分類と編年的位置づけを行った田口一郎氏の研究成果が有効と考える。頸部内面ハケメの有無や整形手法に関わる分類基準の設定に、本項での分類と異なる点はあるが、概ねAa1・Aa2類が田口氏分類（田口1981）のⅡb類・Ⅲa類、Ab1類・Ab2類～Ab3類が田口氏のⅣa～b類・Ⅳc類に相当しよう。大きな相異は、器形の特徴から田口氏のⅣc類を二分したことである。また田口氏のⅣa～b類をAb1類に対応させたのは、統合すべきと考えたためではなく、この段階の資料が本遺跡では少ないことが理由である。

以上の甕Aの細分から、①装飾要素としての頸～肩部横ハケメの消失、②球形胴から長胴化の胴部形状の変化、③ハケメ整形の簡素化、④口縁形態の形骸化を変化要素として捉え、以下の5段階の型式組列を想定した。

Aa1類→Aa2類→Ab1類→Ab2類→Ab3類

甕Bは樽式に属する。出土例が少なく、ほぼ一型式と捉えてよい。口縁は短く外反し、頸部は弓なりにくびれ、胴は中～上位で張り出す。口縁～頸部に櫛描波状文を施す。胴部形状の長短により二分できるが、小型甕における用途上の微差と考えたい。

甕Cは縄文施文を特徴とする「吉ヶ谷・赤井戸式」（註3）である。口頸部の粘土紐積み上げ痕のあるものをCa類、ないものをCb類とした。弓なりにくびれる頸部から口縁は弱く外反して開き、胴部は「橐」形に近い形状と思われる。粘土紐積み上げ痕は装飾効果として採用されたと思われるが、その文様オリジナルについては不明であり、先行型式からの継承要素とは認定できないのが現状である。この両者を継起的な型式組列に位置づけるのは難しい。他遺跡の一括出土例を見てもCa類とCb類が共存する例は多い。ここでは口頸部形状の共通性から、両者を同時期のものと捉えておくべきだろう。

甕Dは「く」字状に屈曲して開く口頸部形状と外面のケズリ整形技法が大きな特徴である。口唇部が

つまみナデによって尖るDa類と丸みをもつDb類に二分した。本遺跡での類例が少ないため、型式組列での先後関係を認定する根拠を捉えたいが、器壁厚の薄いDa類が先行すると考えておきたい。なお、Db類には裾内側に形骸化した折り返しのつく脚台をつける例があり(12号住-8)、甕Ab3類からの後続型式として位置づけることも可能である。これは田口氏分類のS字甕Ⅶ類に相当し、そのなかでも最終段階の台付甕と捉えておく。

高杯については、樽式に属する高杯A、東海西部系の高杯B、屈折する杯部と柱状脚をもつ高杯Cに三分される。

高杯Aは、口縁が内彎して開くAa類と、「く」字状に屈曲して短く口縁が外反するAb類に細分される。全形を知る例はないが、低く外反する円錐形脚をもつと思われる。内外面とも横位に研磨するのが共通する整形上の特徴で、両者とも在来弥生系高杯として併存してきたものである。ここでは同時存在の異型式として捉えておく。

高杯Bは、椀状の半球形杯部をもつ、所謂「小型高杯」である。出土例から判明する限りでは、弓なりに外反するか、下半が大きく開く円錐形の脚部をもつようである。

高杯Cは、脚下半が強く外反し、下位に円孔を穿つCa類と、典型的な屈折脚をもつCb類に分けられ、Cb類はさらに以下の3類に細分される。

Cb1-杯底部は小径で杯部が長く、口唇はつまみナデで尖る。脚は直線的な筒型で、裾端部は外側に小さな平坦面をつくる。杯部内外面と脚部の研磨は細かく丁寧。

Cb2-杯底面の径が大きく、杯部は相対的に短い。口唇部はつまみナデで上方に湾曲する。脚部はやや下方で開く筒型で、裾端は口唇と同じく下方に湾曲する。研磨は細いがまばらで暗文状。

Cb3-器形はCb2類に近似するが、杯底部の稜が弱く丸みをもち、口唇と脚裾端も丸みを増す。脚部は中位が膨らむエンタシス状で下位が開く。研磨はナデ状でまばら、一部省略するものも見られる。

高杯Cにみる型式細分はそのまま型式組列における時間差として捉えられ、Ca類を起点とした器形と整形手法の形骸化を変化傾向として、Ca類→Cb1類→Cb2類→Cb3類の組列を想定できる。

以上、壺、甕、高杯の主要3器種における型式分類と可能な限りの型式組列を提示した。このなかで、本遺跡出土土器の編年的位置づけに有効と思われるのは、壺Aと壺C、甕A、高杯Cの各型式組列である。次項では、この型式組列を一括共伴遺物と異器種間で共通する様式的特徴で検証しつつ、編年上の時期区分を試みることにする。

(2) 編年的位置づけ

まずは、全体的な時間的枠組みをみておきたい。前項で検討した型式組列から想定される最古段階の型式は、壺Aa1類、壺Ca類、甕Aa1類であるが、総体的に見た場合、在来弥生土器である樽式に属する壺Ca類を本遺跡出土土器群の最古段階に位置づけることが出来よう。これは、肩部の「J」字文や屈曲する胴下半形状に長野県中～北部の箱清水式の影響を看取できる例(註4)だが、簡素化や形骸化の見られない整った櫛描文構成や、長く直線的に開く口頸部、弓なり屈曲の頸部、なで肩で下半が膨らむ長胴形といった形状の特徴は、樽式を細分した飯島・若狭編年(飯島・若狭1988)でも3期に含まれるべきと考える。同じく樽式に含まれると想定したが、少数例のために時間的幅を見込めなかった甕Bについては、簾状文を持たずに櫛描波状文のみの文様構成であること、口縁が短いことを新相要素と考え、壺Ca類の次段階に位置づけることにする。これに時間的に並行するのは壺Cb類や高杯Aと考える。

最新段階に位置づけるべき型式は、壺Ad類、甕Db類、高杯Cb3類である。これらは、群馬県内の資料を基に編年作業を行った坂口氏の1期(坂口1999)に相当する。

最古段階と最新段階の時間幅は、後述するように、少なくとも概ね150年を見積もることができ、遺跡の継続性や他遺跡との同時性などの検討のためには、

さらに時期的細分を行う必要がある。

ここで、先述の型式組列に基づき、共伴資料と様式的共通性から、器種組成における同時性と時期区分設定を試みたい（第78・79図参照）。

1段階—壺Aa1・Aa2・Aa3、壺Ca・Cb、甕Aa1・Aa2・Ab1、甕B、甕Ca・Cb、高杯Aa・Ab、高杯Bを示準とする。他器種として、小型器台、直口壺、在来弥生系の小型広口壺・有孔鉢・鉢が加わる。樽式、吉ヶ谷・赤井戸式の在来系土器群と波及期の東海西部系土器群（廻間Ⅱ期3段階前後に相当する）が共存する。これに南関東系の壺（方形周溝墓—35・36）が伴う。壺CaとCb、甕Aa1～Ab1にみる型式差の分に相当する時間幅がある。本遺跡ではこの段階の一括資料が少なく明確な時期区分は困難だが、高崎市上豊岡引間Ⅳ遺跡SH20例（綿貫他1997）や前橋市元総社西川遺跡12号住例（笹澤ほか2001）などの良好な資料を参考に、古相と新相に二分することが可能である。

2段階—壺Ab・Ac、壺Ba・Bb、壺Cc1・Cc2、甕Aa2・Ab1、高杯B・Ca、球形胴部の罎、直口壺、小型器台を主たる器種組成とし、これに在来弥生系の高杯A類や鉢の最終形態のものが残ると考えられる。

3段階—甕Ab2、高杯Cb1、口縁に比べ体部が著しく小さい罎の定着を指標とし、壺はAb・Ac・Ba・Bb、直口壺が主体となるようである。在来弥生系の型式や小型器台はほとんど姿を消す。

4段階—甕Da・Db、高杯Cb2・Cb3の定着を指標とし、これにナデやケズリ整形の罎・単口縁小型甕、内斜口縁鉢が伴う。壺は不明瞭だが、壺Acが残存し、新たに壺Adが出現すると考えられる。古相ではS字甕最終段階としたAb3、甕Da、高杯Cb2で組成され、器種を越えた共通的特徴として、口唇部の上方へ小さく彎曲する形状を掲げることができる。新相では甕Db、高杯Cd3が主体となり、厚い器壁とケズリ・ナデ整形の盛行で特徴づけられる。

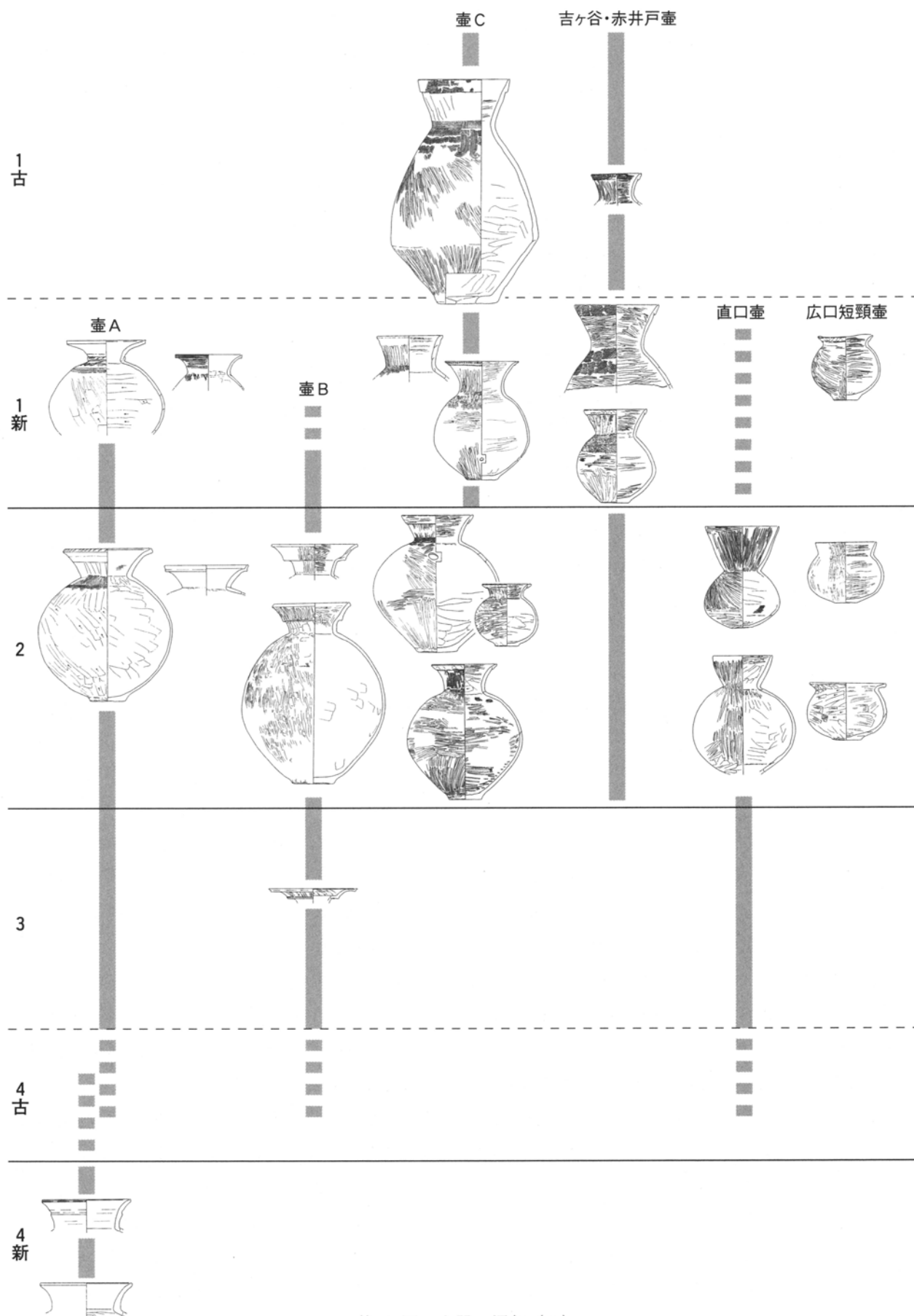
以上のように、本遺跡出土土器の段階区分は、四段階に分けられ、さらに第1段階と第4段階を新旧

二細分とした。これを深澤敦仁氏が行った井野川流域における土器編年案（深澤1998）に照合させると以下のようなになる。

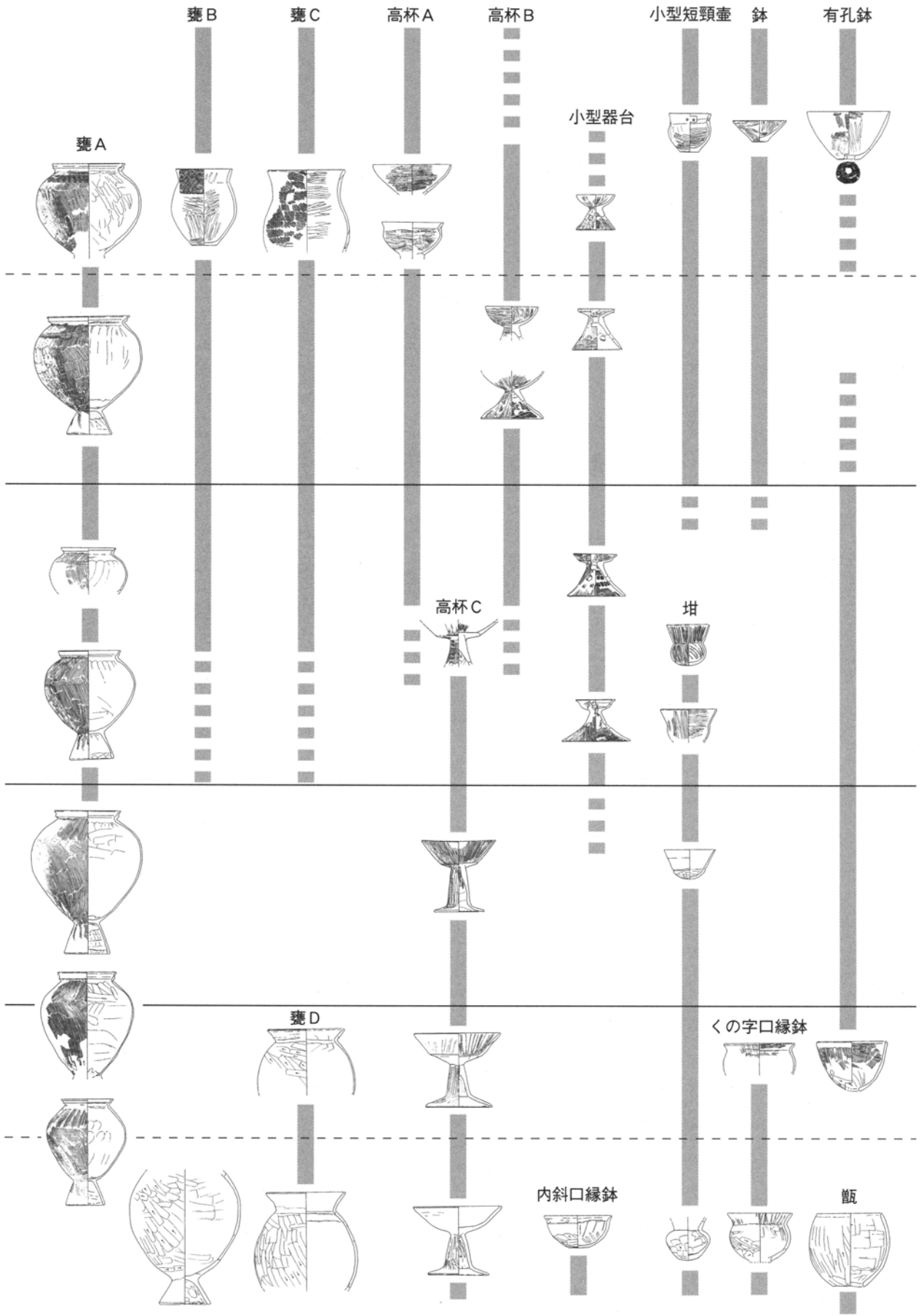
本遺跡段階	深澤（1998）
1—古相	1
1—新相	2
2	3
	4
3	5
4—古相	
4—新相	

深澤氏編年ではS字甕の型式変遷と組成上の増減を時期区分の示準とするため、本遺跡の段階区分とは多少のずれがある。深澤編年3・4段階を本遺跡で2段階にまとめたが、これは本遺跡でのこの段階の一括資料が欠落しているためである。深澤は3段階と4段階の区分を、肩部横ハケメのあるS字甕から無いものへと比率が逆転する点に求めているが、相当数の統計処理によらない限りこの判別は難しい。限られた数量の一括資料の場合、特定器種や特定型式、器種を越えた製作技法上の特徴の存否（できれば複数）に依る方法が相応しいと考える。本遺跡2段階の時期細分については、壺、罎、器台の型式細分が鍵を握ると考えている。

ここで、現時点で想定できる各段階の暦年代比定をしておこう。暦年代資料比定可能な近畿・濃尾・北陸との編年対比については、1段階新相が庄内Ⅲ（米田1991・1994）、廻間Ⅱ—2～3（赤塚1990）、越後Ⅱ—2（坂井・川村1993）に、3段階が布留式Ⅱ（米田1991）、松河戸Ⅰ式に併存する点をもつと考えている。このことから、1段階新相について、同時期に属する石川県羽咋市二口かみあれた遺跡SZ208の井戸材の伐採年代Ad.258年（年輪年代）から、3世紀第3四半期をあてたい。また3段階は4世紀後半代のなかにあると考えておく。



第78図 土器の編年(1)



第 78 図 土器の編年 (2)

3 検出された遺構の時期

次に本遺跡で検出された住居跡及び方形周溝墓の時期について推察してみよう。なお、一括性の条件として、床面付近（床面上レベル5cm以下）か貯蔵穴等の住居内施設出土の土器を対象とする。

遺構名	時期認定土器	段階
1号住居	高杯Cb3、壺Ad	4新
2号住居	甕B、在来系小型短頸壺	1
3号住居	甕Ab2、高杯Cb1、埴	3
4号住居	壺Aa1、甕Aa2	1新
5号住居	甕Ab1・Ab2	2
6号住居	甕Db	4新
7号住居	(高杯Cb1～3)	(4)
8号住居	(甕A、円錐形高杯脚)	(2～3)
10号住居	壺Cc2、甕Aa2・Ab1	2
11号住居	くの字口縁鉢	4古
12号住居	甕Dn	4新
14号住居	(高杯B)	(1)
15号住居	甕Aa2	1新～2
16号住居	甕A	不明
18号住居	不明	不明
方形周溝墓		1～3

方形周溝墓出土土器については、第3章で述べたとおり、旧溝と新溝の各々に伴う土器群が混在して出土しており、さらに近接遺構や包含層から周溝への流入も想定できるので、本来的な帰属土器を抽出するのは非常に困難である。そのなかでも、旧溝土層に含まれ、なおかつ底面レベルに近いとの条件から抽出した方形周溝墓造営初期段階に伴う可能性の高い土器群を第46図に掲げた。これによれば、壺Ca(10)、壺Cb(6)、甕Aa1(74)、甕Aa2(75・87)、高杯A(116)及び高杯B(148)の脚部がみられる。樽式の範疇で捉えうる壺Ca(10)を上限資料、S字甕の甕Aa2(75・87)を下限資料として、これらから組成される土器群は1段階に位置づけられる。従って、

方形周溝墓造営時期は1段階のなかで開始されたと想定される。一方、新溝に伴う土器群を第47図に掲げたが、これを見る限り1段階から3段階までのほとんどの器種と型式が含まれており、特定の時期に限定するのは難しい。確定できるのは、3段階において、土器が埋没するだけ周溝の凹みが存在したということである。言い換えるならば、4段階には少なくとも周溝は埋没していたということであろう。方形周溝墓の北隅に重複する位置関係で1号住居跡が検出されていることは、4段階新相の時期には墓そのものの意義が失われていた可能性も示唆する。

以上の各遺構における時期の検討から、竪穴住居は1段階から4段階まで断絶することなく存在すること、方形周溝墓は1段階に造営が開始し、3段階まで溝が存在したことが判明した。ここであらためて同時期に属する遺構を列記してみよう。

1段階－2号住・4号住・(14号住)・1号方形周溝墓

2段階－5号住・(8号住)・10号住・15号住・1号方形周溝墓

3段階－3号住・(8号住)・1号方形周溝墓

4段階古－11号住・(7号住)

4段階新－1号住・6号住・12号住

4号住→5号住と7号住→6号住は遺構重複が認められるため、一定のインターバルを想定する必要があると考えるが、5号住→8号住、11号住→12号住は、各々の竪穴の北辺と南辺を同一線上にそろえ、約1mの間隔をあけた位置関係から、隣接宅地へ建て直した結果と理解したい。方形周溝墓との位置関係については、1段階に属する2号住が、双方の隅間距離約7mをあけて位置する。22号住廃絶後は西方に21mあけて10号住が位置する。これは東西辺8.5mと調査区内で最大規模を誇る。本遺跡での方形周溝墓が、集落内の有力者階層を被葬者とするという想定が許されるならば、まずこの10号住居住者がその筆頭候補者にあげられようか。

4 南関東系壺について

本遺跡の方形周溝墓は、出土土器が種類・量ともに豊富である点についてきわめて異例であるが、そのなかでも注目すべきなのは、南関東系の壺3点(35～37)である。いずれも赤彩されており、第51図－35は沈線区画による網目状燃糸文、第52図－36は斜縄文を施す。網目状燃糸文は弥生後期から古墳時代初頭にかけて、上総・下総・南武蔵の東京湾岸から荒川・江戸川下流域の地域で主たる分布を示している。ただし、共伴土器のなかに位置づけた場合、主流は斜縄文や羽縄文の壺で、量的には従属するといえそうである。群馬県では現在のところ5例(註5)が知られており、時期は古墳時代初頭に伴う例にはほぼ限られる。本遺跡例は、緩やかに内彎して開口縁形状、「く」字状に移行する直前の頸部形状、なで肩に安定した下膨れの胴部をもち、文様帯が頸部以下の肩に2帯施文することを特徴とする。このことから、南関東の編年上において、弥生末期～古墳時代初頭に位置づけられよう。類例を掲げるならば、東京都北区赤羽台遺跡YK221例(東北新幹線赤羽地区遺跡調査会1992)、千葉県柏市石揚遺跡2号方形周溝墓例((財)千葉県文化財センター1994)等が、最も器形・文様構成とも近似している(第80図)。燃糸文帯の沈線区画は、南関東においては後期中葉段階に盛行するが、古墳時代初頭段階まで残存する例も知られることから、特にこの点をもって古相と位置づける必要もないだろう。また、頸～肩部文様帯が2帯であることから、古相との見方もあるが、ここでは器形の特徴を優先させて考える。

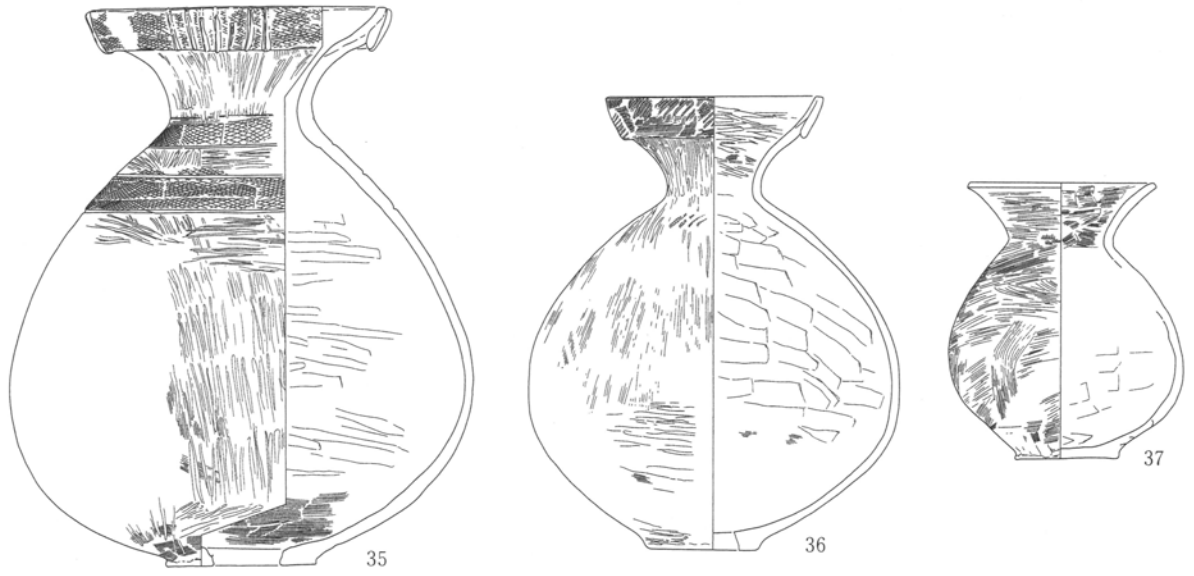
南関東系の壺のうち、36は肩の斜縄文帯が形骸化しており、35に比べて球胴化が進んでいる。37はハケメ整形に赤彩したのみの小型壺で、やはり頸部の「く」字状屈曲と球胴化の進んだ器形をもつ。この両者は35よりも若干後出する位置づけを与えうるが、弥生末期～古墳時代初頭の時間幅からはずれるものではあるまい。

以上の南関東系壺は、器形・文様・成整形手法のいずれも南関東の後期弥生土器と同一で、胎土の

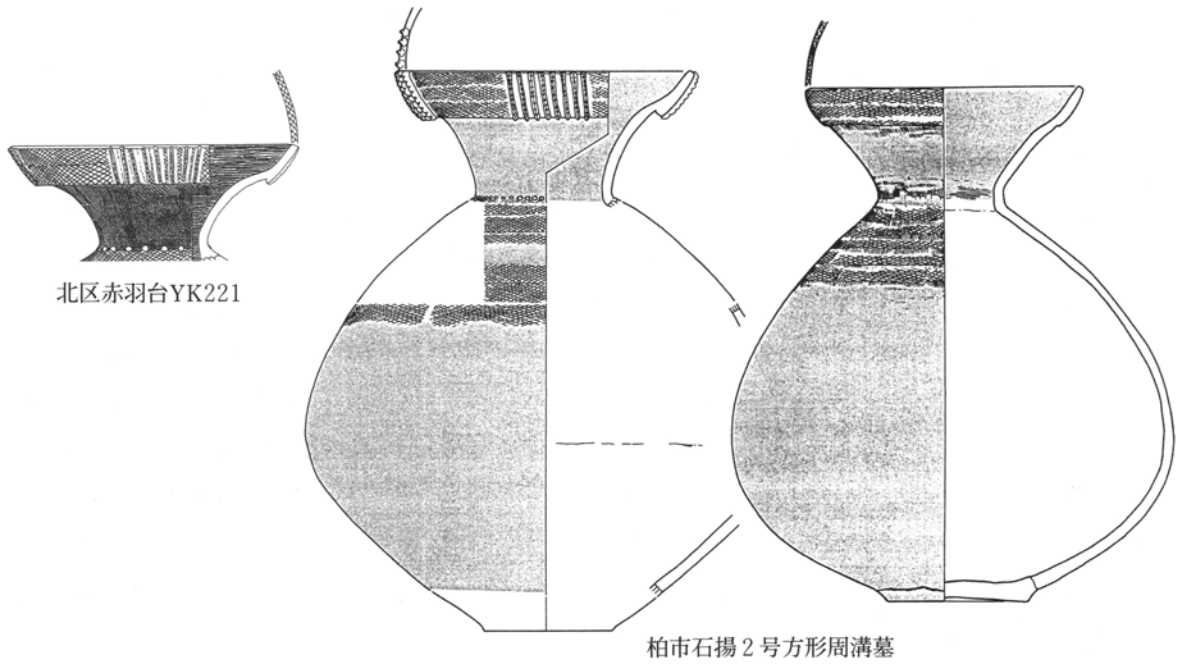
ルーペ観察によっても、在産土器とは異なる。化学分析で検証する必要はあるが、赤色顔料の発色についても、オレンジ系の強い在地樽式土器のベンガラとは異なるようである。以上の特徴から、これらは南関東からの搬入品の可能性が高いと考えてよい。その搬出地については、地理的に近い大宮台地を候補としたいが、比較的新しい段階まで沈線区画縄文帯の残る東京湾岸も十分その範疇に含まれよう。板橋区四葉地区遺跡群東部台地102住からは、樽3式の最新段階に位置づけられる壺と甕が出土しており(第80図)、交差編年上の好資料であるとともに、群馬県南部と東京湾岸地域との交換や贈与等を含めた交流の証しとして意義づけることも許されよう。ここでは、比田井克仁氏が後期中葉以降の様式圏と考える南武蔵地域をその搬出地として措定するにとどめておきたい。

これら南関東系壺は、出土状況を見る限り35と36が四隅部分の旧溝に伴っており、方形周溝墓造営初期の葬送に使用されたのは明らかである。37については新溝埋土から出土しているのも、何時の時点で使用されたかは特定できない。方形周溝墓に限らず、墓に伴う土器の一括性については注意を要し、特に編年上の資料として扱うにはいくつかの手続きを必要とする。本遺跡出土の南関東系壺35・36については、底面の著しい摩滅状態から、集落内において一定期間貯蔵器として実用されていたのは明らかである。従って、く製作→入手→実用→墓への転用→埋没の時間幅をもつことを前提にした上で、旧溝出土土器群との同時存在が認定される。

方形周溝墓旧溝出土土器は、前述したように1段階に属するものに限られる。このなかでは樽3式期末の壺10から1段階でも新相に含まれるS字甕B類に相当する甕Aa2類までの時間幅を想定しておく必要はあるが、南関東系壺35・36が、これらと共存する時間を有したととらえてほぼ矛盾はあるまい。

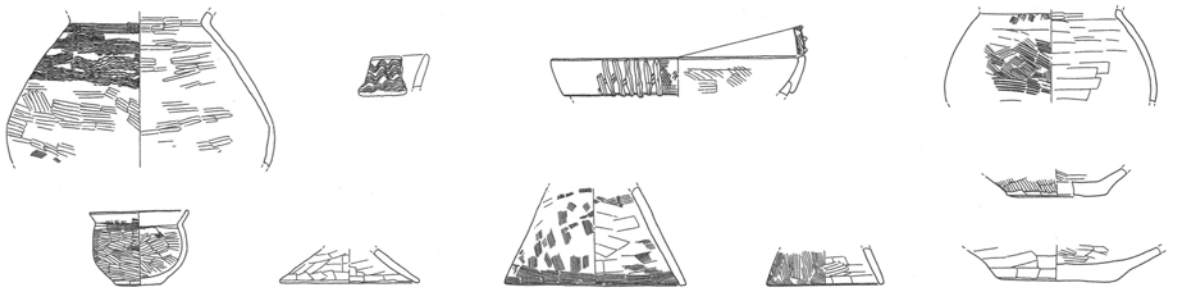


中居町一丁目遺跡 1号方形周溝墓



北区赤羽台YK221

柏市石揚2号方形周溝墓



板橋区四葉地区東部台地102住

0 1:6 20cm

第80図 網目状捺糸文壺と関連資料

5 方形周溝墓と土器

— 葬送祭祀復元にむけて —

本遺跡では、方形周溝墓から多量の土器が出土しているが、その全てが葬送に関わるものでないことは、報文中に述べた。特に掘り直したと想定される新溝出土土器のなかには、周辺からの流入や廃棄行為に伴う可能性の高いものも見られる。従ってその出土分布や器種組成、同時性の分析には新溝出土土器群は不適であり、ここでは出土層位によって分離できた旧溝出土土器について、その概要を記しあわせて方形周溝墓における葬送祭祀研究の問題点を提示することにした。

第46図は旧溝に伴うとした土器群の出土分布図である。器種と型式は、樽式壺（6・10）、南関東系壺（35・36）、壺（54）、吉ヶ谷・赤井戸式壺（25・27）、広口短頸壺（23・66）、S字甕（74・75・87）、（樽式系）高杯（116）、装飾器台（145）、小型器台（148）、北陸系高杯か器台（46）である。これらは、破損状況から方台部から崩落したと考えられる。35の網目状撚糸文壺は東隅、樽式壺10は西隅、南関東系縄文壺36は北隅から出土しており、これらが方台部の四隅に置かれていた可能性を示している。ただし壺35については、破片が東隅の南北に分かれて出土していることから、崩落前の方台部上で何らかの理由によりすでに破砕していたと考えるべきだろう。北東溝中央ではS字甕74が見られるだけであるが、新溝に混入した可能性のある1段階の土器として、樽式壺13、吉ヶ谷・赤井戸式甕26、樽式系鉢129が2mほど北西に離れて出土している（第47図参照）。なお無文の南関東系小型壺37は、新溝内で東隅と北東溝中央に分離して出土しており、本来の位置が推測できない。一方、北西溝北半にはS字甕、吉ヶ谷・赤井戸式壺2点、直口壺、広口短頸壺2点が見られ、新溝に混入したと推定される1段階の壺7・49・50や器台142・118、高杯115・124（以上第47図参照）を含めると、最も出土分布密度が高く全ての器種が揃っているといえる。ただし、土器の復元率は相対的に低く、確認出来る限り穿孔土器の見られないことが

傾向としてうかがえる。西隅については、底部穿孔樽式壺10のほかS字甕、高杯、器台が見られ、これに新溝へ混入したと考えられる胴部穿孔の樽式壺12が伴うようである。

以上の分布傾向から導かれる推論をまとめると以下ようになる。

- ①方台部の四隅には装飾壺を穿孔して配置する。
- ②これらは、南関東系と樽式が見られ、どちらかに限定していない。
- ③これらは、溝崩落前にすでに破砕していた。
- ④溝内土器の出土量には偏りがあり、北西溝北半が最も多い。
- ⑤この地点の土器は、葬送祭祀で使用後、破砕されて廃棄された可能性がある。

新溝出土土器の分布（第47図）は、一括性に問題があるため、概括的な特徴しか捉えることが出来ない。これによれば、肩に穿孔した2段階の樽式系壺21が東隅から器台、直口壺、S字甕などと共に出土し、西隅からは2段階に属する駿河湾～西相模系の壺39が見られる。北東溝中央付近では、3段階のS字甕、遺存度の高い高杯、器台、直口壺がまとまって出土しており、本方形周溝墓葬送に関わる土器群の最終単位を示している。このことから、本方形周溝墓は、1段階（3世紀第3四半期）に造営され、溝の掘り直しを経て3段階（4世紀後半代）に埋没するまで、葬送の場として営続したこと。その間、方台部四隅に装飾された壺を配置することが、複数回行われたこと。葬送祭祀に使用された土器は、特定型式に限定されないことが判明した。

方形周溝墓の継続性と複数回行われたと見られる葬送祭祀については、溝で区画された葬送単位が、唯一被葬者のものではないことを示すと考えられる。仮に一人であるならば、1人の被葬者を対象に約100年にわたって死後の祭祀行為が繰り返されたことになる。埋葬主体部が検出できなかったために憶測の域を出ないが、ここでは、竪穴住居の生計単位あるいは血縁等によって結ばれた特定の一族を、葬送する場として営続したと考えておきたい。

また、葬送祭祀に関わる装飾壺の類が、単一型式に限定されない点は、土器型式と被葬者の出自が短絡的に結びつかない可能性を示唆している。本遺跡の北西約1kmにある高崎市貝沢柳町遺跡では、東海西部系加飾壺（パレススタイル壺、ひさご壺）が、近接する同市上大類北宅地遺跡からは樽式壺と南関東系甕類が、それぞれ方形周溝墓から出土しており、ここでの外来系土器が被葬者や造墓集団とどのように結びつくのかについて、より多角的な分析が必要とされる。井野川流域における弥生後期末～古墳時代初頭（いわゆる庄内式並行期）に、東海地方西部と南関東、さらに北陸北東部も加えた遠隔地の土器群が、この時期から顕在化する全周型ないし土橋を一隅に残すタイプの方形周溝墓と軌を一にするように出現することは、単なる偶然だろうか。高崎市日高遺跡や渋川市有馬遺跡のような四隅土橋タイプはすでに樽式集団のなかに普及しているが、全周型への転換は、単なる内在的発展というより、かかる外来系土器出現の背景に存在する外来集団を介在させて理解すべきではないだろうか。

註

1 「有孔鉢」は佐原真氏が指摘するように、蒸し器としての用途が疑わしいと考えるため、「甗」ではなく形態名称を採用した。本遺跡出土例についても、甗としての使用法を裏付けるような痕跡は認められていない。

2 「小壺」は口径・器高とも10cmほどの壺形小型品で、群馬県の弥生土器では後期末から組成に加わるようになる。1%前後と組成比率が低く、日常用の器ではない可能性もあるが、古墳前期に広く普及する甗に近似する用途が想定でき、その先駆的的地方形式として考えたい。

3 「吉ヶ谷・赤井戸式」の名称使用は、これまでも度々触れてきたが、未だに型式的遡源が不明確な故の苦肉の策である。近年明らかにされた、埼玉県北部の弥生中期後半に属する北島式は、吉ヶ谷式の成立を解明する重要な鍵を握っていると思われる。一方、赤城山南麓の荒砥北三木堂遺跡などに見られる縄文施文土器群の行く末も検討の余地は残されたままである。この呼称を定着させるつもりはないが、さりとてどちらかに一方づける根拠も持ち合わせてい

ない。今しばらく容赦願いたい。

4 J字文については、弥生後期後半の松本平地域で普遍的に見られる文様であるが、後期末には千曲川流域にも散見する。群馬県ではほとんど見られない文様として注意されるが、本遺跡例は最終段階の樽式にJ字文だけを借用したものと解される。

5 1990年に集成を行った島田孝雄氏によれば、太田市と大泉町の2例であったが、2006年現在で公開された資料によれば、高崎市宿横手三波川遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団2001）、上滝榎町北遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団2002）、上滝遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団1981）が追加される。

文献

- 赤塚次郎1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
 飯島克巳・若狭徹1988『樽式土器編年の再構成』『信濃』40巻9号
 斉藤利昭2001『宿横手三波川遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 斉藤英後2002『上滝榎町北遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 坂井秀弥・川村浩司1994『古墳出現前後における越後の土器様相』
 『磐越地方における越後の土器様相』
 坂口 一1999『群馬県における古墳時代中期の土器の様相』『東国土器研究』5
 笹澤泰史ほか2001『元総社西川遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 佐藤明人1981『上滝遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 財団法人大阪府文化財センター2006『古式土師器の年代学』
 (財)千葉県文化財センター1994『石揚遺跡』
 島田孝雄1990『網目様撚紋土器』『利根川』11
 高崎市教育委員会1983『上大類北宅地遺跡』
 高崎市教育委員会1986『貝沢柳町遺跡』
 田口一郎1981『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会1992『赤羽台遺跡』
 比田井克仁1999『弥生後期南武蔵様式の成立過程』『西相模考古』8
 深澤敦仁1998『上野における土器の交流と画期』庄内式土器研究XVI
 米田敏幸1991『土師器の編年I 近畿』『古墳時代の研究』6
 米田敏幸1994『河内における庄内式土器の編年』庄内式土器研究VII
 綿貫鋭一郎他1997『上豊岡引間IV遺跡』高崎市遺跡調査会

写 真 图 版



遺跡全景（東から）



遺跡全景（西から）



調査前風景 (東から)



1号住居 炉跡 遺物(2)出土状況 (南から)



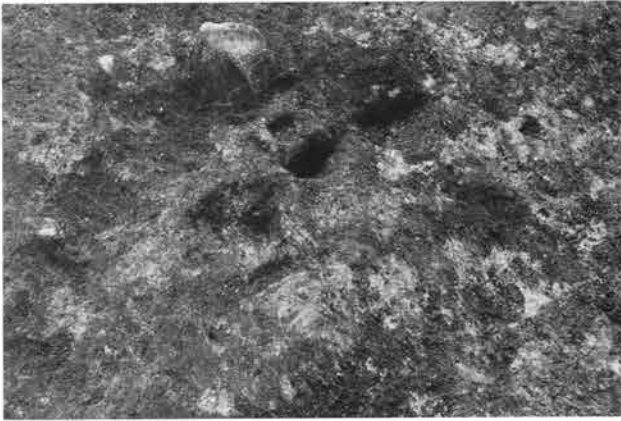
2号住居 全景 (北から)



2号住居 遺物出土状況 全景 (南から)



2号住居 遺物出土状況 (東から)



2号住居 炉跡 (北から)



3号住居 遺物出土状況 全景 (北から)



3号住居 遺物出土状況 (北から)



4号住居 遺物出土状況 全景 (北西から)



4号住居 遺物(1・3)出土状況 (北西から)



5号住居 遺物出土状況 全景 (西から)



4・5号住居 遺物出土状況 全景 (西から)



6号住居 全景 (北から)



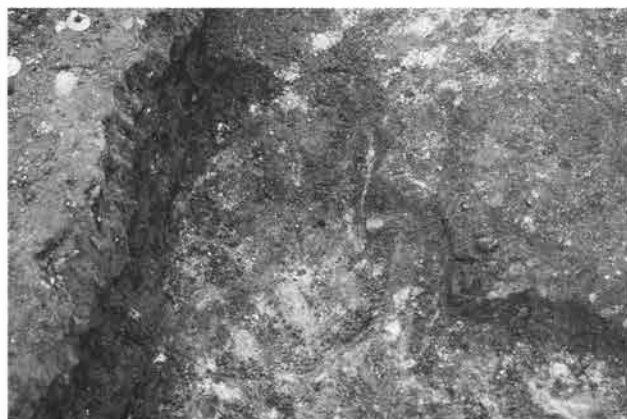
6号住居 炉跡 (東から)



7号住居 全景 (北から)



8号住居 全景 (北から)



8号住居 炉跡 (北から)



9号住居 遺物出土状況 (西から)



9号住居 全景 (西から)



9号住居 カマド (西から)



9号住居 貯蔵穴内遺物(2)出土状況 (西から)



10号住居 全景（北から）



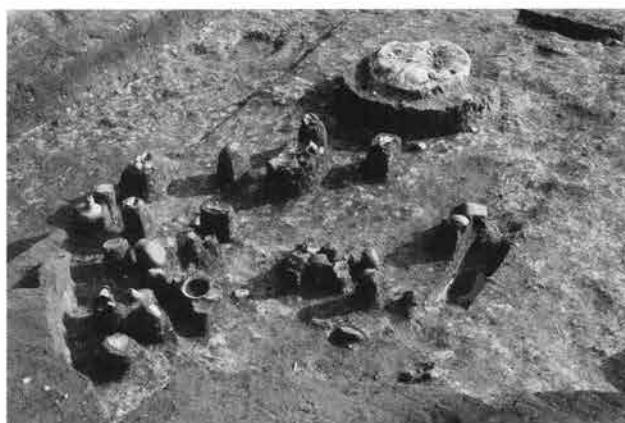
10号住居 遺物出土状況 全景（北西から）



10号住居 遺物出土状況（北から）



10号住居 炉跡（北から）



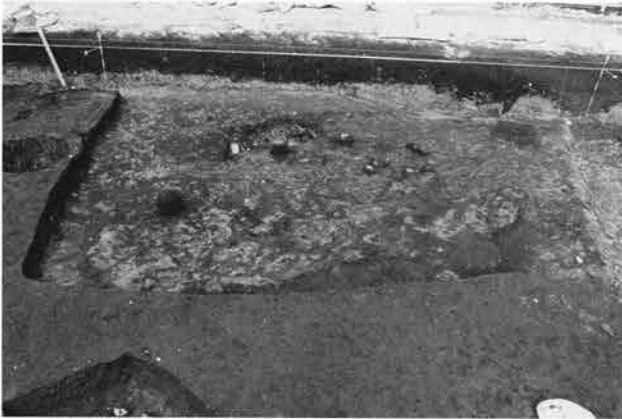
11号住居 遺物出土状況（西から）



12号住居 全景 (南から)



12号住居 遺物(7)出土状況 (東から)



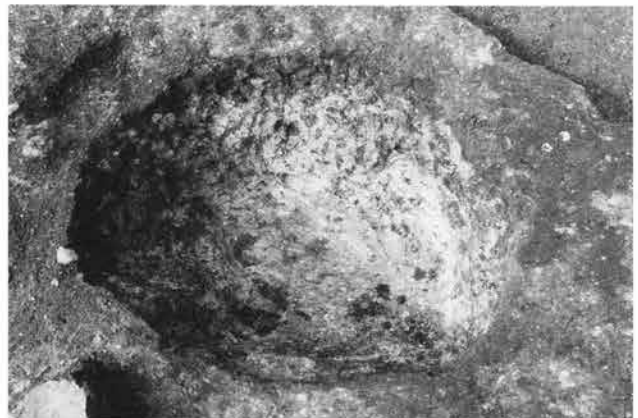
14号住居 遺物出土状況 全景 (南から)



14号住居 全景 (東から)



14号住居 炉跡 (西から)



14号住居 貯蔵穴 (南から)



15号住居 遺物出土状況 全景 (北東から)



15号住居 遺物出土状況 (北東から)



16号住居 全景（南東から）



17号住居 遺物出土状況 全景（北西から）



17号住居 カマド（南西から）



18号住居 全景（北から）



1号井戸 全景（南から）



2号井戸 全景（北から）



3号井戸 全景（北東から）



4号井戸 全景（南から）



5号井戸 全景 (南から)



6号井戸 全景 (南から)



1号土坑 全景 (西から)



2号土坑 全景 (南から)



3号土坑 土層断面 (南から)



4号土坑 全景 (北から)



5号土坑 全景 (南から)



6号土坑 全景 (南西から)



1号火葬跡 人骨出土状況 全景（東から）



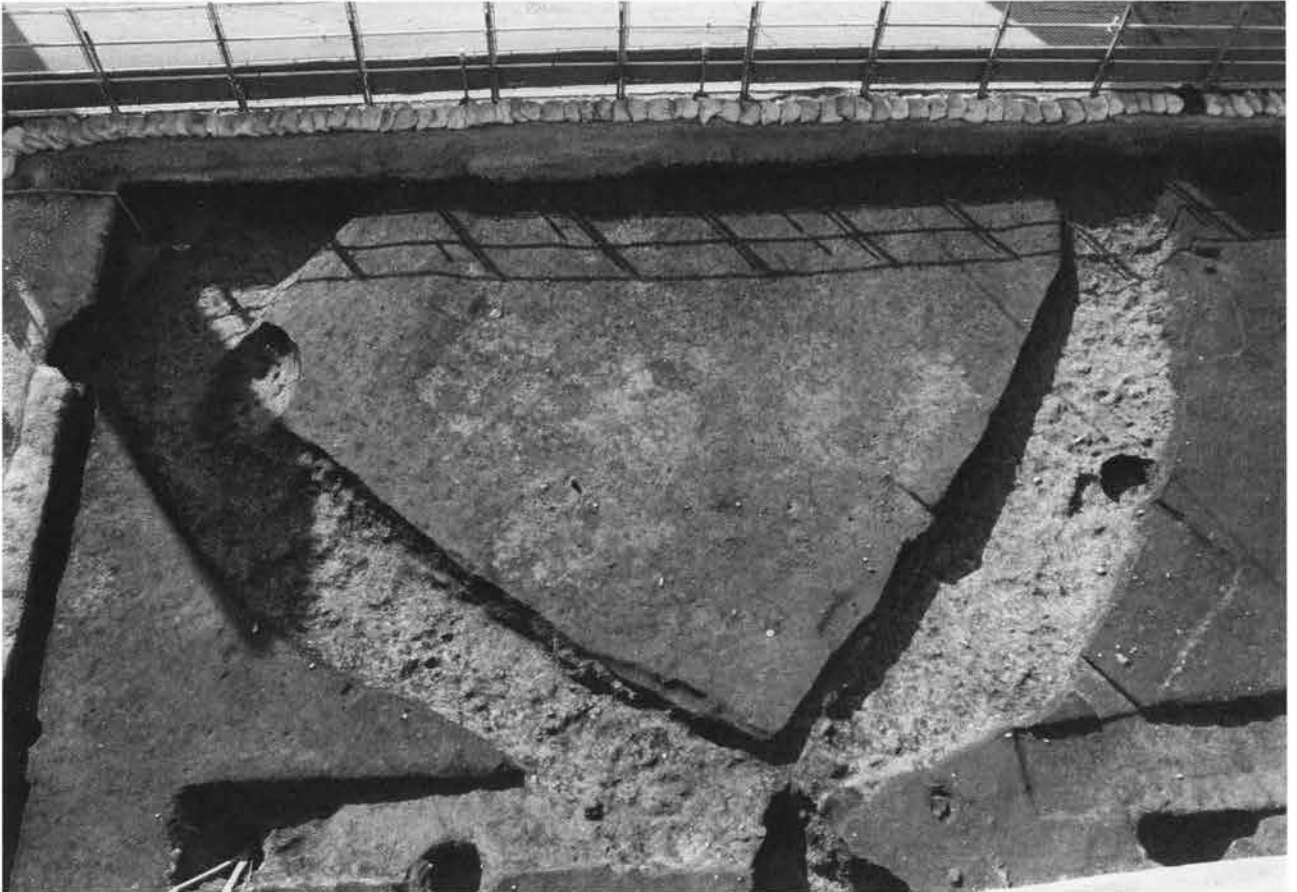
1号火葬跡 全景（西から）



1号溝 全景（南西から）



3号溝 北壁断面（南から）



1号方形周溝墓 全景（北から）



1号方形周溝墓 全景（東から）



1号方形周溝墓 遺物出土状況（南西から）



1号方形周溝墓 遺物出土状況 全景 (南西から)



1号方形周溝墓 遺物出土状況 全景 (北東から)



1号方形周溝墓 南西部分 遺物出土状況 (南から)



1号方形周溝墓 南東部分 遺物出土状況 (南から)



1号方形周溝墓 東部分 遺物出土状況 (東から)



1号方形周溝墓 東隅 遺物(35)出土状況 (南から)



1号方形周溝墓 東隅 遺物(35)出土状況 (北東から)



1号方形周溝墓 北東部分 遺物出土状況 (南東から)



1号方形周溝墓 北東部分 遺物出土状況 (南東から)



1号方形周溝墓 北東部分 遺物出土状況 (南から)



1号方形周溝墓 北東部分 遺物出土状況 (北から)



1号方形周溝墓 北隅 遺物(36)出土状況 (北から)



1号方形周溝墓 北隅 遺物(36)出土状況 (南から)



1号方形周溝墓 北西部分 遺物出土状況 (南から)



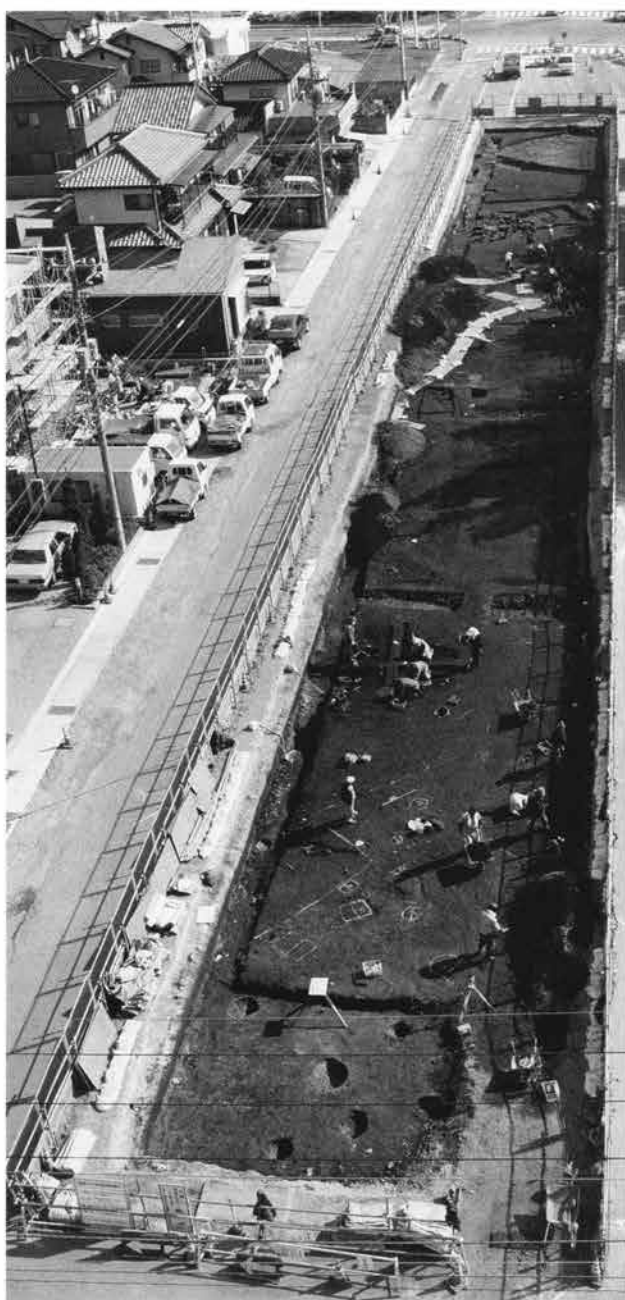
1号方形周溝墓 北西溝中央 遺物出土状況 (南から)



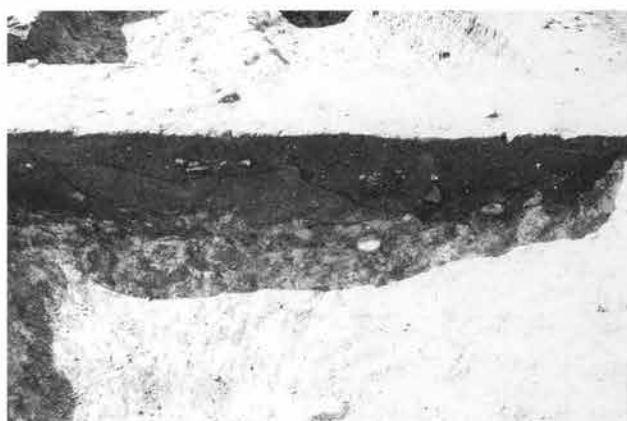
1号方形周溝墓 西部分 遺物出土状況(南から)



1号方形周溝墓 西隅 遺物(10)出土状況(南から)



調査区全景(西上空から)



1号方形周溝墓 溝土層断面C-C'(東から)



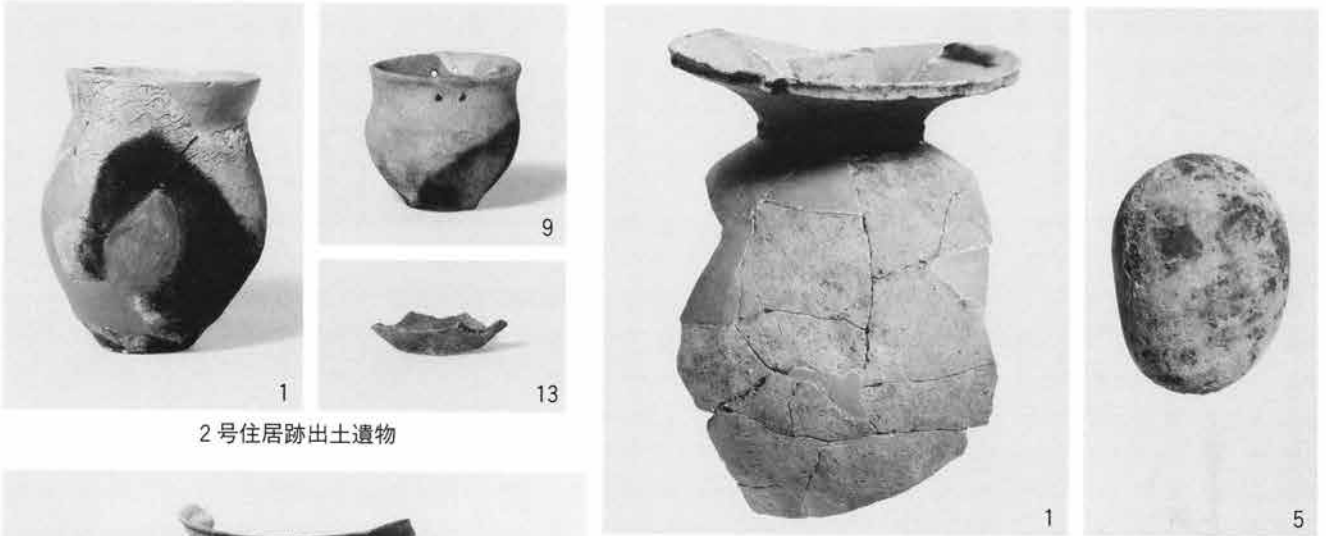
1号方形周溝墓 溝土層断面A-A'(北から)



基本土層 中位黒色土がAs-C混土



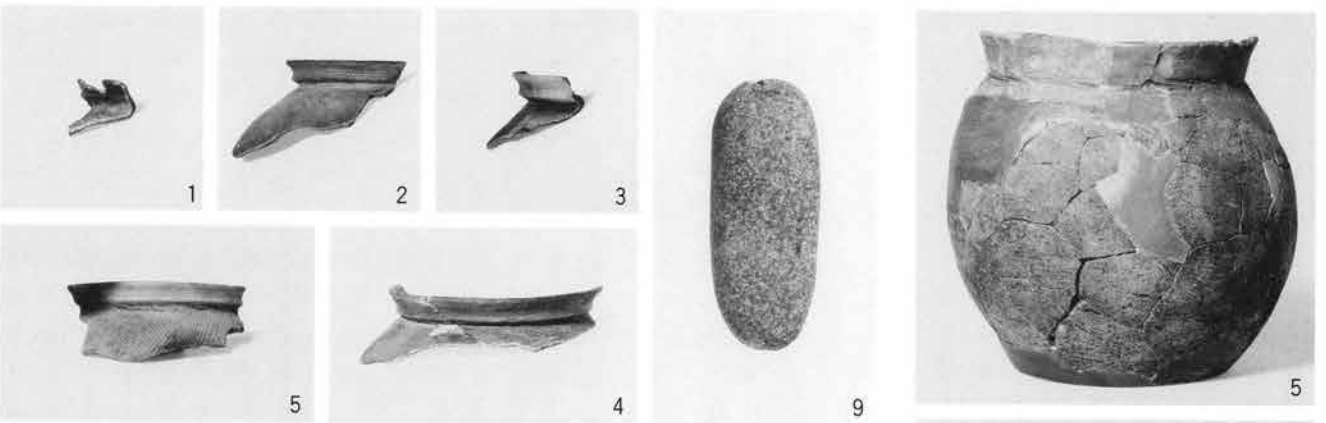
1号住居跡出土遺物



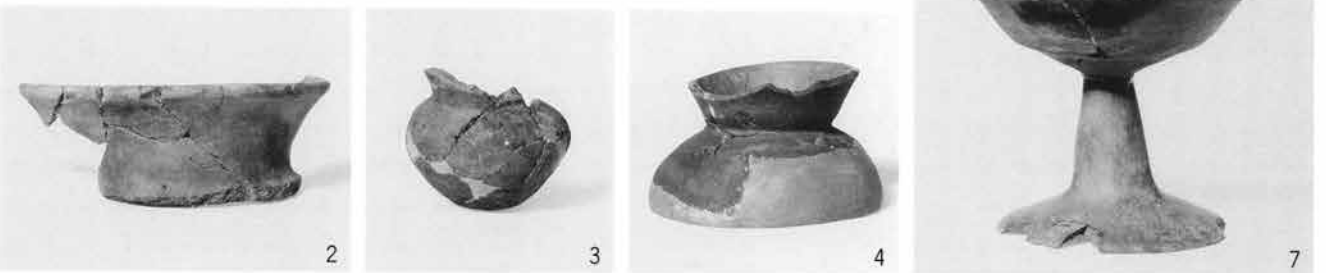
2号住居跡出土遺物



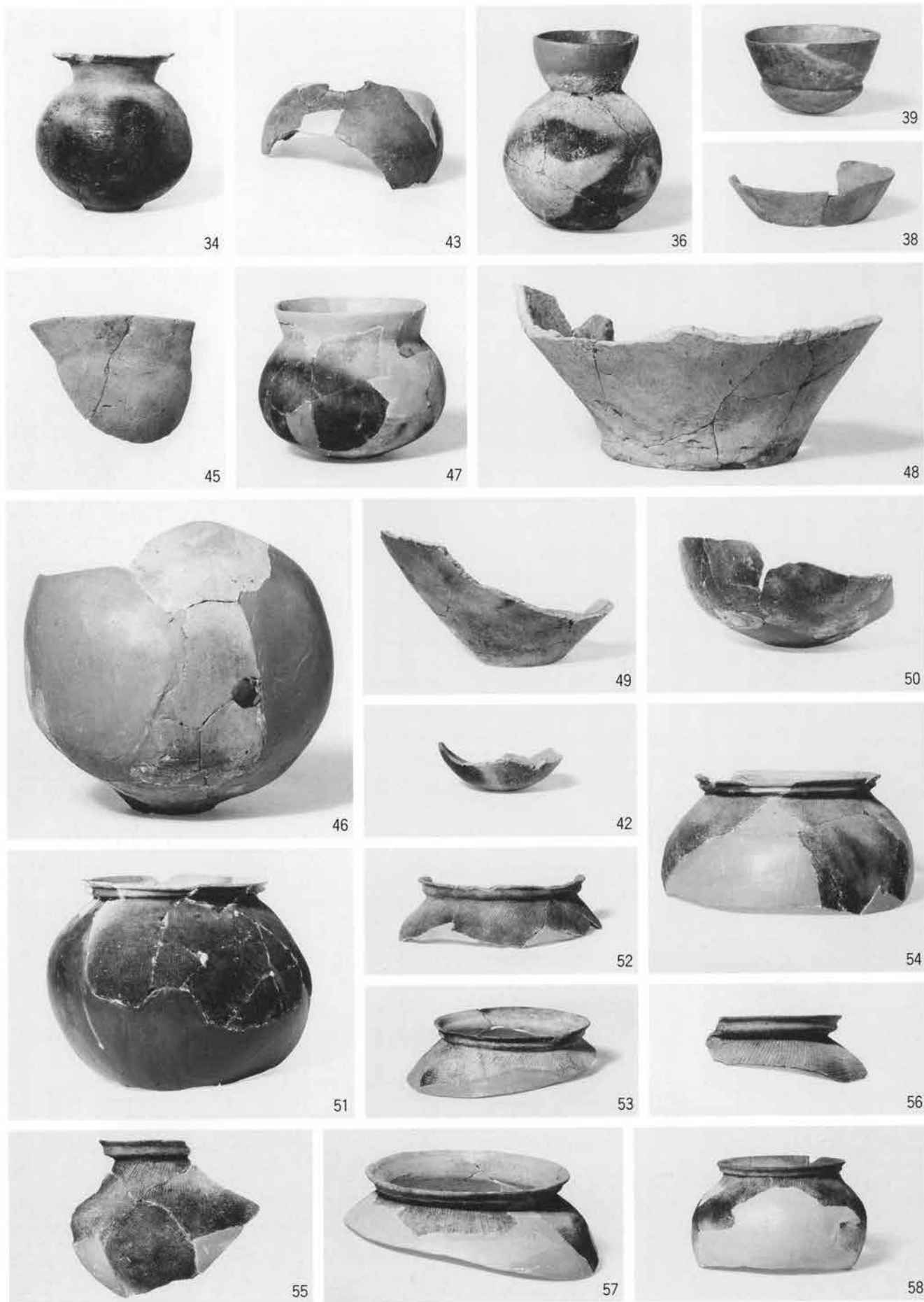
4号住居跡出土遺物



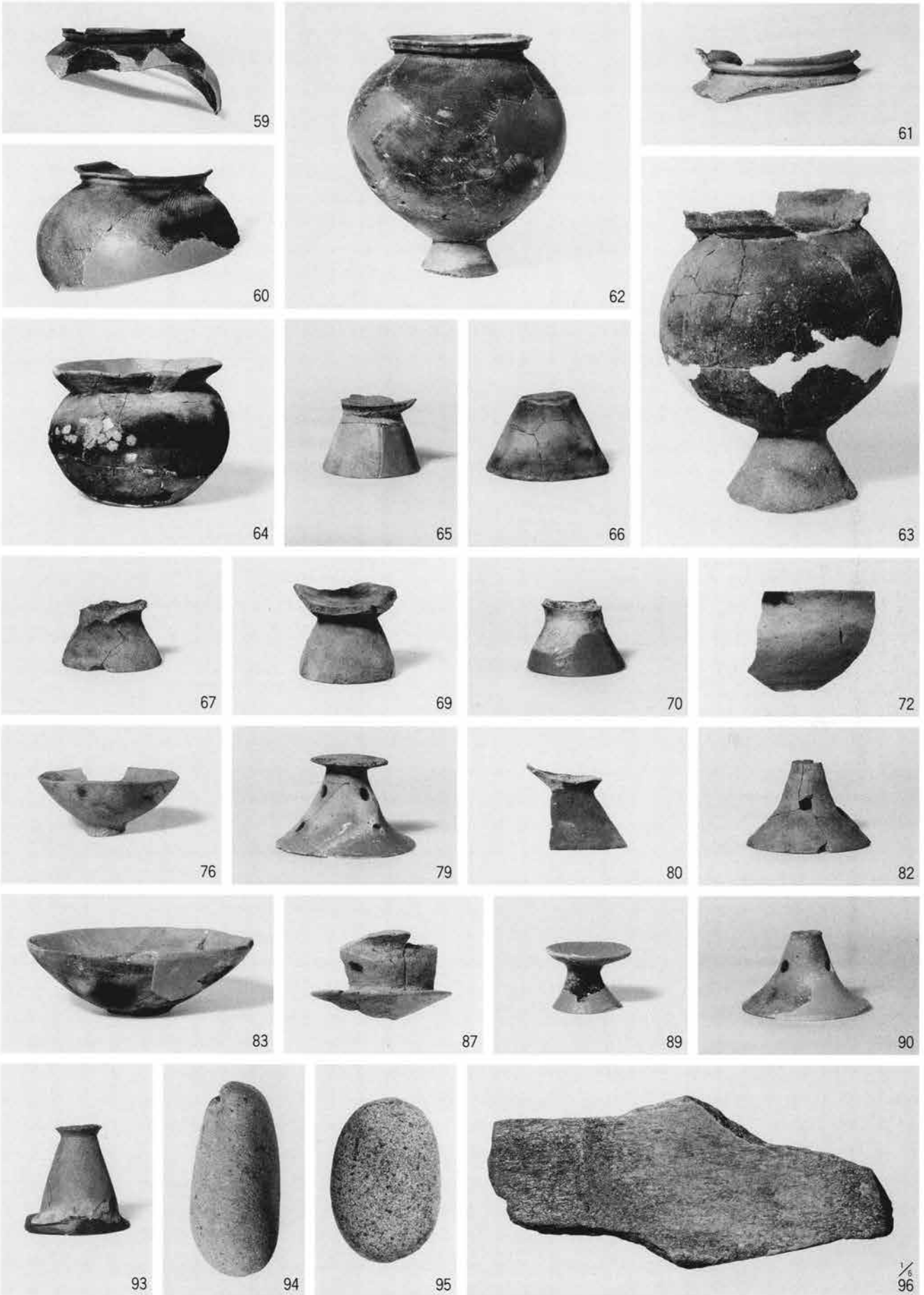
5号住居跡出土遺物



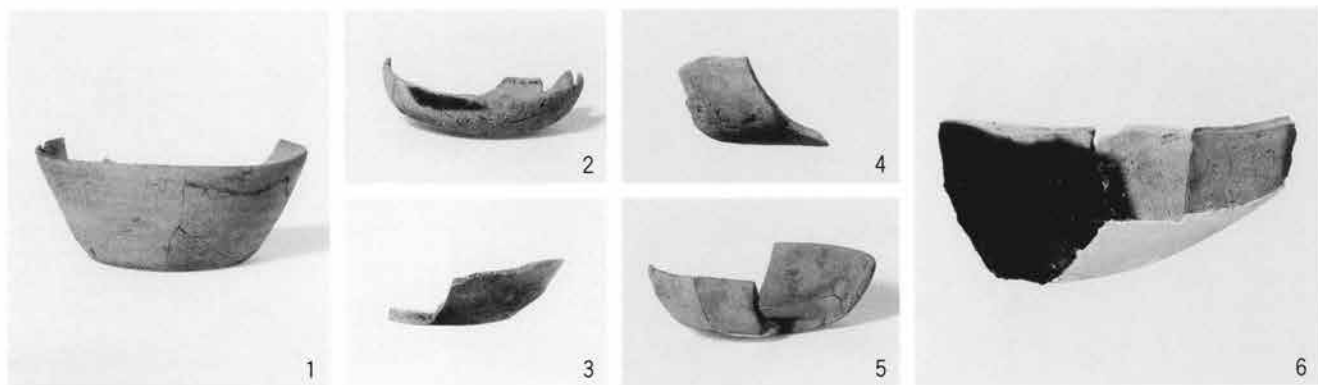
6号住居跡出土遺物



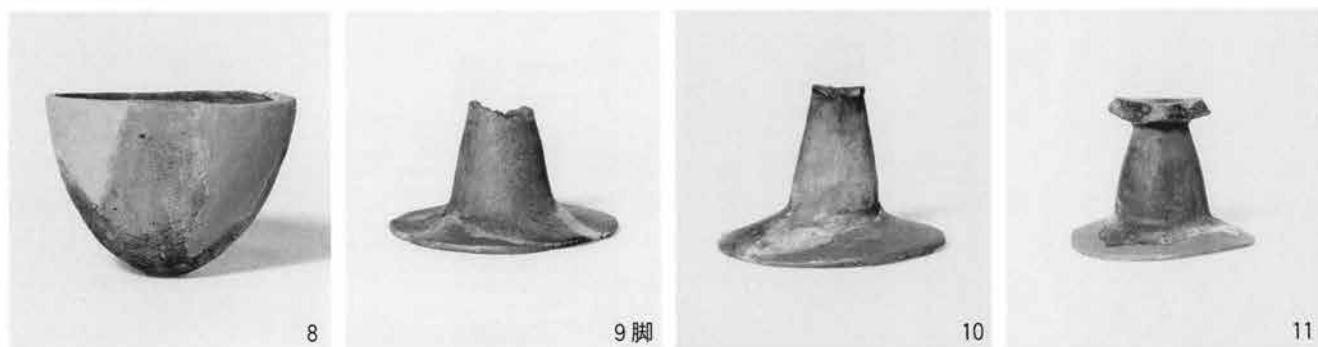
10号住居跡出土遺物(1)



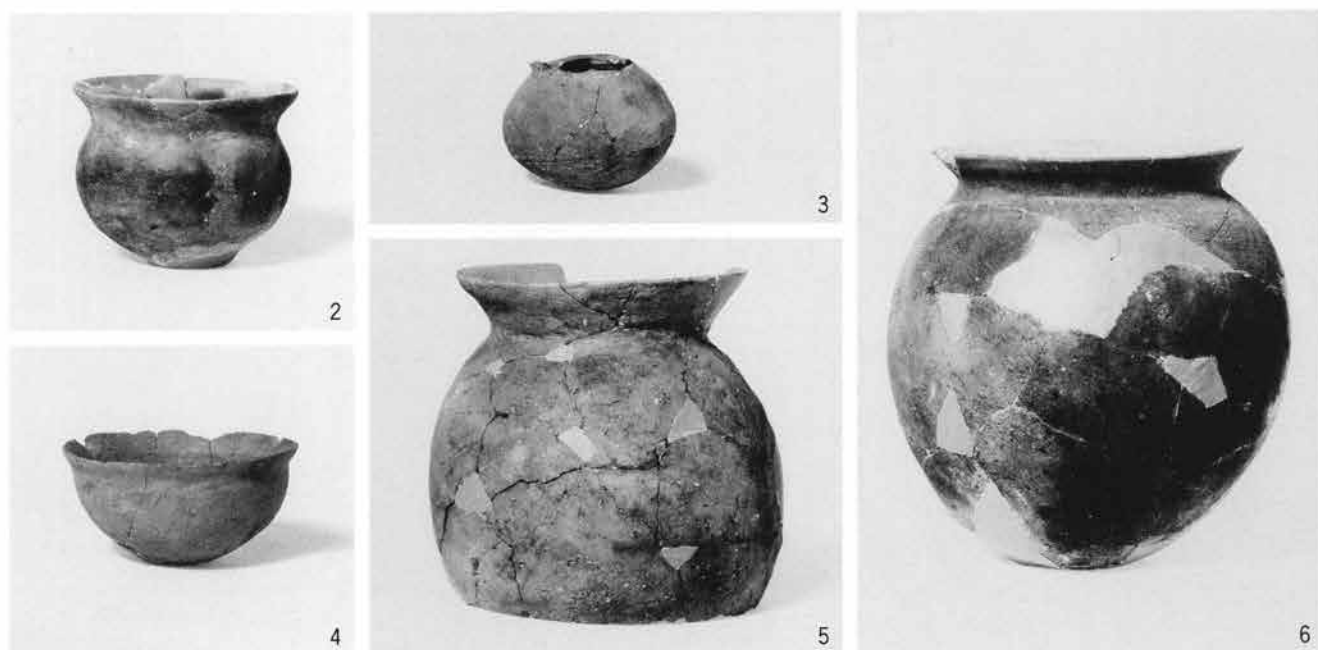
10号住居跡出土遺物(2)



9号住居跡出土遺物



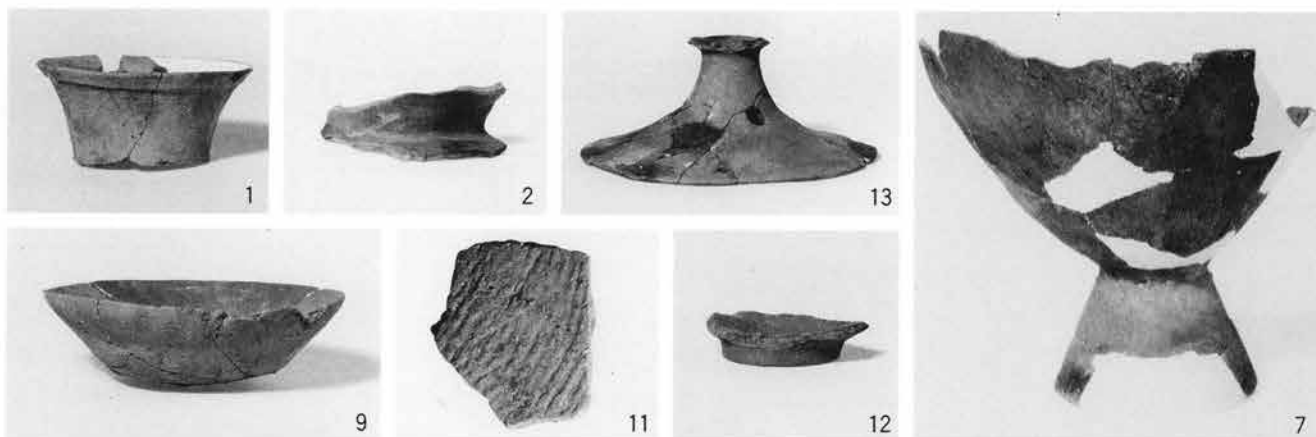
11号住居跡出土遺物



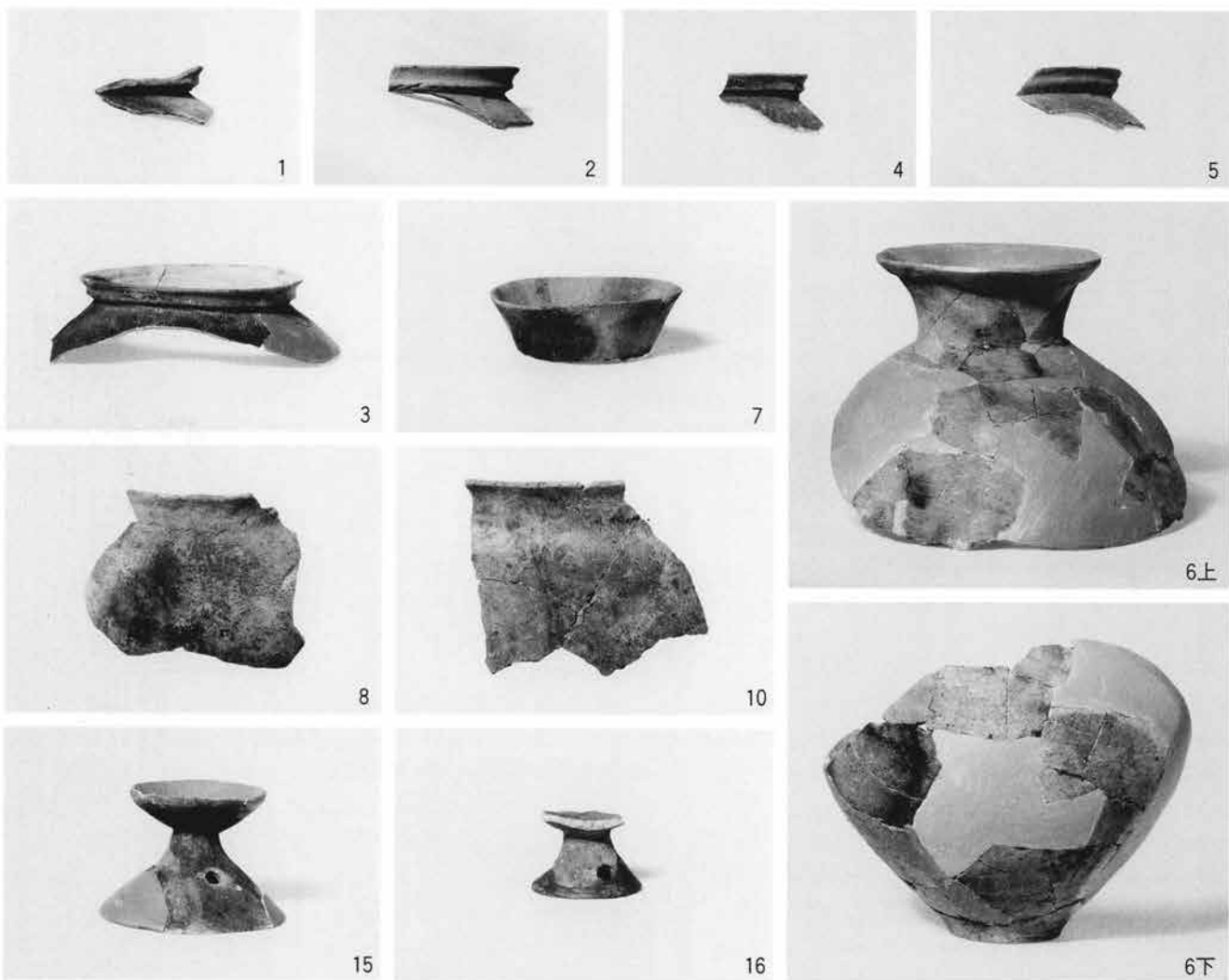
12号住居跡出土遺物 (1)



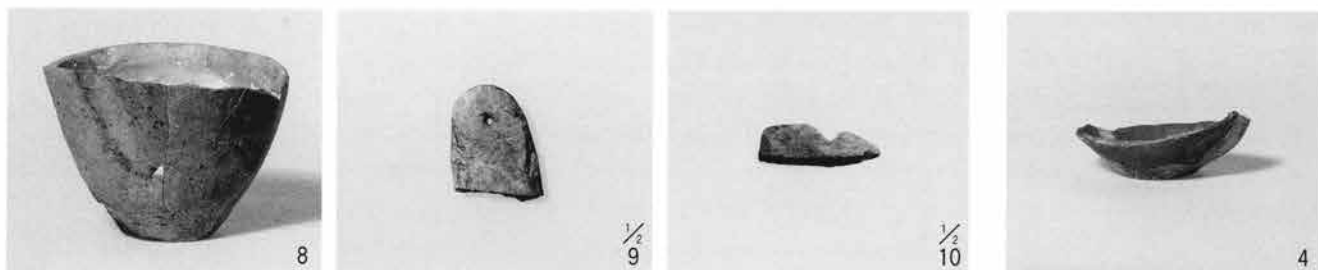
12号住居跡出土遺物(2)



14号住居跡出土遺物

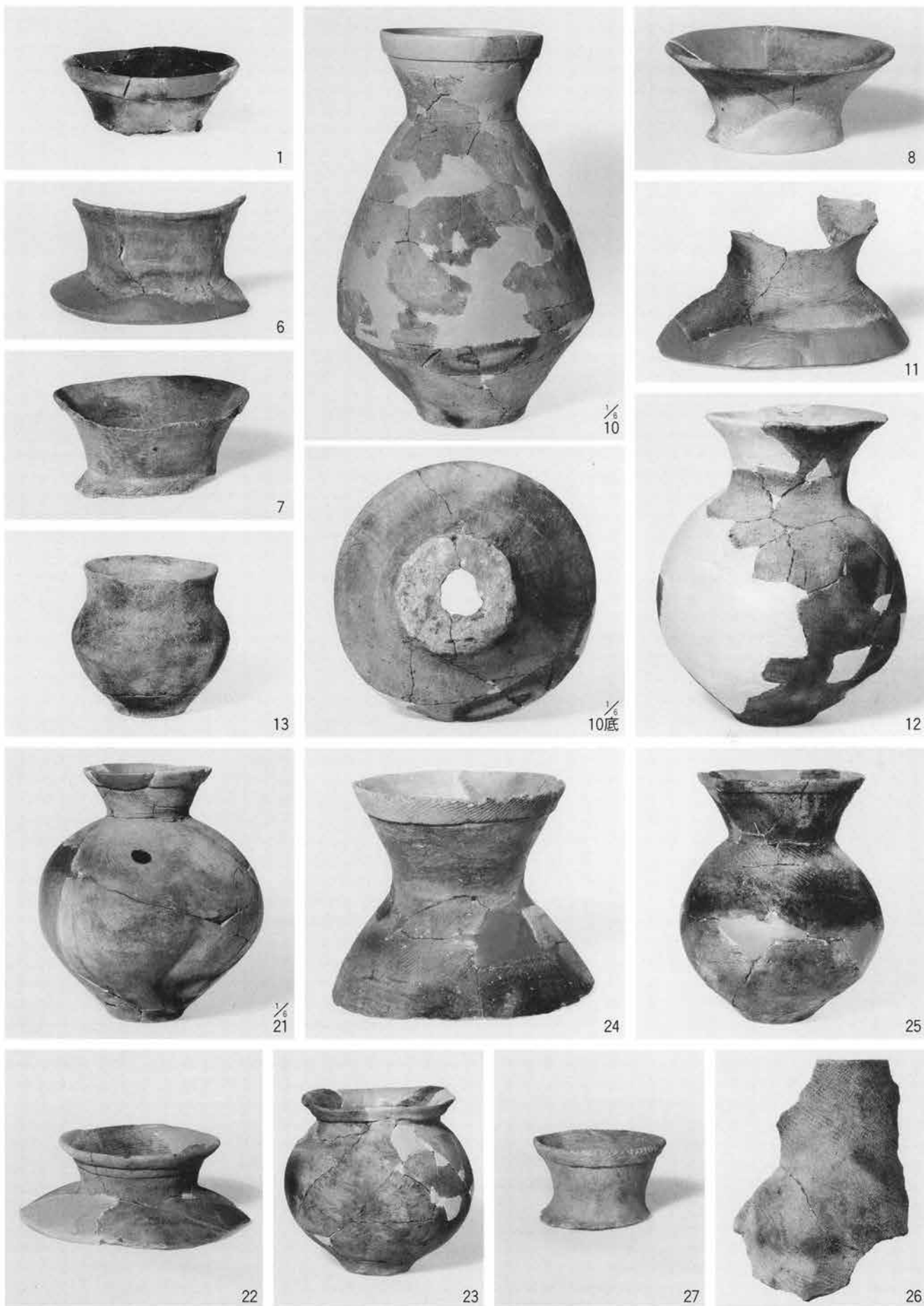


15号住居跡出土遺物



17号住居跡出土遺物

18号住居跡出土遺物



1号方形周溝墓出土遺物 (1)



34



35



36



37



35底



38



40



44



45



39



43



49

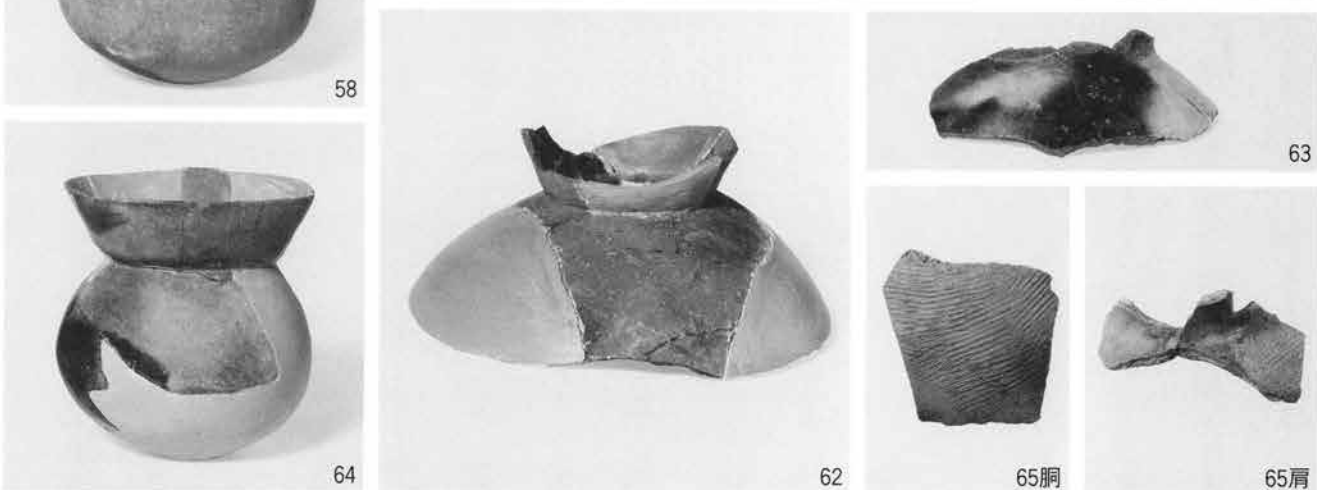
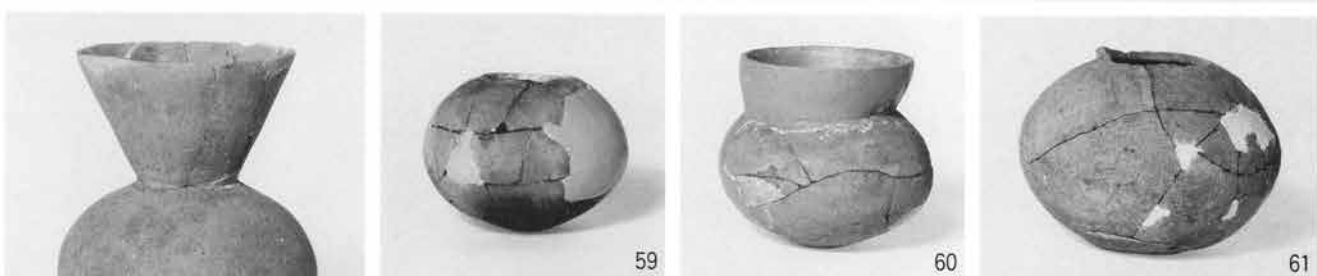


48



50

1号方形周溝墓出土遺物(2)



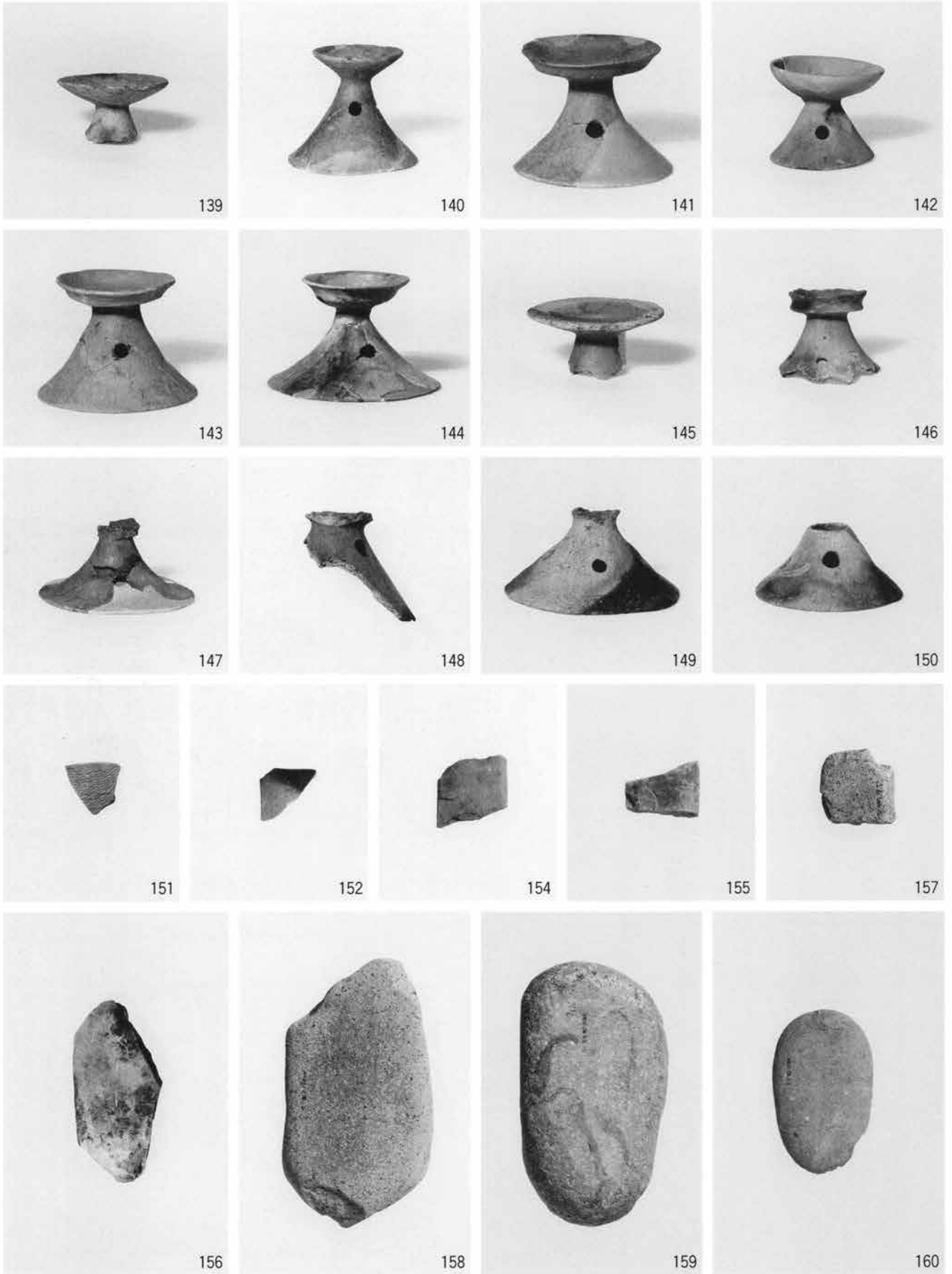
1号方形周溝墓出土遺物(3)



1号方形周溝墓出土遺物(4)



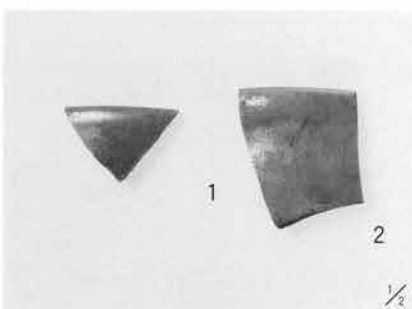
1号方形周溝墓出土遺物(5)



1号方形周溝墓出土遺物(6)



6号土坑出土遺物



1号溝出土遺物



3号溝出土遺物



33



34



31



39



42



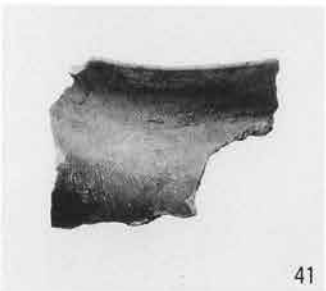
45



46



56



41



44



47



57



58



48



49



60



37



54

遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なかいまちいっちょうめいせき
書名	中居町一丁目遺跡
副書名	(都)3.3.8高崎駅東口線地方特定街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第398集
編著者名	柏木一男、大木紳一郎、中東耕志、榎崎修一郎
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20070223
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町大字下箱田784-2

遺跡名ふりがな	なかいまちいっちょうめいせき
遺跡名	中居町一丁目遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしなかいまちいっちょうめ
遺跡所在地	群馬県高崎市中居町一丁目28-11
市町村コード	10005
遺跡番号	01051
北緯(日本測地系)	
東経(日本測地系)	
北緯(世界測地系)	361917
東緯(世界測地系)	1390212
調査期間	20050101-20050228
調査面積	1428
調査原因	道路改良工事
種別	集落/墓
主な時代	古墳/平安
遺跡概要	古墳+平安-住居+墓/散布地-縄文-土器
特記事項	古墳前期の集落と方形周溝墓。南関東系土器。



財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書 第398集

中居町一丁目遺跡 (都)3.3.8高崎駅東口線地方特定街路整備事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成19年(2007)2月22日 印刷

平成19年(2007)2月23日 発行

編集・発行／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2

電話 0279-52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／杉浦印刷株式会社
